

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A descriptive study of the Turuoka dialect : The third language survey in Turuoka city, the 1st report

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001352

国立国語研究所報告 109-1

鶴岡方言の記述的研究

—第3次鶴岡調査 報告1—

国立国語研究所

1994

国立国語研究所報告 109-1

鶴岡方言の記述的研究

—第3次鶴岡調査 報告1—

A Descriptive Study of the Turuoka Dialect

—The Third Language Survey in Turuoka City, the 1st Report—

国立国語研究所

1994

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所は創立以来、国民の言語生活の実態を知るための調査研究を全国各地で実施している。その一環として、昭和25年度と昭和46年度の2度にわたり、山形県鶴岡市において言語生活の実態調査を行った。その結果は、国立国語研究所報告5『地域社会の言語生活 — 鶴岡市における実態調査 — 』、および報告52『地域社会の言語生活 — 鶴岡市における20年前との比較 — 』（昭和28年、昭和49年、秀英出版刊）として発表している。

その後20年の時を経過した現在、経年的変化を記述しさらに今後の変化を予測するために、第3回目の調査を企画したところ、幸いに課題名「地域社会の言語生活 — 鶴岡市における戦後の変化 — 」(代表者江川清)として文部省科学研究費補助金総合研究(A)の交付を受けることが出来た。第3次調査では種々の観点から複数の調査が企画実施されたが、今回の報告書で取り上げるのは、伝統的な鶴岡方言の記述に関するものである。

この調査は、国立国語研究所の所員をはじめ多くの研究者の参加を得て、共同で行われた。この報告書は、参加者中の、国立国語研究所情報資料研究部長江川清、同言語変化研究部第一研究室 大西拓一郎、および東京女子大学 佐藤亮一教授、東京外国語大学 井上史雄教授、広島文教女子大学 新田哲夫助教授、京都外国語大学 渋谷勝己助教授、東京都立大学 篠崎晃一助教授が分担執筆した。

この種の調査は言うまでもなく、現地の方々の熱意ある協力がなければ完成しないものである。前回、前々回同様、今回も鶴岡市役所、同教育委員会、および市立図書館関係者等の非常なご協力をいただいた。また、被調査者の方々には、お忙しい中この調査のために多くの時間を費やしていただいた。

これらのご厚意に対して、謹んでお礼を申し上げる次第である。

平成6年7月

国立国語研究所長 水 谷 修

目 次

刊行のことば

I 章	鶴岡方言の記述的研究の概要	7
1	鶴岡方言記述調査の目的・経緯 (江川 清・大西拓一郎)	9
2	鶴岡方言の位置 (井上史雄)	17
II 章	鶴岡方言の音韻 (井上史雄)	37
III 章	鶴岡方言のアクセント (新田哲夫)	81
IV 章	鶴岡市大山方言の用言の活用 (大西拓一郎)	141
V 章	鶴岡方言のテンスとアスペクト (渋谷勝己)	237
VI 章	鶴岡方言における助詞「サ」の用法 — 共通語との対応を中心に — (佐藤亮一)	267
VII 章	鶴岡方言の授受表現 (篠崎晃一)	287
	索引	301

Contents

Foreword

Chapter I	Outline of the Study	7
	Aims and Procedures of the Study	9
	The Position of the Turuoka Dialect	17
Chapter II	The Phonological System of the Turuoka Dialect	37
Chapter III	Accent in the Turuoka Dialect	81
Chapter IV	Declensions of Verbs, Adjectives and Adjectival Verbs of the Oyama Dialect in Turuoka City	141
Chapter V	Tense and Aspect in the Turuoka Dialect	237
Chapter VI	Usage of the Case Marker <u>sa</u> in the Turuoka Dialect — a Comparative Study with the Standard Language —	267
Chapter VII	Expressions of Giving and Receiving in the Turuoka Dialect	287
Index		301

I 章

鶴岡方言の記述的研究の概要

1. 鶴岡方言記述調査の目的・経緯
江川 清・大西拓一郎
2. 鶴岡方言の位置 井上史雄

1. 鶴岡方言記述調査の目的・経緯	9
1.1. 目的と意義	9
1.2. 調査の組織	10
1.3. 方法	11
1.4. 被調査者	12
1.5. 調査の実施	13
1.6. 調査結果の分析と討議	14
2. 鶴岡方言の位置	17
2.1. 概要・研究史	17
2.2. 鶴岡方言の地理的位置	17
2.3. 鶴岡市方言の地理的内部差	27
2.4. 鶴岡方言の歴史的背景	32
2.5. 近代の変化	33
2.6. 外来語 外来音	35
2.7. 社会言語学的変異と共存体系	36

1. 鶴岡方言記述調査の目的・経緯

1.1. 目的と意義

国立国語研究所では、山形県鶴岡市において、昭和25年以来、約20年間隔で社会調査を実施してきた。そのおもな目的は、戦後半世紀にわたる急激な社会変化の中で方言が共通語化していく過程について、その実態や社会的な要因を明らかにしようとするところにある。ところで、方言の共通語化と言った場合、その変化のもとになる伝統的な方言の詳しい記述が必要である。そのような要請から、昭和25年の第1回目の調査(第1次調査)においては、鶴岡市ならびに周辺地域の方言の特徴についての調査が実施された。その結果は、第1次調査の報告書の中で「鶴岡方言の特徴」として報告している(国立国語研究所(1953))。この報告の中の、特に方言体系の記述に関しては、さらに詳しいデータなど求められる点があると考えられる。また、その後約40年が経過し、学界全体の学問的進歩の中で、方法的にさらに深めるべき点も見出される。さらに、昭和47年の第2回目の調査(第2次調査)結果(国立国語研究所(1974))を見てもわかるように、かなりのスピードで共通語化は進んでおり、それからさらに20年を経た第3回目の調査(第3次調査)が、伝統的な方言を調査できる最後の機会と考えられた。そこで、今回、共通語化の問題をとらえるにあたって根本となる伝統的な方言の記述をもう一度実施することにした。ゆえにその目的は、現時点で求め得るもっとも伝統的な方言の記述にある。そして、同時にそれは、現在の学界の要請に応えられる方法に裏打ちされたものであることが必要である。この実行は、単に共通語化以前の古い方言の記録ということを超えて、方言学における記述的研究という分野の進展に寄与するものと考えられるし、関連分野に対しても具体的なデータに裏付けられた理論の実証として、成果の活用が期待される。後述のとおり、調査の組織に加わったメンバーの中に方言学を専門とする研究者が加わっていた。そのメンバーで方言記述班(以下、記述班)を組織し、班内でバランスをとりながら、

それぞれの研究者の関心に従って、記述の対象となる分野を定め調査を実施した。

1.2. 調査の組織

この調査は、主として、文部省科学研究費補助金、総合研究(A)「地域社会の言語生活－鶴岡市における戦後の変化－」(課題番号03301060,平成3～4年度)によるものである。

この研究の申請段階からの研究代表者は江川清(国立国語研究所情報資料研究部長)であり、研究分担者として、米田正人、熊谷康雄、杉戸清樹、尾崎喜光、相澤正夫、井上優、大西拓一郎、前川喜久雄(以上国立国語研究所)、真田信治(大阪大学)、水野義道(京都工業繊維大学)、加藤和男(金沢大学)、佐藤和之(弘前大学)、井上史雄(東京外国語大学)、今石元久(広島女子大学)、佐藤亮一(フェリス女学院大学)、高田誠(筑波大学)、渋谷勝己(大阪大学)が、研究協力者として、横山詔一、伊藤雅光、池田恵理子、磯部よし子、辻野都喜江、塚田実知代、白沢宏枝、米田純子(以上国立国語研究所)、金沢裕之(岡山大学)、沢木幹栄(信州大学)、篠崎晃一(東京都立大学)、鈴木敏昭(富山大学)、新田哲夫(広島文教女子大学)、吉岡泰夫(熊本短期大学)、堀司朗(鶴岡市図書館)、早野慎吾(上智大学大学院)が加わり役割を分担した(所属は平成4年度)。

以上のうち、記述班に加わって面接調査と分析を実施したのは、大西拓一郎、井上史雄、佐藤亮一、渋谷勝己、篠崎晃一、新田哲夫の6名である。本報告書は、おもにこの6名の執筆になる。その他、前川喜久雄は談話資料の収録を行ったが、平成5年度にアメリカへ出張し、その資料を活かすにはいたらず、また、分析に加わることもできなかった。

調査全般の指揮にあたっては、米田正人が主として行い、後述する補充調査、記述班会議(検討会)の開催にあたっての事務処理も務めた。また、大西拓一郎は記述班のとりまとめ役を務めた。

以下、特に断らない限り、記述班が行ったことがらについて述べる。

1.3. 方法

まず、記述班の内部において、記述する分野の決定を行った。分野を考慮するにあたっては、共通語化以前の伝統的方言の姿を求めその体系を記述するという目的や、言語体系として当該方言をとらえるにあたっての全体におけるバランスなどと同時に、社会調査で扱われている共通語化項目の位置付けと社会調査の分析時への活用といった社会調査との有機的関連を配慮した。さらに、当該地域の従来の研究の状況、ならびに学界の研究動向なども念頭に置いた。また、当然のことながら、記述班に加わったメンバーの専門領域、関心のありかたなども配慮した。こうした中から、おおまかに、音韻(井上史雄)、アクセント(新田哲夫)、活用(大西拓一郎)、テンス・アスペクト(渋谷勝己)、助詞(佐藤亮一)、語彙・語法(篠崎晃一)のように分野を決定した。

調査は、後述の被調査者のところへ出向く、個別面接調査法によった。また、井上は鶴岡出身のネイティブスピーカーであり、記述にあたっては、みずからの内省をかなり活かしている。また、その点で、他の班員の調査結果や記述内容についてネイティブの立場からチェックし、問題点についてアドバイスを行う役割も果たすこととなった。具体的な調査の内容や方法は担当分野により異なり、それぞれの報告の中で述べられている。いずれにせよ、与えられた課題は、各班員の専門分野にかなり近く、事前に問題点の整理などを行った上で調査に臨み、新たに発見されたことがらなどに対しては臨機応変に対応した。

このようにして、面接調査を行って得られた結果を、担当分野ごとに体系的に整理して記述したものが本報告書である。それゆえ、この報告書の内容は、各担当者にゆだねられる部分が多い。全体に関わる問題点(例えば記述結果のくいちがいの一部分)の整理などはI章2.で述べることになる。また、それぞれの記述で残された課題の整理や展望といったことも各章で述べることになる。

1.4. 被調査者

被調査者の選定にあたっては、協力者の堀司朗氏(第2次調査のサンプリングの際から世話になっている鶴岡市立図書館職員)にお願いした。堀氏の目から見て、比較的鶴岡方言の話者として適当と考えられ、同時に記述調査のようにやや時間がかかる調査にも協力してもらえそうな身近な方を紹介してもらった。このような手立てで被調査者にあたる方法が適切であるかどうかは議論のあるところかもしれない。例えば、社会調査の被調査者の中から伝統的方言をよく用いていると判断される被調査者を追跡することもひとつの方法かと考えられる。しかしながら、そうしてあつたところで、その被調査者が本当に鶴岡方言の話者として適当であるかどうかの判断は、結果次第であろう。また、社会調査での被調査者と調査者の接触時間は限られたものであり、その結果だけから、記述調査のようなややもすれば長時間を要する調査に適しているかどうかといったようなパーソナリティーに関わる判断は難しいと考えられる。

結果的には、本報告書から判断されるとおり、堀氏の紹介による被調査者は記述調査の対象として特に問題はなかったようである。ここに堀氏より紹介を受け、本報告書の記述の対象となった被調査者の氏名(敬称略, 50音順)と読み、ならびに被調査者として扱われている章を列挙する。

- 小野寺 茂(おのでらしげる)……………Ⅲ章
- 小野寺忠雄(おのでらただお)……………Ⅴ章
- 小野寺秀子(おのでらひでこ)……………Ⅲ章
- 工藤喜美子(くどうきみこ)……………Ⅴ章
- 佐藤綾子(さとうあやこ)……………Ⅳ章
- 佐藤久治(さとうきゅうじ)……………Ⅶ章
- 佐藤治助(さとうじすけ)……………Ⅳ章
- 菅 靖治(すげせいじ)……………Ⅶ章
- 田村和子(たむらかずこ)……………Ⅵ章・Ⅶ章

富樫善治(とがしぜんじ)……………Ⅲ章

なお、本報告書の中では、被調査者を「話者」として述べることもある。意味は同じである(それほどの多人数を対象とせず、ある方言の代表的な話し手とみなした上で調査の対象とするような記述的研究の中では、後者のように呼ぶことが普通である)。これらの話者の属性については、各章を参照のこと。

1.5. 調査の実施

調査は主として、第3次調査の2年目の期間中(1992年11月18日～25日)に行った。2年目も社会調査が継続中であり、記述班員も社会調査に加わっており、その合間を見ては記述調査を実行した。そして、結果的にはこの期間中では11月22日～24日に記述調査が集中することになった。

鶴岡に向かう事前に、堀氏より紹介を受けた各話者に、調査の趣旨などを記した文書を郵送した。そして、鶴岡に到着してから11月18日と19日に、まず、大西が各話者を訪問し、調査の趣旨を再度説明し、ある程度の話者の属性、ならびに調査につきあってもらえる空き時間などを尋ねて回った。その中で話者の話しぶりなどを観察した。そこで得られた感触をもとに、大西の「勘」のようなもので、それぞれの話者を各分野を担当する記述班員に振り分けた。それからは各記述班員が話者に接触をとり、日程などの調整を行った。

上述のとおり、社会調査と並行して行ったために記述調査に時間が充分にはとれないことがあった。また、調査というものには一般にそのようなことはあるのだろうが、調査後に疑問が生じたり、さらに知りたいことが発生するようなことがあった。

多人数を対象とする社会調査とは異なり、記述調査の場合は補充・追跡が容易である。そこで、国立国語研究所の庁費を活用して補充調査にかけた。ゆえに、記述調査においては第3次調査の社会調査の期間からはずれる時期に調査を実行していることがあるが、それはこのような事情があったからである。詳しい調査の時期などについては、各章で述べているので参照のこと。

1.6. 調査結果の分析と討議

調査結果の分析は、各担当者にかなり任せられることとなったが、決してそれぞれが勝手に、ばらばらに行ったわけではない。記述班員全員が集まった検討会での討議を通して、記述内容を、方法も含めて、検討し合った。その際に、上述のとおり井上がネイティブの立場からチェックやアドバイスを行った。

社会調査の期間中に行った調査の結果については、その期間中に中間報告会の形で検討会を宿の一室で開き、それまでに得られた結果を持ち寄って、検討し合った。その検討内容を盛り込みながら、期間中に再度調査に出かけた。

翌、平成5年の5月10日に平成5年度の第1回検討会を国立国語研究所で開催した。ここでは、記述内容ならびに進捗状況の確認や報告、表記などで統一をはかるべき事項の検討、本報告書刊行までのスケジュールの策定を行った。

平成5年9月18日から19日にかけて、第2回検討会を国立国語研究所で開催した。この期間中の18日は国立国語研究所関係者に公開しての中間報告会とし、各記述班員の分析結果を報告した。このようにして、班員ならびに科研費の分担者・協力者以外からもある程度広く意見を聴く機会を設けた。翌19日は班内の検討会として、執筆にあたっての統一事項やスケジュールの確認などを行った。

平成6年1月22日から23日にかけて、第3回(最終)検討会を国立国語研究所で開催した。事前に、ほぼ最終原稿となるものを記述班員同志で郵送し合い、それを読んだ上で、さらに問題となることがらについて指摘し合い、検討した。そして、こまごまとした書式の統一などについて決定し、最終原稿の執筆にとりかかった。

上記のような経緯を経て、本報告書はできあがった。Ⅱ章以降は各担当者が1章ずつ受け持って、各分野の記述を行っている。次に、各章の記述分野と執筆者、ならびに現在の所属を記す。

- II章：音韻, 井上史雄(東京外国語大学)
- III章：アクセント, 新田哲夫(広島文教女子大学)
- IV章：用言の活用, 大西拓一郎(国立国語研究所)
- V章：テンス・アスペクト, 渋谷勝己(京都外国語大学)
- VI章：助詞「さ」, 佐藤亮一(東京女子大学)
- VII章：授受表現, 篠崎晃一(東京都立大学)

具体的な記述内容に相当するII章以降は、各章の独立性がかなり高く、いわば論文集としての性格を持っていることは確かである。しかしながら、それぞれの執筆者がばらばらの行動をとった上での結果でないことは、ここまで述べてきたことで明らかであろう。記述班内でかなり綿密に検討会を実行し、同時に研究所内に公開した報告会も開催することにより、「ひとりよがり」な記述内容になることも抑えられたと考えられる。国立国語研究所の旗印ともいえる「共同研究」をどのようにとらえるか、ということとも関わるが、このようなスタイルも一種の共同研究である。社会調査ほど大規模ではないように思われるかもしれないが、調査の準備から執筆の終了までに費やした延べ人数は計算してみれば、意外に相当なものにのぼるはずである。

なお、国立国語研究所の方言の記述的研究に主眼を置いた報告書としては、国立国語研究所(1959)があるが、一地点の伝統的方言を集中的に記述した報告書は本報告書の他にはない。

以上、I章1.では本報告書のもとになる調査の目的、調査結果の分析・検討の経緯などについて述べた。対象とした鶴岡(市)方言の研究史などに基づく概要については、以下I章2.に述べる。

参考文献

国立国語研究所(1953)『地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』

(秀英出版)

国立国語研究所(1959)『日本方言の記述的研究』(明治書院)

国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較

－』(秀英出版)

(以上, I章1. 江川清, 大西拓一郎 執筆)

2. 鶴岡方言の位置

2.1. 概要・研究史

ここでは、現在の鶴岡方言の位置づけについて記述する。本書の音韻・アクセント・文法・語彙などの記述の基盤として、地域差や共通語の影響などを明らかにするのが一つの目的である。以下のように鶴岡旧市内と新市内とで音韻・文法・語彙・敬語などについていくばくかの違いがある。本書では新旧の市内の記述が入りまじっているの、区別する必要があるときは、旧市内のものを「鶴岡方言」(または「鶴岡弁」)、新市内(も含んだ)のを「鶴岡市方言」と呼び分ける。

鶴岡方言については、江戸時代以来各種の記述・記録がある。昭和以降は、特に斎藤秀一が多数の論文を執筆した。平成に入ってから、方言集などが世に出ている。これらをもとに(現代の世代差も加味し)200年近くにわたる歴史的变化を論じることも可能である。文献目録は、日本方言研究会(1990)に収録されている。

2.2. 鶴岡方言の地理的位置

まず鶴岡方言を全体として方言区画という地理的観点から位置づけてみる。

鶴岡方言は、方言学的には、日本語本土方言の、東部方言に属する。主に音韻を手がかりに、東部方言の中で「東北方言(または奥羽方言)」に区画される。単語アクセントの高低の区別があって、いわゆる一型(無)アクセントでない点で、その中の「北奥(ほくおう)方言」に入れられる。南奥方言と北奥方言の境界は山形県内を通る。

山形県の方言は、内陸と庄内の対立意識が強いが、内陸の大部分は無アクセントで、南奥方言に入れられる。庄内(と最上地方)は東京式(乙種)アクセントを持ち、北奥方言に入る。ことばの対立意識は、明治初年に、出羽国が羽

前・羽後二つに分けられ、羽前の大部分が山形県にまとめられたことで強められた。庄内の役人・官僚が内陸出身であることも対立意識をかきたてたらしい。庄内からの交通路も、内陸と分かれる。江戸時代には日本海経由の西回り海運が盛んで、直接上方に結びついた。また東京への交通路も、上越新幹線以前から羽越線経由で、新潟県を通る。『日本言語地図』で個々の単語の分布をみても、庄内地方は、新潟県から秋田県にかけての日本海側の「方言分派」を示すことが多い。

対立意識があるにもかかわらず、実際に方言調査資料を分析してみると、庄内には内陸地方ごとに山形市の影響が認められる。現在若い人の間に広がりつつある方言形、「新方言」に着目すると、内陸・山形市から鶴岡市・酒田市への飛び火による伝播が認められる。グロットグラム(地理×年齢図)によると、「分らない」などラ行五段活用動詞がワガラネからワガンネへ変化しつつあるのなどが、その例である。さらに鶴岡の第2次調査から加えられた「呉れる」の項目でのクレル>クエル>ケルという変化も、内陸からの影響を反映すると思われる。また最近鶴岡市内でも、純粹の鶴岡人が「べー」を使用することがある。かつてはこの形を使うかどうか、内陸か庄内かの重要なカギだったが、やはり、内陸の影響が及んだものと考えられる。「べー」の普及には、用法の単純化が起こって、ヨカンベーでなくイーベのようになり、動詞・形容詞・(名詞+)助動詞ダの終止形にそのままべーが接続するようになって使いやすくなったことも、働いている。

内陸との方言対立が圧倒的に大きいために、庄内方言を一体化して扱うことが多いが、庄内にも内部の差があって、いくつかには区画することが可能である。まず庄内南端の大鳥方言は、音韻的に言語島をなし、他の東北方言と違う(井上(1974))。言語的には山形県の方言を、大鳥/他の庄内/内陸と、3分してもいいほどである。大鳥以外の庄内地方は、ほぼ最上川を境に、南北に分けられる。民衆の地域区分意識でも「川北」「川南」に分けている。

ただし、実際に言語地理学的分布を調査してみると、庄内を南北に分ける境界線は、最上川ではなく、もっと南で、ちょうど鶴岡/酒田の買い物圏(商圏)



図1 「(うな)された」

の境界に一致する。この地域のグロットグラムによれば、昭和になってから酒田の商圈が拡大するのに伴って、平野のまったなかの境界線上の集落の若い世代が酒田の文法形式を使うようになった例さえある。

庄内全体でみると、南北差は文法と語彙の差が目だつ。北の酒田と南の鶴岡でことばが違うことは、両都市のことばに接した経験のある人ならすぐに気づくし、実例もたちどころにあげることができる。しかし、普通の人はこのほぼ同規模の複眼都市の一方で用がすむので、両都市のことばに接することが少ない。また文法現象はあまりにも使用頻度数が大きいためによく耳にして、地理的背景があることに思い至らない。こうして、庄内方言の南北差よりは、「庄内弁」の一体性が民衆の常識になっている。

南北差を示す文法現象の代表は、語中のリ・レがダ行・ナ行に続くときの発音の変化である。図1の庄内方言地図参照。「取られた・うなされた」などは、鶴岡を含む南では一エダになるが、酒田を含む北では一ッダになる。また「借りた・枯れた」が南ではカリダ・カレダだが、北ではともにカッダになる。

またミッダ(見ている)、カイッダ(書いている)などの用法や形についても地域差がある。図3～8以下参照。この図は、図2に○印で示したS字または逆Z字型に並ぶ集落で、10, 30, 50, 70代の話者に面接して得たデータによる(詳しくは井上(1985)参照)。左下の4人が鶴岡市家中新町、左上が酒田市、右上は最上郡高坂、右下は最上郡古口のインフォーマントである。項目は、動詞の単なる連用形と、共通語「ている」にあたる本報告書V章でのアスペクト表現とを、ペアで尋ねた。単なる連用形では、図7 Z126「飛んだ」のように音便によって生じたモーラ音素(特殊拍)「ン」が脱落して「トンダ」のように変化することがあるが、農村部の老人に多く、鶴岡・酒田市内にはみられない。また「ている」にあたる表現では、図4 Z116のカイッダ(書いている)、図6 Z118のトイッダ(研いでいる)のような縮約形をとって、連用形のカイダ・トイダと区別しているが、図8 Z127では「飛んでいる」にあたる言い方を作ろうにも「トトンダ」が音韻論的に不可能なために、これを単なる連用形と区別するために、トンデル・トンデダも使われる。おもに庄内地方北部で使われる。本報告

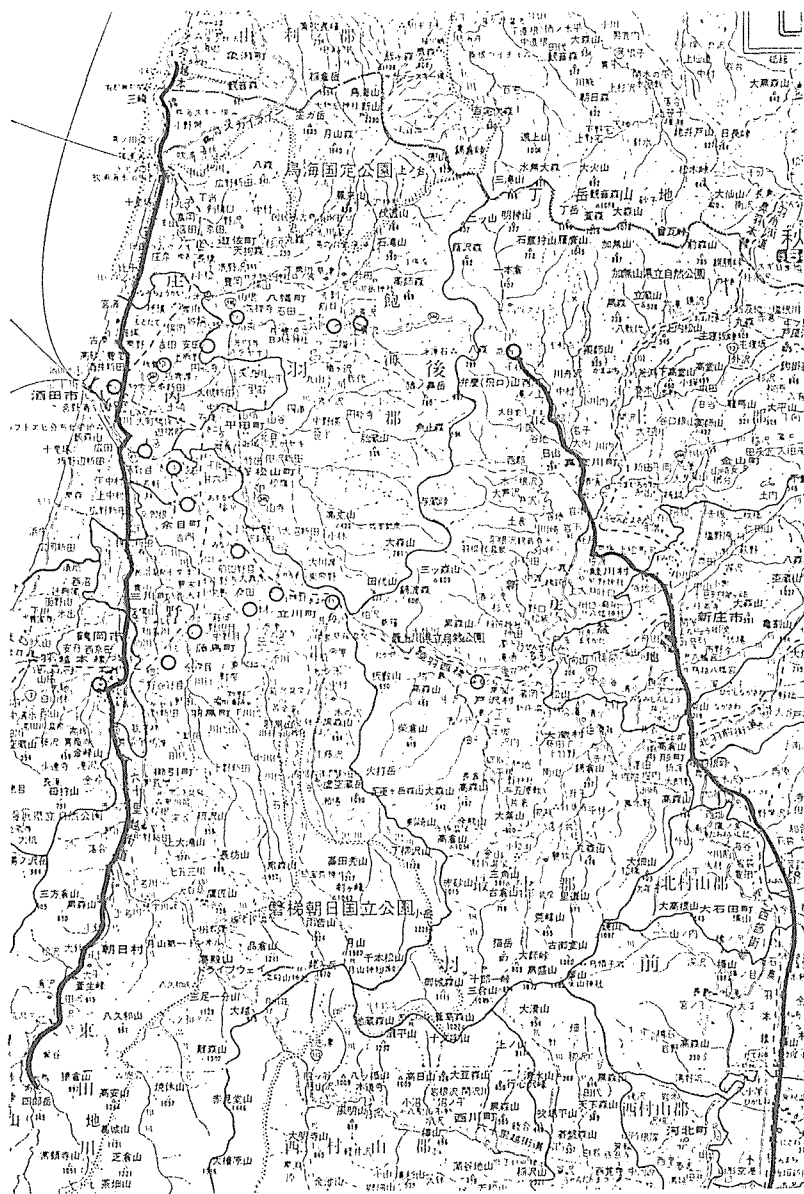


図2 調査地域図

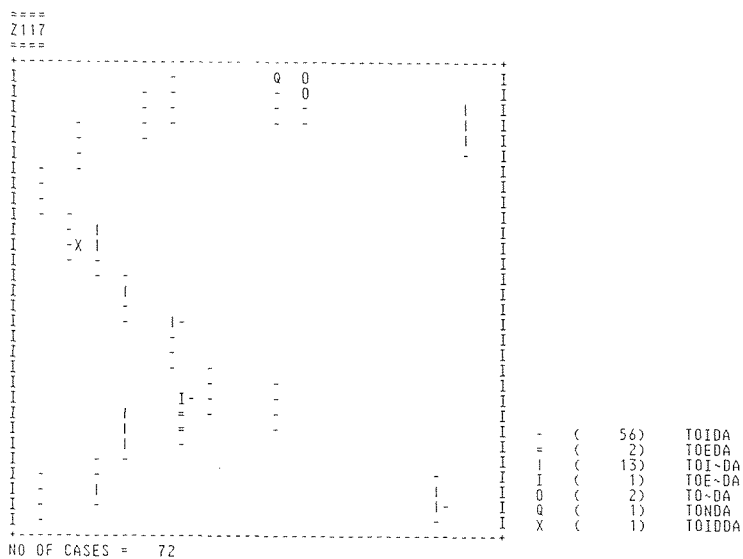


図5 「研いだ」

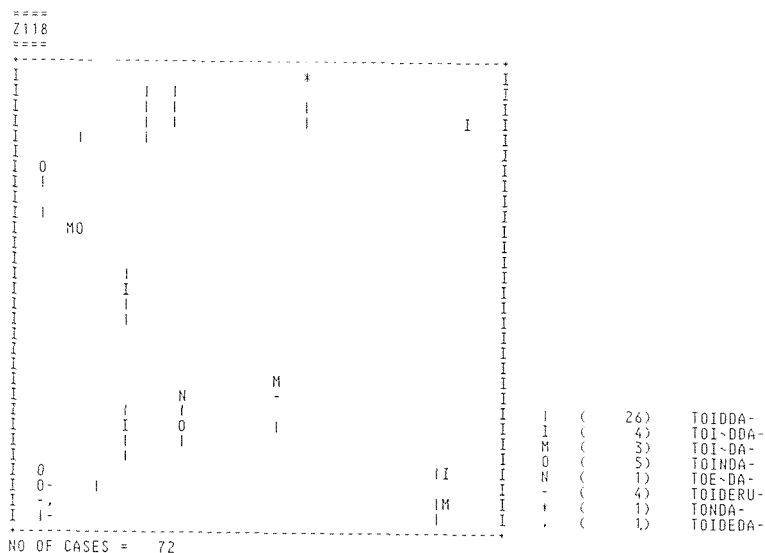


図6 「研いでいる」

書IV章の記述もこのような地域差の中で位置づけられるべきである。

図9には、本報告書VI章の文法現象の中の格助詞の使用の南北差を示す。サの用法の広がりには庄内の中でも地域差がある。鶴岡市・酒田市の各2高校で高校生と父母(および酒田の小学生)のアンケートを依頼した結果である。生徒・父母を出身地によって分類した。「見に」をミサというのは、鶴岡市と田川郡という南部に多いことが読み取れる(A = よく使う, B = 使う, C = 無記入)。下段の高校生では使用者がやや増えている。(酒田をはじめとする北部ではミーまたはミニ)。図は省略するが、同様に「強かった」で、ツエケが広がりつつあるのは酒田、ツエッケが広がりつつあるのは鶴岡という差が、現在でも発生しつつある。また「高く」で鶴岡はタガグ、酒田はタゲグという違いもあり、形容詞無活用化の程度が違うことを示す。

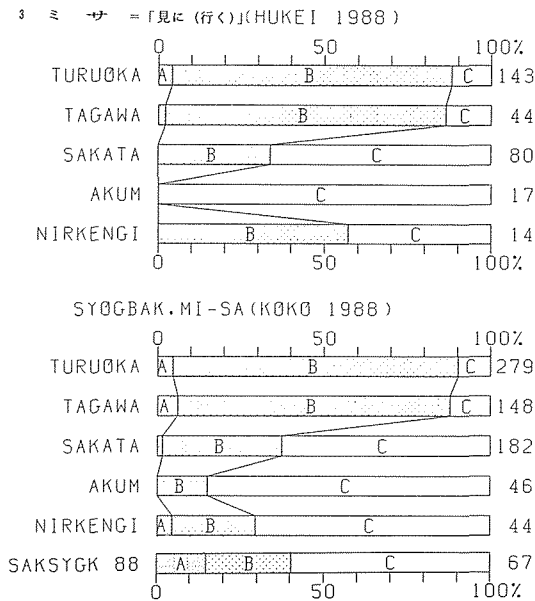


図9 ミサ

実例の列挙はやめるが、以上のような地域差・世代差は、鶴岡旧市内と新市内の旧大山町との違いとしても存在するようで、本書の文法記述の中には、鶴岡旧市内で使わないもの(少なくとも井上の知らないもの)も混じっている。ただし井上が共通語化の影響を受けている可能性もあり、確認のためには、さらに広範な調査が必要である。

なおアクセントについては、語彙調査の経験から、庄内一円ではほぼ同様と見られる。大鳥方言のアクセントについては、平安時代のアクセントの区別との歴史的関係を示す「類」の分け方が、庄内一円と違うという分析があったが、上野(1993)によって、実は庄内一円と同じであることが確かめられた。『現代日本語方言大辞典』の巻頭の「調査地点図」で庄内中央部の余目のアクセントが「型の確定が困難」としてあるが、多分全平の語がときに頭高に聞こえる傾向のためだろう。地元出身者にとっては、型の聞き分けに困難はない。東京式(乙種)アクセントの一つで、「類」の分け方が関東・中部・中国地方の大部分と違うだけである。

語彙に関しては、現象の数が膨大なので、まず、全体傾向を指摘する。江戸時代後期に記された鶴岡の方言集『浜荻』の語彙の一部をとりあげて、庄内一円で言語地理学的調査を行った。個々の分布図はまだ一部分しか公にしていなかったが、コンピュータ・データにして、多変量解析法を適用したことがある。それによると、庄内(と新潟県北端)を南北に分ける分布傾向と、鶴岡中心に周囲論的分布を示す分布傾向とが、大きく現れてきた。南北に分ける分布傾向のうち、北の中心地は酒田である。結局、庄内地方の語彙分布は、酒田・鶴岡という複眼都市によって支配されているとみてよい。

このコンピュータによる一般的分布傾向は、個々の方言地図の考察とも一致する。庄内全体への新形の発信地はまず鶴岡、次が酒田である。また地理的平面のみを扱ったこの分析は、その後手がけたグロットグラムでの庄内を南北に線上に貫く地域(図2の左の実線)での地理×年齢による分布で、さらに確実に確かめられた。鶴岡・酒田の中年層・老年層をピークに、近郊農村に向かってピラミッド型の伝播を示す例が(上記ワガンネ以外にも)いくつか見

つかっている。酒田・鶴岡という地方都市は、庄内への新語の中継地と発信地の役を果たしていたと、とらえる。

この文化的中心地としての鶴岡・酒田のことばの意識は、マジ(町)とザイゴ(在郷)という民衆の地域区分と一致する。「在郷」ザイゴ・ゼンゴということばには、庄内では差別語に近いひびきがある。しかしこの民衆の地域区分には、言語的裏付けがある。かつて士族・町人の住んでいたマジのことばは、「やさしい、上品だ」ととらえられ、農村部の「古めかしい」ことばと区別される。商店街が戦前に成立していたようなマジは、庄内にはいくつかあるが、中でも城下町鶴岡がことばの上品さでは筆頭だった。「殿様」はじめ士族が住んでいたことが敬語的表現の発達に結びつき、それが方言意識に影響したのだろう。この場合のマジは鶴岡の旧市内(ことに商店街)である。

なお、江戸時代の鶴岡の方言集『浜荻』の所収語形を一番多く残しているのは、庄内南東の山間部の集落だった。これは、庄内方言での会話文を多く含んだ「郷土本」にも、反映している。江戸時代後期の方言会話の文法・語彙を分析してみると、現在の鶴岡方言ではなくなっているが、かつて山間部の老人・老女から聞いた覚えのある言い方が多く出てくる。庄内地方における鶴岡から数十キロという地理的へだたりは、百数十年という時間的経過にほぼ比例するとみてよい。

2.3. 鶴岡市方言の地理的内部差

鶴岡の第1次調査の行われたのは、戦後の町村合併の前だった。第2次、第3次の調査では、学区を手がかりに第1次と同様の地域つまり旧市内を選んだ(小学校は第一から第五まで、のちに第六小分離、中学校は一中から三中まで)。ただし、かつての郊外の田圃が住宅地になったので、調査地域の住居の範囲は広がった。

鶴岡の旧市内と新市内のことばの違いは、音韻・文法・語彙・敬語など、広範にみられる。なお鶴岡新市にかなり遅れて合併になった旧大山町は、古い城

下町で、天領になったこともあり、酒造業者も多く、裕福な町であった。その近在の農村は、大山町そのものと違った点もあり、鶴岡旧市内とことばが違う。IV章の記述ではそこを対象にしたので、鶴岡旧市内では使わない言い方が出てくる。ただしその多くは、改新・共通語化を受ける以前の古い言い方なので、共通語化以前の純粹の方言を記録したいという要求にはかなう。鶴岡共通語化調査の途中で気づいたことだが、シス、チツ、ジズの区別のないいわゆる一つ仮名(ズーズー弁)の持ち主は、近郊の生育で、成人後鶴岡旧市内に住みついた人たちだった。鶴岡の老人層では、生育地による音韻体系の違いがあると分かったが、この点は、もっと大量のデータで実証できる。国立国語研究所の鶴岡調査と同様な項目で、鶴岡市南部の外内島(とのじま)と櫛引町山添(やまぞえ)地区で住民全員の調査を2度にわたって行った。その調査結果によると、市街地と農村部との顕著な違いが見られた。典型は図10のグラフの敬語にみられる。鶴岡市共通語化調査と近郊櫛引町山添・鶴岡市外内島(とのじま)の調査結果を1枚のグラフにまとめたものだが、校長に向かって「書いたのか」と尋ねるときの敬語が、鶴岡市と山添地区とでまったく違う。鶴岡では丁寧語デスと尊敬語オカキニナツタをかなり使うが、山添では丁寧語をやや使うのみで、尊敬語を使う人は20代にわずかにいるくらいである。なお「書いた」の部分も鶴岡市内ではカイダだが山添地区にはケーダというアイ連母音の融合があるなど、文法、形態音韻論にも違いがある。ただし、山添の若者は鶴岡に通勤するものもあり、鶴岡と似た傾向を示す。地元の者にとっては、日頃から感じていた違いが、グラフで表されたわけである。

さらに鶴岡旧市内にも様々な地域差がみられる。庄内を南北に貫くグロットグラム調査では、鶴岡旧市内の調査地点を多くとった。旧市内の内部差を見たかったからである。図11のグロットグラムが典型で、鶴岡旧市内に地域差がある(調査集落の地理的配置は図2の左の実線)。距離で1kmも離れていない、家並の続く市街地でのことである。「いたずら」を表すことばをワツラというのは、この図では鶴岡旧市内の中でも主に旧鶴岡町だけである。(なお「庄内方言地図」によると、酒井藩の支藩のあった小さな城下町、松山町松嶺で

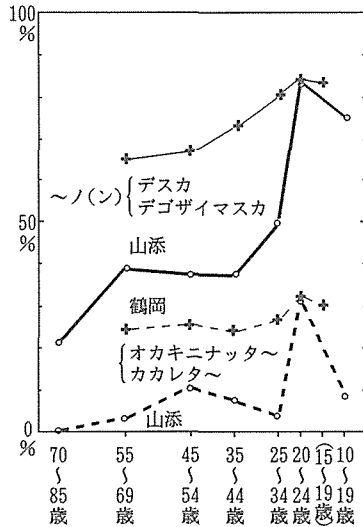


図10 地方都市と近郊の敬語使用

もワツラを使っており、松嶺のことばには鶴岡弁が入っているという民衆の意識には合致する(井上1981)。

ここに図を出さないが、「メダカ」の項目でも、ウルノメというのは鶴岡旧市内の80代の老人層だけで、メグラザッコというのは旧鶴岡町の70代(と50代)だけだった(中年以下では共通語形メダカが進出して地域差が薄れている)。この説明として学区の差が考えられる。いずれもこどもの生活ではよく出てくる単語である。

鶴岡のマジの中でも、別の意味の微妙なことばの違いを感じとることができる。士族と商人の違いが目だつもので、戦前までは士族の老人はことに違ったことばを使っていたという。実例をあげてもらおうと、敬語に関する現象が多い。士族の間では、対者のみならず第三者にもきちんと尊敬語を使うし、士族の身分に応じて使い分けることもあった。最高の敬語は殿様(の子孫)について使われる。商人・職人の使う敬語はそれほど高い待遇度のものがなく、近郊の農民の間ではほとんど無敬語の状況だったらしい。

現	朝 日 村				櫛 引 町		鶴 岡 市			三川町	酒 田 市		遊佐町	A	
旧	大 泉 村		本 郷 村		山 添 村		斎 稲	大 宝		横 押	広 野	鶴 酒	西 南	稲 吹	上
	大 鳥 田 沢		大 針 本 郷 熊 出		荒 屋 山 添		村 村	寺 村		山 切 村	野 村	渡 田	荒 瀨	川 村	浦 村
集	松 寿 繁 營 荒 上 下	大 小 砂 上 下 滝 熊	板 河 追 上 茶 屋 里		外 千 三 本 家 大 道	一 外 千 三 本 家 大 道	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村	村 村 村 村 村 村
落	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田	ヶ 田 田 田 田 田
名	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢	崎 岡 岡 谷 沢 沢 沢
80代	■	■							◆◆	○			○		⊖
70代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○
60代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○
50代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○
40代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○
30代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○
20代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○
10代	■	■	■	■	■				◆	○	○	○	○	○	○

■ ワスラ | ワサ = ワッヅ
 ● ワヤラ ◆ ワツラ ○ ワチ ⊖ ワッチ い間く

図11 「いたずら」

学校差と結び付けて、市内の中学校を次のように特徴づけた人がいた。一中(西部)士族、二中(北部)農民、三中(南部)商人。江戸時代から近代にかけての鶴岡町の職業構成をよくとらえている。京都のような古い都市でも、職業による住み分けは明らかだが、鶴岡程度の都市規模でも明瞭である。第1次・第2次鶴岡調査の結果も、生え抜きに限り、年齢層に分ければ、この微細な地域差が出る可能性がある。ただし、1990年代には、かつてのマジの外の田圃だったところを埋め立てて一戸建ての新興住宅地が形成されており、住民の移動があって、上の特徴は薄れつつある。なお新興住宅地の住民は、旧市内の商店街から住宅を移した人もあり、山間部・近郊の出身で便利な市内に住居を構えた人もいる。鶴岡の住民構成とその地理的分布は、複雑になった。

鶴岡のマジのなかのことばの違いには、いわゆる階層差・職業・学歴に基づくものもある。しかしこれは個人差に関わる様々な要因が働くために、また共通語化の程度と結びつけて考えられるために、鶴岡方言自体の内部差とは見なされないようである。

外住歴によってことばが違ふ現象は、「言語形成期」以後の移住では方言習得が困難だというテーゼで、説明された。ただ、小学校・高校の同級生とひさしぶりに会ってみると、それぞれの成人以降の居住地の方言にみごとな順応性を示しているのに驚かされる。山形市・青森市などのことばの調子を身につけて、鶴岡方言色をうすくしているのである。個人差はあるが、東北方言内部なら新しい土地の方言に同化する現象がありそうである。

市内のことばの内部差で一番大きいのは、実は世代差である。共通語調査の音韻項目でも、3回の調査結果を実年齢(生年)によって人々を配列してみると、1950年頃の60代から、1990年頃の10代まで、約100年にわたることばの違いが分かる。年齢差が一番大きい。音韻については体系そのものの差として把握できる。II章での音韻記述に際しては、共存する音韻体系をいくつかたてて、説明してみた。

2.4. 鶴岡方言の歴史的背景

以上、地理的な背景について述べた。しかし、鶴岡市内の地域差を微細にみると、結局個人差に結びつき、しかも共通語化という歴史的過程、場面差という社会言語学的な使い分けに話しが及ぶ。以下では、時間的な軸に従って、現在の鶴岡の方言状況をとらえてみる。

考古学的遺物は、それ自身ではことばについて何も語らない。ただ庄内地方では縄文遺跡は豊富だが、弥生遺跡が少ないことは、この地域における日本語の使用が、九州などより遅かったことを暗示する。考古学的遺物は、歴史時代以降も庄内平野の山沿いに片寄る。古い集落は平野周辺部に発達した。平野中央部の穀倉地帯は、地名に「興屋・京田・新田」などが多く、中世後期から近世にかけて開拓されたとされる。鶴岡も赤川旧河道を堀に利用した大宝寺城から発展した新興の城下町だった。武藤家・最上家の支配から、江戸時代初期に酒井藩となり、幕末まで改易がなかった。武士階層の移住は江戸時代初期以降なかったわけである。しかし鶴岡の名字は戦前をみても多様で、周辺の農山村で1集落ごとに一つの有力な名字が占める状況と異なる。ことに武家は各地から集まったと思われる。

鶴岡では、城下町ゆえに士族の使う敬語が発達をとげた。また知識層の規範意識が強かったために、イエヤシス、ジズ、チツの音韻の融合(混同)が起こらなかった可能性がある。鶴岡には知的な雰囲気があったと思われ、方言研究文献が江戸時代以来現代までも刊行されている。港町、商人の街酒田で方言研究があまり盛んでなかったのとは対照的である。

江戸時代以来の庄内方言の歴史を再構成してみると、江戸語が庄内に直接入ったと思われる例もある。『浜藪』所収の庄内弁「ジョナメル」「ノウテンキ」、郷土本で使われている「ハクイ」などは、江戸でも使われていたものだろう。江戸への参勤交代の武士が取り入れたというルートが考えられるが、確証はない。

2.5. 近代の変化

鶴岡の方言は、明治以降大きな変化を経た。一つは日常の方言レベルで、県庁所在地山形市の方言の影響を受けはじめたこと、もう一つは改まったことばのレベルで、標準語・共通語が使われはじめたことである。山形市はじめ内陸の影響は、しかし大きくはなかった。語彙・文法の違いは依然大きだし、アクセントも無アクセントにはなっていない。また戦前の標準語の普及は文字・文章を通じるものが主で、アクセントに及ぶものではなかった。

東京の話しことばの影響は、以前はそれほど大きくなかったと思われる。個人史からいって、東京人に継続的に接するチャンスは少なかった。ラジオや映画などを通じての話しことばも影響は大きくなかった。映画のことばの調子が自分たちと違うのは、演技のための特別なことばを使っているものと思こんでいた。東京の人が日常あんな変な調子で話すとは信じられなかったのである。小学校でアクセントについての授業があったときにも、担任の先生が「東京でそのことば自体をアクセントのようにアを高く発音するとは信じられない」と説明したくらいだった。東京出身者が選挙の宣伝カーのウグイス嬢に採用されたり、放送部でアナウンサーを勤めたり、国語の時間に模範の朗読をしたことはあった。しかし、中舌母音を使わないとか、有声化させないとかの見本にはなったが、アクセントについては無関心だった。(井上が東京とのアクセントの違いに気づいたのは、上京して大学に入学し、「岩手のおじさんの話し方と似てる」と言われたあとである。標準語を話しているつもりなのにどうして東北と分かるのか不可解で、のちにアクセントのせいと気づいた。第2次鶴岡調査の調査員として参加したが、若い女性のインフォーマントが「ネコ」を尾高で答えたあと、「テレビではネコと言ってるようですノ」と頭高の形を引用したのは、時代の変化を語る象徴的なできごとと思えた。つぎの第3次調査の若いインフォーマントはかなりがアクセントをも共通語化していた。)

本論文前半に掲げた方言地図やグロットグラムの調査データは、その集落

で育成したいいわゆる生え抜きの人に限った調査結果である。資料を厳密にしたからこそ細かい地域差が分かった。しかし、言語変化に際し、生え抜き以外の人の影響も無視できない。鶴岡の3回の社会言語学的面接調査の結果の解釈のためにも、地域社会の内部差を考察しよう。

鶴岡という地域社会では、鶴岡方言・鶴岡弁だけが使われているような錯覚におちいるが、そこで生育した個人の狭い見聞からみても等質ではなく、鶴岡弁以外の話し手が混在していた。学校にはときどき転校生があった。今その訛りを思い出すと、山形県内だけでなく、福島県、中国地方からの転校生もいた。当時はどこのことばかには関心をいれず、鶴岡との違いにのみ興味をいだき、時に違うことばをわざと言わせてからかうことがあった。転校生は、こんな洗礼(いやがらせ?)を受けて、鶴岡方言を習得しようと努めたようである。しばらくたつと、ことばの違いは気にならなくなり、「庄内弁」を使う仲間として扱った。中学校に進学したときに、その年はじめて内陸地方出身の先生が鶴岡市に新任で赴任した。無アクセントの調子がおかしくて、学友とまねては笑いあうことがあった。高校に入ると、今思えば不完全な、半分共通語の影響を受けた庄内弁を使う友達(転校生)もいたが、人によってことばが違うことを認めるようになり、からかうことはなかった。成人では、高校の先生の一部のように、他地域出身で共通語を使う先生や、地元出身でも共通語を使う先生にも接したが、庄内弁を使わないことに抵抗は覚えなかった。しかし、個々に例外はあるものの、無反省な一般人の感覚からいうと、鶴岡在住者は庄内弁を使うと考えていた。地域社会の中の例外的共通語使用者は、その後方言調査をしながら気をつけてみると、出身地や社会階層に片寄りがあったが、当時はその傾向性には気づかなかった。

1960年代の高度成長期以降、鶴岡の方言状況も変化したように思われる。テレビという映像メディアで東京はじめよその情報が豊かに入った。幼児の中にはテレビで共通語を話せるようになった子もいた。また出稼ぎ・就職・進学・Uターンなどで長期的に居住地を移すことがあり、旅行のような短期的移動でも庄内弁以外に接することが多くなった。小学校・中学校の先生は以前

は山形師範・山形大学出身者が主体だったが、東京の大学を出て、東京風の共通語を使う先生も出てきた。共通語化には、むしろ高度成長期以降の東京の影響が大きかったように思える。

最近の全国の共通語化の状況を見ると、教科書や小説で使われるような「標準語」でなく、テレビのタレントが日常の口頭語として使うような「共通語」が普及しつつある。むしろ「東京語化」「東京弁化」と呼んでいくくらいである。たとえば、鶴岡の若い世代は、逆接の表現をドモからケドに変えている。文章語的なケレドモを受け入れるのではない。従来方言は文章語の影響を受けて、格調高い言い方を受け入れるかのようにとらえられていたが、現在の方言は庶民の底流のことは同士で、若い世代の新方言のやりとりを行い、東京語と相互影響を与えあっているように思われる。

方言がこのように常に動き、ゆれるものだとしたら、従来の単一の共時的体系では記述・説明がむずかしい。従来は共通語の影響を受けない、もっとも古風な体系の記述を目指した。しかし、「新方言」のように、共通語と関わりなく、方言自体で改新が進むこともある。新古の方言体系を扱うためには、音韻体系の記述で試みたような、共存体系を仮定することを考えてみるべきだろう。少なくとも変異について、該当箇所では指摘する必要がある。

2.6. 外来語 外来音

鶴岡弁の最近の変化のもう一つは、方言の国際化とでも呼べるものである。以前の日本の方言は、標準語・共通語にいかにも近づくかという観点から位置づけられることが多かった。しかし、音韻記述で明らかになったように、最近の若い世代の方言の中では、外来語音が確立したととらえうる(ただし、増えているモーラは、子音自体・母音自体が以前から存在していたもので、組み合わせの可能性が増えただけのことである)。また、語彙的にも、外来語の使用は共通語におけると同じ程度になろうとしている。鶴岡共通語化調査・山添調査ともに外来語を調査項目に入れているので、その勢力の伸張を知ることが

できる。ただし、文法記述の面では外来語はほとんど関係がない。

2.7. 社会言語学的変異と共存体系

以上鶴岡の方言使用状況を考察してきた。第1次調査から第3次調査にかけての40年間に、また実年齢を考慮に入れると約100年の間に、鶴岡の方言使用状況は大きく変わった。

音韻体系については、いくつかの共存する体系を認めるべきことを論じた。東北方言的な体系から共通語化を受けた体系まで、場面差・文体差・個人差をもって使い分けられている。

文法についても、共通語化が進み、世代差・文体差がある。従来記述では、もっとも古い体系を記述するのが慣習だった。しかし、文法変化は共通語化の方向のみでなく、新方言を生み出す方向にも向かっている。これを正当に位置づけるためには、やはり共存する文法体系を考える必要がある。

参考文献

井上史雄(1974)「荘内・大鳥・山北方言の音韻(文法)分布」『山形方言』11

井上史雄(1981)「ワスラ(悪さ)の語形と意味の変化」『山形方言』17

井上史雄(1985)「現代の方言伝播過程－庄内Z調査－」『東京外国語大学論集』

35

上野善道(1993)「山形県大鳥方言のアクセントの類別体系」『日本海域研究所報告』25

日本方言研究会(1990)『日本方言研究の歩み－文献目録－』(角川書店)

三矢重松(1930)『荘内語及語釈』(刀江書院)

山形県方言研究会(1972)『山形県方言概説』(栄文堂書店)

(以上、I章2. 井上史雄 執筆)

Ⅱ 章
鶴岡方言の音韻

井上史雄

1. 研究史	39
2. 歴史的背景	40
2.1. 祖(P)体系	41
2.2. 古(O)体系	43
2.3. 新(Y)体系	46
2.4. 現(M)体系	47
2.5. 共通語(K)体系	47
3. 研究の視点	48
3.1. 研究材料	48
3.2. 比較対照の観点	49
3.2.1. 分布 distribution	49
3.2.2. 音声的特徴 phonetic realization	49
3.2.3. 所属語例(音韻対応) correspondence	50
4. 共時的音韻記述	50
4.1. 記述方針	50
4.2. 音素目録 inventory	51
4.2.1. 母音 vowels	51
4.2.2. 半母音 semivowels	53
4.2.3. 子音 consonants	53
4.2.4. モーラ音素(特殊拍) moraic phonemes	55
4.3. 音節構造 structure	56
4.4. リズム単位 rhythmic unit	57
4.5. 音素結合(配列)論 phonotactics	58
5. モーラ表	59
5.1.1. O体系モーラ表	59
5.1.2. O体系語例	62
5.2.1. Y体系モーラ表	63
5.2.2. Y体系語例	65
5.3.1. M体系モーラ表	76
5.3.2. M体系語例	76
6. おわりに	77

ここでは、現在の鶴岡方言の発音のしくみについて記述する。本報告書のアクセント・文法・語彙などの記述の基盤として、表記の方針を定めるのが一つの目的である。また鶴岡共通語化第3次調査報告書での分析の基礎を築くことにもなる。音韻的には鶴岡方言は、東北方言のひとつとしての特徴を示す。しかし様々な形で共通語の影響を受けて、現在は共通語化の程度により連続体をなしつつ、世代差・場面差などの形で多様性を示している。この状況を適切に示すために、いくつかの音韻体系が共存しているという観点からの記述を試みる。

1. 研究史

鶴岡方言の発音については、すでに江戸時代後期に『庄内方音攷』が記されており(三矢(1930)所収)、これは日本の諸方言の中では早い記録である。明治以降もさまざまな研究者によって発音の特徴が記されてきた。また戦後は、アメリカ構造言語学の音韻論の観点から、いち早く記述が行われ、大鳥方言と対比するかたちでモーラ表も提示された(柴田(1953))。鶴岡の第1次調査の報告書(国立国語研究所(1953))には、調査した音韻現象について、音韻論的分析に基づいた簡略かな表記法も提案されている。

ただしこれらの音韻体系の分析は、少なくとも子音については、別の解釈が可能である。かつての音韻変化による文法的不規則活用を単純化するために、文法的類推という歴史的変化が起こったためだが、このプロセスを統合的に説明するには、共存する音韻体系の考え方を適用するのが望ましい。また、その後共通語化が進行し、さらに外来語も大量に流入した。これも統合して説明するためには、後述のように三つ以上の体系の共存を仮定するほうがいい。

以下では、言語史的な変化の順番を追って記述を進める。変異については、該当箇所では指摘する。

2. 歴史的背景

現在の鶴岡方言の状況を理解するためには、歴史的、通時的説明が必要かつ適切であろう。くわしくは後述するが、次のような現象が鶴岡方言の発音の主な特徴だった。

6母音であること、

カ行・タ行子音の有声化が母音間でみられること、

サ行・ザ行子音に口蓋化音がみられること、

ハ行子音に両唇音(両唇摩擦音)がみられ、カ行に合拗音があること。

鶴岡市内ではその後共通語化が少しずつ進行し、以上の現象が失われつつある。世代・場面などによって発音に違いがある。これを異なった音韻体系の共存ととらえることができる。以下で設定するいくつかの音韻体系については、鶴岡地域の発音の歴史的変化の過程として、並べることができる。

この通時的動態の根本原理のひとつは、音変化と文法的類推という、歴史言語学の基本的動因であった。かつてカ行・タ行子音の有声化という発音変化が起こったが、そのために動詞活用体系に不規則な部分が生じた。これを修復するために文法的類推という変化が起きた。これにより補い合う分布がくずれて、新しい最小対 minimal pair が生まれたのである(井上(1968))。また最近になってからも、形容詞が多音節化して、モーラ音素を語幹に挿入する変化が進行して、音素の結合可能性が増えた。また共通語化に影響されて、助動詞との接続の音変化が起こった。

かつて子音だけに着目して、P体系とY体系という二重の体系の共存を論じた(井上(1968))。今回は母音など他の現象も考慮した。現在急速に流入しつつある共通語の体系も考慮に入れると、さらに新しい体系も存在すると考える方が記述に便利である。以下にくわしく論じる。

記述言語学では通時論と共時論の峻別が必要であり、理論的に有効でもあった。しかし現実社会の多様な言語使用を説明するためには、単一の言語体系がある地域社会に行われているという考えでは不十分である。複数の体系

の共存を考えるべきだし、またそれらが、通時的にP→O→Y→M体系という順番をもって使用されてきたことを考慮に入れる方が、現実をうまく説明できる。従ってここでは、通時論的な視点をもって、共時的音韻体系を記述する。

以下に見られるように、O体系から鼻音やアイ連母音の古風な発音がなくなったものが、Y体系である。またM体系は、Y体系に外来語音などが加わったものである。Y体系が一番単純な体系である。しかし現実の一個人がY体系だけしか使っていないわけではない。古風な発音と外来語の発音を取り去って、単純かつ整然たる体系を抽象したのがY体系と、位置づけることもできよう。

以下時系列に添って述べる。

2.1. 祖(P)体系

まず、鶴岡方言を含む東北方言のもっとも基本的な音韻体系を考える。歴史的に再構成したものにあたる。歴史言語学の「比較方法」と「内的再構」の方法により、音韻変化の「相対年代」を考慮に入れた結果である。現在の音韻体系から過去にさかのぼって構築したものだが、ここでは、時間的順番に従って、出発点として、祖語の体系から記述する。

現在の東北地方諸方言の音韻体系を、過去から現在にかけての中央語の体系と比較して、比較言語学・比較方言学の手法で祖語の体系を再構成することができる(井上(1980))。その結果によると、「東北祖語」は、旧かなづかいに反映されるような平安時代の中央語と同じものから出発したと考えられる。つまり、現在の東北方言の音韻現象を歴史的に説明するのに、文献などで知られる奈良時代の音韻体系まで戻る必要はない。たとえばイエオ段の母音の甲乙の区別は、東北に残っていない。もっともDallasの記述した明治初期の米沢方言には、かな発生直前のア行のエと、ヤ行のイエの区別が反映しているかとも思われるが、語例が不十分なために、確言できない。(換言すれば、中央の古文獻に残る音韻体系は、本土には残っていない。沖縄方言における奈良時代

母音の甲乙の区別の残存が議論のあるところである。) 東北方言母音の音声的相違の成因についても議論がある。連母音アイ・アウが平安時代以降(音便変化や漢語の流入によって)大量に発生し、中世に広いエと広いオが生じたことによって、連鎖反応として他の母音の音色が変化し、イとウの中舌化によって、現在の母音体系が生じたと、考えられる。

これは東北方言の体系としての新しさを示す。ただし、これは、祖語から分かれた直後の音韻体系が現在と同様だったことを示すわけではない。東北方言的な音韻体系を持つようになったあと、(東北以外の)本地方言と平行的な発展をとげた可能性もあるからである。現在に至るまで改新がかなり進んだことを示す。なお、東北方言に先住民の言語としてのアイヌ語基層があるという説は昔から多いが、今のところは、アイヌ語基層によってしか説明できないような確実な現象はない。たとえば東北方言の母音の音声が違うことについては、現在のアイヌ語の母音と共通性が少ないので、アイヌ語基層に帰することは無理である。カ・タ行子音の有声化についても、共通語の「清濁」とは違うが、それ以上にアイヌ語の子音体系は東北方言と違うので、これまたアイヌ語基層のためとはいえない。(ただし東北地方北部の地名などについては、アイヌ語起源のものが認められる。)

東北方言の最大の特徴は、カ・タ行子音の有声化(濁音化)である。有声母音間という限られた音韻環境で起こった。そのため、初期には下記のように、きれいな相補(補い合う)分布を示した。

	語頭その他	語中
音素	有声母音間以外	有声母音間
/k, t/	[k, t]	[g, d]
/g, d/	[g, d]	[ɟ, ð]

この有声化が可能になったのは、(中世までの中央語と同じく)語中で濁音に入りわたり鼻音(鼻音化)があって、k, t が有声化しても区別がついたため

ある。有声化については、『庄内方言攷』で「中濁」という用語を使っている(三矢(1930))。現在はまったくの有声子音だが、まだ変化の途中段階で、カタ行子音の語中での有声化が不十分だった可能性がある。これは第1次鶴岡調査の老人層の段階よりはるか以前の体系である。

この体系は、現在では再編成を受けたが、後述のような最小対を見つけだすのは容易ではなく、東北方言音韻分析の初期には、/k, g/ /t, d/ の音素の補いあう分布で説明された(柴田(1953))。しかし1960年代からは、後述の /k, g, ŋ/ /t, d, ð, n/ をたてる分析が主流になった。

東北方言は有声化の存在によって本州中央部の方言と区別される。この現象の実際の分布地域は、ほぼ利根川・阿賀野川以北である。なお、有声化の規則や入りわたり鼻音の分布からみて、東北方言の祖語では、サ行子音はあきらかに破裂的で、現在のような摩擦音ではなかった。

なお漢語と有声化については使用場面や相対年代により複雑な関係が考えられる。有声化を起こさない近代漢語だけに考察を限るともっと単純な体系が浮かび出る可能性がある。

2.2. 古(O)体系

上述のP体系は、その後東北各地で地域差を生じた。山間僻地での独自の発展があったし、また地方的中心地(大藩の城下町)の影響を受け、ある程度の地域に共通な現象が伝播した。江戸時代後期以降の鶴岡に行われていたと思われる体系を古(O)体系と名付けよう。

古(O)体系は、現在さまざまな手がかりから復元されるもっとも特徴的な発音を反映するものと、設定できる。これは第1次鶴岡調査でえられた老人層の発音のさらに前の段階にあたる。絶対年代では、ほぼ江戸時代後期から明治頃にあたるだろう。戦後まもなくまでは、農山村の老女のこぼとして、実際に耳にすることもあったような発音である。昭和期以降の方言研究での古典的記述で目指されていたもので、標準語・共通語の影響を受けていない、

いわゆる「純粹の方言」を反映する。もっとも方言的特徴が多い、大きい段階である。

この体系では、カ・タ行有声化が、文法的類推によって改変を受け、補い合う分布がくずれることになった。語幹の発音をそろえるという文法的類推により、次のようなミニマルペアが生じたことで、子音音素の設定について異論のない体系となった。

たとえば「聞く」の活用は、無声子音と無声子音+広い母音 (a, o, e) とに囲まれた環境では k の有声化が起こらないために、語幹部分で k, g 両方が使われ、伝統文法に従って書くと、次のようだった。

kikane kigimasu kigu kikeba kike

しかしその後語幹を g にそろえて単純化するという類推変化によって、以下のように変わった。

kigane kigimasu kigu kigeba kige

一方「腕白だ」のキカネは、独立の語としてこの類推の枠外にあったので、次のような最小対が生じた(音声記号は簡略表記)。

キカネ(腕白だ) キガネ(聞かない) キガネ(気兼ね)

[kikane] [kigane] [kigane]

同様に、可能動詞も、以下のような対を生みだした。

ツケル(付ける) ツゲル(着ける=着くことができる) ツゲル(告げる)

[tsukeru] [tsuɣeru] [tsuɣeru]

シケル(時化する) シゲル(敷ける=敷くことができる) シゲル(茂る)

[sikeru] [sigeru] [sigeru]

また次の例の形態素のように単語の切れ目と有声化の境界が一致しないで、語中で無声のカ行・タ行が現れることも原因である。

カルコイ(軽い) マルケル(丸める) ネブテ(眠い)

こうして母音間と語頭で、補い合う分布でなくなった。

なおタ行については、上野(1973)が次のような例をあげて、雫石方言では/t, d, ð/も同じ音韻環境で対立することを示している。「しい」/sii/「つい」/cui/

などの母音がさらに短母音化したためであるが、鶴岡方言では対応する例が見つかっていない。

/suta/(下) /suda/(敷いた) /suða-/ (しだれ柳)

/cuta/(蔦) /cudā/(突いた) /cuða/(千田)

しかし、鶴岡方言でも、カ・タ行を同じように扱って、次のように音韻分析すべきである。同様に、入りわたり鼻音を伴うザ・バ子音についても、平行的に独立の子音音素と認める方が、音声との対応が規則的になり、話し手の意識とも一致する。

	語頭その他	語 中
音素	有声母音間以外	有声母音間
/k, t/	[k, t]	[k, t]
/g, d/	[g, d]	[g, d]
/ŋ, ð/	---	[ŋ, ð]

古(O)体系は、音声的に、ほかに次のような特徴を示していた。

1. 濁音ザダバ行で子音に入りわたり鼻音が伴った。
2. ハ行の子音が両唇摩擦音[ɸ]だった。カ行合拗音クワ・グワ[kwa, gwa]があった。
3. ユ>ヨの変化が規則的に起こっていた。同様に拗音のユ段がヨ段に規則的に変化した。

しかし3の変化は、ここで記述する現代老人層の音韻体系になるまでに、回帰または共通語化を起こして、失われてしまった。

4. 語頭のイ>エの変化については、近代になってからかと思われる。これも回帰・共通語化を経た。
5. アイ連母音の融合はすでに起こっていた。形容詞終止形では徹底された。カ行・ガ行五段動詞の音便形では、かつて起こってケーダ(書いた)・ケーダ(嗅いだ)になった可能性もあるが、鶴岡市内では、確たる

証拠がない。

この体系は第1次鶴岡調査報告書の柴田の記述に反映している。重要な特徴は、鶴岡面接調査の音韻項目として採用された。特徴を羅列すると次のようであった。

母音： 中舌化 アイ連母音 イエ混同
 子音： 有声化 鼻音化 一つ仮名(シス,ジズ,チツ混同)
 八行音 カ行合拗音 セゼ

第1次調査のときは、鶴岡市内では、戦前からの共通語化によって方言的特色が薄れはじめた段階だった。1990年代には、市内はもとより、山間部でも特色音声を耳にすることがまれになった。第1次調査の記述は貴重な資料といえることができる。

2.3. 新(Y)体系

Yとは、かつては若い世代 Young(または調査地点 Yachi) を示すものだったが(井上(1968)),その後若い世代での共通語化が急速に進んだために、鶴岡では現在の老人層から中堅層にかけての体系と、位置づけられる。ただし鶴岡の若者の間にもこの体系は受け継がれているし、農山村ではもっと強固な勢力を若者の間に張っている。この体系はかなり安定したもので、東北地方各地で観察される。第2,3次鶴岡調査での中年層(八行両唇音・サ行口蓋化・濁音の鼻音化を失った人たち)の音韻体系がこれである。現実には、個々の単語の発音の仕方などで、共通語化の程度が連続体 continuum を示す。井上自身が身につけたのはこのY体系である。同世代の者と帰省のたびごとに方言で話していて違和感がないし、同世代の調査や自然会話の録音でも音韻体系の違いは認められない。

具体的音韻現象をあげると、アイ連母音からの広いエ[e]は従来の狭いエ[e]と合一した。他の母音の音声は以前と変わらず、中舌化は温存している。カタ行子音の有声化は温存した。(鼻音化を失ったために、「的」「窓」ともにマド

になった。しかし文脈で識別できるので、伝達に不便は生じなかった。)音韻的にはシス, チツ, ジズの区別が保たれており、「二つ仮名」である。ハ行子音の両唇音はフのばあいのみ現れる。セゼでの口蓋化は、方言語彙では温存されたが、近代漢語や外来語ではセゼで発音される。

2.4. 現(M)体系

現在の鶴岡の若い世代では、共通語化がさらに進行した。また外来語の影響もあった。それによりモーラが増加した。これは、中年以上が改まった場面で使用する体系でもありうる。学校の共通語教育で教わるものに近い。

中年以上の体系との目立った違いは、/e/ についての音韻意識・認知である。狭い母音が連母音の後部要素として現れるときに、すべて/i/と解釈される(つまりアイとアエの区別がなくなった)。またシ/si/・ジ/zi/・チ/ci/にあたる音声は単語により口蓋化に違いがある。音韻分析および自然会話の分析によると、共通語シジチに対応する音節はY体系では [si, zi, tsi] だが、M体系では [ʃi, zi, tʃi] になる傾向がある。つまり、Y体系とM体系の違いは音声的なものと扱いうる。ただ、オモシ[omoʃi](面白い)(ももとはオモシエ [omoʃe])などのいくつかの方言特有の語形については、[si]という発音が聞かれない。このような語彙的相違をどう扱うかで、M体系の音韻分析に違いが出る可能性がある。

またカ・タ行子音の有声化も、文法形式では保たれているが、個々の単語では有声化を示さないものもある。ことに新語や改まった場面で使われやすい語が共通語的発音になる。現在の青年層は、音韻体系そのものはY体系とそっくりでも、個々の所属語に関しては徐々に共通語に近づいているらしい。

2.5. 共通語(K)体系

共通語の圧倒的影響で、鶴岡の若い世代の中には、日常も(少なくとも調査

の場面では)共通語を使う人が多くなってきた。以前から本人または母親が共通語使用地域の人で観察されていたが、地元生え抜きでも共通語を使う人の割合が多くなった。

その音韻体系は、現代東京共通語と同じである。ただガ行鼻音については、東北方言の基層を受け継いで、保持する人が多いが、生徒の中にはガ行鼻音を持たないものも出現している。この人たちは有声化も振り捨てているので、「柿」と「鍵」の区別がなくなるわけではない。ただY体系の持ち主とのコミュニケーションで混乱が起きる可能性があるが、文脈で見当がつくせい、誤解のエピソードは耳にしていない。

この体系は、鶴岡方言の体系の内的必然として出たものでなく、外的に借用として取り入れられたものであり、さらに現代共通語と同一なので、以下では正面から記述の対象とはしない。

3. 研究の視点

3.1. 研究材料

以下での記述に使った資料は、次のとおりである。1の内省が主で、2で確認し、他は参考に使った。

1. 井上の内省。(1942年鶴岡旧市内鳥居町生まれ、18才まで同所で生育。その後上京。平均1年1回以上帰省。方言と共通語の使い分けは話し相手による。父は山形市、母は鶴岡旧市内生育。アクセントも一型でなく鶴岡方言のものを習得したことから分かるように、言語的には父の影響は少ない。)
2. 録音資料。旧士族老年層のもの(ビデオデータもある)。鶴岡朝暘第2小学校80周年記念座談会(老・中・若)記録テープ。中年層の自然会話テープ。高校生の自然会話データ(ビデオ)。
3. 面接調査資料。鶴岡方言を用いて面接調査した資料は、庄内方言地図

や庄内グロットグラムのための調査その他数多い。庄内各地についての資料がある。(なお国立国語研究所の鶴岡の第2次・第3次面接調査では井上は共通語を使用した。)

4. 文献資料。斎藤義七郎翻刻の各種「郷土本」はじめ、江戸時代以来の方言記述。斎藤秀一の鶴岡近郊山添の方言記述。

3.2. 比較対照の観点

共通語と対照してこの方言の音韻体系を特徴づけるためには、いくつかの観点が可能である。ここで整理して述べる。

3.2.1. 分布 distribution

まず共時的な音素の分布の違いがある。これまでの音韻論ではこれが特に注目された。音素の数と体系的配置に着目し、共通語との違いが指摘された。たとえば濁音ザダバについて、鼻音化した音素をたてるのは、音韻分布そのものの共通語との違いを意味する。ただ、歴史的視点に立つなら、共通語とはくらべずに、旧かなづかいに反映されるような体系とくらべ、しかるのちに共通語との違いを指摘する方が、実態をよく示すはずである。

また鶴岡方言と東北方言一般との違いを指摘する視点もある。たとえば、いわゆる「ズーズー弁」(＝一っ仮名弁)でないこと、つまり、シズ、ジズ、チツの区別があることは、旧かなづかいや共通語と対比するだけでは、特徴として浮かび上がってこない。同様に、語頭のイエの区別があることも、かつての東北方言一般と違うところである。

3.2.2. 音声的特徴 phonetic realization

位置づけの視点として、各音素の音声的実現も重要である。ことにY体系は、音素の共時的体系としては共通語と類似するが、音声的実現はずいぶん違う。母音の音声が食い違っているためである。一般人には、「発音があいまい

だ」という(自己中心的な)印象を与える。ことにサザ(タダ)行で、音韻的にはシ・ス、チ・ツなどの区別があるが、実現する音声で子音が[s]であるために、[j]を期待する他地域の人には、発音があいまいという印象を与えうる。

3. 2. 3. 所属語例(音韻対応) correspondence

位置づけのもうひとつの視点は、所属語例である。通時的観点から、共通語または旧かなづかいに反映されるような音韻体系を比較の基準におくと、特徴が浮かび出る。たとえば、硬口蓋子音(舌音系列)で、/t, d, n/が存在するのは共通語と同様だが、所属する語がずれており、かつて語中で有声化が起こったために共通語の /-t-/ は鶴岡方言では /-d-/ になる。これは音韻対応の違いである。なお、漢語・外来語・擬声擬態語は別扱いされる必要がある。

この違いは、一般人には「ことばが濁る」などと表現されるが、上の1と2の視点では説明が難しい。

また所属語の少ないモーラがある。セは鶴岡方言にも存在するが、その発音を持つ語は少ない。大部分の方言語彙がシェで発音されるからである。

以下では、この三つの視点を適宜おりまぜて、鶴岡方言の音韻の特徴を浮き彫りにしたい。

4. 共時的音韻記述

4. 1. 記述方針

以下では、鶴岡方言について、三つの共存する体系を記述する。3体系に分ける基準は、以下のようなものである。

まず東北方言の祖語にあたるP体系は、記述の対象とはしない。再構されたこの体系は、夜空の星のように、個々の音韻現象については時代が違うからである。

第1のO体系の記述では、現在たどりうる最古の体系をめざした。ただ、現

在の鶴岡市内の老人層の音韻記述からは、郊外の老人がかつて使っていたような体系、ましてや江戸時代の記述や郷土本の表記に表れるような体系は出てこない。

第2のY体系は、現在の鶴岡の活躍層の体系である。日常よく耳にするものでもあり、記述の中心にすえた。

第3のM体系は、現在の鶴岡の若者の体系である。Y体系との食い違いを重点に記述する。

このあと共通語と同じK体系が、個人により、場面により広がりつつあるが、ここでは記述対象としない。

以下では、抽象的な単位、数の少ない分析単位から記述をはじめめる。

4.2. 音素目録 inventory

まず音素目録から、要素の数の少ないものからみる。母音・子音などの音素をあげる。体系 system としての組立も考える。次にその組み合わせを提示する。実際の音韻記述では、単語を発音してもらって発音の区別の有無をみる。それをもとに母音子音を設定した。O, Y, Mの体系を区別しながら説明する。

4.2.1. 母音 vowels

母音の数には変遷があった。O体系では、東北方言一般と同様に次のように6個の母音を設定される。前舌・後舌の母音音素の数をそろえる形で、配列した。

O体系	/	i		u	
		e		o	
		ɛ	a		/

特徴は、まず音素の分布として/e/があること。音声的には、国際音声字母の[ɛ], D. ジョーンズの基本母音 No. 3 に近い。カタカナなら「エァ」などで表記が可能である。歴史的対応からいうと、かつてのアイ(アエ)連母音の変化＝融合から生じたものである(オイは融合せず)。

他の母音についても音声的には共通語と食い違いがある。

/i/は中舌母音である。D. ジョーンズの基本母音 No. 17 に近い。しかし唇はわずかな張唇で緊張はゆるやかである。ここでは[i]で表記する。

/u/も中舌母音である。D. ジョーンズの基本母音 No. 18 に近い。唇は円唇にはならず、緊張はゆるやかである。ここでは簡略表記として[u]で表記する。

/e/はいわゆる狭いエにあたる調音で、ほぼD. ジョーンズの基本母音 No. 2 にあたる。ここでは国際音声字母本来の用法に従って[e]で表記するが、共通語のエより狭い(イに近い)ことに注意すべきである。

母音については世代差が大きく、若い世代で5母音化が共通語化の形で進行中である。Y体系とM体系は母音体系については同一である。

Y体系とM体系	/	i		u
			e	o
			a	/

この体系は、アイ連母音からの広いエァが使われなくなった(元からのエと融合した)もので、共通語化による。従って歴史的には、Y体系とM体系の/e/には共通語のエ段由来のものと、アイ連母音由来のもの双方が属する。音声的には共通語と食い違いがあり、前述の狭いエである。

Y体系とM体系の違いの一つは母音の音声にある。現在の10代のかなりは、5母音の音声的実質も共通語化に向かいつつあり、/i/ /u/ の中舌性を失い、/e/ が共通語と同じ広さの母音に化しつつある。くわしくみると、/u/ の音声は張唇(平唇)で、東日本の共通語の発音である。ただし後述のように有声化は(ことに文法形式において)残しているので、響きは東北弁的・鶴岡方言的

である。また促音のあとに濁音が来うる点なども、従来の鶴岡方言と変わらない。典型・理想型としてM体系を設定するときには、母音手がかりになる。しかし後述のすべてのM体系の特徴が束となって、ある個人の個人語 idiolect に現れるわけではなく、現象によって出入りがある。これまでの鶴岡調査報告書および後に公刊される鶴岡市全体の社会言語学的調査で、個々の音韻現象による使用率の違いとして、明らかなおりである。

4.2.2. 半母音 semivowels

O = Y = M体系

/ w j /

ヤ行・ワ行・拗音・合拗音は、半母音が加わったものと解釈でき、O, Y, M, 三つの体系に共通である。後述のように、組み合わせの可能性に違いがある。また音声的にはゆるんだ発音があって、たとえばカヤ/kaja/(蚊帳)の/j/にあたる発音は、前後の母音[a]よりわずかに狭い母音にすぎない。

4.2.3. 子音 consonants

O体系の子音は数が多い。有声化が起こり、文法的類推により、補い合う分布がくずれたためである。

O体系	/	p	t	c	s	k	h
		b	d	z		g	'
		ḃ	ḋ	ž			
		m	n	r		ŋ	/

O体系の音韻の特徴は、分布の点で鼻音化した / ḃ ḋ ž / があることである。音声的には、濁音にあたる子音の入りわたりが語中で鼻音化し、前の母音の出わりも鼻音化する。歴史的音韻対応からいうと、かつての濁音のう

ちザ・ダ・バ行の子音にあたる。中世以前の日本語中央語の発音をほぼ引き継いだものである。ザ・ダ・バ行の鼻音は衰微傾向にある。鼻音化の程度に個人差があるだけでなく、単語の音声環境の差、意味分野・使用範囲の差もある。談話の場面差・文体差もある。老人女性の気のおけない自然会話で、昔からの暮らしに関することを方言特有の語彙で話すときには、鼻音化がはっきり表れることがある。なお濁音系列の中でもガ行子音は完全な鼻音(鼻濁音)である。

音素 /' / については注釈が必要である。母音・半母音のまえて、音声的に喉頭化音があるわけではない。しかし、「里親：砂糖屋」の区別は可能である。これを /sadooja/ /sadorja/ のように、長音部分のモーラ音素/R/を使って表記し分けることもできる。音素 /' / を設定すると、/sado'o'ja/ /sador'ja/ のようになり、余剰的ではあるがもっとはっきり区別できる。しかも音素 /' / を設定すると、基本的音韻構造を統一的に/CV/として説明することができる。また、ハイル(入る)対ハエル(生える)の発音の対立があるが、ハイルを /hajru/ と解釈すると音素 /' / はたてないで済む。しかしハエルは /haeru/ としか解釈できない。ここで母音連続が生じる。片方のイが(はっきり中舌母音の響きがあるにもかかわらず)半母音で、もう一方のエが母音という扱いは、音素の分布と機能が似ているこのペアには、不適切である。ハイル・ハエル双方をそろえて、/ha'iru/ /ha'eru/ と解釈したい。

Y体系の子音は、数が減った。Y体系の特徴は、O体系の入りわたり鼻音を伴った子音音素がなくなったことである。非鼻音化により「的・窓」がともにマドと発音される。音韻的区別が消滅したことになる。発音では区別できない(アクセントも単独では同じ)。

Y・M体系 /	p	t	c	s	k	h
	b	d	z		g	'
	m	n	r		ŋ	/

M体系の子音も見かけ上同じである。母音の音声が共通語と同じものに変化するのと連動するかたちで、サザタダ行の子音も変化があった。M体系の子音を増やすか否かは、サ行などの子音の解釈次第である。セ・シェ、スイ・シが単語によって使い分けられる傾向が生じたのを /s/ /ʃ/ という別音素で説明するか否かである。若い世代の自然会話資料によると、スイとシの使い分けは単語・人・場面で様々な変異がある。同一モーラ /si/ の自由変異音と考えることができる(音韻論的には自由変異だが、社会言語学的に説明できる性格のものである)。「面白い」などの単語は [omɔʃi] とのみ発音されるが、語によっては [ʃi] とも [si] とも発音される。共通語化の進む一段階で、語彙的伝播 lexical diffusion の現象が現れているものと説明できる。

これと異なる解釈もある。別のモーラと解釈するが、

/sje/ /sji/ /se/ /si/

のようにすれば、音素の数は少なくともすむ。ハ行の両唇音について /hwa hwi hwe hwo/ で説明するのと同じである。半母音の組み合わせで説明するわけである。ここでは、最後の見解に従ってモーラ表を作った。

4.2.4. モーラ音素(特殊拍) moraic phonemes

モーラ音素に関しては、O, Y, M体系とも共通で、次のようである。

/ Q N R /

それぞれ仮名で「ッ」「ン」「ー」で表記され、促音・撥音・長音(特殊拍)にあたる。数としては、すべての体系に共通だが、後述のように長さについて音声的違いがある。また現れうる音韻環境についても、違いがある。漢語起源の語については、いわゆる訛語として特殊拍が脱落したり付加されたものがかつては存在したらしいが、現在はそう多くない。ゴンボ、ネンジ(ごぼう、人参)などは耳にしなくなった。

モーラ音素同士が連続することは多くない。「トーン」「ブーン」「シーン」のような擬声語擬態語では/R/のあとに/N/が来る。「トーン」「スプーン」「シーン」のような外来語でも/R/のあとに/N/が来るようになった。しかし「ト音(記号)」「保温」「武運」「子音」などは、/R/ではなく、それぞれ/to'on/ /ho'on/ /bu'un/ /si'in/である。共通語では「秘蔵っ子」で/R/のあとに/q/が来るし、「ロンドンっ子」では/N/のあとに/q/が来るが、鶴岡方言としては使用がまれである。

従ってよく現れる結合は、R-Nのみである。

4.3. 音節構造 structure

音節構造では、O=Y=M体系である。

鶴岡方言の音素連結の基本構造すなわち規準形 canonical form は、CV というモーラ、つまり子音+母音の結合である。CV構造の「開音節」が基本で、この結合が多くの単語で圧倒的である。斎藤秀一によれば、多くの漢語起源の語が方言形として撥音・促音を脱落させて、このCVの形を取った。しかし、現在はさらに音素結合の可能性が増えた。文法形式でも促音・撥音をとるものが新形として現れている。現在の結合の可能性をみると次のようになる。2拍以上の単語では、この基礎構造が反復されることになる。

(M)C(S)V(M(M))

つまり、まず基本のCVの前にモーラ音素Mが入りうる。これは共通語にはまれな特徴的結合で、特殊拍で始まる音節・単語がある。語例をみると次の結合がある。

MC- / Nd- Nm- /

ンダ(そうだ)、ンデネ(そうじゃない)、ンメ(うまい、梅)、ンマ(馬)は市内でも使われる。ンガ(おまえ)は近郊で使われることがあったが、現在は耳にし

ない。ンナ(父)がかつて近郊で使われており、鶴岡方言でも引用の形で発音することが可能である。ンネ(そうじゃない)が山形県内陸地方などから報告されているが、鶴岡方言では言わない。庄内方言の中にはンブ(おぶう)という地域もあるが、鶴岡市内では知られていない。従って語頭の / nn- nŋ- nb- / はない。なお東京語の「ンマ、ンメ、ンマイ」(馬・梅・うまい)などの [m] は、[m]の前のみという限定があり、ウ/u/の条件異音と解釈できるが、鶴岡方言ではdの前にも現れるので、音素/n/と解釈する。

CとVの間には半母音Sが入りうる(拗音)。これは共通語でも当たり前の現象である。結合可能性については、4.5.表1で論じる。

CVの後にはモーラ音素が入りうる。これも共通語で当たり前である。なお、このMの後に来うる音素には、共通語とくらべて制限が少ないが、後述する。

4.4. リズム単位 rhythmic units

リズムの単位にも特徴がある。柴田武提唱の着眼点で、アクセントと音節の音声的長さに着目した日本方言の2分類、シラビーム方言とモーラ方言の区別である。古代日本語は音節=シラブルが単位のシラビーム方言であった。特殊拍「ンッー」も一つのリズム単位に数えるモーラ方言は、後世生じたものと考えられている。

鶴岡方言のO体系・Y体系は、「ンッー」が短く発音されるという音声的実現からいっても、アクセントの単位からいっても、シラビーム方言である。一方M体系では、ほぼ完全にモーラ方言になったとみなされる。ただしモーラ方言になった変化時期を確定することは難しい。なお「鶴岡方言の位置」でも指摘したように、五段活用動詞の音便形で「買った」「読んだ」などの促音・撥音が脱落する現象が、庄内地方で観察される。「要る」にあたる庄内方言の単語が「ヨダ」になるのも、語源の「要だ」の長音の脱落と説明できる。

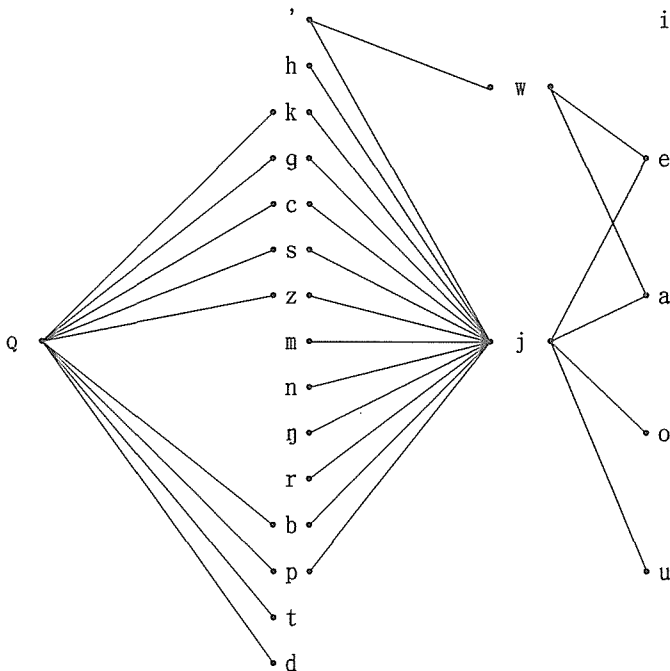
リズム単位とからむが、鶴岡方言では、1拍名詞は単独では(また助詞が付

いた場合も)やや長く発音される。文字および共通語教育のおかげで、やや長いことに気づかないか、「半分の長さ」と意識することが多い。しかし、長音の拍を含む語の長さが共通語にくらべて短いので、たとえば「戸」と「十」、「子」と「甲」、「目」と「姪」、「絵・柄」と「A」、「麩」と「封」は、(アクセントを無視すれば)発音の上では長さの差が判別できず、約1.5拍分である。1拍名詞は、CVMの2モーラ(1シラビーム)と解釈されるべきである。つまり規準形CVのみからなる(1モーラの)単語は、存在しない。

4.5. 音素結合(配列)論 phonotactics

ここでは、音素同士が単語を作るときにどんな順番でつながるかの可能性

表1 音素結合表



を見る。上のように基本的には

(M)C(S)V(M)

であっても、モーラ音素Mの出現には、制限がある。

音素同士がつながるときの規則性・制限については、共通語と一部異なる。1音節を形成する(M)C S Vの結合を表1に示す。これはY体系のものである。O体系・M体系とも、基本的には同じパターンを示す。

もっとも目だつ違いは、Mを考慮に入れたときであり、促音qのあとに濁音が来うことである(共通語では、もともと促音は濁音の前には現れなかった)。表1の左側が特徴的である。なお、近郊では-r-の前でも促音が表れるようである(IV章参照)。

鶴岡方言で濁音の前に促音が使われるようになった最大の原因は、文法的なものだった。動詞終止形のルが、促音化したのである。たとえば-ru+gaが、オギッガ(起きるか)のようになった。また語彙的現象として、形容詞の語幹のモーラ数が増える傾向があった。カッデ(固い)、アッゲ(赤い)などである(共通語でも、現在は外来語により促音のあとに濁音が出現した。)

5. モーラ表

上記の音素結合の可能性のうち、C Vの結合については、以前から五十音図の形で示すことがあった。方言音韻の分析でもC Vのモーラの結合を示すのが慣例である。このやりかたで諸方言の違いがあらわになるからである。以下に一覧表を示す。半母音の入るC S Vの結合も入れる。

音素表記とカタカナ表記とを1対1で対応させることも試みる。O体系、Y体系、M体系をそれぞれ別に示す。

5.1.1. O体系モーラ表 (表2参照)

音素そのものは、前述した。全般的現象について説明する。

まず有声化について。かつては補い合う分布をなしていただろうが、音韻

論的に鼻音化音素と分離された。有声化したカ・タ行子音が「中濁」という記述があるが、実態は不明である。補い合う分布だとしたら子音の数が少なくなるが、現在の老人層では、完全な補い合う分布は観察されない。従って、子音音素の数が増え、モーラも増える。

語頭のイ・エの混同=合一についても過去の状況はあいまいである。語頭のイのない方言は、現在は「川北」(庄内地方最上川以北)が主で、エモコ(里芋の子芋)のような発音がある。

ユとヨの合一、拗音ユ段がヨ段に合一した現象も同様である。カヨ(粥飴、樹液)、ツヨ(露、金田一春彦の再構)、タヨハン(神主<太夫様)、ショーゲン(祝言)、ジョンモン(十文)、チョーギ(中気)のような訛語が、かつての混同を物語る。また士族に伝えられた「庄内論語」の唱え方で(酒井忠明氏吹き込みのカセットテープによる)、「ギオ ミテ セザルワ ヨー ナキ ナリ」のようになるのは、『庄内方言攷』で「士大夫」もユ>ヨの訛を免れないとした記述と合致する。ただし、新潟方言などと違って、ヌとノ、ルとロなども合一したかは、不明である。

二つ仮名か一つ仮名か、ズーズー弁かについては、市内でかつてシス、ジズ、チツを混同したか、不明である。文献の記述でも不確かである。農村部では混同し、現在の老人も区別がない。市内で混同した形跡は、今となっては見つけにくい。

音声的には、シ・ジ・ンジ・チでは非口蓋化子音+中舌母音が使われ、セ・ゼ・ンゼでは口蓋化子音+半狭母音が使われる。

なおここでのカタカナ表記は音韻的に与える。(表音的なら以下のように与えたいところである。)

スイ ズィ ンズィ ツィ シェ ジェ ンジェ

[]内に発音記号で音声を示す。簡略表記として用いる。母音[i, u]が無声子音の前で無声母音化する現象などは、表記には示していない。()内は、語の意味。同音語は同じ()内に示した。アクセントは無視してある。

表2 O体系モーラ表 鶴岡市内江戸・明治時代 鶴岡市内老年層

網掛けはY体系との相違箇所

/	'i	'e	'ɛ	'a	'o	'u	'ja	'jo	'ju	'je	'wa	'we
イ	エ	エァ	ア	オ	ウ	ヤ	ヨ	ユ	イェァ	ワ	ウェァ	
hi	he	he	ha	ho	hu	hja	hjo	hju	--	--	--	
ヒ	ヘ	ヘァ	ハ	ホ	フ	ヒャ	ヒョ	ヒュ	--	--	--	
ki	ke	ke	ka	ko	ku	kja	kjo	kju	--	--	--	
キ	ケ	ケァ	カ	コ	ク	キャ	キョ	キユ	--	--	--	
gi	ge	ge	ga	go	gu	gja	gjo	gju	--	--	--	
ギ	ゲ	ゲァ	ガ	ゴ	グ	ギャ	ギョ	ギユ	--	--	--	
gi	ge	ge	ga	go	gu	gja	gjo	gju	--	--	--	
ギ	ゲ	ゲァ	ガ	ゴ	グ	ギャ	ギョ	ギユ	--	--	--	
si	se	se	sa	so	su	sja	sjo	sju	--	--	--	
シ	セ	セァ	サ	ソ	ス	シャ	ショ	シユ	--	--	--	
zi	ze	ze	za	zo	zu	zja	zjo	zju	--	--	--	
ジ	ゼ	ゼァ	ザ	ゾ	ズ	ジャ	ジョ	ジュ	--	--	--	
zi	ze	ze	za	zo	zu	zja	zjo	zju	--	--	--	
ジ	ゼ	ゼァ	ザ	ゾ	ズ	ジャ	ジョ	ジュ	--	--	--	
ci	--	--	--	co	cu	cja	cjo	cju	--	--	--	
チ	--	--	--	ツォ	ツ	チャ	チョ	チュ	--	--	--	
--	te	te	ta	to	--	--	--	--	--	--	--	
--	テ	テァ	タ	ト	--	--	--	--	--	--	--	
--	de	de	da	do	--	--	--	--	--	--	--	
--	デ	デァ	ダ	ド	--	--	--	--	--	--	--	
--	de	de	da	do	--	--	--	--	--	--	--	
--	ンデ	ンデァ	ンダ	ンド	--	--	--	--	--	--	--	
ni	ne	ne	na	no	nu	nja	njo	nju	--	--	--	
ニ	ネ	ネァ	ナ	ノ	ヌ	ニャ	ニョ	ニユ	--	--	--	
ri	re	re	ra	ro	ru	rja	rjo	rju	--	--	--	
リ	レ	レァ	ラ	ロ	ル	リャ	リョ	リュ	--	--	--	
pi	pe	pe	pa	po	pu	pja	pjo	pju	--	--	--	
ピ	ペ	ペァ	パ	ポ	プ	ピャ	ピョ	ピユ	--	--	--	
bi	be	be	ba	bo	bu	bja	bjo	bju	--	--	--	
ビ	ベ	ベァ	バ	ボ	ブ	ビャ	ビョ	ビユ	--	--	--	
bi	be	be	ba	bo	bu	bja	bjo	bju	--	--	--	
ンビ	ンベ	ンベァ	ンバ	ンボ	ンブ	ンビャ	ンビョ	ンビユ	--	--	--	
mi	me	me	ma	mo	mu	mja	mjo	mju	--	--	--	
ミ	メ	メァ	マ	モ	ム	ミャ	ミョ	ミユ	--	--	--	
	N		Q		R							
	ン		ッ		ー							

5.1.2. O体系語例

以下には、Y体系と違うもの(表2で網掛けした部分)のみ、語例をかかげる。

イエア	ハイエア[hajɛ](早い)
ウエア	ヨウエア[jowɛ](弱い) コウエア[kowɛ](こわい, 疲れた)
ンジ	サンジ[saʒi](匙)
ンゼ	カンゼ[kaʒɛ](風)
ンザ	アンザ[aʒa](あざ)
ンゾ	ナンゾ[naʒo](謎)
ンズ	カンズ[kaʒu](数)
ンジャ	ダインジャ[daĩʒa](大蛇)
ンジョ	ダインジョンド[daĩʒoɔda](大丈夫だ)
ンジュ	フンジュン[ɸuʒun](不順)
ンデ	ユンデル[jwɔderu](ゆでる) ウンデ[wɔde](腕)
ンダ	マンド[maɔda](未だ) メンダマ[meɔama](目玉) キレーンダ [kiɾe:ɔda](綺麗だ)
ンド	カンド[kaɔo](角) オンドリ[oɔori](踊り)
ンビ	カンビ[kaɔi](微) ワサンビ[wasaɔi](山葵)
ンベ	カンベ[kaɔe](壁) ナンベ[naɔe](鍋)
ンバ	ハンバ[haɔa](幅) ツンバゲ[tɕuɔage](唾)
ンボ	ツンボ[tɕuɔo](壺) ノンボル[noɔoru](登る)
ンブ	カンブラ[kaɔura](蕪) ハゴンブ[hagoɔu](運ぶ)
ンビャ	
ンビョ	テンビョーシ[teɔjo:si](手拍子)
ンビュ	
エア	エアーサズ[ɛ:sazɯ](挨拶)

ヘア	ヘアール[hɛ:rw](入る)
ケア	ケアゴ[kɛ:go](蚕) ケアダ[kɛ:da](書いた)
ゲア	タゲア[tagɛ](高い)
ゲァ	タゲァーダ[taŋɛ:da](持ったくタグイタ)
セア	アッセア[asse](浅い)
ゼア	ゼァンゴ[zɛŋgo](在郷)
ンゼァ	サンゼァ[sazɛ](栄螺)
テァ	テァーシタ[te:sita](大した)
デア	カデア[kadɛ](固い) デァーゴン[de:gon](大根)
ンデア	キョーンデア[kjo:ðɛ](兄弟)
ネァ	ネァー[nɛ:](無い)
レァ	カレァ[karɛ](辛い)
ペァ	エッペァ[eppɛ](いっぱい)
ベァ	サンベァ[sambe](3杯)
ンベァ	ニンベァ[niɸɛ](2倍)
メァ	ンメァ[mme](うまい)

以下は音声で顕著に違う例である。ンゼァについてはすでに掲げた。

セ	アセ[aʃɛ](汗) セギ[ʃegĩ](咳) セー[ʃe:](しろ)
ゼ	ゼーキン[zɛ:kĩN](税金)

5.2.1. Y体系モーラ表 (表3参照)

Y体系のモーラ表の表層をみると、共通語のものと類似する。しかし音声的に差異は大きく、発音すればすぐ分かる。原因は母音の音色が違い、また歴史的対応が違うことによる。母音は5母音であるが、イウエの音声が違う。子音ではO体系における濁音の入りわり鼻音が消失した影響が大きい。これにより子音音素は減少した。ただしガ行鼻音は、音声的に入りわり鼻音と違っていたのでそのまま保たれた。

表3 Y体系モーラ表 鶴岡市内中年層

/	'i	'e	'a	o	'u	'je	'ja	'jo	'ju	'wa	'we
	イ	エ	ア	オ	ウ	イェ	ヤ	ヨ	ユ	ワ	ウエ
	hi	he	ha	ho	hu	--	hja	hjo	hju	--	--
	ヒ	ヘ	ハ	ホ	フ		ヒャ	ヒョ	ヒュ		
	ki	ke	ka	ko	ku	--	kja	kjo	kju	--	--
	キ	ケ	カ	コ	ク		キャ	キョ	キユ		
	gi	ge	ga	go	gu	--	gja	gjo	gju	--	--
	ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ		ギャ	ギョ	ギユ		
	ŋi	ŋe	ŋa	ŋo	ŋu	--	ŋja	ŋjo	ŋju	--	--
	ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ		ギャ	ギョ	ギユ		
	si	se	sa	so	su	sje	sja	sjo	sju	--	--
	シ	セ	サ	ソ	ス	シエ	シャ	ショ	シユ		
	zi	ze	za	zo	zu	zje	zja	zjo	zju	--	--
	ジ	ゼ	ザ	ゾ	ズ	ジエ	ジャ	ジョ	ジユ		
	ci	--	--	co	cu	cje	cja	cjo	cju	--	--
	チ			ツォ	ツ	チェ	チャ	チョ	チュ		
	--	te	ta	to	--	--	--	--	--	--	--
		テ	タ	ト							
	--	de	da	do	--	--	--	--	--	--	--
		デ	ダ	ド							
	ni	ne	na	no	nu	--	nja	njo	nju	--	--
	ニ	ネ	ナ	ノ	ヌ		ニャ	ニョ	ニユ		
	ri	re	ra	ro	ru	--	rja	rjo	rju	--	--
	リ	レ	ラ	ロ	ル		リャ	リョ	リュ		
	pi	pe	pa	po	pu	--	pja	pjo	pju	--	--
	ピ	ペ	パ	ポ	プ		ピャ	ピョ	ピユ		
	bi	be	ba	bo	bu	--	bja	bjo	bju	--	--
	ビ	ベ	バ	ボ	ブ		ビャ	ビョ	ビユ		
	mi	me	ma	mo	mu	--	mja	mjo	mju	--	--
	ミ	メ	マ	モ	ム		ミャ	ミョ	ミユ		
			N	Q	R						
			ン	ッ	ー						

語中でもハイル(入る)・ハエル(生える)・ウナサエル(うなされる)などのようにイ・エの区別がある。

音声的には古音と共通語化の結果とが共存している。シ・ジ・チでは非口蓋化子音と中舌母音が使われる。シェ・ジェでは口蓋化子音と狭い母音エが使われ、セ・ゼと語によって並存している。

5.2.2. Y体系語例

以下に各モーラの語例をあげる。語頭と語中,前後の音環境(5母音・促音・撥音・長音)を考慮に入れて,様々な例をあげる。最小対(ミニマルペア)の例をあげるようにしたが,各モーラごとに語例を並べたために,ペアを探しにくい。

喉音系列

- イ /'i/ イー[i:](胃) イシ[is̩i](石) イバル[i̯baru](威張る) ハイル
[ha̯iru](入る) タイゴ[ta̯igo](太鼓) キーロ[k̩i:ro](黄色) ス
イガ[s̩wiga](西瓜) コイ[k̩oi](鯉・恋) ゲンイン[gen̩in](原因)
- エ /'e/ エー[e:](柄) ハエル[ha̯eru](生える) ニエル[n̩ieru](煮える)
ウエ[ue](上) コエ[k̩oe](声・肥え) サンエン[s̩anen](三円)
ツエ[tsue](強い)
- ア /'a/ アサ[asa](朝) ホラアナ[h̩oraana](洞穴) ニアウ[n̩ia̯u](似合
う) タグアン[tag̩uan](沢庵) マエアシ[ma̯easi](前足) トア
ミ[to̩ami](投網)
- オ /'o/ オッパ[op̩pa](尾) オドゴ[od̩ogo](男) カオ[k̩ao](顔) シオ
[s̩io](塩) カズオ[k̩az̩uo](鯉) テオゲ[te̩oge](手桶) カンオ
ゲ[k̩anoge](棺桶)
- ウ /'u/ ウー[w̩:](鶺鴒) ウリ[w̩ri](瓜) カウ[k̩aw](買う) イウ[i̯u](言
う) ミズウミ[m̩iz̩u̯umi](湖) ヒロウ[h̩irow](拾う)
- イエ/'je/ ハイエ[h̩aje](早い)

- ヤ /'ja/ ヤマ[jama](山) カヤ[kaja](蚊帳) ヒヤス[hijasw](冷やす)
クヤム[kwjamu](悔やむ) ヘヤ[heja](部屋) オヤ[oja](親)
ホンヤ[honja](本屋)
- ヨ /'jo/ ヨージ[jo:zi](用事) ヨウエ[jowe](弱い) コヨリ[kojori](紙
捻り) ドヨー[dojo:](土曜) メンヨー[menjo:](綿羊)
- ユ /'ju/ ユリ[juri](百合) ユビ[jubi](指) オユ[oju](お湯) マユ
[majw](繭) フユ[ɸujw](冬) ショーユ[ʃo:jw](醤油) カンユ
[kanjw](肝油)
- ワ /'wa/ ワッカ[wakka](輪) カワ[kawa](川) ワリ[wari](悪い) イワ
[iwa](岩) クワ[kuwa](桑・鍬) セワ[sewa](世話) デンワ
[denwa](電話)
- ウエ/'we/ ヨウエ[jowe](弱い) コウエ[kowe](恐い・疲れた)
- ヒ /hi / ヒー[hi:](火) ヒヤグ[hijagw](柄杓) オヒサマ[ohisama](お
日様) ジョーヒン[ʒo:hin](上品)
- ヘ /he / ヘー[he:](屁) ヘソビ[hesobi](鍋墨) シマヘビ[simahebi](縞
蛇) ニヘン[nihen](二辺)
- ハ /ha / ハッパ[happa](葉) ハド[hado](鳩) ゴハン[gohan](御飯) デ
ハル [deharu](出る) シハン[sihan](師範)
- ホ /ho / ホー[ho:](穂・帆) ホダル[hodarw](蛭) アホ[aho](阿呆) テ
ホン[tehon](手本) ニホン[nihon](二本)
- フ /hu / フー[ɸu:](麩) フユ[ɸujw](冬) サイフ[saiɸw](財布) アフレ
ル[aɸurerw](溢れる) トーフ[to:ɸw](豆腐)
- ヒャ/hja/ ヒヤグ[hjagw](百) ニヒヤグ[nihjagw](二百)
- ヒョ/hjo/ ヒョーシ[hjo:si](表紙) ニヒョー[nihjo:](二俵)
- ヒュ/hju/ ヒューズ[hju:zu](ヒューズ)
- キ /ki / キリ[kiri](霧・桐) アキタ[akita](秋田) ガッキ[gakki](段)
ホンキ[honki](本気)
- ケ /ke / ケムリ[kemuri](煙) シケン[siken](試験) ツケル[tsukerw]

(付ける) ソケット[soketto](ソケット) マルケル[marukeru]
(丸める)

カ /ka/ カミ[kami](紙・髪) シカグ[sikagu](四角) ヒカル[hikaru]
(光る) サンカグ[sankagu](三角) ハッカ[hakka](薄荷)

コ /ko/ コメ[kome](米) ハンコ[hanko](判) スリコギ[surikonji](すり
こぎ) ヤッコエ[jakkoe](柔らかい) ハッコエ[hakkoe](冷たい)
マルコエ[marukoe](丸い)

ク /ku/ ハクサイ[hakusai](白菜) ハナクソ[hanakuso](鼻くそ) メク
ソ[mekuso](目くそ) モンク[monku](文句) トックリ[tokkuri]
(徳利)

キャ/kja/ キャグ[kjagu](客) キャンデー[kjande:](キャンディー)

キョ/kjo/ キョー[kjo:](今日) キョネン[kjonen](去年) ラッキョ
[rakkjo](らっきょう) センキョ[senkjo](選挙) トーキョー
[to:kjo:](東京)

キュ/kju/ キュー[kju:](灸) キューコー[kju:ko:](急行) ヤキュー
[jakju:](野球) オンキュー[onkju:](恩給)

ギ /gi/ ギンバル[gimbaru](いきむ) ヒツギ[higgī](低い) カギ[kagi]
(柿) アギダ[agida](飽きた)

ゲ /ge/ ゲツパ[geppa](びり) マゲル[mageru](負ける) タツゲ[tagge]
(高い) タゲ[tage](竹)

ガ /ga/ ガッキ[gakkī](段) ガス[gasu](ゴミ) アガ[aga](赤・垢)

ゴ /go/ ゴシャグ[gošagu](怒る) ジューゴ[žu:go](十五) ケシゴム
[kesigomu](消しゴム) タゴ[tago](蛸・扇)

グ /gu/ グミ[gumi](ぐみ) キグ[kigu](菊) ヒグ[higu](引く) トーグ
エ[to:gue](遠い)

ギャ/gja/ ギャグ[gjagu](逆) オギャグ[ogjagu](お客)

ギョ/gjo/ ギョーギ[gjo:gi](行儀) オギョー[ogjo:](お経)

ギユ/gju/ ギューニュー[gju:nju:](牛乳) オギュー[ogju:](お灸)

- ギ /gi / カギ[kagi] (鍵) ウナギ[unagi] (鰻) ペンギン[peŋgiŋ] (ペンギン)
- ゲ /ge / カゲ[kage] (影) コゲル[kogeru] (焦げる) マゲル[mageru] (曲げる) ニンゲン[niŋgen] (人間)
- ガ /ga / カガミ[kagami] (鏡) ハガギ[hagagi] (葉書) ハンガ[hanga] (版画)
- ゴ /go / アゴ[ago] (顎) ハシゴ[hasigo] (梯子) メンゴエ[mengoe] (かわいい) リンゴ[ringo] (林檎)
- グ /gu / サワグ[sawagu] (騒ぐ) ヌグ[nugu] (脱ぐ) モグラ[mogura] (もぐら) ドングリ[donguri] (どんぐり)
- ギャ/gja/ ハンギャグ[hanjagu] (反逆)
- ギョ/gjo/ ニギョー[nigjo:] (二行)
- ギユ/gju/ ニューギュー[nju:gju:] (乳牛)

舌音系列

- シ /si / シソ[siso] (紫蘇) アシ[asi] (足) シシ[sisi] (獅子) ハンシ[hansi] (半紙) ザッシ[zassi] (雑誌)
- セ /se / セメン(ト)[semen] [semento] (セメント) キセン[kisen] (汽船) ビンセン[binsen] (便箋)
- サ /sa / サゲ[sage] (酒) サラ[sara] (皿) ハサミ[hasami] (鋏) ケンサ[kensa] (検査) アッサリ[assari] (あっさり)
- ソ /so / ソリ[sori] (櫓) ソデ[sode] (袖) ヘソ[heso] (臍) ホッソエ[hossoe] (細い) エンソグ[ensogu] (遠足)
- ス /su / スミ[sumi] (墨・炭) カラス[karasu] (鳥) トース[to:su] (通ず) タンス[tansu] (タンス) ヤッス[jassu] (安い)
- シェ/sje/ シェー[ʃe:] (しろ) ヨゴシェ[jogose] (よこせ) オモシェ[omose] (面白い) シェギ[ʃegi] (咳) シェパード[ʃepa:do]
- シャ/sja/ シャックリ[ʃakkuri] (しゃっくり) タッシャ[taʃʃa] (達者) ジ

テンシャ [zitenʃa] (自転車)

シヨ/sjo/ ショーガズ [ʃo:ɢazw] (正月) ショーユ [ʃo:jw] (醤油) ハンシヨ
ー [hanʃo:] (半鐘) オシヨハン [oʃohan] (和尚さん)

シュ/sju/ シュロ [ʃuro] (シュロ) シュージ [ʃu:zi] (習字) セーシュ
[se:ʃw] (清酒) センシュ [senʃw] (選手) リッシェン [riʃʃwŋ]
(立春)

ジ /zi / ジー [zi:] (字) ジシャグ [ziʃagw] (磁石) アジ [azi] (味) カジ
[kazi] (火事・家事・勝ち) ツジ [tsuzi] (土)

ゼ /ze / ゼンマイ [zenmai] (ぜんまい) ゼーキン [ze:kin] (税金) カゼ
[kaze] (風・風邪) ガーゼ [ga:ze] (ガーゼ) アンゼン [anden]
(安全)

ザ /za / ザマ [zama] (ぎま) ザル [zarw] (箆) アザ [aza] (痣) カザリ
[kazari] (飾り) ギンザ [gindza] (銀座)

ゾ /zo / ゴーギン [zo:gin] (雑巾) ゴー [zo:] (象) ナゾ [nazo] (謎) カ
ゾエル [kazoerw] (数える) シンゾー [sindzo:] (心臓)

ズ /zu / ズガ [zuga] (図画) ミズ [mizw] (水) アズガウ [azugaw] (扱う)
アズズ [azzw] (暑い・厚い) カンズメ [kandzume] (缶詰) タズ
[tazw] (立つ)

ジェ/zje/ ジェットキ [zettoki] (ジェット機)

ジャ/zja/ ジャグジ [ʒagzi] (蛇口) ジャリ [zari] (砂利) クジャグ
[kwʒagw] (孔雀)

ジョ/zjo/ ジョー [ʒo:] (錠) ジョーロ [ʒo:ro] (如露) ドンジョ [dondʒo]
(どじょう) カンジョ [kandʒo] (便所<閑所)

ジュ/zju/ ジューバゴ [ʒu:bago] (重箱) ジュズ [ʒuzw] (数珠) ボグジュー
[bogʒu:] (墨汁) シュジュズ [ʃuʒuzw] (手術) ショージュ
[ʃo:ʒu:] (焼酎)

チ /ci / チー [tsi:] (血) チジ [tsizi] (父・知事) チカラ [tsikara] (力)
ヤバチ [jabatsi] (濡れて不快だ) オッチ [ottsi] (唾) マッチ

[mattsi](マッチ) オンチ[ontsi](音痴)

ツォ/co / ゴツツォー[gottso:](ご馳走)

ツ /cu / ツギ[tswŋi](次・継ぎ) ツル[tswru](鶴) オツカイ[otsukai]
(お使い) バケツ[baketsw](バケツ) ヤツツ[jattsw](八つ)
パンツ[pantsw](パンツ)

チェ/cje/ チェーン[tʃe:n](チェーン)

チャ/cja/ チャー[tʃa:](茶) チャワン[tʃawan](茶碗) コゲチャイロ
[kogetʃairo](焦げ茶色) イッチャグ[ittʃagu](一着) バンチ
ャ[bantʃa](番茶)

チョ/cjo/ チョーチョ[tʃo:tʃo](蝶) チョージン[tʃo:zi:n](提灯) イチョ
ー[itʃo:](銀杏) テチョー[tetʃo:](手帳)

チュ/cju/ チューガッコー[tʃu:ŋakko:](中学校) ジョチュー[ʒotʃu:](女
中) デンチュー[dentʃu:](電柱)

テ /te / テー[te:](手) テズ[tezu](鉄) テンキ[tenki](天気) ヒダリ
テ[hidarite](左手) トゴロテン[togoroten](心太) カンテン
[kantēn](寒天) キツテ[kitte](切手) ジテンシャ[zitenʃa]
(自転車) ケブテ[kebute](煙い) ネブテ[nebute](眠い)

タ /ta / タンボ[tambo](田圃) タマ[tama](玉) ホータイ[ho:tai](包帯)
ジュータグ[ʒu:tagu](住宅) キタ[kita](北・来た) フタ[ɸuta]
(蓋) ヒタイ[hitai](額) ヒラタゲ[hiratage](平葺) センタ
グ[sentagu](洗濯) キッタ[kitta](切った・来ている) バッタ
[batta](ばった)

ト /to / トリ[tori](鳥) トーフ[to:ɸu](豆腐) カントマメ[kantomame]
(南京豆<関東豆) ヤットテ[jattote](やっと) フートー
[ɸu:to:](封筒) ヒトリ[hitori](一人) アヤトリ[ajatori](縋
取り) カトリセンコ[katorisenko](蚊取り線香) フットエ
[ɸuttoe](太い) セート[se:to](生徒)

デ /de / デハル[deharu](出る) デギル[degiru](できる) ユデル

- [jwderw](茹でる) テーデン[te:den](停電) カデル[kaderw]
 (勝てる) オギデル[ogiderw](起きている) ウデ[wde](腕・打
 て) タデ[tade](縦・立て)
- ダ /da / ダイグ[da'igw](大工) ダグ[dagw](抱く) ヤンダ[janda](いや
 だ) マダ[mada](又・未だ) カダ[kada](肩・型) フダ[ɸwda]
 (札) アメダマ[amedama](飴玉) キレーダ[kire:da](きれいだ)
 ヒョーダン[hjo:dan](瓢箪) ジョーダン[ʒo:dan](冗談)
- ド /do / ドグ[dogw](毒) ドテ[dode](土手) ネンド[nendo](粘土) カ
 ド[kado](角) オドリ[odorī](踊り) オーソードー[o:so:do:]
 (大騒動) マド[mado](的・窓) アド[ado](後・跡)
- ニ /ni / ニモツ[nimotsw](荷物) ニル[nīrw](煮る) カニ[kanī](蟹)
 ゴーニ[zo:nī](雑煮) ニンニグ[nīnnīgw](にんにく)
- ネ /ne / ネッコ[nekkō](根) ネル[nerw](寝る・練る) カネ[kane](金)
 スネ[sune](脛) シンネン[sīnnen](新年) カエネ[kaene](変え
 ない・食えない)
- ナ /na / ナッパ[nappa](菜) ナメ[name](名前) ナル[narw](成る・鳴る)
 ハナ[hana](鼻・花) スナ[suna](砂) ギンナン[gīnnaŋ](銀杏)
 トンナ[tonna](取るな)
- ノ /no / ノハラ[nohara](野原) ノル[norw](乗る) ミノ[mīno](糞) キ
 ノゴ[kīnogo](茸) カンノンサマ[kannonsama](観音様)
- ヌ /nu / ヌスム[nusumw](盗む) ヌル[nurw](塗る) キヌ[kīnw](絹) コ
 ヌガ[konuga](米糠)
- ニャ/nja/ ニャンコ[njan̄ko](猫) コンニャグ[konn̄jagw](こんにゃく) ハ
 ンニャ[hann̄ja](般若)
- ニョ/njo/ ニョーボ[njo:bo](女房) ニョロニョロ[njoronjoro](にょろに
 よろ)
- ニュ/nju/ ニューガグ[nju:wagw](入学) ニュース[nju:wsw](ニュース) シ
 ンニュー[sīnnju:](しんにゅう=部首の)

- リ /ri / リス[risu](りす) リンゴ[rīngo](林檎) クリ[kuri](栗) エリ[eri](衿) オリル[oriru](降りる) トリガダ[torigada](取り方)
- レ /re / レンコン[reŋkon](蓮根) レコード[reko:do](レコード) クレ[kure](暮れ・呉れ) ヒレ[hire](鱈)
- ラ /ra / ラグダ[raguda](らくだ) ラップ[rappa](ラップ) カラス[karasu](鳥) シラミ[sirami](しらみ) クラ[kura](倉)
- ロ /ro / ログ[rogu](六) ローガ[ro:ga](廊下) コンロ[konro](焔炉) フロ[φuro](風呂) シロ[siro](白)
- ル /ru / ルスイ[rusui](留守番) アップル[appiru](あひる) ウル[uru](売る) アゲル[ageru](開ける) クエル[kweru](呉れる・塞ぐ)
- リャ/rja/ リャグジ[rjaguzi](略字)
- リョ/rjo/ リョーリ[rjo:ri](料理) エンリョ[enrjo](遠慮)
- リュ/rju/ リュー[rju:](竜) ジョーリュウ[30:rju:](上流)

唇音系列

- ピ /pi / ピアノ[piano](ピアノ) ハッピ[happi](法被) トッピデモネ[toppidemone](突飛な) エンピズ[empizu](鉛筆) キンピラ[kimpira](金平) スピード[supi:do](スピード)
- ペ /pe / ページ[pe:zi](頁) ペンサギ[pensagi](ペン先) テッペン[teppen](天辺) モンペ[mompe](もんぺ)
- パ /pa / パン[pan](パン) パーマ[pa:ma](パーマ) デパート[depa:to](デパート) ミツパ[mitsupa](三つ葉) スパイ[supai](スパイ) ハッパ[happa](葉) カッパ[kappa](河童) シンパイ[simpai](心配)
- ポ /po / ポンプ[pompu](ポンプ) ポケット[poketto](ポケット) テッポー[teppo:](鉄砲) サンポ[sampo](散歩) スポーツ[supo:tsu](スポーツ)

プ /pu / プロペラ[puropera](プロペラ) ポプラ[popura](ポプラ) パイ
 プ[paipu](パイプ) ポンプ[pompw](ポンプ) キップ[kippw](切
 符) イップン[ippwN](一分) サンブン[sampwN](三分)

ピャ/pja/ ハッピーグ[happjagw](八百)

ピョ/pjo/ トップョーシモネ[toppjo:simone](突飛な) カンピョー
 [kampjo:](干瓢) イッピョー[ippjo:](一俵) ハッピーョー
 [happjo:](八俵・発表)

ピュ/pju/ ピューピュー[pju:pju:](ピューピュー)

ビ /bi / ビジン[bizin](美人) ビワ[biwa](琵琶) ビン[bin](瓶) カビ
 [kabi](黴) ワサビ[wasabi](山葵)

ベ /be / ベンジョ[bendzo](便所) ベントー[bento:](弁当) カベ[kabe]
 (壁) ナベ[nabe](鍋) アンベ[ambe](案配) センベー[sembe:]
 (煎餅)

バ /ba / バシャ[bafa](馬車) バガ[baga](馬鹿) バジ[bazi](罰) ハバ
 [haba](幅) ツバゲ[tsubage](唾)

ボ /bo / ボロ[boro](襤褸) ボダン[bodan](釦・牡丹) ボッキレ
 [bokkire](棒切れ) ツボ[tsubo](壺) ノボル[noboru](上る)
 ゴンボ[gombo](午券) トンボ[tombo](とんぼ)

ブ /bu / ブダ[bwda](豚) ブドー[bwdo:](葡萄) ブンド[bwundo](葡萄)
 カブラ[kabura](蕪) ハゴブ[hagobw](運ぶ) コンブ[kombw](昆
 布) シンブン[simbwN](新聞)

ビャ/bja/ ビャッコタイ[bjakkotai](白虎隊) サンビャグ[sambjagw](三百)

ビョ/bjo/ ビョーブ[bjo:bw](屏風) ビョーイン[bjo:in](病院) ガビョー
 [gabjo:](画鋏) テビョーシ[tebjo:si](手拍子)

ビュ/bju/ ビューピュー[bju:bju:](ビュービュー) ビュンビュン
 [bjwmbjwN](ビュンビュン)

ミ /mi / ミー[mi:](実) ミガン[migan](蜜柑) ミミ[mimi](耳) ハサミ
 [hasami](鋏) サンミ[sammi](寒い)

- メ /me/ メー[me:](目・芽) メシ[mesi](飯) コメ[kome](米) メメズ
[memezū](みみず) サメ[same](鮫) イッカンメ[ikkamme](一貫
目) イッチョーメ[ittjo:me](一丁目) アンメ[amme](甘い)
- マ /ma/ マエ[mae](前) マズ[mazū](まず) シマ[sima](島) ゴマ[goma]
(胡麻) サンマ[samma](さんま)
- モ /mo/ モグ[mogu](川藻) モラウ[moraw](貰う) カモ[kamo](鴨・加茂)
イモ[imo](芋) サンモン[sammon](三文)
- ム /mu/ ムリ[muri](無理) ムガデ[mugade](百足) カム[kamu](咬む)
フム[φumu](踏む) ノム[nomu](飲む) マムシ[mamusi](蝮) カ
ンムリ[kammuri](冠)
- ミヤ/mja/ ミヤグ[mjagu](脈) サンミヤグ[sammjagu](山脈)
- ミヨ/mjo/ ミヨーガ[mjo:ga](茗荷) ミヨージ[mjo:zi](名字) トーミョー
[to:mjo:](灯明)
- ミュ/mju/ ミュージック[mju:zikku](ミュージック)

モーラ音素

- ン /N/ ンダ[nda](そうだ) ンデネ[ndene](違う) (ンナ[nna](お前)
ンガ[nga](お前)) アンゼ[andze](有るぜ) ソンマ[somma](す
ぐ) アンニャ[annja](兄) ホン[hon](本) カン[kan](缶) ン
ー[N:](うん)
- ッ /Q/ ハッカ[hakka](薄荷) カッテ[katte](勝手・買って) アッセ
[asse](浅い) オッパ[oppa](尾) カッデ[kadde](固い) アッ
ゲ[agge](赤い) スッガ[sugga](為るか) アッド[addo](有ると)
アッゼ[azze](有るぜ)
- ー /R/ ホーソー[ho:so:](放送) ホーカゴ[ho:kago](放課後) コート
ーガッコー[ko:to:gakko:](高等学校) トーガ[to:ga](十日)
ソーダン[so:dan](相談) カーレ[ka:re](辛い)

表4 M体系モーラ表 鶴岡市内青年層

網掛けはY体系との相違箇所

/ 'i	'e	'a	'o	'u	'je	'ja	'jo	'ju	--	'we	'wa	--
イ	エ	ア	オ	ウ	イェ	ヤ	ヨ	ユ		ウエ	ワ	
hi	he	ha	ho	hu	--	hja	hjo	hju	hwi	hwe	hwa	hwo
ヒ	ヘ	ハ	ホ	フ		ヒャ	ヒョ	ヒュ	フイ	フェ	ファ	フォ
ki	ke	ka	ko	ku	--	kja	kjo	kju	--	--	--	--
キ	ケ	カ	コ	ク		キャ	キョ	キユ				
gi	ge	ga	go	gu	--	gja	gjo	gju	--	--	--	--
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ		ギャ	ギョ	ギユ				
gi	ge	ga	go	gu	--	gja	gjo	gju	--	--	--	--
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ		ギャ	ギョ	ギユ				
si	se	sa	so	su	sje	sja	sjo	sju	--	--	--	--
シ	セ	サ	ソ	ス	シエ	シヤ	シヨ	シユ				
zi	ze	za	zo	zu	zje	zja	zjo	zju	--	--	--	--
ジ	ゼ	ザ	ゾ	ズ	ジエ	ジヤ	ジヨ	ジユ				
ci	--	--	co	cu	cje	cja	cjo	cju	--	--	--	--
チ			ツォ	ツ	チェ	チャ	チョ	チュ				
ti	te	ta	to	tu	--	--	--	--	--	--	--	--
ティ	テ	タ	ト	トゥ								
di	de	da	do	du	--	--	--	--	--	--	--	--
ディ	デ	ダ	ド	ドゥ								
ni	ne	na	no	nu	--	nja	njo	nju	--	--	--	--
ニ	ネ	ナ	ノ	ヌ		ニャ	ニョ	ニユ				
ri	re	ra	ro	ru	--	rja	rjo	rju	--	--	--	--
リ	レ	ラ	ロ	ル		リャ	リョ	リュ				
pi	pe	pa	po	pu	--	pja	pjo	pju	--	--	--	--
ピ	ペ	パ	ポ	プ		ピャ	ピョ	ピユ				
bi	be	ba	bo	bu	--	bja	bjo	bju	--	--	--	--
ビ	ベ	バ	ボ	ブ		ビャ	ビョ	ビユ				
mi	me	ma	mo	mu	--	mja	mjo	mju	--	--	--	--
ミ	メ	マ	モ	ム		ミャ	ミョ	ミュ				

N Q R
ン ッ ー

5.3.1. M体系モーラ表 (表4参照)

M体系のモーラ表の注記は、Y体系と違うものにのみ言及する。

最大の相違は外来語音を受容したことである。受容された発音は現代共通語と同じである。O体系で [hwa, hwi, hwe, hwo] などがあったが、同じものが外来語で使われるようになり、また [ti, tu, di, du] などの結合が使われるようになった。

前述のように若い世代の中で個人差・場面差があるが、母音の音声は共通語と同じようになる個人がいる。またシ・ジ・チについては、共通語的な [ʃi, zi, tʃi] から方言的な [si, zi, tsi] まで、音声的変異がある。有声化に関しては、Y体系と同じように歴史的変化の結果を残しているので、「ことが濁る」という印象は変わらない。

5.3.2. M体系語例

以下にY体系と食い違うモーラの語例を掲げる。前述のように、母音に変化があり、音声的にも共通語と同じようになった。ただし、ここでの [] 内の表記は簡略表記で、O体系・Y体系との違いは示せない。

ティ/ti/	アイスティー[aisuti:]	ピーティーエー[pi:ti:e:](PTA)
ディ/di/	シーディー[ʃi:di:](CD)	
トゥ/tu/	トゥナイト[tunaito]	
ドゥ/du/	----	
フィ/hwi/	フィッシュ[ʃiʃʃw]	
フェ/hwe/	フェルト[ʃerwto]	
ファ/hwa/	ファイト[ʃaito]	ファン[ʃaŋ]
フォ/hwo/	フォーム[ʃo:mw]	

以下は音声がY体系と食い違うモーラである。

シ /si/	オモシ[omofi](面白い)
ジ /zi/	ジープ[zi:pu]
チ /ci/	チーズ[tʃi:zu]

6. おわりに

ここでの目標は、とりあえず文法・音韻記述に統一された表記を与えることだったが、さらに拡大して現段階の音韻体系のありかたを、社会言語学的な変異を考慮に入れて、考察してみた。一地域社会に、歴史的な層を異にするいくつかの音韻体系の共存がありうるという分析によって、鶴岡市の音韻の実態と動態を把握しえた。

現実にある一個人の音韻体系の記述を試みると、あるモーラについては（またはある語については）新しいまたは古い発音を身につけていることがある。さらに、ある場面で新しいまたは古い発音を使うことがある。個人語 *idiolect* といえども単一の整然たる体系を示すとは限らない。ことに現在は鶴岡市民のかなりが方言と共通語を場面に応じて使い分けている。この鶴岡の音韻においても、本来 Y 体系の使用者が、外来語の発音を身につけていることがある。また本来 O 体系の持ち主と見なされるにも関わらず、鼻音化が外来語や近代漢語に及んでいないことがある。音韻の習得が、個人の一生のあいだに様々なルートから多様な形で行われることに対応しているのだろう。

つまり個人が音韻体系として少なくとも二つのものを身につけ、場面・状況により（古風な方言的なものと新しい共通語的なものとを）使い分けていることになる。音韻体系の共存というときに、地域社会全体としての共存を思い描いて、個人内での共存は二方言を使い分ける例外的な人 (*bidialectal*) についてのみ考えるとしたら、不十分である。また、現状は方言から共通語への連続体 *continuum* をなして、過渡期の混沌状態であるという見方は、現実の規則性・傾向性を無視している。現在の共通語化の過程では、ほぼ全成員が様々な形で音韻体系を共存させ、場面などによって適切に使い分けている。発音の使い分けは、現在の急速な共通語化の進行の中で、他地域の日本語方言でも起こっていることだが、鶴岡方言の場合は、東北方言の音韻的特徴があるために、とりわけ際だって現れた。使い分け・共存は、過去のゆるやかな共通語化・中央語化の過程でもあったことだろうし、他言語の史的变化でも見られ

る、なかば言語普遍的な現象であろう。これまでの構造言語学的な音韻記述では、少数の(またはただ一人の)インフォーマントによって、単一の静的な体系の樹立を目指していたが、それが現実を完全に反映しうるものか、反省の余地がある。

これまで3次にわたる鶴岡調査の音韻項目での共通語化の点数は、地元出身者の目から見ると、高すぎる。帰省・調査の度ごとの「参与観察」でも体験していることである。はじめは共通語的な発音で話していても、世間話をして打ちとけた場になり、方言を尋ねるという場面を設定すると、O体系・Y体系の発音が出やすいのは、これまでの多くの方言調査で経験したことである。戦後間もなくの第1次鶴岡調査では、一番共通語的なことばの出やすい「よそから来た人による調査」という場面を設定し、発音調査であることが分かるような形で聞きだしたという。その効果が第2次・第3次調査でははっきり現れて、ふだん街で耳にするのよりずっと共通語的な発音が出たと考えられる。アメリカのラボフによるたくみな調査法で、個人内の音韻の使い分けは現代社会言語学の常識になった。幸いに第3次調査では、場面差についての追加調査も行われたので、その分析結果を待つことにしたい。

Y体系は、考えようによっては、現実の複雑な方言音使用の中から、単純な体系を抽出したものといえる。古風な方言的発音を排除し、かつ最近の外来語音を除外して分析したものである。ある個人のある場面の発音がY体系であっても、その個人がまったくY体系しか使わないとは断言できない。ことに外来語音は、様々な形で現在の方言体系の中に影響を与えつつある。これも第3次調査で加えてあるので、鶴岡調査では、現代日本語方言の音韻の変化・展開の過程が実証的に描き出されることになるだろう。社会言語学的手法による変異の実態調査は、静態的記述に基づく構造言語学的な体系記述とも連携を保つことが望ましい。共存体系の設定はまさにその接点にあたる。日本の他地域の方言の記述も、以上のような共存する音韻体系の立場から行われることが望ましい。該当地域で生育した人 native の観察と内省を生かすことができれば、現実に即した分析ができるだろう。

参考文献

- 井上史雄(1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52
- 井上史雄(1974)「荘内・大鳥・山北方言の音韻(文法)分布」『山形方言』11
- 井上史雄(1980)「言語の構造の変遷－東北方言音韻史を例として－」『講座言語1』(大修館書店)
- 井上史雄(1984)「音韻研究法」『講座方言学 2 方言研究法』(国書刊行会)
- 井上史雄(1985)『新しい日本語－(新方言)の分布と変化－』(明治書院)
- 井上史雄(1989a)「子音の発音の変化」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻(上)』(明治書院)
- 井上史雄(1989b)「方言音韻体系の接触と干渉－荘内のサ行音－」『吉沢典男教授追悼論文集』(東京外国語大学)
- 氏家剛太夫『庄内方音攷』(三矢1930所収)
- 上野善道(1973)「岩手県雫石方言の音韻体系」『日本方言研究会発表原稿集』17
- 国立国語研究所(1953)『地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』(秀英出版)
- 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較－』(秀英出版)
- 柴田武(1953)「これからの方言研究」『国語学』12
- 服部四郎(1979)『新版音韻論と正書法』(大修館書店)
- 三矢重松(1930)『荘内語及語釈』(刀江書院)
- 三矢重松(1932)『国語の新研究』(中文館書店)
- 山形県方言研究会(1972)『山形県方言概説』(栄文堂書店)

Ⅲ 章

鶴岡方言のアクセント

新田 哲夫

1. 調査の概要	83
1.1. 調査日時	83
1.2. 目的	83
1.3. 話者	84
2. 名詞のアクセント	85
2.1. 表記など	85
2.2. 音調の音声的現象面	85
2.3. 音韻解釈	87
2.3.1. 弁別特徴	87
2.3.2. 相補分布	88
2.4. 個人差と変異	89
3. 動詞のアクセント	91
3.1. 用語	91
3.1.1. 動詞群と無核類・有核類	91
3.2. 活用表の音調表記など	91
3.3. 各活用形の説明	92
3.4. 可能動詞	96
3.4.1. 可能動詞と一般動詞	96
3.4.2. 可能動詞と一般動詞の活用	96
3.4.3. 可能動詞の地理的分布	97
3.5. 派生形の交替パターン	98
3.5.1. 交替パターンと可能動詞の成立過程	98
4. 形容詞のアクセント	100
4.1. 形容詞のアクセント体系	100
4.2. 形容詞の資料	100
5. アクセント資料	101
5.1. 資料の説明	101
5.2. 資料の考察	102
5.2.1. 2拍名詞	102
5.2.2. 3拍名詞	103
5.2.3. 動詞	104

1. 調査の概要

調査の概要は以下のとおりである。

1.1. 調査日時

1992年11月22～24日, 1993年9月4～5日, 1993年12月12日～13日に実施した。

1.2. 目的

鶴岡方言のアクセントの共時的な姿について, 次の事柄を明らかにするため調査を行なった。

- (1) 音声的事実について従来の報告で述べられていることを確認する。
- (2) アクセント体系と音韻解釈, 特に相補分布の問題について考察する資料を得る。
- (3) 動詞の活用形と派生形のかなり詳しい報告をする。
- (4) 類別語彙を中心にアクセント素の所属に関する資料を充実させる。

鶴岡方言のアクセントは, その音韻解釈をめぐるこれまでいくつか論争があった(和田(1962), 上野(1975)を参照)。本稿では, 名詞のアクセントを述べる際にその解釈について触れるが深入りはしない。今までの研究が, 解釈をめぐる名詞中心だったことを考慮し, ここでは, 動詞アクセントについて詳述する。したがって, 本稿の中心をなすのは, (3)である。また, 形容詞のアクセントについても言及する。

1.3. 話者

話者と調査した内容^(註1)は次のとおりである。話者の方はいずれも旧鶴岡市内生まれである。

話者A氏 小野寺茂氏。男。1925年鶴岡市新海町生まれ。5年間千葉県市川市(1941～45), 15年間山形県東田川郡藤島町(1953～68, 鶴岡市に隣接, 勤務は鶴岡市)に外住^(註2)。鳥居町在住。名詞のアクセント体系と用言活用のアクセント体系の概略を調査。

話者B氏 小野寺秀子氏。女。1927年鶴岡市末広町生まれ。小野寺茂氏と夫婦。鳥居町在住。名詞のアクセント体系と用言活用のアクセント体系の概略, ならびに名詞の金田一語彙と若干の用言の類別語彙を調査。

話者C氏 富樫善治氏。男。1937年鶴岡市大宝寺町生まれ。新形町在住。上記内容と動詞の活用形と派生形の詳しい調査, ならびに名詞と動詞の金田一語彙を調査。

これらの話者の方言の音声的特徴をあげる。

表1は, 方言の古い特徴を保持しているかどうか表したもので, たとえば, 特徴(1)は/hi, he, hjV/(Vは母音)の子音に現れる両唇摩擦音化, 特徴(6)は/si/と/su/, /zi/と/zu/, /ži/と/žu/が対立せず, [sī, zī, žī]で現れること, 特徴(8)は/ai/, /ae/から生じた半広母音/ε/が/e/と対立するかどうか, などを示す。

表1 話者の音声の方言的特徴

音声特徴	(1)φç	(2)kw	(3)ḃ	(4)ḍ	(5)ž	(6)sī, zī	(7)Je, ze	(8)ε
A氏(1925年生)	△	?	○	○	○	△	△	○
B氏(1927年生)	△	×	○	○	○	△	△	○
C氏(1937年生)	×	×	△	○	○	×	×	△

○は普通に使用, △はまれに現れる^{註3)}, ×は現れないことを示す。スタイル等のいろいろな要因がからむことは当然考えうるが, ここでは, 単語を読んでもらうアクセント調査の際に, 観察されたものを基準に置いている。

2. 名詞のアクセント

2.1. 表記など

別表1で名詞のアクセント体系を示す。ここでは音素表記を行なう。ただし, 音韻調査を中心的に行なっていないので, 未確定部分を含んでいる。二重母音の扱いなど再考を要する。acute accent (ex. *kadá*)で表した音節は「高」を表す。本文中では, L=「低」, H=「高」, M=「中」, F=「下降」, R=「上昇」の記号を用いることがある。無核を/*ka*⁻/等と表すことがある。音声記号として用いる tone letter は, 当該音節の前に付ける。

ここでは, 話者A氏の体系を中心に述べ, 他の話者で補足すべき点を補充する。

2.2. 音調の音声的現象面

音調の音声的な現象面では, 金田一(1953)pp. 168~171の記述と本稿の聞き取りには大きな食い違いはない。また, 佐藤(1972), 上野(1975)とも一致する。現象面では大きな問題はない。ただ, 若干気がついたことを加える。

別表1の1a, 2a, 3aの系列では, 単独形や助詞付き形がLL, LLL, LLLLと表記されているが, 金田一(1953)が指摘しているようにML, MML~MLL, MMLL~MLLL, のように語頭がやや高く聞こえることが多い(むしろこの方が普通か)^{註4)}。4aの長さになると, この高まりは顕著ではない。金田一氏が報告しているLML, LMLLはまれであった。

1 拍語は長くも発音される(むしろこの方が普通か)。「蚊」/*ka*⁻/[*{ka}*:],

[絵]/'é/[t'e]:]. B氏も同様。C氏は短い方が普通という。

1b, 2b, 3b, 4bの系列では、「～サ, ～ト, ～カラ」の助詞付きで「高」が一つ後ろにずれる。ただし, 1b+トはずれない。ずれる発音も存在する可能性があるが, 確認しえなかった^{注5)}。このbの系列の「～ノ」付きでは, 「ノ」の前の「高」が消え1a, 2a, 3a, 4aの系列のそれと同じになる。一方, 1c, 2c, 3c, 4cの系列では, 「高」のずれも, 「ノ」の前の「高」の消失もない。

別表1にあげてないが, 「～モ」は「～ト」と同じ, 「～マデ」は「～カラ」と同じ。金田一(1953)であげられている「～ニ」「～ガ」(この方言ではいずれもまれか)は未調査である。

2bと2c, 3bと3cは単独形では対立はない。自立語が直接続いた場合でも, 以下のように対立はない^{注6)}。

2b	'inú'ida	LHLL	「犬いた」
2c	negó'ida	LHLL	「猫いた」
2b	kusátoru～kusátóru	LHML～LHHL	「草取る」
2c	sagétoru～sagétóru	LHML～LHHL	「鮭取る」
3b	'odogó'ida	LLHLL	「男いた」
3c	musumé'ida	LLHLL	「娘いた」

「～ダ」の場合, 用言を言い切るときのイントネーションが加わる。このイントネーションによる「高」を grave accent で表記する(詳細は3.を参照)。a系列の末尾の「ダ」の「高」はイントネーションによるものとみる^{注7)}。

表2 名詞+ダの音調形

a	kaḏà	hanaḏà	sakanāḏà	niwadoriḏà
b	'eḏá	'asiḏá	'adamaḏá	'inosisiḏá
(b')	'éḏa	'asiḏa	'adamáḏa	'inosisiḏa
c		kadáḏa	kokoróḏa	'asi'odóḏa
d		'áḡiḏa	'usáḡiḏa	tamanéḡiḏa
e			káḃudóḏa	'asáḡa'oḏa
f				mázidageḏa

「ダ」には、「低」から上昇していくものもある(この場合やや長く発音される)。これも一種のイントネーションとみる。

b系列は併用形をもつ。「～サ」「～ト」のところで述べたように「高」がずれるものと、c系列と同じのずれないものである(b')。

B氏は1b「絵ダ」で、ずれるものをもっていない。かわりに長音化した形で、[t'e:l:ɔ̃a] MRLのように上昇のあと「ダ」が低く付くものがある。他はA氏の表2と同じ。

C氏はa系列の末尾の「ダ」が卓立して高くしないことがしばしばある。b系列はA氏同様、二つの併用形をもつが、ずれる形には「ダ」の卓立が見られる。「～サ」「～ト」と同じ性質をもつものと言える。

2.3. 音韻解釈

2.3.1. 弁別特徴

音韻解釈については、大きく分けて二つの方法がある。柴田(1955)、金田一(1956・1963)、上野(1975)の表層面に撤する方法と相補分布を用いた原口(1979)である^(註8)。相補分布を用いた解釈は支持しない(後述)。

弁別特徴については「昇り核」(柴田(1957)),「タキ(滝)」(金田一(1967)),「アクセント高核」(上野(1975))がある。いずれも表層に撤する限り、核の位置は問題とならない。

本稿では、弁別特徴は「上げ」とも「下げ」とも限定できず、アクセント核の置かれている位置が卓立して「高」になることとみる。金田一(1956)註5で触れられている「アクセント中核」や上野の「アクセント高核」と同様の解釈である。理由は次のとおり。

- (1) 核があると想定されるものは、必ずその直前の位置で上昇を伴う。
- (2) また、その直後の下降は、消失したり位置を変えたりしない。

(1)については、東京方言等での「句音調」のように、句頭のマークとして連文節の頭の2拍目に現れたり、1句内の連文節中で消えたりする現象^(註9)は

見られない。上昇はアクセント核に付随する現象である^{註10)}。

特に、上昇が核に付随する例として、1bの単独形が「絵」/ 'é/ [t'e:] のように実現する点は重要である^{註11)}。また2b「足」、2c「肩」もLHで実現する。

(2)については、同じ1拍卓立の音調をもつ弘前方言や雫石方言などの北奥諸方言と異なっている。後に何か続けて発音しようとする「接続形」で下降が消えたり、そこで言い切った場合の「言い切り形」で下降の位置が決定されたりする機構^{註12)}はない。常に核の直後にそれに付随して下降がある。

連文節を1句で発音した場合、上記の原則が守られる。2度目以降の核が弱まったり、自然下降に従って卓立の度合が弱くなることはあるが、1拍卓立の文節音調がそのままの形で接続していくとみてよい。

結局のところ、「高」で卓立する位置をマークすればよい。以下、音調表記と同様の acute accent の記号を音韻解釈にも用いる。名詞のアクセント体系の解釈は別表2のようになる。

2.3.2. 相補分布

原口(1979)の解釈は、

2a. ○○, 2b. ○○́, 2c-2d. ○○

3a. ○○○, 3b. ○○○́, 3c. ○○○́, 3d-3e. ○○○

のように、高さの山より一つ前にアクセントをもつ基底形を立て、母音の広狭を条件とする次のアクセント移動規則で表層へと導く(原口氏が用いているアクセント記号「*」を acute accent に変更)。2cと2d, 3dと3eの相補分布が成り立つという前提である(pp. 51~53)。

$$\acute{V} \begin{bmatrix} V \\ \text{-hight} \end{bmatrix} \rightarrow V \begin{bmatrix} \acute{v} \\ \text{-hight} \end{bmatrix}$$

しかし、相補分布は成立しない。A氏には原口論文であげられている3d「雀」の例外の他に「小麦、鼠」があり、品詞は動詞であるが3dと同じ音調の「できる、延びる、歩く」がある。A氏とほぼ同じ体系をもつB氏の例では、次のも

のがある(*付きは金田一(1953)もあげている例。アクセントの位置は本稿のもので音調の「高」あるいはアクセント核の位置を示す)^{注13)}。

2d ○○ 友, 妻, *影, はも(魚), 軍鶏, 車庫, 過去, 捕虜, ただ(で), 禿げ…

2c ○○○ *露, 罰(ばち), 六…

3d ○○○ 小麦, *雀, *鼠, *紅葉, すすき, みみず, *薬, *狸…; 生きる, 起きる, 落ちる, 延びる, などの有核の上1段動詞; 作る, 走る, 歩く, などの有核の5段動詞

3c ○○○ 鎖, あわび, あくび, くさび, さそり, 二つ, 二人, 鮠, 痛み, 恨み, 泉…

4c ○○○○ 正月, 洗濯, 物置き…

これらの事実は、基底形にせよ表層形にせよ、有核の2b~2d, 3b~3eを核(アクセント)の位置のみの対立として名詞内に収めようとする不都合が生じることを示す。

2bと2c, 3bと3cは先に示したように、表層では単独形でも自立語続きでも対立がないが、助詞付きで対立が生じる。これらの単独形と助詞付きの形との関連付けは、基底面にせよ表層面にせよ、核の交替の有無の情報をアクセント素に付加して処理するしかないわけである。

2.4. 個人差と変異

これまで、主にA氏の体系についてみてきた。B氏、C氏については、体系の枠組み自体はA氏のもの大きく変わらないものの、いくつかの点で違いがある(「~ダ」についてはすでに触れた)。また、個人個人でも、アクセント上の併用形をもち、ゆれているものもある。ここでは、これらに関してまとめて述べる。3名の事例ではあるが、通時的示唆を与えるものとする。

3氏の違いや各氏で併用形のゆれが観察されるのは、音韻解釈で問題となったb系列の助詞付き形の核が移動する交替に関してである。核の交替がないc系列との関係が問題となる。また、同じくb系列において「~ノ」が接続

したときに核が消失して、a系列と同一になる現象もこれに該当する。

A氏(あるいはB氏)の「～サ」のかたちで核の交替が見いだされた語彙について、他の助詞「～ト、～カラ、～ノ」が各氏でどのように現れるかまとめたものが表3である^(註14)。1拍語と2拍語を取り上げる。長さによってその振舞いが異なるので分けて取り扱う。表3内で用いる記号の意味は以下のとおり。+、-の併用で劣勢のものは括弧でくくってある。

表3 b系列の助詞付き形のアクセント交替

記号	交替の内容		核の交替の例			
+	核が後ろに移動する		○+サ→○サ	○○+サ→○○サ		
-	核が移動しない		○+サ→○サ	○○+サ→○○サ		
0	核が消失する		○+ノ→○ノ	○○+ノ→○○ノ		
	1b. ○+サ	1b. ○+カラ	1b. ○+ト	1b. ○+ノ		
A氏	+	+	-	0		
B氏	+	+(-)	-	-		
C氏	+(-)	(+)-	-	0		
	2b. ○○+サ	2b. ○○+カラ	2b. ○○+ト	2b. ○○+ノ		
A氏	+	+	+	0		
B氏	+	+(-)	+(-)	0(+)		
C氏	+(-)	+	(+)-	0		

この表3から次のことが言える。

核の移動に関しては、比較的年齢の若いC氏で、移動のないc系列に近付いていることがわかる。言語的な条件では、次のような傾向がある。

- (1) 2拍語の方が1拍語より核の移動の交替が保存されやすい。
- (2) 「～サ」と「～ト」では、方言形の「～サ」の方が核の移動の交替が保存されやすい。

(3) 「～カラ」は「～ト」と比べて核の移動の交替がやや保存されやすい。

「～ノ」の核の消失については、B氏が特異な現れ方を見せるが、1拍名詞＋ノの場合は、上記(1)の傾向と同種であるし、2拍名詞＋ノの場合は、他の一般助詞からの類推と考えることができる。

3. 動詞のアクセント

この章では動詞を扱う。名詞のときはA氏の資料をもとに述べたが、動詞についてはC氏の資料をもとにする。

3.1. 用語

3.1.1. 動詞群と無核類・有核類

II₁～IV₅の記号は、2拍1段動詞(母音幹動詞、ここにサ変力変動詞も含む)、4拍5段動詞(子音幹動詞)などをさし、各々それに属する動詞を動詞群と呼ぶ。各動詞群は基本形(終止形に対応するもの)が無核のものと同有核のものに二分される。各々それに属する動詞を無核類、有核類と呼ぶ。

個々の動詞は、動詞群、基本形のセグメント、有核・無核の類の情報が与えられれば、種々の活用形、派生形のアクセントを導き出すことができる。これらの情報のみを与えられたものを「基底形」と呼ぶ。例えば、「II₅、/kagu/、有核類」など。本稿では、この基底形から各活用形を導くルールとアクセント核交替に関するルールの類型について明らかにする。

3.2. 活用表の音調表記など

別表3-1～5-2で主な動詞アクセントの活用をあげる。活用形の名前などは仮のもの。形態と意味の詳しい分析には本稿では立ち入らない。名詞のとき同様、表中 acute accent で表した音節は常に高い。同時にアクセン

ト核を示す。grave accent で示した音節も高い。この grave accent の「高」は無核の言い切り形の末尾に現れ、接続形では消える。

「着る」	kirù	LH	kiruságe	LLHL
「着ない」	kinè	LH	kineságe	LLHL
「行った(過去)」	'iqtà	LLH	'iqtaságe	LLLHL
cf. 「行っている(継続)」	'iqtá	LLH	'iqtásage	LLHLL

「着る」「着ない」の音調LHは、名詞の2b「足」2c「肩」の音調とほとんど同じと
 いてよい。しかし、動詞に「～サケ」(理由)^{#15)}を付けた形で、末尾の「高」は
 消えてしまう。「サケ」の「サ」の「高」は付属語本来の核が現れたものである。
 同様に過去の「行った」の末尾もイントネーションによるものである。一方、
 継続の意味をもつ「行っている(た)」の方は、セグメントも音調も「行った」と
 同じであるが、末尾の「高」が「～サケ」でも消えないので、核によるものとみな
 すことができる(後述)。

用言の言い切り形にイントネーションが被さる現象は、東北地方各方言に
 広く見られる現象である^{#16)}。以後の議論で本質的な関係がない場合は省略
 することもある。後半の可能動詞の資料では省略する。

その他、表記について。動詞の別表3-1～5-2にあげた音調表記で
 acute accent が2か所ついているものがある。これは、ここでは「高」が二つ
 連続するものではなく、いずれかの「高」(核)が現れる併用形をもつことを表
 す。例えば、'áqtéru は、'áqteru と 'aqtéru の併用を表す。また、「?」付きは
 話者の答えたアクセントに関するものではなく、語形そのものが存在するか
 疑わしいと話者が答えたものである^{#17)}。

3.3. 各活用形の説明

各活用形に見られる特徴を次の(1)～(15)で簡潔に述べる。別表にのっ
 ているものはゴチックの見出しで、のっていないもので説明を加えたものは明
 朝体の見出しである。○は任意の拍、Cは子音、Vは母音を表す。

- (1) 基本形
- (a) 無核類 全て無核。
- (b) 有核類 全て有核。次末位置(後ろから2番目)に核, -ÓCu。
- (2) 否定形
- (a) 無核類 無核。
- (b) 有核類 有核。末位置に核, -né。
- (3) 禁止形 動詞群を問わず-naの前の-ru-が-Nにも。
- (a) 無核類 無核。
- (b) 有核類 有核。語幹次末位置に核, -ÓCu-na。-ÓN-naのとき-Nの前。
- (4) 条件形 -ba。-ǂaではない。母音幹動詞の-re-が-baの前で-de-となる。
- (a) 無核類 無核。
- (b) 有核類 有核。語幹末位置に核。-Céba。
- (5) 夕形
- (a) 無核類 無核。
- (b) 有核類 有核。II₁動詞は末位置に核, -tá, -dá。他は原則として語幹末位置に核, -ta, -daの前。ただし、音便の場合、
- i. 促音便 -qtá。後ろにずれる。
- ii. イ音便、撥音便、非音便の無声化(-sǂ-)はそれぞれ、-ví-, -vǂ-, -vǂsi-。前にずれる^(註18)
- (6) 希望形 -tε。-t-の有声化はない。したがって、'okitè「置きたい」、'okité「起きたい」、kacité「勝ちたい」のように-t-の前の母音が狭母音のとき、前の子音も有声化しない。
- (a) 無核類 無核。
- (b) 有核類 有核。末位置に核, -té。
- (7) テイル形
- (a) 無核類 有核。次末位置に核, -tému, -dému。
- (b) 有核類 有核。II₁動詞は次末位置に核, -tému, -démuで無核類と区

別なし。他は原則として語幹末位置に核、-teru, -deruの前。

ただし、

- i. 促音便 -'áqteru。タ形と異なり、前にずれる。基本形がII₅のものに 'áqteruほかに 'aqtéruがある。タ形の類推か。
- ii. イ音便、撥音便、非音便の無声化(-sj-)はそれぞれ、-vi-, -vN-, -vsj-。前にずれる。

(8) テイタ1形

- (b) 無核類 有核。末位置に核、-tedá, -dedá。
- (a) 有核類 有核。II₁動詞は次末位置に核、-téda, -déda。他は原則として語幹末位置に核、-teda, -dedaの前。ただし、
 - i. 促音便 -'áqtéda。前にずれる。テイル1形と同じ位置に核。基本形がII₅のものに 'áqtéda ほかに 'aqtéda がある。タ形の類推は同じ。
 - ii. イ音便、撥音便、非音便の無声化はそれぞれ、前にずれる。テイル1形と同じ位置に核。

(9) テイタ2形 タ形語幹-qta, -qdaで作られる。-taを取るか-daを取るかはタ形と同じ。ただし、促音便、撥音便はqは付かず、セグメント上ではタ形と同じになる。

- (a) 無核類 有核。末位置に核、-qtá, -qdá。促音便、撥音便ではタ形と同じセグメントになるが、アクセントでタ形(無核)と対立する。

タ形		テイタ2形	
'iqtà	'iqtaságe	'iqtá	'iqtásage
hundà	hundaságe	hundá	hundásage

- (b) 有核類 有核。原則として語幹末位置に核、-ta, -daの前。ただし、
 - i. 促音便 -'áqt(d)a。前にずれる。テイル形と同じ。ただし、前にずれた 'áqtaのみ。タ形は後ろにずれるためセグメントが同じでもタ形と対立する。'aqtá, 'aqtásage(タ形)と 'áqta, 'áqtasage(テイタ2形)。

ii. イ音便, 撥音便, 非音便の無声化はそれぞれ, 前にずれる。テイル形と同じ位置に核。撥音便の場合, セグメント上でもアクセント上でも同じ形になる。

(10) テイル否定形

- (a) 無核類 有核。末位置に核, -né。
- (b) 有核類 有核。テイル形と同じ位置に核。ただし, 末位置に核, -néも併用で存在する。統一化の力が働いている。

(11) テイタ2 否定形 タ形語幹-qtene, -qdenεで作られる。-teを取るか-deを取るかはタ形, テイタ2形と同じ。促音便, 撥音便はqは付かず, セグメント上ではタ形と同じになる。

- (a) 無核類 有核。末位置に核, -qtené, -qdené。
- (b) 有核類 有核。テイタ2形と同じ位置に核。ただし, 無核類と同じ末位置の併用形もある。

(12) テイル条件形

- (a) 無核類 有核。次末位置に核, -réba。
- (b) 有核類 有核。テイル形と同じ位置に核。

(13) テアル形 母音幹動詞語幹-raqteru, 子音幹動詞語幹-aqteru。サ変はsaraqteru。-aqteruの形をもつものを意味の面からテアル形と呼ぶ。

- (a) 無核類 有核。次末位置に核, -Caqtéru, -Caqdéru。テイル形と同じ位置に核。
- (b) 有核類 有核。語幹次末位置に核。-Cáqteru。

(14) テアッタ1形 -Caqteda。テアル形の過去。

- (a) 無核類 有核。末位置に核, -Caqtedá。テイタ形と同じ位置に核。
- (b) 有核類 有核。語幹末に核, -Cáqteda。

(15) テアッタ2形 テアッタ1形の短い形。母音幹動詞語幹-raqta。子音幹動詞語幹-Caqta。サ変はsaraqta。V章ではサッタ形と呼んでいるもの。

- (a) 無核類 有核。末位置に核-tá。テアッタ1形と同じ位置に核。

(b) 有核類 有核。語幹次末位置に核, -Cáqta。

3.4. 可能動詞

3.4.1. 可能動詞と一般動詞

5 段動詞基本形から -Cu → -Ceru のように派生され,主に能力可能の意味を持った動詞を「可能動詞」と呼ぶ。同じ派生でありながら可能の意味を持たない動詞をここでは「一般動詞」と呼ぶ。また,派生のもととなったものを「基本動詞」と呼ぶ。

例 売る(基本動詞) ; 本が売れる(一般動詞) ; 本をうまく売れる(可能動詞)

上野(1986)では,青森市方言の可能動詞のことが論じられた。これは,一般動詞と可能動詞が対立することを初めて指摘したものである。鶴岡方言でも青森市方言とほぼ同様のことがいえる。別表6で「基本動詞」から派生した「一般動詞」と「可能動詞」の例をあげる。以下,無核を積極的に表すのにtagu-のように示す。

別表6から次のことがいえる。

- (1) 基本動詞が無核であれば,一般動詞も無核。可能動詞は有核である。
- (2) 基本動詞が有核であれば,一般動詞も可能動詞も有核である。

すなわち,基本動詞が無核のときだけ,一般動詞と可能動詞に対立が生じる。

3.4.2. 可能動詞と一般動詞の活用

基本動詞が有核の場合,派生した一般動詞と可能動詞は,ル形(終止形)では対立はないが,それぞれの活用形のアクセントを見ると,否定形と条件形で対立が現れる。表4はそれぞれの主たる活用を示したものである。

表4の有核の基本動詞の場合,一般動詞は,他の基本動詞と同様の交替する活用パターンをとるが,一方,可能動詞は語幹末位置に固定したアクセント核を

表 4 可能動詞の活用形

基本動詞	派生形	ル形	否定形	タ形	条件形	
tagu ⁻	一般動詞	炊ける	tageru ⁻	tagene ⁻	tageda ⁻	tagereba ⁻
	可能動詞	炊ける	tagéru	tagéné	tagéda	tagéréba
nara ^{bu} -	一般動詞	並べる	nara ^{beru} -	nara ^{bene} -	nara ^{béda} -	nara ^{bereba} -
	可能動詞	並べる	nara ^{béru}	nara ^{béné}	nara ^{béda}	nara ^{béréba}
nú ^{ju}	一般動詞	脱げる	nu ^{geru}	nu ^{gené}	nu ^{géda}	nu ^{gereba}
	可能動詞	脱げる	nu ^{geru}	nu ^{gené}	nu ^{géda}	nu ^{gereba}
hodó ^{gu}	一般動詞	ほどける	hodó ^{geru}	hodogené	hodogéda	hodogeréba
	可能動詞	ほどける	hodó ^{geru}	hodogéné	hodogéda	hodogéréba

持っているために、一般動詞の交替核が末位置-néにくる否定形と次末位置-rébaの条件形で、可能動詞の固定核と対立が生じている^(註19)。

可能動詞は、このような語幹に固定の核をもつと同時に、井上(1980)p. 280で指摘されているようにセグメント上でも語幹の統一がなされる。C₁V_NC₂V_w(V_Nは狭母音、V_wは広母音)で、C₁、C₂とも無声子音の場合、C₂は有声化せず、無声子音のままであるが、可能動詞ではこれに該当する環境であっても、C₂は有声子音で現れて語幹の統一がなされる。一方、一般動詞の場合は、有声化しない原則があてはまる^(註20)。

基本動詞	一般動詞	可能動詞
「引く」 higu ⁻	hikeru (気が～)	higéru (うまく引くことができる)
「付く」 cú ^{gu}	cukéru (身に～)	cugéru (味方に付くことができる)

この他、sigéru(sigu「敷く」)、hugéru(hugu「拭く」)、cugéru(cúgu「着く」)、hugéru (húgu「吹く」)など例をあげることができる。

3. 4. 3. 可能動詞の地理的分布

さて、上野(1986)では、可能動詞と一般動詞が対立するのは、東北方言だけの特徴という指摘がある(p. 22)。新潟県村上市を南限として、青森市と雫石町(上野(1986)p. 13註14)の例のほかに、この鶴岡市が加わったわけである。

可能動詞の語幹の統一には、「固定核」と並んで先の非無声化(有声化)があるが、これら二つの現象のそれぞれの地理的な分布が明らかになれば、語幹統一の過程の解明に役立つにちがいない。統一化そのものは非常に広範な現象で、弁別的アクセントを有しない方言においても、非無声化(有声化)というかたちで統一化が働いているかもしれない。とにかくも細部にわたり他の地域についての報告が待たれるが、系統関係を越えた「地域的」(areal)な特徴として捉えられる可能性をもつ。

3.5. 派生形の交替パターン

ここでは、今まで見てきた各活用形と可能動詞を統一的に処理しようと試みる。表5にあげた、(1)単純形～(5)一般動詞の間に見られる核の位置の異同を「派生交替」、(a)非過去形～(e)条件形の間に見られる核の位置の異同を「活用交替」と呼ぶ。派生の「元」となる「基底形」として、動詞群、セグメントのほかに、有核・無核の類の情報が与えられれば決まった「活用交替」と「派生交替」の全てを予想しうる。

次の表6では、表5で見られる「活用交替」が、全て「無核」となるのか「交替核」をもつか「固定核」をもつかをまとめたものである。「固定核」といっても、その活用交替間で「固定」しているのであって、派生交替間では、核の位置は必ずしも同じではない^{注21)}。

3.5.1. 交替パターンと可能動詞の成立過程

可能動詞と一般動詞が対立するようになったのは、結局のところ可能動詞が語幹固定核をもつに至ったことによるものであるが、この過程も他の多くの方言の報告が集まれば解明の糸口がつかめるかもしれない。先の上野(1986)では、まず、有核基本動詞をもとに有核可能動詞ができ、そのあとに無核基本動詞に対応する可能動詞が有核(固定核)になったという「群化」の可能性を示唆している(p. 22)。

表5 動詞アクセントの派生交替

	(1) 単純形	(2) テアル形	(3) テイル形	(4) 可能	(5) 一般
(a) 非過去形	tagu ^ː (炊く)	tagaqtéru	taidéru	tagéru	tageru ^ː
(b) タ形1	taida ^ː	tagaqteda	taideda	tagéda	tageda ^ː
(c) タ形2	—	tagaqtá	ta'iqdá	—	—
(d) 否定形	tagane ^ː	tagaqtene	taidene	tagéne	tagerne ^ː
(e) 条件形	tageba ^ː	tagaqtéréba	taideréba	tagéréba	tageréba ^ː
(a) 非過去形	núŋu (脱ぐ)	nuŋáqteru	núideru	nuŋéru	nuŋéru
(b) タ形1	núida	nuŋáqteda	núideta	nuŋéda	nuŋéda
(c) タ形2	—	nuŋáqta	nu'iqda	—	—
(d) 否定形	nuŋane	nuŋáqtene	núidene	nuŋéne	nuŋéne
(e) 条件形	nuŋéba	nuŋáqtereba	núidereba	nuŋéreba	nuŋéreba

表6 動詞アクセントの派生交替

	(1) 単純形	(2) テアル形	(3) テイル形	(4) 可能	(5) 一般
(a) 非過去形					
無核類	}	無核	交替核	交替核	無核
				固定核	
(e) 条件形					
(a) 非過去形					
有核類	}	交替核	固定核	固定核	交替核
(e) 条件形					

鶴岡方言の有核類から作られた可能動詞が固定核をもつのに対し、無核類から作られた可能動詞が、「交替核」と「固定核」の両方の交替を起こすこと(表6)は、その成立の過程で、無核類の可能動詞にまだ群化の力が完全に及んでいないことを示すものと捉えることができる。その一方で、一部、有核類のテアル形、テイル形の否定形で、nuŋáqtene, núideneの固定核ほかに、-néの末位置核をもつこと(表5)は、否定形の統一化も同時に働いていて、無核類可能動詞の固定核が成立した後、否定形の群化がクロスするかたちで及んだ可能性も示している。

4. 形容詞のアクセント

4.1. 形容詞のアクセント体系

最後に形容詞のアクセントについて簡単に触れる。B氏の資料を中心的に取り上げ、A氏、C氏の形についても言及する。表7で主な活用形をあげる。

基本形で有核の「濃い、白い」の否定過去形は、語幹の核と付属語の-néqkeの双方の核が実現し、アクセント上2単位で現れる。ハイフンで区切って示す。

表7 形容詞のアクセント

	基本形	～モノ	～ナル	否定形	否定過去形
無い	né	némono	négunaru	—	—
濃い	kói	kóimono	kógunaru	kógune	kógu-néqke
赤い	'aqqè	'aqqemonó	'aqqegunaru	'aqqeguné	'aqqegu-néqke
白い	siré	sirénomo	sirégunaru	siréqune	sirégu-néqke

A氏は「白い」の基本形で1拍目が長音で現れる([sɪ:re])。「濃い」の「～ナル」でも同様([ko:gu-])。

C氏の「赤い」の基本形の促音はきわめて短いか、ない(['age])。「白い」の基本形ではB氏、A氏のような融合形はまれになっている。[ʃirói]が普通。「濃い」の否定形は表7の形のほか、ko'íguneをもつ。否定過去形の付属語は促音化しない形の-néqkeが普通。2単位はB氏同様である。

4.2. 形容詞の資料

形容詞については、多くの語数を調査していない。上野氏による調査票(A)を用いて、B氏とC氏に関してわずかに19語を補ったに過ぎない。それでも両者に若干の差が現れたので、資料の最後の別表7-3に列挙する。この形容詞資料だけはとりあえず音素表記を行なうが、いままで grave accent で

表していた無核の用言にかかるイントネーションは記さない。

5. アクセント資料

5.1. 資料の説明

金田一語彙を中心にアクセント資料を提示する(別表7-1~7-3)。

名詞の資料は左から横に, 類, 読み, 表記, 話者C氏(1937生まれ)のアクセント, 話者B氏(1927生まれ)のアクセントである。

動詞の資料も同様の列挙の仕方であるが, 話者C氏の資料のみである。

類の表し方で, 例えば1-2とは1拍, 2類を表す。xは金田一語彙の中で類別が不明のもの, zは上野氏によって補われたその他の語彙である。動詞は()括弧を用いて1段動詞か5段動詞かを示した。例えば, 3(5)-1は3拍5段1類を示す。x, zは名詞同様(ただし4拍5段には付けていない)。

適宜「表記」のフィールドで, ()括弧で意味の補いなどを行っている。また, 動詞では別表記などを[]括弧で示している。

名詞は, 全て助詞「~カラ」付きで聞いたものである。アクセント核の位置を番号で示す。番号が当該名詞の拍数を越えているものは, 「~カラ」の付属語に核が現れるものである(別表1, 2のb系列に当たる)。

アクセント記号のフィールドで用いられているmはまれ, xは使用しないことを示す。?は話者の判断が不確かなもの。

「抜ける(自;可)0;2」等は, アクセント記号が()括弧の区切りと対応する。

注記は行をかえて行なったものもあるが, 総じて簡略なものである。

両氏とも時間の都合で併用形の細かい確認をしていない。ただし, B氏のは, 2拍名詞3類, 4・5類に限り, 核が助詞部分にずれるかどうかの確認をしている。したがってその範囲では, アクセント記号2とのみ書かれているのは, 3の併用形を持っていないことを示す。それに対してC氏のデータは, 2とのみ書かれていても3の併用形を持つ可能性がある。また, 逆に3とのみ

書かれていても2の併用形を持つ可能性がある。3拍名詞に関しては、両氏ともそのチェックを行っていない。

「通す, 通る, 入る, 参る」等は, 実際長い音節の後半まで高く聞こえる。核1としてもよいが, 他と統一を取るだけの理由で動詞に限り, 核2とする。同様に「見通す」等も核3とする。

5.2. 資料の考察

資料を類別にまとめるあたって, 主に通時的な面について気がついた点をあげる。

5.2.1. 2拍名詞

金田一(1953)ですでに次のことが明らかにされている。すなわち, 鶴岡方言の2拍名詞の類の統合の仕方は,

1, 2/3/4, 5

で, 東北諸方言で一般的なものであるが, 4, 5類の中が2拍目の母音の広狭によって二つに割れていて $\circ N$, $\circ \mathbb{W}$ (N は狭母音, \mathbb{W} は広母音の拍)のようになっている。また, 3類はアクセント核が付属語にずれていく b 系列に属している。

今回, 調査した資料からは次のことが窺える。

3類では, アクセント核がずれていく核3だけでなく, 核2が多く現れる。

B氏の場合, 核3が現れるところは全て核2も可能な様子である(逆は真ではない)。C氏の場合, 併用形のチェックをしていないので, 核2と核3がばらばらに現れているように見えるが, 第2拍目の母音が広いとき($\circ \mathbb{W}$)アクセント核2が, 第2拍目の母音が狭いとき($\circ N$)核3が現れやすい傾向にあるといえる。

これは, 3類の $\circ \circ$ カラ \rightarrow $\circ \circ$ カラ の変化が, $\circ N$ という条件で先に起きていることを示すものではなく, 変化の「押し戻し」に語音の条件が絡んでい

るものと捉えた方がよいと思われる。

金田一(1954)の報告では、明治30～40年代の話者で、上記の変化がひとまず完了しているので、C氏が更に古い段階を保持しているとは考えにくい。それよりむしろ ○○カラ → ○〇カラ の回帰的变化が起き(これには共通語化と構造的な要因の両方が関係しているだろう)、○Wの環境ではその変化を受け容れやすく、○Nではブロックされていると考えたほうがよい。すなわち、C氏の場合、母音が狭い拍にアクセント核が置かれにくいという、この方言に存在している「フィルター」がかかっている状態として説明しうる。

それにもかかわらず、この原則にいくつか例外が現れていることからすれば、この「フィルター」も絶対的なものではなく、傾向に過ぎないことがわかる。細かなチェックによって、B氏のように、併用形が現れる可能性が大である。

次に4, 5類については、従来の報告とほぼ同様、○Nは核1, ○Wは核2となっている。しかし、B氏において、わずかな単語ではあるが、本来3類で現れるべき核3が、核2の併用で現れている。これはC氏にはない特徴である。

これについては、詳細は不明だが、3類の核2～3のゆれが影響しているのだろうか。〇〇カラ → ○〇カラ の変化のあと、更に○〇カラ → ○〇カラ が起き、4, 5類が3類に統合し始めているとも捉えられるが、いずれにせよこの変化は突発的で一時的な変化であろう。

5.2.2. 3拍名詞

4類は金田一(1954)によれば、核4が伝統的な形と見られるが、核4 → 核3の変化が見られる。年齢の若いC氏の方に古い形が見られる。B, C両氏とも更に併用形が見つかる可能性がある。

5類は両氏ともほぼ○NWのとき核1, ○NNのとき核2, ○WWか○WNのとき核2か核3で現れている。「禪, 錦」核1はこの原則でいくと例外。

6, 7類は○NWのとき核1, ○NNと○W○のとき核2。相補分布で問題にした「雀」は3拍目まで考慮した原則でも例外となっている。

5.2.3. 動詞

類別の観点からは例外は比較的少ない。単純語は多くの方言同様、無核類・有核類の二つに分けられる。ただし、複合動詞については単純語の枠に当てはまらないものも見いだせるので、あらためて別に調査研究する必要がある。

注1) 調査にあたっては、上野善道氏の「アクセント分布調査票(A)」、「アクセント調査票(B)」、「アクセント調査票(C)」を用いた。いずれも私家版。内容は、(A)は類別語彙の1~3モーラ名詞(47語)の単独形、ト、ノ、カラなどの付属語付きと、用言(動詞35語、形容詞4語)の主な活用形の項目、そして628語の体言、35語の動詞、31語形容詞の単語リストから成る。(B)は1~3モーラの体言編で金田一語彙(金田一(1974)pp. 62~73にあげてある単語リスト。類別語彙と重なり合うが詳しい。)とその他の語彙から成る。(C)は動詞と形容詞の用言編で1~4モーラの金田一語彙とその他の用言から成る。

注2) A氏は外住歴があるが、成人後のことであり、旧鶴岡方言の話者として問題はないと判断した。

注3) △印は、二つの場合がありうる。一つは、古い体系と新しい体系のそれぞれの変異形が明確なかたちで存在する場合、もう一つは、古い音声特徴が弱まって消えているか現れているか微妙な場合である。特徴(1), (3), (8)は後者で、C氏の発音の場合、該当の方言的特徴が微妙ながら認められたにもかかわらず、内省に反映しないことがあった。

注4) 上野(1984)p. 351, 註20も参照。また、最近の上野(1993)によれば、山形県東田川郡朝日村大鳥方言でもこの現象がある。庄内南部域に広く分布している特徴かもしれない。

注5) 上野(1975)p. 78では、ずれるものが見られる。

注6) 上野(1975)の指摘を確認。「~いた」のLLは、LM(LH)のときも。なお、あげてある例の「男」は金田一(1953)p. 167では3cの所属になっている。

注7) 金田一(1953)pp. 169~170では、「ダ」が動詞のイントネーションと同種のもの

という示唆がある。

注8) 早田(1977)も「アクセントの直後の音節を高にする」(p. 330)規則で基底から表層に導く記述を行なう点で、後に述べる原口(1979)と同じ性質をもつが、相補分布を用いてはいない。また、表層で頭高型になる2d, 3eへの言及がない。

注9) 川上(1973)p. 11fなど。

注10) ただし、用言の無核のものに言い切りのイントネーションが被さる場合はこの限りではないが、その場合、陳述の末位置に限られるし、連体形になって付属語が接続する場合はその上昇は消えるという性質をもつため、核や句音調の上昇と別に考えることができる。

注11) B氏の1b「絵ダ」の長音化した形で実現するMRLは、「上げ」と「下げ」の両方が反映したものとみることも可能ではあるが、別の考え方もある。すなわち、もしモーラ単位のアクセントととして捉えることが可能であれば、○^o+ダで核が移動しない2c系列と同様の現れ方をしたと考えることもできる。

注12) 上野(1977)pp. 297~298, p. 301。

注13) 上野(1984)では、具体例はあげられていないものの、原口(1979)の金田一論文の語例見落しと相補分布不成立の指摘がなされている。「私説における「重大な欠陥」につながる「大切な点の見落とし」と氏(原口氏：新田註)が言う所の、相補分布の関係とそれに基づくアクセント移動規則は、実は成り立たない例が「雀」一例だけではなくあることを、既に金田一氏が明らかにしているのである(1953. 195)。そして私の調査もそれを追認し、類例を増補している。」(p. 357 註1)とある。また、原口論文の刊行後、講義を通じ直接この相補分布不成立の事実を聞いている。また、そのとき、和田実氏も、和田(1962)でこの事実を当然踏まえていると考えられる旨の発言をされたのを記憶している。なお、金田一氏も当然2cと2d, 3dと3e(金田一(1953)では[A]と[B], [B]と[C]の音韻の分布状況に気づかれている(p. 165, p. 167 註3)。また、金田一(1953)論文では、pp. 171~174で音韻の条件を考慮した通時的な説明も行なっている。

注14) 各氏の調査語彙の量もまたその質も異なっているため、この表にあげられた結果のみが存在すると考えてはならない。例えば、「+」の記号が与えられているとしても、「-」の併用形が存在する可能性は否定できない。A氏の場合、調査語彙数が少なく、本来のb系列が第1回答形であるときには、併用形を確かめなかったことが多い。類別語彙の所属の観点から、第1回答形がc系列のとき、併用形を確かめている。B氏、C氏も最初の調査はそうに行なったが、再調査の際には、当該類別語彙に限って、両方の併用の可能性を確認しながら調査した。また、資料増補のために行なった金田一語彙の調査の際には、「~カラ」付きの形を調査した。したがって、B氏、C氏の場合は、判断材料の質と量がA氏のものとは異なることを注意す

る必要がある。

注15) A氏, B氏とも理由を表す付属語で-hageのかたちをもっている。C氏は-sageだけを用いる。

注16) 上野(1975)p. 41, 注4, 上野(1980)pp. 120~127, 氏は「陳述のイントネーション」と言っている。

注17) 形態論的な規則からみて存在しうる語形でも意味的な制約がある場合がある。別表5-1, 5-2にあげられているテアル形は, 状態変化動詞にしか用いられないという制約があり(V章), 「見る」の形は不自然である。話者によれば, 「見る」のテアル形は, 前もって資料に目を通してあるとか, 見られた痕跡が残っていることを意識したとき, 言えるかもしれないという。しかし, 無理でやや不自然な形でもアクセント規則は守られて現れてくる。アクセント上の体系の「あきま」を確認するのに全く無駄なものではない。

注18) おそらく, アクセント核の担い手は音節にあると考えるのでイ音便や撥音便の場合, ずれる指定はいらないはずである。しかし, ここでは, 非音便形の無声化の場合と統一をとるためにモーラ単位で核を指定しながら原則を考えていく。アクセント記号もモーラ音素の前に付ける原則でいく。

注19) この点も青森方言と共通するが, 無核の基本動詞から生じた可能動詞に若干差があるようである。鶴岡方言では, 有核の一般動詞あるいは基本動詞と同じ交替核のtagené, tagerébaと併用するかたちで, 有核の可能動詞と同じ固定核のtagéne, tagéribaをもつ。青森方言では動詞の長さが関与するのか, 条件形で3, 4音節のものはderéba「出れば」, tageréba「炊ければ」で交替核をもち, 5, 6音節になるとnarabériba「並べば」, sitaga'éreba「従えれば」と固定核をもつ。

注20) 上野(1986)では, 可能動詞の成立に関する通時的な説明で, 二つの可能性を示している。一つは, 可能動詞が成立する以前に基本動詞で有声化が起こり(cuku > cugu), 一般動詞では, 上記有声化を免れる環境では有声化が起こらなかった(cukeru)。そして, 有声化した動詞語幹(cug-)でもって可能動詞が新たに作られたというもの。もう一つは, 可能動詞が有声化の以前にすでに成立していて, 一般動詞も可能動詞も上記有声化を免れる環境では有声化が起こらなかった(cukeru)が, 可能動詞ではのちに, 基本語幹からの類推によって有声化したというものである。可能動詞だけに類推が及んだ理由を, 可能動詞の生産性の高さの基本動詞との関係の緊密性に求めている。また, 一般動詞は語彙の派生で, (自他が逆転することから) 別の単語と捉えられたとしている(p. 19~20)。井上(1980)も類推による説明を行っており, 上野(1986)の後者の説に近いと言える。

注21) nu'iqdaだけは, 音韻解釈上後ろにずれている。

[付記] 資料の整理, 表の作成には福井玲氏作成の XSORT. EXE, SOROE. EXE を使用した。また, TeXを用いた製版を行なったが, その際, 小林肇氏, 福井玲氏, 白川俊氏作成のTeX用音声記号フォントTSIPAを使用した。各氏に感謝申し上げる。

参考文献

- 井上史雄(1980)「言語の構造と変遷－東北方言音韻史を例として－」『講座言語 1 言語の構造』(大修館書店)
- 上野善道(1975)「アクセント素の弁別の特徴」『言語の科学』6
- 上野善道(1980)「アクセントの構造」『講座 言語 1 言語の構造』(大修館書店)
- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古希記念論文集 2 言語学編』(三省堂)
- 上野善道(1986)「青森市方言の動詞のアクセント」『日本海文化』(金沢大学) 13
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座 日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻(上)』(明治書院)
- 上野善道(1993)「山形県大鳥方言のアクセントの類別体系」『日本海域研究所報告』(金沢大学日本海域研究所) 25
- 川上葵(1973)『日本語アクセント法』(学書房出版)
- 金田一春彦(1953)「アクセント」『地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』(秀英出版)
- 金田一春彦(1956)「柴田君のアクセント論を読んで」『国語学』21 (柴田・北浦・金田一編(1980), 金田一(1967)に再録)
- 金田一春彦(1963)「私のアクセント非段階観」『国語研究』17 (金田一(1967)に再録)
- 金田一春彦(1967)『日本語音韻の研究』(東京堂出版)
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究－原理と方法－』(塙書房)

- 佐藤亮一(1972)「アクセント」『山形県方言概説』(栄文堂書店)
- 柴田武(1955)「日本語のアクセント体系」『国語学』21(柴田・北浦・金田一編(1980)に再録)
- 柴田武・北浦甫・金田一春彦編(1980)『日本の言語学 2 音韻』(大修館書店)
- 服部四郎(1979)「表層アクセント素と基底アクセント素とアクセント音調型」『言語の科学』7
- 原口庄輔(1979)「日本語音調の諸相」『言語の科学』7
- 早田輝洋(1977)「生成アクセント論」『岩波講座日本語 5 音韻』(岩波書店)
- 和田実(1962)「アクセント」『方言学概説』(武蔵野書院)

別表1 名詞のアクセント体系

語例	単独	～サ	～ト	～ノ	～カラ
1a 蚊	ka	kasa	kado	kano	kagara
1b 絵	'é	'esá	'édo	'eno	'egára
2a 鼻	hana	hanasa	hanado	hanano	hanagara
2b 足	'así	'asisá	'asidó	'asino	'asigára
2c 肩	kadá	kadása	kadádo	kadáno	kadágara
2d 秋	'ági	'ágisa	'ágido	'ágino	'ágigara
3a 魚	sagana	saganasa	saganado	saganano	saganagara
3b 頭	'adamá	'adamasá	'adamadó	'adamano	'adamagára
3c 心	kogoró	kogorósa	kogoródo	kogoróno	kogorógara
3d 兎	'usáŋi	'usáŋisa	'usáŋido	'usáŋino	'usáŋigara
3e 兜	kábudo	kábudosa	kábudodo	kábudono	kábudogara
4a 鶏	niwadori	niwadorisa	niwadorido	niwadorino	niwadorigara
4b 猪	'inosísí	'inosísísá	'inosísídó	'inosísino	'inosísigára
4c 足音	'asi'odó	'asi'odósa	'asi'odódo	'asi'odóno	'asi'odógara
4d 玉葱	tamanéŋi	tamanéŋisa	tamanéŋido	tamanéŋino	tamanéŋigara
4e 朝顔	'asáŋa'o	'asáŋa'osa	'asáŋa'odo	'asáŋa'ono	'asáŋa'ogara
4f 松茸	mázidage	mázidagesa	mázidagedo	mázidageno	mázidagegara

別表2 名詞のアクセント体系の解釈

語例	単独	～サ	～ト	～ノ	～カラ
1-0 蚊	○	○○	○○	○○	○○○
1-1 絵	ó	óó	óó	○○	óóó
2-0 鼻	○○	○○○	○○○	○○○	○○○○
2-2a 足	○○ó	○○ó	○○ó	○○○	○○○○ó
2-2b 肩	○○ó	○○ó	○○ó	○○ó	○○○○
2-1 秋	○○	○○○	○○○	○○○	○○○○
3-0 魚	○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○○
3-3a 頭	○○ó	○○○○ó	○○○○ó	○○○○	○○○○ó
3-3b 心	○○ó	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○○
3-2 兎	○○ó	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○○
3-1 兜	○○○	○○○○	○○○○	○○○○	○○○○○
4-0 鶏	○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○○
4-4a 猪	○○○○ó	○○○○ó	○○○○ó	○○○○○	○○○○○○ó
4-4b 足音	○○○○ó	○○○○ó	○○○○ó	○○○○ó	○○○○○○
4-3 玉葱	○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○○
4-2 朝顔	○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○○
4-1 松茸	○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○○

別表 3 - 1 動詞の活用形1-1

	基本形	～サケ	否定形	～サケ	禁止形	条件形
II ₁						
着る	kirù	kiruságe	kinè	kinéságe	kinná	kideba
寝る	nerù	neruságe	nenè	neneságe	nennà	nedeba
する	surù	suruságe	sanè	sanéságe	sinnà	sideba
出る	déru	dérusage	dené	denésage	dénna	dedéba
見る	míru	mírusage	miné	minésage	mínna	midéba
来る	kúru	kúrusage	koné	konésage	kúnna	kudéba
居る	'irù	'iruságe	'inè	'ineságe	'innà	'ideba
くれる	kerù	keruságe	kenè	kenéságe	kennà	kedeba
II ₅						
行く	'igù	'iguságe	'iganè	'iganéságe	'igunà	'igeba
売る	'urù	'uruságe	'uranè	'uranéságe	'unnà	'ureba
買う	ka'ù	ka'uságe	kawanè	kawanéságe	ka'unà	ka'eba
置く	'ogù	'oguságe	'oganè	'oganeságe	'ogunà	'ogeba
押す	'osù	'osuságe	'osanè	'osaneságe	'osunà	'oseba
踏む	humù	humuságe	humanè	humanéságe	humunà	humeba
会う	'á'u	'á'usage	'awané	'awanésage	'á'una	'a'éba
打つ	'úzu	'úzusage	'uzané	'uzanésage	'úzuna	'uzéba
取る	tóru	tórusage	torané	toranésage	tónna	toréba
書く	kágu	kágusage	kagané	kaganésage	káguna	kagéba
出す	dásu	dásusage	dasané	dasanésage	dásuna	daséba
読む	'jómù	'jómusage	'jomané	'jomanésage	'jómuna	'joméba
食う	kú	kúsage	kuwané	kuwanésage	kúna	kéba
III ₁						
曲げる	majerù	majeruságe	majenè	majeneságe	majennà	majedeba
借りる	karirù	kariruságe	karinè	karineságe	karinnà	karideba
建てる	tadéru	tadérusage	tadené	tadenésage	tadénna	tadedéba
閉じる	tožírù	tožírusage	tožiné	tožinésage	tožinna	tožidéba
III ₅						
送る	'ogurù	'oguruságe	'oguranè	'oguranéságe	'ogunnà	'ogureba
使う	cuka'ù	cuka'uságe	cukawanè	cukawanéságe	cuka'unà	cuka'eba
磨く	miŋagù	miŋaguságe	miŋaganè	miŋaganéságe	miŋagunà	miŋageba
選ぶ	hagobù	hagobúsage	hagobanè	hagobaneságe	hagobunà	hagobéba
作る	cugúru	cugúrusage	cugurané	cuguranésage	cugúnna	cuguréba
払う	hará'u	hará'usage	harawané	harawanésage	hará'una	hara'éba
叩く	tadágu	tadágusage	tadagané	tadaganésage	tadáguna	tadagéba
選ぶ	'erábu	'erábusage	'erabané	'erabanésage	'erábuna	'erabéba
歩く	'arúgu	'arúgusage	'arugané	'aruganésage	'arúguna	'arugéba
入る	héru	hérusage	herané	heranésage	hénna	heréba

別表 3-2 動詞の活用形1-2

	基本形	～サケ	否定形	～サケ	禁止形	条件形
IV ₁						
重ねる	kasenerù	kasaneruságe	kasanenè	kasanenéságe	kasanennà	kasanedeba
数える	kažo'èru	kažo'èrusage	kažo'ené	kažo'enésage	kažo'éнна	kažo'edéba
IV ₅						
固まる	kadamarù	kadamaruságe	kadamaranè	kadamaranéságe	kadamarunà	kadamareba
働く	hadaragù	hadaraguságe	hadaraganè	hadaraganéságe	hadaragunà	hadarageba
転がす	koronjasù	koronjasuságe	koronjasanè	koronjasanéságe	korogasunà	koronjaseba
脹らむ	huguramù	huguramuságe	huguramanè	huguramanéságe	huguramunà	hugumameba
謝る	'a'jamáru	'a'jamárusage	'a'jamarané	'a'jamaranésage	'a'jamáнна	'a'jamaréba
近づく	cigažúgu	cigažúgusage	cigažugané	cigažuganésage	cigažúguna	cigažugéba
動かす	'uηogásu	'uηogásusage	'uηogasané	'uηogasanésage	'uηogásuna	'uηokaséba
押し込む	'osikómu	'osikómusage	'osikomané	'osikomanésage	'osikómuna	'osikoméba

別表 4-1 動詞の活用形2-1

	タ形	～サケ	テイル形	テイタ 1 形	テイタ 2 形	～サケ
II ₁						
着る	kità	kitaságe	kitéru	kitedá	kiqtá	kiqtásage
寝る	nedà	nedaságe	nedéru	nededá	neqdá	neqdasage
する	sità	sitaságe	sitéru	sitedá	siqtá	siqtásage
出る	dedá	dedásage	dedéru	dedéda	déqda	déqdasage
見る	midá	midásage	midéru	midéda	míqda	míqdasage
来る	kitá	kitásage	kitéru	kitéda	kíqta	kiqtasage
居る	'idà	'idaságe	'idéru	—	'iqdá	'iqdasage
くれる	kedà	kedaságe	kedéru	kededá	keqdá	keqdasage
II ₅						
行く	'iqtà	'iqtaságe	'iqtéru	'iqtedá	'iqtá	'iqtásage
売る	'uqtà	'uqtaságe	'uqtéru	'uqtédá	'uqtá	'uqtásage
買う	kaqtà	kaqtaságe	kaqtéru	kaqtédá	kaqtá	kaqtásage
置く	'oidà	'oidaságe	'oidéru	'oidedá	'o'iqdá	'o'iqdasage
押す	'osità	'ositaságe	'ositéru	'ositedá	'osiqtá	'osiqtásage
踏む	hundà	hundaságe	hundéru	hundedá	hundá	hundásage
会う	'aqtá	'aqtásage	'áqtéru	'áqtédá	'áqta	'áqtasage
打つ	'uqtá	'uqtásage	'úqtéru	'úqtédá	'úqta	'úqtasage
取る	toqtá	toqtásage	tóqtéru	tóqtédá	tóqta	tóqtasage
書く	káida	káidasage	káideru	káideda	ka'iqda	ka'iqdasage
出す	dásita	dásitasage	dásiteru	dásiteda	dasiqta	dasiqtasage
読む	'jónða	'jónðasage	'jónðeru	'jónðeda	'jónða	'jónðasage
食う	ku(q)tá	ku(q)tásage	kúqtéru	kúqtédá	kúqta	kúqtasage
III ₁						
曲げる	majedà	majedaságe	majederu	majededá	majeqdá	majeqdasage
借りる	karidà	karidaságe	karideru	karidedá	kariqdá	kariqdasage
建てる	tadéda	tadédasage	tadéderu	tadédeda	tadéqda	tadéqdasage
閉じる	tožída	tožidasage	tožideru	tožideda	tožiqda	tožiqdasage
III ₅						
送る	'oguqtà	'oguqtaságe	'oguqtéru	'oguqtédá	'oguqtá	'oguqtásage
使う	cukaqtà	cukaqtaságe	cukaqtéru	cukaqtédá	cukaqtá	cukaqtásage
磨く	miñaidà	miñaidaságe	miñaidéru	miñaidedá	miña'iqdá	miña'iqdasage
運ぶ	hagondà	hagondaságe	hagondéru	hagndedá	hagondá	hagondásage
作る	cukuqtá	cukuqtásage	cukúqteru	cukúqtéda	cukúqta	cukúqtasage
払う	haraqta	haraqtasage	haráqteru	haráqtéda	haráqta	haráqtasage
叩く	tadáida	tadáidasage	tadáideru	tadáideda	tada'iqda	tada'iqdasage
選ぶ	'eránda	'erándasage	'eránderu	'erándeda	'eránda	'erándasage
歩く	'arúida	'arúidasage	'arúideru	'arúideda	'aru'iqda	'aru'iqdasage
入る	héqta	héqtasage	héqteru	héqtéda	héqta	héqtasage

別表4-2 動詞の活用形2-2

	夕形	～サケ	テイル形	テイタ1形	テイタ2形	～サケ
IV ₁						
重ねる	kasanedà	kasanedaságe	kasanedéru	kasanededá	kasaneqdá	kasaneqdaságe
数える	kažo'éda	kažo'édasage	kažo'éderu	kažo'édeda	kažo'éqda	kažo'éqdasage
IV ₅						
固まる	kadamaqtà	kadamaqtaságe	kadamaqtéru	kadamaqtédá	kadamaqtá	kadamaqtásage
働く	hadaraidà	hadaraidaságe	hadaraidéru	hadaraidedá	hadara'iqdá	hadara'iqdaságe
転がす	koronásità	koronásitaságe	koronásitéru	koronásitedá	koronásiqtá	koronásiqtásage
服らむ	hugurandà	hugurandáságe	hugurandéru	hugurandedá	hugurandá	hugurandásage
謝る	'a'jamaqtá	'a'jamaqtásage	'a'jamáqteru	'a'jamáqteda	'a'jamáqta	'a'jamáqtasage
近付く	cigažú(i)da	cigažú(i)dasage	cigažú(i)deru	cigažú(i)deda	cigažú('i)qda	cigažú('i)qdasage
動かす	'uɲogásita	'uɲogásitasage	'uɲogásiteru	'uɲogásiteda	'uɲogásiqta	'uɲogásiqtasage
押し込む	'osikónnda	'osikónndasage	'osikónderu	'osikóndeda	'osikónnda	'osikónndasage

別表 5 - 1 動詞の活用形3-1

	テイル否	テイル条	テアル形	テアッタ 1 形	テアッタ 2 形
II ₁					
着る	kitené	kiteréba			
寝る	nedené	nederéba			
する	sitené	siteréba	saraqterú	saraqtedá	saraqta
出る	dedéné	dedéreba			
見る	midéné	midéreba	miráqteru?	miráqteda?	miráqta?
来る	kiténé	kitéreba			
居る	'idené?	'ideréba			
くれる	kedené	kederéba			
II ₅					
行く	'iqtené	'iqteréba			
売る	'uqtené	'uqteréba			
買う	kaqtené	kaqteréba	kawaqterú	kawaqtedá	kawaqta
置く	'oidené	'oideréba	'ogaqterú	-dá	'ogaqta
押す	'ositené	'ositeréba	'osaqterú	-dá	'osaqta
踏む	hundené	hunderéba	humaqterú	-dá	humaqta
会う	'áqtené	'áqtereba			
打つ	'úqtené	'úqtereba	'udáqteru	-dá-	'udáqta
取る	tóqtené	tóqtereba	toráqteru	-rá-	toráqta
書く	káidené	káidereba	kagáqteru	-gá-	kagáqta
出す	dásitené	dásitereba	dasáqteru	-sá-	dasáqta
読む	'jóndené	'jóndereba	'jomáqteru?	-má-?	'jomáqta?
食う	kúqtené	kúqtereba			
III ₁					
曲げる	maqedené	maqederéba	majeraqterú	majeraqtedá	majeraqta
借りる	karidené	karideréba	kariraqterú	-dá	kariraqta
建てる	tadédéné	tadédereba	taderáqteru	taderáqteda	taderáqta
閉じる	tožidené	tožidereba	tožiráqteru	-rá-	tožiráqta
III ₅					
送る	'oguqtené	'oguqteréba	'oguraqterú	'oguraqtedá	'oguraqta
使う	cukáqtené	cukaqteréba	cukawaqterú	-dá	cukawaqta
磨く	miḡaidené	miḡaidereba	miḡagaqterú	-dá	miḡagaqta
選ぶ	hagondené	hagonderéba	hagobaqterú	-dá	hagobaqta
作る	cugúqtené	cugúqtereba	cuguráqteru	cuguráqteda	cuguráqta
払う	haráqtené	haráqtereba	hara'wáqteru	-'wá-	hara'wáqta
叩く	tadáidené	tadáidereba	tadagáqteru	-gá-	tadagáqta
選ぶ	'erándené	'erándereba	'erabáqteru	-bá-	'erabáqta
歩く	'arú'idené	'arú'idereba			
入る	héqtené	héqtereba			

別表 5-2 動詞の活用形3-2

	テイル否	テイル条	テアル形	テアッタ 1 形	テアッタ 2 形
IV ₁					
重ねる	kasanedené	kasanederéba	kasaneraqtéru	kasaneraqtedá	kasaneraqta
数える	kažo'édéné	kažo'édereba	kažo'eráqteru	kažo'eráqteda	kažo'eráqta
IV ₅					
固まる	kadamaqtené	kadamaqteréba			
働く	hadaraidené	hadaraidereba			
転がす	koronjasitené	koronjasiteréba	koronjasaqtéru	koronjasaqtedá	koronjasaqta
脹らむ	hugurandené	huguranderéba			
謝る	'a'jamáqtené	'a'jamáqtereba	'a'jamaráqteru?	'a'jamaráqteda?	'a'jamaráqta?
近付く	cigažú(i)dené	cigažú(i)dereba			
動かす	'uŋogásitené	'uŋogásitereba	'uŋogásáqteru	-sá-	'uŋogásáqta
押し込む	'osikónđené	'osikóndereba	'osikomáqteru	-má-	'osikomáqta

別表6 一般動詞と可能動詞

基本動詞	派生形	一般動詞	可能動詞
II ₅	III ₁		
売る	'uru ⁻	売れる (本が)	'ureru ⁻ (本を)
炊く	tagu ⁻	炊ける (飯が)	tageru ⁻ (飯を)
釣る	curu ⁻	釣れる (魚が)	cureru ⁻ (魚を)
抜く	nugu ⁻	抜ける (気が)	nugeru ⁻ (気を)
剥く	mugu ⁻	剥ける (皮が)	mugeru ⁻ (皮を)
焼く	'jagu ⁻	焼ける (魚が)	'jageru ⁻ (魚を)
割る	waru ⁻	割れる (皿が)	wareru ⁻ (皿を)
III ₅	IV ₁		
浮ぶ	'ugabu ⁻	浮かべる (船を)	'ugaberu ⁻ (上手に)
屈む	kaŋamu ⁻	屈める (腰を)	kaŋameru ⁻ (上手に)
沈む	sižumu ⁻	沈める (体を)	sižumeru ⁻ (上手に)
進む	susumu ⁻	進める (話を)	susumeru ⁻ (やっと前に)
並ぶ	naraberu ⁻	並べる (本を)	naraberu ⁻ (上手に)
まくる	maguru ⁻	まくれる (裾が)	magureru ⁻ (裾を)
めくる	meguru ⁻	めくれる (皮が)	megureru ⁻ (皮を)
II ₅	III ₁		
折る	'oru	折れる (枝が)	'oreru (枝を)
切る	kíru	切れる (手が)	kiréru (上手に)
裂く	ságu	裂ける (布が)	sagéru (布を)
立つ	tázu	立てる (看板を)	tadéru (上手に)
解く	tógu	解ける (氷が)	togéru (問題を)
取る	tóru	取れる (魚が)	toréru (魚を)
脱ぐ	núŋu	脱げる (靴が)	nuŋéru (靴を)
III ₅	IV ₁		
砕く	kuďágu	砕ける (岩が)	kuďagéru (岩を)
こする	kosúru	こすれる (膝が)	kosuréru (床を)
ちぎる	ciŋíru	ちぎれる (手が)	ciŋiréru (紙を)
ねじる	nežírú	ねじれる (棒が)	nežiréru (棒を)
ほどく	hoďógu	ほどける (紐が)	hoďogéru (紐を)
休む	'jasúmu	休める (体を)	'jasuméru (ゆっくり)
破る	'jabúru	破れる (布が)	'jaburéru (布を)

別表7-1 名詞のアクセント資料

1-1	エ	柄	0	0	1-2	ク	苦(にする)	1	0
1-1	オ	緒	0	0	1-2	ゴ	五	1	2
1-1	カ	蚊	0	0	1-2	ゴ	暮	1	1
1-1	カ	香	x*	x**	1-2	ジ	四	0	0
		(※ **ka'oriが普通)			1-2	ジ	字	1	1
1-1	コ	子	0	0	1-2	ジ	痔	0	0
1-1	セ	瀬	m1	x	1-2	ジ	地(が出る)	0	0
1-1	チ	血	0	0	1-2	チャ	茶	1	0
1-1	ト	戸	0	0	1-2	デ	出(が悪い)	0	3
1-1	ホ	帆	1, 2	1, 2	1-2	ニ	二	1	2
1-2	ウ	鶴	m1, 2	m1	1-2	ブ	分(がよい)	0	1
1-2	ナ	名	0	0	1-2	マ	間(か抜ける)	0	1
1-2	ハ	菜	0	0	1-2	ミ	実	0	0
1-2	ヒ	日	0	0	1-2	ミ	身	0	0
1-2	モ	藻	0	1	2-1	アク	灰汁	0	0(灰の意味)
1-2	ヤ	矢	1, 2	1	2-1	アネ	姉	0	0
1-3	エ	絵	1, 2	2	2-1	アメ	飴	0	0
1-3	オ	尾	1*	1**	2-1	アリ	蟻	0	0
		(※ **'oopa1が普通)			2-1	イカ	烏賊	0	0
1-3	キ	木	1, 2	2	2-1	ウオ	魚	x	x**
1-3	コ	粉	1, 2	m1			{**古くは'i'o0と。cf.'oo'i'o1は鮭の意}		
1-3	ス	酢	1, 2	2	2-1	ウシ	牛	0	0
1-3	タ	田	2(tan6o1)	2	2-1	ウメ	梅	0	0
1-3	テ	手	1, 2	2	2-1	エダ	枝	0	0
1-3	ト	砥	x	1**	2-1	エビ	海老	0	0
		(※toolakeru2(砥をかける)「研ぐ」の意で使用)			2-1	オイ	甥	0	0
1-3	ナ	菜	1	1	2-1	オカ	丘	0	0
1-3	ニ	荷(か重い)	2	2	2-1	カイ	効(かがない)	1*	0(ke)
1-3	ネ	根	1, 2	2			{*keといえ0}		
1-3	ノ	野	1	1	2-1	カオ	顔	0	0
1-3	ヒ	火	1, 2	2	2-1	カキ	柿	0	0
1-3	ヘ	屁	1, 2	2	2-1	カゴ	籠	0	0
1-3	ホ	穂	1, 2	1	2-1	カサ	瘡	0	0
1-3	ミ	箕	m2?	m1	2-1	カゼ	風	0	0
1-3	メ	芽	1, 2	2	2-1	カナ	仮名	0	0
1-3	メ	目	1	1	2-1	カニ	蟹	0	0
1-3	ユ	湯	1	m1**	2-1	カネ	金	0	0
		(**'o'ju3,風呂の意味でも)			2-1	カネ	鐘	0	0
1-3	ヨ	夜	1	1	2-1	カブ	株	0	0
1-3	ワ	輪	1, 2	1, 2	2-1	カベ	壁	0	0
1-x	ケ	毛	1	2	2-1	カマ	釜	0	0
1-x	ス	巢	1, 2	1	2-1	カヤ	蚊帳	0	0
1-x	セ	背	1, 2	2	2-1	カユ	粥	0('ogaju)	0('ogaju)
1-x	ハ	歯	1	1, 2	2-1	キジ	雉	0	0
1-x	ハ	刃	1, 2	1	2-1	キズ	傷	0	0
1-x	ヨ	世	1	m1	2-1	キミ	君	1	m1
1-2	イ	胃	0	0	2-1	キリ	桐	0	0
1-2	ガ	蛾	0	0	2-1	キリ	霧	0	0
1-2	キ	氣(か狂う)	0	0	2-1	クギ	釘	0	0
1-2	ク	九	1	2	2-1	クチ	口	0	0

2-1	クニ	国	0	0	2-1	ニシ	西	0	0
2-1	クビ	首	0	0	2-1	ニワ	庭	0	0
2-1	クレ	暮れ	0	0	2-1	ヌノ	布	0	3
2-1	クワ	楸	2?, 3?	2	2-1	ノキ	軒	0	0
2-1	コシ	腰	0	0	2-1	ハイ	灰	0*	0**
2-1	コテ	籠手	0	0					{*古くはhcか。 **'agu0と言った}
2-1	コマ	駒	0	2, 3	2-1	ハエ	蠅	0*	0
2-1	コモ	蚕	0	3					{*古くは「灰」と同形のhcかhenoko0}
2-1	コレ	これ	0	0	2-1	ハコ	箱	0	0
2-1	ゴマ	胡麻	0	0	2-1	ハシ	端	0	0
2-1	サキ	先	0	0	2-1	ハス	蓮	0	0
2-1	サギ	鶯	0	0	2-1	ハタ	傍(の人)	0	0
2-1	サケ	酒	0	0	2-1	ハチ	蜂	0	0
2-1	ササ	笹	0	0	2-1	ハナ	鼻	0	0
2-1	サト	里	m2	0	2-1	ハネ	羽	0	0
2-1	サバ	鯖	0	0	2-1	ヒエ	稗	m2	3
2-1	サメ	鮫	0	0	2-1	ヒゲ	髭	0	0
2-1	サラ	皿	0	0	2-1	ヒザ	膝	0	0
2-1	シナ	品	0	m3(sinamono3)	2-1	ヒシ	菱	0	0
2-1	シバ	芝	2	2	2-1	ヒマ	暇	0	0
2-1	シロ	城	0	0	2-1	ヒモ	紐	0	0
2-1	シワ	皺	2	3	2-1	ヒレ	鱗	2	0
2-1	スエ	末	0	0	2-1	フエ	笛	0	0
2-1	スキ	楸	m2	0	2-1	フカ	蟻	m2	2
2-1	スギ	杉	0	0	2-1	フジ	藤	0	0
2-1	スズ	鈴	1	1	2-1	フタ	蓋	0	0
2-1	スソ	裾	0	0	2-1	フダ	札	0	0
2-1	ソコ	底	0	0	2-1	フデ	筆	0	0
2-1	ソデ	袖	0	0	2-1	ヘソ	臍	0	0
2-1	ソレ	それ	0	0	2-1	ホシ	星	0	0
2-1	タカ	鷹	0	0	2-1	マイ	舞い	0	0
2-1	タキ	滝	0	0	2-1	マト	的	2	3
2-1	タケ	竹	0	0	2-1	マネ	真似	0	0
2-1	タツ	龍	0	0	2-1	ミギ	右	0	0
2-1	タデ	蓼	m2	3, 2	2-1	ミズ	水	0	0
2-1	タナ	棚	0	0	2-1	ミチ	道	0	0
2-1	ダレ	誰	2	0	2-1	ミネ	峰	0	3
2-1	チリ	塵	m0(gomi3)	0	2-1	ミヤ	宮	0	0
2-1	ツツ	筒	1	1	2-1	ムシ	虫	0	0
2-1	ツボ	壺	0	3	2-1	ムネ	棟	0	3
2-1	ツメ	爪	0	0	2-1	モミ	初	0	0
2-1	ツヤ	艶	2	3	2-1	モモ	桃	0	0
2-1	ツリ	釣り(魚;銭)	0	0	2-1	モリ	森	0	0
2-1	トコ	床	0	0	2-1	ヤブ	藪	0	0
2-1	トモ	友	1	1	2-1	ヤリ	槍	0	0
2-1	トラ	虎	0	0	2-1	ユカ	床	2	3
2-1	トリ	鳥	0	0	2-1	ユリ	百合	0	0
2-1	ドコ	どこ	0	0	2-1	ヨイ	宵	0	m0
2-1	ドコ	どこ	0	0	2-1	ヨコ	横	0	0
2-1	ドコ	どこ	0	0	2-1	ヨメ	嫁	0	0

2-2	アザ	痣	0	0	2-2	ユキ	雪	0	0
2-2	アジ	鯨	2	3	2-2	ヨソ	余所	2	2
2-2	アレ	あれ	0	0	2-2	ワザ	技	0	0
2-2	イガ	栗毬	0	0	2-3	アカ	垢	2	3, 2
2-2	イシ	石	0	0	2-3	アサ	麻	2	2
2-2	イワ	岩	0	0	2-3	アシ	足	3	3
2-2	ウタ	歌	0	0	2-3	アス	明日	m3*	1**
2-2	オト	音	0	0			(* **asita ₄ が普通)		
2-2	カキ	垣	1*	0**	2-3	アナ	穴	2	3
	{* **igenagi}				2-3	アミ	網	2	3
2-2	カタ	型	0	0	2-3	アヤ	綾	m2	m2, 3
2-2	カタ	方(その～)	0	0	2-3	アワ	泡	2	3, 2
2-2	カド	門	2	2	2-3	イエ	家	2	3
2-2	カミ	紙	0	0	2-3	イケ	池	2	3, 2
2-2	カラ	殻	0	0	2-3	イヌ	犬	3, 2	3, 2
2-2	カワ	川	0	0	2-3	イモ	芋	2	3
2-2	キタ	北	0	0	2-3	イロ	色	2	3
2-2	キバ	牙	0	0	2-3	ウジ	蛆	3, 2	3, 2
2-2	クイ	杭	0	1	2-3	ウデ	腕	2	3, 2
2-2	クシ	串	0	0	2-3	ウネ	畝	2	3, 2
2-2	クラ	鞍	2	3	2-3	ウマ	馬	2	3, 2
2-2	コロ	頃(～をみて; その～)	2	0	2-3	ウミ	膿	2	3, 2
2-2	シモ	下	0	0	2-3	ウラ	裏	0	3
2-2	セミ	蟬	0	0	2-3	オニ	鬼	3	3, 2
2-2	タビ	度(その～に)	0	0	2-3	オヤ	親	2, 3?	3, 2
2-2	タビ	旅	0	3, 2	2-3	カイ	貝	1	1**
2-2	タメ	為(になる)	2	2?			{**kと合わない。		
2-2	ツカ	塚	2	3			ただしsizimike(×-g-, -ŋ-)「しじみ貝」}		
2-2	ツギ	次	2	3	2-3	カギ	鍵	3	3
2-2	ツク	蔦	0	3	2-3	カチ	勝ち	2	3
2-2	ツマ	妻	1	1	2-3	カミ	神	1	m1 (kami sama)
2-2	ツマ	棲	x	0	2-3	カミ	髪	3	3, 2
2-2	ツル	弦	0	0	2-3	カメ	瓶	2	3, 2
2-2	ナシ	梨	0	0	2-3	カワ	皮	2, 3	3, 2
2-2	ナツ	夏	0	0	2-3	キク	菊	3	3, 2
2-2	ニジ	虹	1	1	2-3	キシ	岸	3	0
2-2	ハシ	橋	0	0	2-3	キモ	肝	2	2, 3?
2-2	ハタ	旗	0	0	2-3	キワ	際(今の)	2	m2
2-2	ハタ	機	0	0	2-3	クキ	莖	3	3, 2
2-2	ヒジ	肘	0	0	2-3	クサ	草	2	3, 2
2-2	ヒト	人	0	3	2-3	クシ	櫛	3, 2	3, 2
2-2	ヒメ	姫	1	m2	2-3	クソ	糞	2	3, 2
2-2	ヒル	昼	0	0	2-3	クツ	靴	3	3, 2
2-2	フミ	文	1	m1	2-3	クマ	熊	3	3, 2
2-2	フユ	冬	0	0	2-3	クミ	組	3, 2	3, 2
2-2	マチ	町	0	0	2-3	クモ	雲	3	3, 2
2-2	ムネ	胸	0	0	2-3	クラ	倉	3	3, 2
2-2	ムラ	村	0	0	2-3	クリ	栗	3	3, 2
2-2	ヤエ	八重	2	2	2-3	クワ	桑	2	3, 2
2-2	ユエ	故(に; それ～)	m2	x	2-3	コイ	恋	1	1

2-3	コケ	苔	2	3, 2	2-3	バチ	撥(三味線)	2	3, 2
2-3	コト	事	3	3, 2	2-3	ヒビ	ひび(皮;器)	2	3, 2
2-3	コメ	米	2	3, 2	2-3	フサ	房	2	3, 2
2-3	サオ	竿	2, 3	3, 2	2-3	フシ	節	2	3, 2
2-3	サカ	坂	2, 3	3, 2	2-3	フチ	縁	3	3, 2
2-3	サビ	錆	3, 2	3, 2	2-3	ホリ	堀	2	3, 2
2-3	シオ	塩	2	3, 2	2-3	マク	幕	3	3, 2
2-3	シオ	潮	2	m2?	2-3	マゴ	孫	2	2
2-3	シタ	舌	2	3, 2	2-3	マス	楯	3, 2?	3, 2
2-3	シマ	島	2	3, 2	2-3	マタ	股	2	3, 2
2-3	シメ	標	2	m2?	2-3	マメ	豆	2	3, 2
2-3	シモ	霜	2	3, 2	2-3	マリ	鞠	1	1
2-3	シリ	尻	3, 2	3, 2	2-3	ミセ	店	2, 3, 2	3, 2
2-3	スシ	蛭脰	3, 2	3, 2	2-3	ミミ	耳	3	3, 2
2-3	スネ	脛	2	3, 2	2-3	ムロ	室	2	3, 2
2-3	スミ	炭	3, 2	3, 2	2-3	メイ	煙	0	1
2-3	スミ	墨	3, 2	3, 2	2-3	モノ	物	3	3, 2
2-3	セリ	芹	3, 2	3, 2	2-3	ヤニ	脂(松, 煙, 目)	3	3, 2
2-3	タイ	鯛	1	1	2-3	ヤマ	山	2, 3	3, 2
2-3	タケ	丈	2	3, 2	2-3	ヤミ	闇	3	3, 2
2-3	タチ	太刀	1	2	2-3	ユビ	指	3	3, 2
2-3	タニ	谷	3, 2	3, 2	2-3	ユミ	弓	3	3, 2
2-3	タマ	玉	2	3, 2	2-3	ユメ	夢	2	3, 2
2-3	ツカ	柄	2	3, 2	2-3	ウキ	脳	3	3, 2
2-3	ツキ	月	3, 2	3, 2	2-3	ワキ	腋	3	3, 2
2-3	ツチ	土	2	3, 2	2-3	ウク	梓	3	3, 2
2-3	ツナ	綱	2, 3	3, 2	2-3	ワタ	綿	2	3, 2
2-3	ツノ	角	2, 3	3, 2	2-3	ワニ	鱷	3, 2	3, 2
2-3	ツラ	面	2, 0	3, 2	2-4	アト	跡	2	2
2-3	デシ	弟子	0	3, 2	2-4	アマ	尼	2	2
2-3	トウ	塔	1	1	2-4	アワ	粟	2	m2, 3
2-3	トキ	時	1, 3	1	2-4	イキ	息	1	1
2-3	トシ	年	2	3, 2	2-4	イタ	板	2, 3	2, 3
2-3	ドク	毒	3?, 2?	0	2-4	イチ	市	1	1
2-3	ナミ	波	3	3, 2	2-4	イツ	いつ	3	0
2-3	ナワ	縄	2	3, 2	2-4	イト	糸	2	2
2-3	ヌカ	糠	2	3, 2	2-4	イネ	稲	2	2
2-3	ノシ	熨斗	2	3, 2	2-4	ウス	臼	1	1
2-3	ノチ	後(に, の)	x	m2('adoode2)	2-4	ウミ	海	1	1
2-3	ノミ	蚤	3	3, 2	2-4	ウリ	瓜	1	1
2-3	ノリ	海苔	3	3, 2	2-4	オビ	帯	1	1
2-3	ハカ	墓	2, 3	3, 2	2-4	カイ	權	1	1(kai)
2-3	ハギ	萩	1	1	2-4	カサ	傘	2	2
2-3	ハケ	刷毛	2	3, 2	2-4	カス	槽	2	2
2-3	ハジ	恥	2	2, 3?	2-4	カズ	数	1	1
2-3	ハチ	鉢	3, 2	3, 2	2-4	カタ	肩	2	2, 3
2-3	ハナ	花	2	3, 2	2-4	カド	角	2	2
2-3	ハマ	浜	2, 3	3, 2	2-4	カマ	鎌	2	2
2-3	ハラ	腹	2, 3	3, 2	2-4	カミ	上	1	1
2-3	ハレ	晴れ	2	2	2-4	キヌ	絹	1	1

2-4	キネ	杵	2	2	2-5	アセ	汗	2	2
2-4	キョウ	今日	1, 3	1, 3	2-5	アニ	兄	1	1
2-4	キリ	錐	1	1	2-5	アブ	蛇	1	1
2-4	クズ	屑	1	1(gomi2)	2-5	アメ	雨	2	2
2-4	クダ	管	2	2, 3	2-5	アユ	鮎	2	1
2-4	ケサ	今朝	2	2	2-5	イド	井戸	2	2
2-4	ケタ	桁	2	2	2-5	オケ	桶	2	2, 3
2-4	ゲタ	下駄	2	2, 3	2-5	カキ	牡蠣	1	1
2-4	サヤ	鞘	2	2, 3	2-5	カゲ	蔭	1	1
2-4	シル	汁	1	1	2-5	キビ	黍	1	1
2-4	スジ	筋	1	1	2-5	クモ	蜘蛛	2	2
2-4	スミ	隅	1	1	2-5	クロ	黒(色;犬;有罪) 2	2	2
2-4	ゼニ	銭	1	1	2-5	コイ	鯉	1	1
2-4	ソト	外	2	2	2-5	コエ	声	1	1
2-4	ソバ	側	2	2	2-5	コト	琴	2	2
2-4	ソラ	空	2	2, 3	2-5	サケ	蛙	2	2**
2-4	タネ	種	2	2, 3	(**古は'oo'i'ol. 'agi'azi3とは塩蛙(薄味). cf. sjonbiki「塩引き」(濃い塩味))				
2-4	チチ	乳	1	1	2-5	サル	猿	1	1
2-4	チチ	父	2	m2	2-5	シロ	白(色;犬;無罪) 2	2	2
2-4	ツエ	杖	3	3	2-5	タテ	縦	2	2
2-4	ツチ	槌	1	1	2-5	タビ	足袋	1	1
2-4	ツバ	鍔	2	m2	2-5	ツネ	常	2	2, 3
2-4	ツブ	粒	1	1	2-5	ツユ	露	2	2
2-4	ツミ	罪	1	1	2-5	ツル	鶴	1	1
2-4	トガ	谷	m1	x	2-5	ナベ	鍋	2	2
2-4	ナエ	苗	2	2(ne2とも)	2-5	ハモ	鱧	m1	m1
2-4	ナカ	中	2	2	2-5	ハル	春	1	1
2-4	ナニ	何	0	0	2-5	ヒル	姪	1	1**
2-4	ヌシ	主	1	1	(**hero1が普通)				
2-4	ノミ	鹽	1	1	2-5	フナ	鯰	2	2
2-4	ハシ	筭	1	1	2-5	ヘビ	蛇	1	1
2-4	ハダ	肌	2	2	2-5	マエ	前	1(me)	1(me)
2-4	ハリ	針	1	1	2-5	マド	窓	2	2
2-4	フネ	舟	2	2	2-5	マユ	眉	m1*	m1**
2-4	ヘラ	鏡	2	3, 2	(*ma'ju2が普通, konogeは古。**konogeが普通)				
2-4	ベニ	紅	1	1	2-5	マユ	藪	1	1
2-4	ホカ	他	2	2	2-5	ムコ	婿	2	2
2-4	マツ	松	1	1	2-5	モモ	腿	2	2
2-4	ミノ	味噌	2	2, 3	2-x	イマ	今	2	2
2-4	ミノ	蓑	m1, 2	2	2-x	ウエ	上	0	0
2-4	ムギ	麦	1	1	2-x	ウチ	うち	0	m0**
2-4	ヤド	宿	2	2	(**i'e3, 2, 'je1が普通)				
2-4	ワナ	罝	2, 3	3, 2	2-x	オキ	沖	0	0
2-4	ワラ	藁	2	2, 3	2-x	オク	奥	1	1
2-4	ワレ	我	m1	1	2-x	カメ	亀	2	2
2-5	アイ	藍	1	1	2-x	カモ	鴨	2	2
2-5	アオ	青(色;馬) 2;1	2;1	2;1	2-x	ココ	ここ	2	2
2-5	アカ	赤(色;犬;左) 2	2	2	2-x	サキ	先(の大臣) m0	m0	m0
2-5	アキ	秋	1	1	2-x	シタ	下	0	0
2-5	アサ	朝	2	2					

2-x	ソコ	そこ	2	2	2-z	セン	千	1	1
2-x	タコ	蛸	2	2	2-z	ソバ	蕎麦	3	2
2-x	トモ	供	m1	m1	2-z	ゾウ	象	1	1
2-x	ハト	鳩	2	2	2-z	タコ	帆	2	2
2-x	ホド	程	0	0	2-z	タダ	只(で)	1	1
2-x	モト	許(親の)	0	3	2-z	タバ	束	2	2
2-x	モト	元	0	3	2-z	タラ	鱈	2	2
2-x	モト	本	0	3	2-z	タル	樽	2	3
2-x	ヨル	夜	1	1	2-z	ダニ	ダニ	3	3
2-z	アゴ	顎	0	0	2-z	ダン	段	1	1
2-z	アジ	味	0	0	2-z	チエ	知恵	2	2
2-z	アダ	仇(を討つ) m0		m2	2-z	ツル	蔓	0	0
2-z	アラ	粗(を探す) 0*		2	2-z	テツ	鉄	1	1
		(*魚のはdongpara0)			2-z	テラ	寺	0	0
2-z	イゴ	以後	m2	2	2-z	テン	天	1	1
2-z	イス	椅子	1	1	2-z	デメ	出目	1	2
2-z	イチ	一	3	3	2-z	ドシヤ	土砂	2	2
2-z	イボ	疣	2	2	2-z	ドテ	土手	0	0
2-z	ウソ	嘘	2	2	2-z	ドブ	溝	0	0
2-z	ウド	うど	0	0	2-z	ドレ	どれ	0	0
2-z	ウン	運	1	1	2-z	ナオ	なお	m1?, 0?	m1
2-z	カコ	過去	1	m1	2-z	ナゾ	謎	0	0
2-z	カジ	火事	1	1	2-z	ナマ	生	2	2
2-z	カジ	朧	1	1	2-z	ナラ	奈良	2	2
2-z	カラ	空(だ)	0	0	2-z	ニク	肉	2	3
2-z	カン	勘	0	3	2-z	ニラ	萘	2	2
2-z	カン	缶	1	1	2-z	ニワ	二羽	2	2
2-z	キザ	きざ(だ)	2	2	2-z	ヌマ	沼	3	3
2-z	キボ	規模	2	2	2-z	ネギ	葱	1	1
2-z	キュウ	九	1	1	2-z	ネコ	猫	2	2
2-z	キン	金	1	1	2-z	ネツ	熱	0	0
2-z	クセ	癖	0	0	2-z	ノド	喉	2	2
2-z	コブ	瘤	0	0	2-z	ノリ	糊	0	3
2-z	コマ	独楽	2	2	2-z	ハゲ	禿げ	1	1
2-z	サク	柵	3	0	2-z	ハチ	八	3	3
2-z	サゾ	さぞ(〜だろう) 0		x	2-z	バカ	馬鹿	2	2
2-z	サン	三	1	1	2-z	バシヤ	馬車	2	2
2-z	シカ	鹿	0	0	2-z	バチ	罰	0	2
2-z	シソ	紫蘇	0	0	2-z	バン	晩	0	0
2-z	シチ	七	2	3	2-z	バン	番	1	1
2-z	シマ	縞	0	2	2-z	バン	バン	1	1
2-z	シャコ	車庫	1	1(-ko)	2-z	ヒゲ	ひだ	0	3
2-z	シャモ	軍鶏	1	1	2-z	ヒナ	雛	2	2
2-z	ジコ	事故	2	2	2-z	ヒヤク	百	3	3
2-z	ジュウ	十	1	3	2-z	ヒラ	平(社員)	2	3
2-z	スナ	砂	2	3	2-z	ヒラ	びら(をまく)	2	2
2-z	スリ	スリ	1	1	2-z	ヒワ	枇杷	2	2
2-z	ズガ	図画	2	2	2-z	ビン	瓶	1	1
2-z	セキ	咳	2	3	2-z	フク	服	3	3
2-z	セキ	席	0	1	2-z	フロ	風呂	2	2

2-2	ブタ	豚	2	2	3-1	オット	夫	0	0
2-2	ブナ	ぶな(木)	0	0	3-1	オドリ	踊り	0	0
2-2	ブリ	鱒	0	1	3-1	オノレ	己	m0	x
2-2	ヘイ	塀	0	0	3-1	オワリ	終り	0	0
2-2	ヘン	変(に)	1	1	3-1	カガリ	篝	m0	x
2-2	ホネ	骨	3	2	3-1	カザリ	飾り	0	0
2-2	ホボ	ほぼ	1	m1	3-1	カシミ	霞	0	0
2-2	ホリヨ	捕虜	2	m1	3-1	カタチ	形	0	0
2-2	ホン	本	1	1	3-1	カツオ	鯉	0	0
2-2	ボウ	棒	0	0	3-1	カツラ	桂	1	m1
2-2	ボヤ	小火	2	2	3-1	カバネ	骸	m0	x
2-2	ボロ	ぼろ(を出す)	2	m1	3-1	カブラ	蕪	0	0
2-2	ボン	盆(器)	1?*	0	3-1	カマド	竈	0	0
		(*'obonが普通)			3-1	カワラ	河原	0	0
2-2	ボン	盆(行事)	1	3	3-1	キモノ	着物	2	2
2-2	マス	鱒	0	0	3-1	クサリ	鎖	0	3
2-2	マダ	まだ(だ)	1	1	3-1	クツワ	轡	0	0
2-2	マン	万	1	1	3-1	クライ	位	0	0
2-2	ミゾ	溝	0	2	3-1	クルマ	車	0	0
2-2	ミツ	蜜	1	1	3-1	ケムリ	煙	0	0
2-2	ムチャ	無茶	2	2	3-1	コウシ	仔牛	0	0
2-2	モン	もし	1	1	3-1	コウジ	麴	0	0
2-2	モズ	百舌(鳥)	1	1	3-1	コオリ	氷	0	0
2-2	モチ	餅	0	0	3-1	コトシ	今年	0	0
2-2	モン	門	1	1	3-1	コトリ	小鳥	0	0
2-2	ヤギ	山羊	1	1	3-1	コドモ	子供	0	0
2-2	ヤケ	自棄	1	2	3-1	コヤマ	小山	0, 2	0, 2
2-2	ヤセ	痩せ	1	1	3-1	コヨイ	今宵	4	0
2-2	ヤネ	屋根	2	2	3-1	コロモ	衣	0	0
2-2	ヤヤ	やや	2	2	3-1	サカナ	魚	0	0
2-2	ユゲ	湯気	2	2	3-1	サカリ	盛り	0	0
2-2	ヨイ	酔い	2('jo'i)	2('jo'i)	3-1	サクラ	桜	0	0
2-2	ヨウ	用	0	m0**	3-1	サトリ	悟り	0	0
		{**joozi0が普通}			3-1	サワリ	障り	4	x
2-2	リカ	理科	2	2	3-1	シュウト	舅	0	0
2-2	ロウ	蠟	1	3	3-1	ショウジ	障子	0	0
2-2	ロク	六	3	2	3-1	シルシ	印	0	0
2-2	ロバ	驢馬	2	2	3-1	シワザ	仕業	0	0
2-2	ワカ	和歌	2	2	3-1	スズキ	鱧	0	m0?
3-1	アオイ	葵	0	0	3-1	スモウ	相撲	0	0
3-1	アタイ	値	0	0**	3-1	タキギ	薪	0	0
		{**nanbo'ate0が普通}			3-1	タタミ	畳	0	0
3-1	アラレ	霰	0	4	3-1	チマキ	粽	0	0**
3-1	イカダ	筏	0	0			{**sasamagi0が普通}		
3-1	イカリ	錨	0	4	3-1	ツイデ	序で	0	0
3-1	イナカ	田舎	0	0	3-1	ツカイ	使い(をやる)	0	0
3-1	イワオ	巖	m0	m0	3-1	ツクエ	机	0	0
3-1	イワシ	鰯	0	0	3-1	トキワ	常盤	m0	m0
3-1	ウガイ	嗽い	0	0	3-1	トナリ	隣	0	0
3-1	ウルシ	漆	0	0	3-1	トマリ	泊り	0	0

3-1	ナマエ	名前	0	0	3-2	ムスメ	娘	3	3
3-1	ニカワ	膠	0	0	3-2	ムッツ	六つ	4	4(副は0)
3-1	ネゴト	寝言	0	0	3-2	ヤッツ	八つ	4	4(副は0)
3-1	ノゾミ	望み	0	0	3-2	ユウベ	夕べ	0	4('jon5e4副は0)
3-1	ノボリ	昇り	0	0	3-2	ヨッツ	四つ	4	4(副は0)
3-1	ハジメ	初め	0	0	3-4	アシタ	明日	4	4(副は0)
3-1	ハチス	蓮	x	x	3-4	アタマ	頭	4	4
3-1	ハツカ	二十日	0	4(副は0)	3-4	アマリ	余り	4	4
3-1	ハナヂ	鼻血	0	0	3-4	アウセ	袷	4	4
3-1	ハニワ	埴輪	1	3	3-4	イクサ	軍	4	4
3-1	ヒサシ	庇	0	0	3-4	イタチ	鼯	4	3
3-1	ヒタイ	額	0	0	3-4	イタミ	痛み	3	3
3-1	ヒツギ	棺	0	0	3-4	イツカ	五日	4	4(副は0)
3-1	ヒツジ	羊	0	0	3-4	イトマ	暇	m0	x
3-1	ヒデリ	日照り	0	0	3-4	イノリ	祈り	2	x**
3-1	ヒヨリ	日和	0	0			{**o inori0が普通}		
3-1	フツカ	二日	0	4(副は0)	3-4	ウシオ	潮	m2	x
3-1	フノリ	布海苔	0	0	3-4	ウズラ	鶉	0	1
3-1	ホコリ	埃	0	0	3-4	ウチワ	団扇	4	4
3-1	ミカタ	味方	0	2	3-4	ウナジ	項	3	m0**
3-1	ミカド	帝	m0	m0			{**kubiが普通}		
3-1	ミギワ	汀	m0	m0	3-4	ウマヤ	厩	4	4
3-1	ミサオ	操	0	m2	3-4	ウラム	根み	3	3
3-1	ミゾレ	霰	0	3	3-4	オウギ	扇	3	3
3-1	ミッカ	三日	0	4(副は0)	3-4	オンレ	恐れ	4	3
3-1	ミナト	港	0	0	3-4	オトコ	男	4	4
3-1	ミヤコ	都	0	0	3-4	オモイ	思い	2	2
3-1	ミヤマ	深山	m0	m0	3-4	オモテ	表	3	3
3-1	ムイカ	六日	0	4(副は0)	3-4	カガミ	鏡	4, 3	4
3-1	ムカシ	昔	0	0	3-4	カシラ	頭	4	3
3-1	ムスコ	息子	0	0	3-4	カタキ	敵	4	4
3-1	ヤグラ	檜	0	0	3-4	カタナ	刀	4	4
3-1	ヤジリ	鎌	0	m0	3-4	カタラ	宝	4	3
3-1	ヤッコ	奴	0	0**	3-4	カンナ	匏	4	4
		{**「乞食」の意}			3-4	キノウ	昨日	0	4(kinno副は0)
3-1	ヤナギ	柳	0	0	3-4	コトバ	言葉	4	3
3-1	ヤモメ	寡婦	0	m2	3-4	コヨミ	暦	4	3
3-1	ヨウカ	八日	0	4(副は0)	3-4	サカイ	境	4	4(sage)
3-1	ヨダレ	涎	0	3	3-4	サダメ	定め	3	3
3-1	ヨッカ	四日	0	4(副は0)	3-4	シラガ	白髪	4	3
3-1	ヨロイ	鎧	0	0	3-4	スズリ	覗	4	4
3-1	ワタリ	渡り	0	0	3-4	スマイ	住まい	2	2**
3-2	アズキ	小豆	0	0			{*sume-suru「住んでいる」で普通に用いる}		
3-2	オンナ	女	3	3('onago0)	3-4	スマカ	住み処	2	2
3-2	ケヌキ	毛抜き	0	0	3-4	タグイ	類	2	2
3-2	ヒガシ	東	0	0	3-4	タスケ	助け	4	3
3-2	フタエ	二重	3	3	3-4	タニマ	谷間	4	4
3-2	フタツ	二つ	4	4(hutaqcu副は0)	3-4	タノミ	頼み	4	4
3-2	フタリ	二人	3	3(副も)	3-4	タメシ	例	4	4
3-2	ミッツ	三つ	4	4(副は0)	3-4	タモト	袂	3	2

3-4	タワラ	俵	4	3	3-5	ヒトエ	単衣	3	3
3-4	ツツミ	包み	4	3	3-5	ヒバシ	火箸	2	2
3-4	ツツミ	鼓	4	0	3-5	ホウキ	帚	1	1
3-4	ツトメ	勤め	4	4	3-5	マクラ	枕	1	1
3-4	ツバキ	唾液	4	3(cuβage)	3-5	マナコ	眼	2(managu)	2(managu)
3-4	ツルギ	剣	4	0	3-5	モミジ	紅葉	2	2
3-4	トウゲ	峠	4	4	3-5	ワサビ	山葵	2	2
3-4	トリコ	膚	4	x	3-6	アヤメ	菖蒲	3	2**
3-4	ナガレ	流れ	2	2		{**sjoβu1が普通}			
3-4	ナギサ	渚	m0	m1	3-6	イズレ	何れ	0	m0**
3-4	ナゲキ	嘆き	0	m0		{**doqcis4など}			
3-4	ナノカ	七日	4	4	3-6	ウサギ	兎	2	2
3-4	ナマズ	鯰	4	3	3-6	ウナギ	鰻	2	2
3-4	ニオイ	匂い	4	3	3-6	オトナ	大人	2	2
3-4	ヌイメ	縫目	3	4	3-6	カエル	蛙	2	2**
3-4	ネガイ	願い	4	4		{**biqki3が古。これは「財布」の意でも}			
3-4	ハカマ	袴	4	3	3-6	カモメ	鷗	2	2
3-4	ハサミ	鋏	4	4	3-6	キツネ	狐	1	1
3-4	ハヤシ	林	4	4	3-6	シラミ	虱	2	2
3-4	ヒビキ	響き	4	3	3-6	ススキ	すすき	2	2
3-4	フカリ	光	4	3	3-6	スズメ	雀	2	2
3-4	フクロ	袋	4	3	3-6	スモモ	李	2	2
3-4	フスマ	襖	0	0**	3-6	セナカ	背中	2	2
	{**karakami3が普通}				3-6	タカサ	高さ	2	2
3-4	ホトケ	仏	4	3	3-6	タンボ	田圃	1	1
3-4	ムシロ	蓆	4	3	3-6	ダンゴ	団子	4	3
3-4	ヤカラ	族	0	x	3-6	ツバメ	燕	2	2
3-4	ワカレ	別れ	4	3	3-6	ナガサ	長さ	2	2
3-5	アサヒ	朝日	2	2	3-6	ネズミ	鼠	2	2
3-5	アブラ	油	1	1	3-6	ハダカ	裸	2	2
3-5	アルジ	主人	2	m2	3-6	ハダシ	裸足	2	2
3-5	アワビ	鮑	2	2	3-6	ヒダリ	左	2	2
3-5	アワレ	哀れ	2	2	3-6	ヒバリ	雲雀	2	2
3-5	イツツ	五つ	2	2(副も2)	3-6	ヒロサ	広さ	2	0
3-5	イトコ	従兄	3	3	3-6	マコト	誠	2	x
3-5	イノチ	命	2	2	3-6	ミミズ	蚯蚓	2	2(memeži)
3-5	オヤコ	親子	2	2	3-6	ヨモギ	蓬	2	2
3-5	カグラ	神楽	1	1	3-7	イチゴ	苺	1	1
3-5	カレイ	鰈	2	2(kare)	3-7	ウシロ	後ろ	1	1
3-5	キュウリ	胡瓜	1	1	3-7	カイコ	蚕	1	1**
3-5	ココロ	心	3, 4	3		{**'ogohan2, 'ogosama2が普通}			
3-5	ザクロ	柘榴	1	1	3-7	カブト	兜	1	1
3-5	スガタ	姿	2	2	3-7	カラシ	辛子	2	2
3-5	スダレ	簾	3	4	3-7	クジラ	鯨	1	1
3-5	タスキ	褌	1	1	3-7	クスリ	薬	2	2
3-5	ナサケ	情け	4	3	3-7	タマゴ	卵	2	2
3-5	ナスビ	茄子	2	x(nasu1を使う)	3-7	タヨリ	便り	0	0
3-5	ナミダ	涙	1	1	3-7	トライ	盟	2	2(tare)
3-5	ニシキ	錦	1	1	3-7	チドリ	千鳥	2	2
3-5	ハシラ	柱	1	1	3-7	ツバキ	椿	2	2

3-7	ナマリ	鉛	2	2	3-7	サソリ	蠍	0	3
3-7	ハタケ	畑	2	2	3-7	スノコ	糞の子	2	2
3-7	ヒトツ	一つ	2	2	3-7	ソバヤ	蕎麦屋	4	3
3-7	ヒトリ	一人	2	2	3-7	トビラ	扉	0	1
3-7	ミドリ	緑	2	2	3-7	ノッポ	ノッポ	1	1
3-7	ヤマイ	病	2	m1**	3-7	マツチ	マツチ	1	1
(**'jamciというか?)									
3-x	アイダ	間	0	4	3-7	マツゲ	睫毛	4	3
3-x	アクビ	あくび	0	4	3-7	ミカン	蜜柑	2	2
3-x	アグラ	胡座	0	0	3-7	ミサキ	岬	0	2
3-x	アシダ	足駄	1	1	3-7	ミンナ	皆	4	3
3-x	アタリ	辺り	0	0	3-7	ムカデ	百足	0	4
3-x	アナタ	あなた	2	3('anda)	3-7	リング	林檎	0	3
3-x	アラシ	嵐	0	0	3-7	ワカメ	わかめ	2	2
3-x	イズミ	泉	2	2	4-2	アイカギ	合鍵	0	3
3-x	オキナ	翁	m1	x	4-2	アサガオ	朝顔	2	2
3-x	カシワ	柏	4	4	4-2	アシオト	足音	0	5, 4
3-x	カラス	鳥	2	2	4-2	アマザケ	甘酒	0	0(-sa-)
3-x	サザエ	栄螺	3	2	4-2	アミモノ	編み物	4	4
3-x	タヌキ	狸	2	2	4-2	アメフリ	雨降り	5	5
3-x	チカラ	力	0	0	4-2	イノシシ	猪	5	5
3-x	ツバサ	翼	2	2	4-2	ウグイス	鶯	2	3
3-x	ツルベ	釣瓶	0	0	4-2	ウズマキ	渦巻き	4	3
3-x	トカゲ	蜥蜴	4	2	4-2	ウメボシ	梅干し	0	0
3-x	トコロ	所	3, 4	4	4-2	オトウト	弟	4	5
3-x	ナカマ	仲間	4	4	4-2	オンガク	音楽	1	1
3-x	ナナメ	斜め	3	3	4-2	カネモチ	金持ち	0	0
3-x	ハタチ	二十歳	0	0	4-2	カマキリ	螳螂	0	3
3-x	フモト	麓	0	0	4-2	カミソリ	剃刀	0	0
3-x	ホタル	蛍	2	1	4-2	カミナリ	雷	0	5
3-x	ホノオ	炎	2	2	4-2	カラカサ	唐傘	5	4
3-x	ミコシ	御輿	2	2	4-2	ガラスド	ガラス戸	5	4
3-x	ミナミ	南	4	4	4-2	キネンビ	記念日	2	2
3-x	ムコウ	向こう	0	0	4-2	キョウダイ	兄弟	1*	1**
3-x	ヤシロ	社	0	0	(* **-de)				
3-x	ワラジ	草鞋	2	2	4-2	クスリヤ	薬屋	2	2
3-x	ワラビ	蕨	3	3, 4	4-2	クチブエ	口笛	0	0
3-2	アケビ	木通	4	0	4-2	コウモリ	蝙蝠	1	1
3-2	エクボ	えくぼ	1	1	4-2	コスモス	コスモス	4	3
3-2	エノキ	榎	2	2	4-2	コムギコ	小麦粉	5	4
3-2	カキネ	垣根	4	0	4-2	コンニャク	蒟蒻	5	4, 5
3-2	カワラ	瓦	2	2	4-2	サカミチ	坂道	3	3
3-2	クサビ	楔	2	3	4-2	サンガツ	三月	3	3
3-2	ケムシ	毛虫	0	0	4-2	ザブトン	座布団	3	3
3-2	ケモノ	獣	0	0	4-2	シイタケ	椎茸	1	1
3-2	コガネ	黄金	2	2	4-2	ショウガツ	正月	5	4
3-2	コズエ	梢	4	3	4-2	スリッパ	スリッパ	2	2
3-2	コグマ	木霊	0	0	4-2	センセイ	先生	3	3
3-2	コミチ	小道	0	0	4-2	センタク	洗濯	0	4
3-2	ゴボウ	牛蒡	2	0(gonbo)	4-2	クマネギ	玉葱	5	3
					4-2	テブクロ	手袋	2	2

4-2	トモダチ	友達	0	0
4-2	ドヨウビ	土曜日	3	3
4-2	ナウトビ	綱跳び	3	3
4-2	ニワトリ	鶏	0	0
4-2	ニンジン	人参	0	0
4-2	ハマグリ	蛤	3	3
4-2	ハミガキ	歯磨き	3	3
4-2	ハリガネ	針金	3	3
4-2	ヒッコシ	引っ越し	0	5
4-2	フクロウ	梟	1	1
4-2	マツタケ	松茸	3	1
4-2	ミギガワ	右側	0	0
4-2	ミツバチ	蜜蜂	1	1
4-2	ムラサキ	紫	2	2
4-2	モチツキ	餅搗き	0	0
4-2	モノオキ	物置き	5	4
4-2	ライゲツ	来月	1	1
4-2	ロウソク	蝋燭	5	5

別表 7-2 動詞のアクセント資料

2(1)-1 イル	居る	0	2(5)-1 ヌク	抜く	0
2(1)-1 キル	着る	0	2(5)-1 ヌル	塗る	0
2(1)-1 スル	する	0	2(5)-1 ノル	乗る	0
2(1)-1 ニル	似る	0	2(5)-1 ハク	履く	0
2(1)-1 ネル	寝る	0	2(5)-1 ハル	張る[貼]	0
2(1)-2 エル	得る	1	2(5)-1 ヒク	引く[弾, 挽]	0
2(1)-2 クル	来る	1	2(5)-1 フク	拭く	0
2(1)-2 デル	出る	1	2(5)-1 フク	葺く	0
2(1)-2 ヘル	経る	m1('eruという)	2(5)-1 フム	踏む	0
2(1)-2 ミル	見る	1	2(5)-1 フル	振る	0
2(1)-x イル	射る	1	2(5)-1 マウ	舞う	m1
2(1)-x イル	射る	m1	2(5)-1 マク	巻く	0
2(5)-1 アク	開く[明, 空]	0	2(5)-1 マス	増す	m1
2(5)-1 イウ	言う	0	2(5)-1 ムク	向く	0
2(5)-1 イヌ	往ぬ	x	2(5)-1 モム	揉む	0
2(5)-1 イル	入る	m0	2(5)-1 モル	盛る	0
2(5)-1 ウム	産む	1	2(5)-1 ヤク	焼く[妬]	0
2(5)-1 ウル	売る	0	2(5)-1 ヤム	止む	1
2(5)-1 オウ	追う	0	2(5)-1 ヤル	やる	0
2(5)-1 オク	置く	0	2(5)-1 ユウ	結う	m1
2(5)-1 オス	押す[推]	0	2(5)-1 ユク	行く	0
2(5)-1 オル	織る	1	2(5)-1 ヨブ	呼ぶ	0
2(5)-1 カウ	買う	0	2(5)-1 ヨル	寄る	0
2(5)-1 カク	欠く	m0	2(5)-1 ワク	沸く	0
2(5)-1 カグ	嗅ぐ	0	2(5)-1 ワル	割る	0
2(5)-1 カス	貸す	0	2(5)-2 アウ	合う	1
2(5)-1 カル	刈る	0	2(5)-2 アク	飽く	x('agiru2)
2(5)-1 キク	開く	0	2(5)-2 アム	編む	1
2(5)-1 クム	汲む	0	2(5)-2 アル	有る	1
2(5)-1 ケス	消す	0	2(5)-2 ウツ	打つ	1
2(5)-1 コス	越す	0	2(5)-2 ウム	膿む	1
2(5)-1 サク	咲く	0	2(5)-2 オル	折る	1
2(5)-1 サル	去る	m1	2(5)-2 カウ	飼う	1
2(5)-1 シク	敷く	0	2(5)-2 カク	書く[搖]	1
2(5)-1 シヌ	死ぬ	0	2(5)-2 カツ	勝つ	1
2(5)-1 シル	知る	0	2(5)-2 カム	噛む	1
2(5)-1 スウ	吸う	0	2(5)-2 キル	切る	1
2(5)-1 スク	空く[透, 鋤]	0	2(5)-2 クウ	食う	1
2(5)-1 ソウ	添う	m1	2(5)-2 クム	組む	1
2(5)-1 タク	焚く	0	2(5)-2 クル	繰る	x
2(5)-1 タス	足す	0	2(5)-2 コク	抜く	x
2(5)-1 チル	散る	0	2(5)-2 コグ	漕ぐ	1
2(5)-1 ツク	突く	0	2(5)-2 サク	裂く	1
2(5)-1 ツグ	継ぐ[次, 注]	0	2(5)-2 サス	刺す[差, 指]	1
2(5)-1 ツム	積む	0	2(5)-2 スム	住む	1
2(5)-1 ツム	摘む	0	2(5)-2 スム	澄む	1
2(5)-1 ツル	釣る[吊]	0	2(5)-2 スル	摩る[刷, 摺]	1
2(5)-1 トブ	飛ぶ	0	2(5)-2 ソル	剃る	1
2(5)-1 ナク	泣く	0	2(5)-2 タツ	断つ	1
2(5)-1 ナル	鳴る	0	2(5)-2 タツ	立つ[建]	1

2(5)-2 ツク	着く[付]	1	3(1)-1 ウエル	植える	0
2(5)-2 ツク	掘く	1	3(1)-1 ウメル	埋める	0
2(5)-2 テル	照る	1	3(1)-1 オエル	終える	0
2(5)-2 トク	解く[溶]	1	3(1)-1 カエル	替える[変換]	0
2(5)-2 トグ	研ぐ	1	3(1)-1 カケル	欠ける	0
2(5)-2 トル	取る[採, 撮, 執]	1	3(1)-1 カリル	借りる	0
2(5)-2 ナウ	絞う	1	3(1)-1 カレル	枯れる	0
2(5)-2 ナス	為す	1	3(1)-1 キエル	消える	0
2(5)-2 ナル	成る	1	3(1)-1 キセル	着せる	0
2(5)-2 ヌウ	縫う	1	3(1)-1 グレル	呉れる	m0(keruが普通)
2(5)-2 ヌグ	脱ぐ	1	3(1)-1 グレル	暮れる	0
2(5)-2 ネル	練る	1	3(1)-1 コエル	越える	0
2(5)-2 ノス	伸す	m1	3(1)-1 シミル	染みる	m0
2(5)-2 ノム	飲む	1	3(1)-1 ステル	捨てる	0
2(5)-2 ハウ	還う	1	3(1)-1 ソエル	添える(他;可)	0;2
2(5)-2 ハク	掃く	1	3(1)-1 ノメル	染める	0
2(5)-2 ハク	吐く	1	3(1)-1 ツキル	尽きる	2
2(5)-2 ハグ	剥ぐ	1	3(1)-1 ツケル	漬ける	0
2(5)-2 フク	吹く	1	3(1)-1 ヌケル	抜ける(自;可)	0;2
2(5)-2 フス	伏す	m0	3(1)-1 ヌレル	濡れる	0
2(5)-2 フル	降る	1	3(1)-1 ノセル	乗せる[載]	0
2(5)-2 ホス	干す	1	3(1)-1 ハレル	腫れる	0
2(5)-2 ホル	揺る	1	3(1)-1 ホレル	惚れる	0
2(5)-2 マク	晒く	1	3(1)-1 マケル	負ける	0
2(5)-2 マツ	待つ	1	3(1)-1 マゲル	曲げる	0
2(5)-2 ムス	蒸す	1	3(1)-1 ムセル	噬せる	0
2(5)-2 モツ	持つ	1	3(1)-1 モエル	燃える	0
2(5)-2 モル	漏る	1	3(1)-1 ヤセル	瘦せる	0
2(5)-2 ヤム	病む	m1	3(1)-1 ヤメル	止める	0
2(5)-2 ヨウ	酔う	1	3(1)-1 ヨセル	寄せる	0
2(5)-2 ヨム	読む	1	3(1)-2 アエル	和える	2
2(5)-2 ヨル	擦る	1	3(1)-2 イキル	生きる	2
2(5)-3 オル	居る	x	3(1)-2 ウエル	飢える	2
2(5)-2 イル	煎る	1	3(1)-2 ウケル	受ける	2
2(5)-2 イル	要る	0	3(1)-2 オイル	老いる	2
2(5)-2 ウク	浮く	0('ugiru0)	3(1)-2 オキル	起きる	2
2(5)-2 キク	利く	0	3(1)-2 オチル	落ちる	2
2(5)-2 ケル	蹴る	1	3(1)-2 オビル	帯びる	m2
2(5)-2 コム	込む(乗物)	1	3(1)-2 オリル	下りる[降]	2
2(5)-2 ショウ	背負う	0	3(1)-2 カケル	掛ける	2
2(5)-2 ソル	反る	1	3(1)-2 カネル	兼ねる	2
2(5)-2 ダク	抱く	0	3(1)-2 コエル	肥える	2
2(5)-2 ダス	出す	1	3(1)-2 コメル	込める	2
2(5)-2 ヘル	減る	0	3(1)-2 サエル	冴える	2
2(5)-2 ムク	剥く	0	3(1)-2 サメル	覚める	2
3(1)-1 アケル	明ける[空, 開]	0	3(1)-2 シイル	強いる	2
3(1)-1 アゲル	上げる[挙, 揚]	0	3(1)-2 シメル	占める	2
3(1)-1 アテル	当てる	0	3(1)-2 シメル	締める[閉]	2
3(1)-1 アレル	荒れる	0	3(1)-2 スギル	過ぎる	2
3(1)-1 イレル	入れる	0	3(1)-2 セメル	攻める	2

3(1)-2	クエル	絶える	2	3(1)-z	ズレル	ずれる	2
3(1)-2	クエル	耐える	2	3(1)-z	ソレル	逸れる	2
3(1)-2	クテル	建てる[立]	2	3(1)-z	クケル	炊ける(自;可)	0;2
3(1)-2	タレル	垂れる	2	3(1)-z	タテル	立てる(他;可)	2;2
3(1)-2	ツメル	詰める	2	3(1)-z	タベル	食べる	2
3(1)-2	トケル	解ける(自;可)	2;2	3(1)-z	タメル	溜める	0
3(1)-2	トジル	閉じる[絞]	2	3(1)-z	タリル	足りる	0
3(1)-2	ナゲル	投げる	2	3(1)-z	ツケル	付ける[着;点]	2
3(1)-2	ナデル	撫でる	2	3(1)-z	ツレル	釣れる(自;可)	0;2
3(1)-2	ナメル	舐める	2	3(1)-z	テレル	照れる	2
3(1)-2	ナレル	馴れる	2	3(1)-z	デキル	できる	2
3(1)-2	ニゲル	逃げる	2	3(1)-z	トメル	止める[留;泊]	0
3(1)-2	ノビル	のびる	2	3(1)-z	トレル	取れる(自;可)	2;2
3(1)-2	ノベル	述べる	2	3(1)-z	ニエル	煮える	0
3(1)-2	ハネル	跳ねる	2	3(1)-z	ヌゲル	脱げる(自;可)	2;2
3(1)-2	ハレル	晴れる	2	3(1)-z	ノベル	延べる	2
3(1)-2	バケル	化ける	2	3(1)-z	ノレル	乗れる	2
3(1)-2	フケル	老ける[更]	2	3(1)-z	ハエル	映える	2
3(1)-2	フセル	伏せる	2	3(1)-z	ハエル	生える	2
3(1)-2	ホエル	吠える	2	3(1)-z	ハゲル	禿げる	2
3(1)-2	ホメル	誉める	2	3(1)-z	ハメル	填める	0
3(1)-2	ボケル	惚ける	2	3(1)-z	バレル	バレる	2
3(1)-2	ミエル	見える	2	3(1)-z	ヒエル	冷える	2
3(1)-2	ミセル	見せる	2	3(1)-z	ヒケル	引ける(自;可)	0;2
3(1)-2	モレル	漏れる	2	3(1)-z	フエル	増える	0
3(1)-2	ユデル	茹でる	2	3(1)-z	ホレル	掘れる(自;可)	2;2
3(1)-2	ワケル	分ける[別]	2	3(1)-z	マセル	ませる(子供)	2
3(1)-z	アキル	飽きる	2	3(1)-z	マゼル	混ぜる	2
3(1)-z	アセル	褪せる	2	3(1)-z	マテル	待てる(可)	2
3(1)-z	アビル	浴びる	0	3(1)-z	マネル	真似る	2
3(1)-z	イケル	行ける(道;酒)	0;2	3(1)-z	ミチル	満ちる	2
3(1)-z	イケル	埋ける	2	3(1)-z	ムケル	向ける(他;可)	0;2
3(1)-z	ウレル	熟れる	2	3(1)-z	モゲル	もげる(自;可)	2;2
3(1)-z	ウレル	売れる(自;可)	0;2	3(1)-z	モテル	持てる(自;可)	2;2
3(1)-z	オレル	折れる(自;可)	2;2	3(1)-z	モメル	もめる(自;可)	0;2
3(1)-z	カケル	書ける(可)	2	3(1)-z	ヤケル	焼ける(自;可)	0;2
3(1)-z	カビル	微びる	0	3(1)-z	ヤレル	やれる(自;可)	2
3(1)-z	キメル	決める	0	3(1)-z	ユレル	揺れる	0
3(1)-z	クエル	食える(可)	2(keru1とも)	3(1)-z	ヨケル	避ける	2
3(1)-z	クベル	くべる(火に)	0	3(1)-z	ヨメル	読める(自;可)	2;2
3(1)-z	グレル	グれる	2	3(1)-z	ヨレル	擦れる(自;可)	2;2
3(1)-z	コゲル	焦げる	2	3(1)-z	ワレル	割れる	0;2
3(1)-z	コリル	怒りる	2	3(5)-1	アカス	明かす	0
3(1)-z	サケル	避ける	2	3(5)-1	アガル	上がる[拳;揚]	0
3(1)-z	サケル	裂ける(自;可)	2;2	3(5)-1	アソブ	遊ぶ	0
3(1)-z	サゲル	下げる	2	3(5)-1	アタル	当たる[中]	0
3(1)-z	サビル	錆びる	2	3(5)-1	アラウ	洗う	0
3(1)-z	シミル	凍みる	2	3(5)-1	アラス	荒らす	0
3(1)-z	ジャレル	じゃれる	2	3(5)-1	イカル	怒る	m2
3(1)-z	スレル	摩れる(自;可)	2;2	3(5)-1	イタス	致す	m2

3(5)-1	イタル	至る	m2	3(5)-1	ツカウ	使う	0
3(5)-1	ウカブ	浮ぶ	0	3(5)-1	ツクス	尽くす	2
3(5)-1	ウタウ	歌う	0	3(5)-1	ツヅク	続く	0
3(5)-1	オカス	犯す	m0	3(5)-1	ツナグ	繋ぐ	0
3(5)-1	オクル	送る	0	3(5)-1	ツモル	積もる	0
3(5)-1	オドス	脅す	0	3(5)-1	トバス	飛ばす	0
3(5)-1	オドル	踊る	0	3(5)-1	ナノル	名乗る	0
3(5)-1	オヨブ	及ぶ	0	3(5)-1	ナラス	鳴らす	0
3(5)-1	オワル	終る	0	3(5)-1	ナラブ	並ぶ	0
3(5)-1	カオル	香る	0	3(5)-1	ニギル	握る	0
3(5)-1	カガム	屈む	0	3(5)-1	ヌラス	濡らす	0
3(5)-1	カコウ	囲う	0	3(5)-1	ネムル	眠る	0
3(5)-1	カコム	囲む	0	3(5)-1	ノゾク	覗く	0
3(5)-1	カザル	飾る	0	3(5)-1	ノゾム	望む	0
3(5)-1	カタル	語る	0	3(5)-1	ノボル	昇る[上]	0
3(5)-1	カヨウ	通う	0	3(5)-1	ハコブ	運ぶ	0
3(5)-1	カラス	枯らす	0	3(5)-1	ハズス	外す	0
3(5)-1	カワル	変わる[替.代] 0		3(5)-1	ヒロウ	捨う	0
3(5)-1	キザム	刻む	0	3(5)-1	フサグ	塞ぐ	0
3(5)-1	キタス	来す	0	3(5)-1	フルウ	振るう	0
3(5)-1	キラウ	嫌う	0	3(5)-1	ホコル	誇る	2
3(5)-1	ククル	括る	2	3(5)-1	マガル	曲る	0
3(5)-1	クグス	下す	0	3(5)-1	マサル	勝る	2
3(5)-1	クダル	下る	0	3(5)-1	マツル	祭る	0
3(5)-1	クボム	窪む	0	3(5)-1	マナブ	学ぶ	0
3(5)-1	クラウ	食らう	0	3(5)-1	ミガク	磨く	0
3(5)-1	クラス	暮らす	0	3(5)-1	ムカウ	向かう	0
3(5)-1	ケズル	削る	0	3(5)-1	ムシル	むしる	0
3(5)-1	コラス	凝らす	0	3(5)-1	ムスブ	結ぶ	0
3(5)-1	コロス	殺す	0	3(5)-1	メグル	巡る	0
3(5)-1	サガス	捜す	0	3(5)-1	モラウ	貰う	0
3(5)-1	サトス	論ず	2	3(5)-1	ユガム	蠢む	0
3(5)-1	サトル	悟る	2	3(5)-1	ユスル	揺する	0
3(5)-1	サラス	晒す	0	3(5)-1	ユズル	譲る	0
3(5)-1	サワル	触る	0	3(5)-1	ワカス	沸かす	0
3(5)-1	シズム	沈む	0	3(5)-1	ワタス	渡す	0
3(5)-1	シタウ	慕う	0	3(5)-1	ワタル	渡る	0
3(5)-1	シノブ	忍ぶ	0	3(5)-1	ワラウ	笑う	0
3(5)-1	シルス	印す	0	3(5)-2	アオグ	屬ぐ[仰]	2
3(5)-1	スクウ	掬う[救]	0	3(5)-2	アバク	暴く	2
3(5)-1	スクム	竦む	0	3(5)-2	アマス	余す	m2
3(5)-1	スサブ	荒ぶ	m0	3(5)-2	アマル	余る	2
3(5)-1	ススグ	濯ぐ	0	3(5)-2	アユム	歩む	2
3(5)-1	ススム	進む	0	3(5)-2	イツク	急ぐ	2
3(5)-1	ススル	啜る	0	3(5)-2	イタム	痛む[傷]	2
3(5)-1	ソソグ	注ぐ	0	3(5)-2	イドム	挑む	2
3(5)-1	タタム	畳む	0	3(5)-2	イノル	祈る	2
3(5)-1	チカウ	誓う	0	3(5)-2	イワウ	祝う	2
3(5)-1	チガウ	違う	0	3(5)-2	ウゴク	動く	2
3(5)-1	チラス	散らす	0	3(5)-2	ウツス	移す[写,映] 2	

3(5)-2	ウツル	移る[写, 映]	2	3(5)-2	タダス	正す	2
3(5)-2	ウバウ	奪う	2	3(5)-2	タノム	頼む	2
3(5)-2	ウラム	恨む	2	3(5)-2	ツカム	掴む	2
3(5)-2	エガク	描く	2	3(5)-2	ツクル	作る	2
3(5)-2	エラブ	選ぶ	2	3(5)-2	ツツム	包む	2
3(5)-2	オガム	拝む	2	3(5)-2	ツノル	募る	2
3(5)-2	オコス	起こす[興]	2	3(5)-2	ツムグ	紡ぐ	0
3(5)-2	オコル	起こる[興]	2	3(5)-2	トオス	通す	2
3(5)-2	オシム	惜しむ	2	3(5)-2	トオル	通る	2
3(5)-2	オトス	落す	2	3(5)-2	トガル	尖る	2
3(5)-2	オモウ	思う	2	3(5)-2	トドク	届く	2
3(5)-2	オヨグ	泳ぐ	2	3(5)-2	ナオス	直す[治]	2
3(5)-2	オロス	下ろす[降, 卸]	2	3(5)-2	ナオル	直る[治]	2
3(5)-2	カエス	返す[帰, 反]	2	3(5)-2	ナガス	流す	2
3(5)-2	カエル	帰る[返, 反]	2(kerul, keqta1)	3(5)-2	ナゲク	喚く	2
3(5)-2	カエル	解る	2	3(5)-2	ナジル	詰る	2
3(5)-2	カカル	掛かる	2	3(5)-2	ナツク	懐く	2
3(5)-2	カギル	限る	m2	3(5)-2	ナビク	靡く	2
3(5)-2	カセグ	掻く	2	3(5)-2	ナブル	鬻る	m2
3(5)-2	カツグ	担ぐ	2	3(5)-2	ナヤム	悩む	2
3(5)-2	カナウ	叶う	2	3(5)-2	ナラウ	習う	2
3(5)-2	カブル	被る	2	3(5)-2	ナラム	覗む	2
3(5)-2	カマウ	かまう(他人に)	2	3(5)-2	ニオウ	匂う	0
3(5)-2	カラム	絡む	2	3(5)-2	ニクム	憎む	2
3(5)-2	カワク	乾く	2	3(5)-2	ニゴル	濁る	2
3(5)-2	キシル	軋る	2	3(5)-2	ニナウ	担う	2
3(5)-2	キノウ	餓う	2	3(5)-2	ヌグウ	拭う	2
3(5)-2	クグル	潜る	2	3(5)-2	ヌスム	盗む	2
3(5)-2	クジク	挫く	2	3(5)-2	ネガウ	願う	2
3(5)-2	クダク	砕く	2	3(5)-2	ネタム	妬む	2
3(5)-2	クドク	口説く	2	3(5)-2	ノコス	残す	2
3(5)-2	クモル	曇る	2	3(5)-2	ノコル	残る	2
3(5)-2	クルウ	狂う	2	3(5)-2	ノバス	延ばす	2
3(5)-2	コノム	好む	2	3(5)-2	ハカル	計る[測, 図, 謀]	2
3(5)-2	コボス	溢す	2	3(5)-2	ハゲム	励む	0
3(5)-2	コモル	籠る	2	3(5)-2	ハサム	挟む	2
3(5)-2	サガル	下がる	2	3(5)-2	ハシル	走る	2
3(5)-2	サワグ	騒ぐ	2	3(5)-2	ハジク	弾く	2
3(5)-2	シナウ	しなう(竹)	2	3(5)-2	ハタス	果たす	2
3(5)-2	シノグ	凌ぐ	0	3(5)-2	ハラウ	払う	2
3(5)-2	シバル	縛る	2	3(5)-2	ハラム	孕む	2
3(5)-2	シボル	絞る	2	3(5)-2	ヒカル	光る	2
3(5)-2	スゴス	過ごす	2	3(5)-2	ヒガム	僻む	2
3(5)-2	スベル	滑べる	2	3(5)-2	ヒタス	浸す	0
3(5)-2	スマス	澄ます(つんと; 耳を)[濟]	2	3(5)-2	ヒネル	捻る	2
3(5)-2	セマル	迫る	2	3(5)-2	ヒビク	響く	2
3(5)-2	ソダツ	育つ	2	3(5)-2	ヒラク	開く	2
3(5)-2	ソムク	背く	2	3(5)-2	ヒルム	ひるむ	2
3(5)-2	タオス	倒す	2	3(5)-2	フクム	含む	2
3(5)-2	タタク	叩く	2	3(5)-2	フケル	恥ける	2

3(5)-2	フセグ	防ぐ	2	3(5)-2	コオル	凍る	0
3(5)-2	フトル	太る	2	3(5)-2	コガス	焦がす	2
3(5)-2	マジル	交じる	2	3(5)-2	コスル	擦る	2
3(5)-2	マネク	招く	2	3(5)-2	コマル	困る	2
3(5)-2	マモル	守る	2	3(5)-2	コヤス	肥やす(目,私腹) 2	
3(5)-2	マヨウ	迷う	2	3(5)-2	コロブ	転ぶ	0
3(5)-2	メグム	恵む	2	3(5)-2	コワス	壊す	2
3(5)-2	モウス	申す	1	3(5)-2	サケブ	叫ぶ	0
3(5)-2	モドル	戻る	2	3(5)-2	ササル	刺さる	2
3(5)-2	モラス	漏らす	2	3(5)-2	サソウ	誘う	0
3(5)-2	ヤスム	休む	2	3(5)-2	サバク	裁く	2
3(5)-2	ヤトウ	雇う	2	3(5)-2	サボル	サボる	2
3(5)-2	ヤブル	破る	2	3(5)-2	サマス	覚ます[冷,醒] 2	
3(5)-2	ユルス	許す	2	3(5)-2	シカル	叱る	2
3(5)-2	ユルム	緩む	2	3(5)-2	シコム	仕込む	2
3(5)-2	ヨソウ	装う	m0	3(5)-2	シボム	萎む	0
3(5)-3	アルク	歩く	2	3(5)-2	シマウ	仕舞う	2
3(5)-3	カクス	隠す	2	3(5)-2	シマル	締まる	2
3(5)-3	ハイル	入る	2	3(5)-2	シメス	示す	0
3(5)-3	マイル	参る(墓,降参) 2		3(5)-2	シメス	湿す	0
3(5)-2	アセル	焦る	2	3(5)-2	シャガム	しゃがむ	2
3(5)-2	アブル	あぶる	2	3(5)-2	シャベル	喋る	2
3(5)-2	アヤス	あやす(子供) 2		3(5)-2	ジュクス	熟す	2
3(5)-2	イカス	生かす	2	3(5)-2	ジラス	焦らす	2
3(5)-2	イジル	弄る	2	3(5)-2	スグツ	巢立つ	2
3(5)-2	イツク	居着く	2	3(5)-2	スワル	座る	0
3(5)-2	イバル	威張る	2	3(5)-2	ズラス	ずらす	2
3(5)-2	イブル	燻る	2	3(5)-2	セガム	せがむ	2
3(5)-2	ウカル	受かる(試験) 0		3(5)-2	ソマル	染まる	0
3(5)-2	ウナル	唸る	2	3(5)-2	ソラス	逸らす[反] 2	
3(5)-2	ウマル	埋まる	0	3(5)-2	ソロウ	揃う	2
3(5)-2	オコル	怒る	2	3(5)-2	タクル	祟る	2
3(5)-2	オブウ	負ぶう	2	3(5)-2	タマル	溜る	0
3(5)-2	カゲル	陰る	2	3(5)-2	タメス	試す	2
3(5)-2	カジル	齧る	2	3(5)-2	タヨル	頼る	0
3(5)-2	カスム	霞む	0	3(5)-2	タラス	垂らす	2
3(5)-2	カバウ	庇う	2	3(5)-2	ダブル	ダブる	2
3(5)-2	キコム	着込む	2	3(5)-2	ダベル	駄弁る	m2
3(5)-2	キツク	気付く	2	3(5)-2	ダマス	騙す	2
3(5)-2	キドル	気取る	2	3(5)-2	ダマル	黙る	2
3(5)-2	キバム	黄ばむ	0	3(5)-2	ツツク	突つく	m2(cuqcuku3)
3(5)-2	キマル	決まる	0	3(5)-2	ツツル	綴る	2
3(5)-2	キラス	切らす	2	3(5)-2	ツプス	潰す	0
3(5)-2	クギル	区切る	2	3(5)-2	ツマル	詰まる	2
3(5)-2	クサル	腐る	2	3(5)-2	ツルス	吊す	0
3(5)-2	クバル	配る	2	3(5)-2	テラス	照らす	2
3(5)-2	クヤム	悔やむ	2	3(5)-2	デアウ	出会う	2
3(5)-2	クルム	包む	2	3(5)-2	トカス	溶かす	2
3(5)-2	グズル	ぐずる(子供) 2		3(5)-2	トザス	閉ざす	2
3(5)-2	ケムル	煙る	0	3(5)-2	トツク	嫁ぐ	2

3(5)-2 トマル	止まる[留, 泊]	0	3(5)-2 ミヌク	見抜く	2
3(5)-2 ドナル	怒鳴る	2	3(5)-2 ムラス	蒸らす	2
3(5)-2 ドモル	吃る	2	3(5)-2 メイル	減入る	2
3(5)-2 ナグル	殴る	2	3(5)-2 メカス	めかす	2
3(5)-2 ナジム	馴染む	2	3(5)-2 メクル	めくる	0
3(5)-2 ナマル	訛る[鈍]	2	3(5)-2 メザス	目指す	2
3(5)-2 ナメス	躡す	2	3(5)-2 メダツ	目立つ	2
3(5)-2 ナラス	慣らす	2	3(5)-2 モグル	潜る	2
3(5)-2 ニアウ	似合う	0	3(5)-2 モドス	戻す	2
3(5)-2 ニガス	逃がす	2	3(5)-2 モヤス	燃やす	0
3(5)-2 ニゴス	濁す(お茶, 言葉)	2	3(5)-2 ヤクス	訳す	2
3(5)-2 ニタツ	煮立つ	2	3(5)-2 ヤジル	やじる	2
3(5)-2 ニブル	鈍る	2	3(5)-2 ユスグ	溜ぐ	0
3(5)-2 ニルム	温む	2	3(5)-2 ヨコス	よこす	0
3(5)-2 ネギル	値切る	2	3(5)-2 ヨゴス	汚す	0
3(5)-2 ネットク	寝付く	2	3(5)-2 ヨジル	よじる	2
3(5)-2 ネットク	根付く	2	3(5)-2 ヨワル	弱る	2
3(5)-2 ネバル	粘る	2	3(5)-2 リキム	力む	2
3(5)-2 ノゾク	除く	0	3(5)-2 ワカル	分かる	2
3(5)-2 ハガス	剥がす	2	3(5)-2 ワメク	喚く	2
3(5)-2 ハズム	弾む	0	4(1)-1 アキレル	呆れる	0
3(5)-2 ハタク	叩く	m2	4(1)-1 アクエル	与える	0
3(5)-2 ハナス	放す	2	4(1)-1 アフレル	溢れる	0
3(5)-2 ハナス	話す	2	4(1)-1 アワテル	慌てる	3
3(5)-2 ハブク	省く	2	4(1)-1 ウカベル	浮かべる(他;可)	0:3
3(5)-2 ハヤス	生やす	2	4(1)-1 ウズメル	埋める	0
3(5)-2 ハヤル	流れる	2	4(1)-1 ウマレル	生まれる	0
3(5)-2 ハラス	晴らす	2	4(1)-1 オクレル	後れる[遅]	0
3(5)-2 バラス	バラす	2	4(1)-1 オシエル	教える	0
3(5)-2 ヒヤス	冷やす	2	4(1)-1 カサネル	重ねる	0
3(5)-2 フカス	蒸かす	2	4(1)-1 カスメル	掠める	0
3(5)-2 フブク	吹雪く	2	4(1)-1 カタメル	固める	0
3(5)-2 ヘバル	へバル(疲れ)	2	4(1)-1 キコエル	聞こえる	0
3(5)-2 ホグス	ほぐす	2	4(1)-1 クラベル	比べる	0
3(5)-2 ホジル	ほじる	2	4(1)-1 シオレル	萎れる	3
3(5)-2 ホテル	火照る	2	4(1)-1 スグレル	優れる	0
3(5)-2 ホドク	解く	2	4(1)-1 ススメル	勧める	0
3(5)-2 ホロブ	減ぶ	0	4(1)-1 スタレル	廢れる	3, 0
3(5)-2 ボカス	ぼかす	0	4(1)-1 タダレル	爛れる	0
3(5)-2 ボヤク	ぼやく	2	4(1)-1 ツカエル	仕える	0
3(5)-2 マカル	負かる(代金)	0	4(1)-1 ツカエル	使える(可)	3
3(5)-2 マクル	捲る(腕)	0	4(1)-1 ツタエル	伝える(他;可)	0:3
3(5)-2 マザル	混ざる	2	4(1)-1 トドメル	留める[止]	3
3(5)-2 マタグ	跨ぐ	2	4(1)-1 ナラベル	並べる(他;可)	0:3
3(5)-2 マビク	間引く	2	4(1)-1 ハジメル	始める	0
3(5)-2 マブス	塗す	2	4(1)-1 ハズレル	外れる	0
3(5)-2 マウス	回す	0	4(1)-1 ヒロゲル	広げる	0
3(5)-2 マワル	回る	0	4(1)-1 フクレル	脹れる	0
3(5)-2 ミコム	見込む	2	4(1)-1 ホロビル	亡びる	0
3(5)-2 ミダス	乱す	2	4(1)-1 マトメル	纏める	3

4(1)-1 ムカエル	迎える	0	4(1)-2 モウケル	儲ける[設]	3
4(1)-1 ムクイル	報いる	0	4(1)-2 モトメル	求める	3
4(1)-1 ワスレル	忘れる	0	4(1)-2 ヤブレル	破れる(自;可)[敗]	3
4(1)-2 アガメル	崇める	m3	4(1)-2 ワカレル	別れる[分]	3
4(1)-2 アズケル	預ける	3	4(1)-3 カカエル	抱える	3, 0
4(1)-2 アツメル	集める	3	4(1)-3 カクレル	隠れる	3
4(1)-2 アワセル	合わせる	3	4(1)-3 ササエル	支える	0
4(1)-2 ウレエル	憂える	m3	4(1)-3 ササゲル	捧げる	0
4(1)-2 オサエル	抑える[押]	0	4(1)-3 トラエル	捕らえる	3
4(1)-2 オサメル	納める[修, 取, 治]	3	4(1)-2 アバレル	暴れる	0
4(1)-2 オソレル	恐れる	0	4(1)-2 アマエル	甘える	0
4(1)-2 オボエル	覚える	3	4(1)-2 イジメル	いじめる	3
4(1)-2 カゾエル	数える	3	4(1)-2 イタメル	炒める	0
4(1)-2 カナエル	叶える	m3	4(1)-2 ウスメル	薄める	0
4(1)-2 カナデル	奏でる	m0	4(1)-2 ウスレル	薄れる	0
4(1)-2 カブセル	被せる	3	4(1)-2 ウモレル	埋もれる	0
4(1)-2 カマエル	構える(態度;可)	3;3	4(1)-2 オウジル	応じる	0
4(1)-2 カラゲル	絡げる	3	4(1)-2 オクレル	送れる(可)	3
4(1)-2 キヨメル	清める	3	4(1)-2 オダテル	煽てる	0
4(1)-2 キワメル	極める	3	4(1)-2 オブエル	負ぶえる(可)	3
4(1)-2 クズレル	崩れる	3	4(1)-2 オボレル	溺れる	0
4(1)-2 ケガレル	汚れる	3	4(1)-2 オモエル	思える(可;自)	3;3
4(1)-2 コクエル	答える	3	4(1)-2 オヨゲル	泳げる(可)	3
4(1)-2 コボレル	溢れる	3	4(1)-2 カガメル	屈める(他;可)	0;3
4(1)-2 コワレル	壊れる	3	4(1)-2 カブレル	かぶれる(浴)	0
4(1)-2 サズケル	授ける	3	4(1)-2 カンジル	感じる	0
4(1)-2 サダメル	定める	3	4(1)-2 キガエル	着替える	3
4(1)-2 シズメル	鎮める	0	4(1)-2 キタエル	鍛える	0
4(1)-2 シビレル	痺れる	3	4(1)-2 クジケル	挫ける(自;可)	3;3
4(1)-2 シラベル	調べる	3	4(1)-2 クダケル	砕ける(自;可)	3;3
4(1)-2 ソナエル	供える[備]	3	4(1)-2 クビレル	括れる	3
4(1)-2 タオレル	倒れる	3	4(1)-2 クワエル	加える	3
4(1)-2 タスケル	助ける	3	4(1)-2 クワセル	食わせる	3
4(1)-2 タズネル	尋ねる[訪]	3	4(1)-2 コサエル	拵える	3
4(1)-2 タタエル	称える	0	4(1)-2 コジレル	拗れる(病気, 話)	3
4(1)-2 タトエル	例える	3	4(1)-2 コラエル	堪える	0
4(1)-2 タバナル	束ねる	3	4(1)-2 サカエル	栄える	0
4(1)-2 ツカレル	疲れる	3	4(1)-2 サビレル	寂れる	3
4(1)-2 ツトメル	務める[努, 勤]	3	4(1)-2 シアゲル	仕上げる	3
4(1)-2 トガメル	咎める	3	4(1)-2 シカケル	仕掛ける	3
4(1)-2 ナガレル	流れる	3	4(1)-2 シカメル	しかめる(顔)	3
4(1)-2 ナグメル	宥める	3	4(1)-2 シズメル	沈める(他;可)	0;3
4(1)-2 ハナレル	離れる	3	4(1)-2 シタテル	仕立てる	3
4(1)-2 ヒラケル	開ける(自;可)	3;3	4(1)-2 シナビル	萎びる	0
4(1)-2 ヒロメル	広める	0	4(1)-2 ショウジル	生じる	0
4(1)-2 ヘダテル	隔てる	3	4(1)-2 シラケル	白ける	3
4(1)-2 マカセル	委せる	3	4(1)-2 シラセル	知らせる	0
4(1)-2 マギレル	紛れる	3	4(1)-2 シンジル	信じる	0
4(1)-2 マジエル	交える	3	4(1)-2 ススケル	煤ける	0
4(1)-2 ミダレル	乱れる	3	4(1)-2 スポメル	窄める	0

4(1)-z	セバメル	狭める	3	4(1)-z	ヤツレル	窶れる	3
4(1)-z	センジル	煎じる	3	4(1)-z	ヤラセル	やらせる(使役)	0
4(1)-z	ソコネル	損ねる	3	4(1)-z	ヤラレル	やられる(受身)	0
4(1)-z	ソダテル	育てる(他;可)	3;3	4(1)-z	ユルメル	緩める	3
4(1)-z	ソロエル	揃える(他;可)	3;3	4(1)-z	ユワエル	結わえる	3
4(1)-z	タカメル	高める	0	4(1)-z	ヨゴレル	汚れる	0
4(1)-z	タマゲル	たまげる(驚)	3	4(1)-z	ワキデル	湧き出る	3
4(1)-z	チギレル	ちぎれる(自;可)	3;3	4(5)	アジワウ	味わう	3
4(1)-z	チヂレル	縮れる	0	4(5)	アズカル	預かる	3
4(1)-z	ツウジル	通じる	0	4(5)	アセバム	汗ばむ	3
4(1)-z	ツカエル	支える(頭,胸)	0	4(5)	アツカウ	扱う	0
4(1)-z	ツカレル	憑かれる	3	4(5)	アツマル	集まる	3
4(1)-z	ツツケル	続ける(他;可)	0;3	4(5)	アテガウ	宛てがう	0
4(1)-z	ツブレル	潰れる	0	4(5)	アヤカル	肖る	3
4(1)-z	ツヨメル	強める	3	4(5)	アヤシム	怪しむ	3
4(1)-z	テガケル	手掛ける	3	4(5)	アヤブム	危ぶむ	3
4(1)-z	デカケル	出かける	3	4(5)	アヤマル	謝る	3
4(1)-z	デスギル	出過ぎる	3	4(5)	アラソウ	争う	3
4(1)-z	トドケル	届ける	3	4(5)	アラワス	表す	3
4(1)-z	トボケル	惚ける	3	4(5)	アワサル	合わさる	3
4(1)-z	ナガメル	眺める	3	4(5)	アワグツ	泡立つ	3
4(1)-z	ナマケル	怠ける	3	4(5)	イイハル	言い張る	0
4(1)-z	ニタテル	煮立てる	3	4(5)	イキアウ	行き合う	3
4(1)-z	ネカセル	寝かせる	0	4(5)	イキゴム	意気込む	3
4(1)-z	ネジレル	振れる(自;可)	3;3	4(5)	イジクル	弄くる	3
4(1)-z	ネボケル	寝惚ける	3	4(5)	イタグク	戴く	0
4(1)-z	ネムレル	眠れる(可)	3	4(5)	イタワル	劣る	3
4(1)-z	ノロケル	のろける	0	4(5)	イツワル	偽る	3
4(1)-z	ハジケル	弾ける(自;可)	3;3	4(5)	イナオル	居直る	3
4(1)-z	ヒシヤケル	ひしゃげる	m3	4(5)	イヤガル	嫌がる	3
4(1)-z	フクメル	含める	3	4(5)	イラダツ	苛立つ	3
4(1)-z	フザケル	ふざける	3	4(5)	イリクム	入り組む	3
4(1)-z	フヤケル	ふやける	3	4(5)	イロヅク	色づく	3
4(1)-z	フルエル	震える	0;3	4(5)	ウカガウ	伺う	0
4(1)-z	ブツケル	ぶつける	0	4(5)	ウケトル	受け取る	0
4(1)-z	ホウジル	焙じる	m0	4(5)	ウゴカス	動かす	3
4(1)-z	ホドケル	解ける	3	4(5)	ウシナウ	失う	0
4(1)-z	ボヤケル	ぼやける(焦点;不平の可)	3;3	4(5)	ウズマル	埋まる	0
4(1)-z	マクレル	捲れる	0	4(5)	ウタガウ	疑う	0
4(1)-z	マルメル	丸める	0	4(5)	ウタグル	疑る	0
4(1)-z	ミアキル	見飽きる	3	4(5)	ウチコム	打ち込む	3,0
4(1)-z	ミアゲル	見上げる	0	4(5)	ウナズク	頷く	3
4(1)-z	ミツケル	見付ける	1(mizugeru1, mizugeda1)	4(5)	ウミダス	生み出す	3
4(1)-z	ミトメル	認める	0	4(5)	ウラギル	裏切る	3
4(1)-z	ムクレル	むくれる(不機嫌)	0	4(5)	ウラナウ	占う	3
4(1)-z	メイジル	命じる	0	4(5)	ウラヤム	羨む	3
4(1)-z	メザメル	目覚める	3	4(5)	ウリダス	売り出す	3
4(1)-z	モチイル	用いる	3	4(5)	ウルオウ	潤う	3
4(1)-z	モラエル	貰える(可)	3	4(5)	ウロツク	うるつく	3
4(1)-z	ヤスメル	休める(他;可)	3;3	4(5)	オイコス	追い越す	3

4(5)	オギナウ	補う	3	4(5)	シアゲル	仕上げる	3
4(5)	オクマル	奥まる	3	4(5)	シクジル	しくじる	3
4(5)	オコナウ	行なう	0	4(5)	シズマル	静まる	3
4(5)	オサマル	収まる	3	4(5)	シタガウ	従う	0
4(5)	オシコム	押し込む	3	4(5)	シデカス	しでかす	3
4(5)	オンワル	教わる	0	4(5)	シハラウ	支払う	3
4(5)	オチツク	落ち着く	1('ozizu(i)da1)	4(5)	シメキル	締め切る	3
4(5)	オドカス	脅かす	0	4(5)	ジンドル	陣取る	3
4(5)	オドロク	驚く	3	4(5)	セキコム	咳き込む	3
4(5)	オブサル	負ぶさる	3	4(5)	タカマル	高まる	3
4(5)	カキトル	書き取る	3	4(5)	タガヤス	耕す	3
4(5)	カクマウ	囲まう	3	4(5)	タスカル	助かる	3
4(5)	カサナル	重なる	0	4(5)	タタカウ	戦う	0
4(5)	カサバル	嵩張る	3	4(5)	タチヨル	立ち寄る	1
4(5)	カタツク	片付く	3	4(5)	タノシム	楽しむ	3
4(5)	カタマル	固まる	0	4(5)	タメラウ	ためらう	3
4(5)	カタムク	傾く	3	4(5)	ダマカス	騙かす	3
4(5)	カタヨル	偏る	3	4(5)	チカヅク	近付く	3
4(5)	カチヌク	勝ち抜く	3	4(5)	チヂカム	縮かむ	0
4(5)	カナシム	悲しむ	3	4(5)	チヂマル	縮まる	0
4(5)	カブサル	被さる	3	4(5)	チマヨウ	血迷う	3
4(5)	カミアウ	噛み合う	3	4(5)	チョンギル	ちゅん切る	3
4(5)	カラカウ	からかう	3	4(5)	チラカス	散らかす	0
4(5)	カラマル	絡まる	3	4(5)	チラカル	散らかる	0
4(5)	カワカス	乾かす	3	4(5)	チラバル	散らばる	0
4(5)	カンヅク	感付く	3	4(5)	ツカマル	掴まる[捕]	1
4(5)	ガタツク	がたつく	3	4(5)	ツキアウ	付き合う	3
4(5)	ガンバル	頑張る	0	4(5)	ツタワル	伝わる	0
4(5)	キカザル	着飾る	3	4(5)	ツツク	ツツク	3
4(5)	キキトル	聞き取る	3	4(5)	ツツシム	慎む	3
4(5)	キズツク	傷つく	3	4(5)	ツナガル	繋がる	0
4(5)	キリダス	切り出す	3	4(5)	ツブヤク	呟く	3
4(5)	クイコム	食い込む	3	4(5)	ツボマル	窄まる	0
4(5)	クタバル	くたばる	3	4(5)	ツマズク	つまずく	3
4(5)	クツツク	くつつく	3	4(5)	ツモナウ	伴う	3
4(5)	クルシム	苦しむ	3	4(5)	ツヨマル	勤まる	3
4(5)	クロズム	黒ずむ	3	4(5)	テツダウ	手伝う	3
4(5)	ケトバス	蹴飛ばす	m0(keqtobasu0が普通)	4(5)	テワクス	手渡す	3
4(5)	コトワル	断る	3	4(5)	デアガル	出歩く	3
4(5)	コロガス	転がす	0	4(5)	デシヤバル	でしゃばる	3
4(5)	コロガル	転がる	0	4(5)	トドマル	留まる	3
4(5)	コワガル	恐がる	3	4(5)	トリダス	取り出す	3
4(5)	ゴマカス	ごまかす	3	4(5)	トンガル	尖る	m3(togaru2が普通)
4(5)	サカラウ	逆らう	3	4(5)	ナガビク	長引く	3
4(5)	サキダツ	先立つ	3	4(5)	ナヤマス	悩ます	3
4(5)	ササヤク	囁く	0	4(5)	ニオウス	匂わす	3
4(5)	サマヨウ	さまよう	3	4(5)	ネスゴス	寝過ごす	3
4(5)	サムガル	寒がる	3	4(5)	ノサバル	のさばる	3
4(5)	ザラツク	ざらつく	3	4(5)	ハカドル	拂る	3
4(5)	ザワメク	ざわめく	3	4(5)	ハゲマス	励ます	3

4(5)	ハサマル	挟まる	3	4(5)	ヨクバル	欲張る	3
4(5)	ハジマル	始まる	0	4(5)	ヨコギル	横切る	3
4(5)	ハタラク	働く	0	4(5)	ヨロコブ	喜ぶ	3
4(5)	ハムカウ	はむかう	3	4(5)	ヨロメク	よろめく	3
4(5)	ハルメク	春めく	3	4(5)	ヨワマル	弱まる	3
4(5)	バラマク	ばらまく	2, 3	4(5)	ワリキル	割り切る	3
4(5)	ヒニクル	皮肉る	3	5(1)	アキラメル	諦める	4
4(5)	ヒネクル	捻くる	3	5(1)	アコガレル	憧れる	0
4(5)	ヒヤカス	冷やかす	3	5(1)	アツタメル	暖める	4
4(5)	ヒラメク	閃く	3	5(1)	アマンジル	甘んじる	0
4(5)	ヒロガル	広がる	0	5(1)	アラタメル	改める	4
4(5)	ヒロマル	広まる	0	5(1)	アラワレル	現れる	4
4(5)	フクラム	脹らむ	0	5(1)	イイスキル	言い過ぎる	4
4(5)	フサガル	塞がる	0	5(1)	ウズモレル	埋もれる	4
4(5)	フルワス	震わす	0	5(1)	ウナサレル	うなされる	4
4(5)	フンバル	踏ん張る	0	5(1)	ウヌボレル	うぬぼれる	0
4(5)	ブチコム	ぶち込む	3	5(1)	オクラセル	遅らせる	0
4(5)	ブツカル	ぶつかる	1	5(1)	オチツケル	落ち着ける (他;可) 4:4	
4(5)	ブラツク	ぶらつく	3	5(1)	オトロエル	衰える	4
4(5)	ヘコマス	凹ます	0	5(1)	カキスギル	書き過ぎる	4
4(5)	ベタツク	べたつく	3	5(1)	カタツケル	片付ける	4
4(5)	ホシガル	欲しがる	3	5(1)	カタムケル	傾ける	4
4(5)	ホジクル	ほじくる	3	5(1)	カンガエル	考える	0
4(5)	ホドコス	施す	3	5(1)	クタビレル	くたびれる	4
4(5)	マカナウ	賄う	3	5(1)	クルシメル	苦しめる	4
4(5)	マゴツク	まごつく	3	5(1)	ココロミル	試みる	4
4(5)	マタガル	跨る	3	5(1)	コシラエル	捻える	0
4(5)	マチガウ	間違う	3	5(1)	コマラセル	困らせる	4
4(5)	マツワル	纏わる	3	5(1)	コラシメル	懲らしめる	4
4(5)	マトマル	纏まる	3	5(1)	タシカメル	確かめる	4
4(5)	マニアウ	間に合う	3	5(1)	ツカマエル	捕まえる	4
4(5)	ミアタル	見当たる	3	5(1)	テナズケル	手懐ける	4
4(5)	ミオクル	見送る	0	5(1)	デムカエル	出迎える	4
4(5)	ミオトス	見落とす	3	5(1)	トノエル	整える	4
4(5)	ミチビク	導く	3	5(1)	トリイレル	取り入れる	4
4(5)	ミトオス	見通す	3	5(1)	ノリイレル	乗り入れる	4
4(5)	ムキアウ	向き合う	3	5(1)	ヒカラビル	干からびる	2
4(5)	ムズカル	むずかる	3	5(1)	ヒネクレル	ひねくれる	4
4(5)	メグラス	巡らす	0	5(1)	ブラサゲル	ぶら下げる	2
4(5)	モウカル	儲かる	3	5(1)	ホコロビル	綻びる	4
4(5)	モギトル	もぎ取る	3	5(1)	マチガエル	間違える	4
4(5)	モタラス	もたらす	3	5(1)	ミセツケル	見せつける	4
4(5)	モチヨル	持ち寄る	0	5(1)	ミチガエル	見違える	4
4(5)	モトツク	基づく	3	5(1)	ヤツツケル	やっつける	1
4(5)	モヨオス	催す	3	5(1)	ワルビレル	悪びれる	4
4(5)	ヤクダツ	役立つ	3	5(5)	アツタマル	暖まる	4
4(5)	ヤシナウ	養う	0	5(5)	アマヤカス	甘やかす	4
4(5)	ヤスマル	休まる	3	5(5)	アラタマル	改まる	4
4(5)	ヤラカス	やらかす(失敗) 0		5(5)	ウズクマル	うずくまる	0
4(5)	ユサブル	揺さぶる	0	5(5)	ウリトバス	売り飛ばす	4

5(5)	オソレイル	恐れ入る	0
5(5)	オドロカス	驚かす	4
5(5)	オモイダス	思い出す	2
5(5)	オモテダツ	表立つ	4
5(5)	カガヤカス	輝かす	4
5(5)	カキオトス	書き落とす	4
5(5)	カシコマル	畏まる	4
5(5)	カッキヅク	活気づく	4
5(5)	カッバラウ	かっぱらう	4
5(5)	クチバシル	口走る	4
5(5)	クルシガル	苦しがる	4
5(5)	ケツバス	蹴っ飛ばす	4
5(5)	ケツマズク	蹴つまずく	4
5(5)	サカノボル	遡る	4
5(5)	スツバス	すつとばす	4
5(5)	ソソノカス	唆す	4
5(5)	チヂコマル	縮こまる	0
5(5)	チョロマカス	ちょろまかす	4
5(5)	ツカイコム	使い込む	4
5(5)	トドコオル	滞る	4
5(5)	ナツカシム	懐かしむ	4
5(5)	ナミダグム	涙ぐむ	4
5(5)	ハネマワル	跳ね回る	2
5(5)	ヒケラカス	ひけらかす	4
5(5)	ヒッカカル	引っ掛かる	4
5(5)	フクラマス	膨らます	0
5(5)	ブツトオス	ぶつ通す	4
5(5)	ホノメカス	仄めかす	4
5(5)	ミウシナウ	見失う	0
5(5)	モリアガル	盛り上がる	4
5(5)	ヤリカエス	やり返す	4
5(5)	ヤリナオス	やり直す	4
5(5)	ヨコタワル	横たわる	4
5(5)	ヨッバラウ	酔っ払う	4
5(5)	ヨロコバス	喜ばす	4

別表 7-3 形容詞のアクセント資料

類	読み	語例	C 氏 (1937 年生まれ)	B 氏 (1927 年生まれ)
2-1	ナイ	無い	né	né
2-1	ヨイ	良い	éé,íí	íí
2-x	コイ	濃い	kói	kói
2-x	スイ	酔い	suqpe	suqke
3-1	アカイ	赤い	'age	'aqe
3-1	アサイ	浅い	'ase	'aqse
3-1	アツイ	厚い	'azu	'aqzu
3-1	アマイ	甘い	'ame	'anme
3-1	ウスイ	薄い	'usu	'uqsu
3-1	オソイ	遅い	'ose	'oqse
3-1	カタイ	堅い	kade	kaqde
3-1	クライ	暗い	kure	kure
3-1	トオイ	遠い	toi	toqgui
3-1	オシイ	惜しい	'osí	'oqsi
3-1	ホシイ	欲しい	hosí	hoqsi
3-2	アオイ	青い	'a'ói	'a'ói
3-2	アツイ	熱い	'acé	'acé
3-2	ウマイ	旨い	nmé	nmé
3-2	オオイ	多い	'ó'í('iqpedá が普通)	'iqpedá
3-2	クロイ	黒い	kurói	kurói
3-2	サムイ	寒い	samúi	sanmúi
3-2	シロイ	白い	sirói	siré
3-2	チカイ	近い	ciké	ciqké
3-2	ツヨイ	強い	cu'é	cui'é
3-2	ヒロイ	広い	hiré	hiré
3-2	フカイ	深い	huké	huqké
3-2	ワルイ	悪い	warí	warí
4-1	アヤシイ	怪しい	'a'jasi	'a'jasi
4-2	クヤシイ	悔しい	ku'jasi	ku'jasi
4-2	クルシイ	苦しい	kurusi	kurusi
4-t	アブナイ	危ない	'abune	'abune
4-t	オイシイ	おいしい	'oisí	'oisí
4-t	オオキイ	大きい	'oqkí	'oqkí
4-t	チイサイ	小さい	cicé	ciqcé
4-t	ミジカイ	短い	miziké	miqké,miziké

IV 章

鶴岡市大山方言の用言の活用

大西拓一郎

1. はじめに	143
2. 動詞の活用	144
2.1. 活用表の概要	145
2.1.1. 活用のタイプ	145
2.1.2. 後続する助動詞・助詞など	148
2.2. 各活用のタイプの記述	151
2.2.1. 子音語幹1動詞	151
2.2.2. 子音語幹2動詞	153
2.2.3. 子音語幹3動詞	153
2.2.4. 母音語幹1動詞	155
2.2.5. 母音語幹2動詞	156
2.2.6. 子音語幹4動詞	157
2.2.7. 子音語幹5動詞	157
2.3. 通時的考察	158
2.3.1. 活用形式の変化	159
2.3.2. 活用の類との対応	162
2.4. 動詞の活用の語形例・文例	164
3. 形容詞の活用	215
3.1. 活用のタイプと活用表	215
3.2. 通時的考察	218
3.3. 形容詞の活用の語形例・文例	220
4. 形容動詞の活用	228
4.1. 活用表	228
4.2. 形容動詞の活用の語形例・文例	230
5. むすび	232

1. はじめに

鶴岡市大山方言の動詞・形容詞・形容動詞の活用を記述する。

この方言の用言の活用の特色として次のような点を指摘することができる。

動詞の活用では、共通語のラ行五段活用に相当するものと一段活用に相当するものが非常に類似していること。形容詞の活用では、カリ活用系の活用形式がほとんど認められないこと。形容動詞の活用では、「～な」「～なら」などのナリ系の形式が認められないこと。

特に動詞の活用の特色については、地域的にややずれるものの、庄内方言の特徴として古く斎藤(1936)から指摘されていたことであり、その点を再確認できたと同時に、さらに詳しい記述データが得られたものと考ええる。

主たる話者は佐藤治助氏である。佐藤治助氏の属性は次のとおり。

生年月日：1922年1月27日

居住歴：鶴岡市大山大字下小中生まれ、1960年頃から鶴岡市双葉町

父親の出身地：鶴岡市大山、母親の出身地：鶴岡市水沢

男性、元中学校・高等専門学校教員(国語)

この話者は鶴岡市の旧市街地の出身ではない。出身地の鶴岡市大山地区は、1963年の合併により鶴岡市に組み込まれた旧西田川郡大山町である。ゆえに旧市街地の現状とはいくぶん異なった点があるかもしれない。しかしながら、かえってそれが鶴岡方言の、またひいては大きな目を見た庄内方言の古層を伝えるものである可能性は高い。事実、先にも少し触れたが、斎藤秀一の一連の活用関係の記述(代表的なものとして斎藤(1936)が挙げられる)に通じる点はかなり見出され、現在の旧市街地の出身者からはなかなか得がたい形態を聴き出すことができたものと考えられる。

以上のような地域的な問題を離れて、この話者は、やはり属性からもわかるとおり、元国語の教員であり、さらに庄内方言について佐藤(1992)のような著書を著している。このことから推察されるように、言語的な感覚に非常にすぐれ、活用の調査のような言語的な勘と調査につきあう忍耐力が求められる

るものにはうってつけの話者である。同時にこの話者は、先にも名前を挙げた庄内出身の夭折の言語研究者である斎藤秀一の研究者でもある(ただし、斎藤秀一の一連の記述から言語的に影響を受けていることはない)。そのこともあって、調査に対してきわめて協力的な姿勢でのぞんでもらうことができた。以上のような事情を配慮した上で、旧市街地の出身ではないことは措いて、「鶴岡市大山方言」と断った上で記述の対象とするものである。

調査は1992年11月22日・24日、1994年1月8日・9日の4日間にわたって行った(また、その後、一部電話で確認を行うこともあった)。

主たる話者の妻、佐藤綾子氏も同席し、随時参考意見を述べるがあったが、それについてはあくまでも参考にとどめ、ここでは主たる話者の回答に基づいて記述を行う。なお、佐藤綾子氏の属性は次のとおり。

生年月日：1929年6月1日

居住歴：鶴岡市大山大字下子中生まれ、1960年頃から鶴岡市双葉町

父親の出身地：鶴岡市大山、母親の出身地：山形県東田川郡藤島町

女性、主婦

なお、調査のために調査票として大西(1992・1993a・1993b)を用いた。

以下の記述では音韻表記を用いる(ただし、いちいちスラッシュ“/”では囲まない。また母音で始まる音節の頭の’は省略した)。主たる話者の音韻ならびに音声的な特徴を活用の記述に関わる点のみ簡単に記しておく。

単独母音の i/e の区別はないようである。ここではeで代表する。

語中子音の有声化は残しているが、鼻音化した ã, ã̃, ã̄ との対立は明確ではない(2.2.1. 参照)。ここでは d, b, z で代表する。ただし、g/g の区別は明確である。

si/su ならびに zi/zu ci/cu の区別はないようである。ここでは su, zu, cu で代表する。

se, ze の音声内容は[ʃe][ʒe]である。

2. 動詞の活用

2.1. 活用表の概要

2.1.1. 活用のタイプ

動詞の活用体系は次に示す活用表1ではほぼ概要がつかめるであろう。

活用表の1番上の行が共通語で対応する意味を示しており、2行目が語幹を、3行目以下活用形番号をふった行に示しているのが語尾である。活用表から具体的な語形を得るためには「語幹+語尾+助動詞・助動詞等」の順で並べればよい(例えば「書かない」であれば、“kag+a+ne=kagane”)。語尾が“-”となっているものは語尾が「なし」であることを示しており、結果的には「語幹+助動詞・助動詞等」で語形が得られることになる(例えば「起きない」であれば、“ogi+ne=ogine”)。“×”は当該の助動詞・助動詞に接続する活用形がないことを示している(これは形式的な接続の制限であり文法の意味的な問題とは関係ない)。頭に“@”が付いているものは音便語幹である。「音便語幹+助動詞・助動詞等」で語形が得られる(例えば「書いた」であれば、“kae+da=kaeda”)。音便語幹については、2.2.1. で述べる(なお、e/e の区別はあるが、音便語幹中の ae に対応する e の形態は話者は用いないと内省するので活用表には取り入れなかった)。上記の手続きで具体的な語形を得ることができるが、2.4. には具体的な語形ならびに文例も掲げるようにする。

語幹の形式で見ると子音で終るもの(「書く」「死ぬ」「食う」「来る」「為る」)と母音で終るもの(「起きる」「答える」「開ける」「取る」)に大きく分けることができることがわかる。

語幹が子音で終る動詞を子音語幹動詞と呼ぶことにする。同じ子音語幹動詞であっても「書く」「死ぬ」「食う」「来る」「為る」は、それぞれ語尾が異なっているようすがわかる。ゆえにこれらは異なる活用のタイプを有すると見る。「書く」のタイプを子音語幹1動詞、「死ぬ」のタイプを子音語幹2動詞、「食う」のタイプを子音語幹3動詞、「来る」のタイプを子音語幹4動詞、「為る」のタイプを子音語幹5動詞と呼ぶことにする。

活用表 1 動詞の総合

	書く	死ぬ	食う	起きる	答える	開ける	取る	来る	為る	
活用形 番号	kag	sun	k	ogi	kodc	age	to	k	s	語幹 / 主な後続の助動詞・助詞ないしは 単独での意味・用法
1	a	a	a	-	-	-	-	o	a	nc(否定)
2	i	i	ue	-	-	-	-	i	u	qdc(希望)
3	i	i	ue	-	-	-	ri	i	u	sorda(様態)
4	u	u	u	ru	ru	ru	ru	uru	uru	言い切り
5	u	θsun	un	n	n	n	n	un	un	na(禁止)
6	u	u	u	q	q	q	q	uq	uq	ro(推量)
7	u	θsun	uq	q	q	q	q	uq	uq	ke(過去回想)
8	e	e	e	re	re	re	re	oe	e	命令
9	e	e	e	re	re	re	re	ie	ue	nc(可能否定)
10	o	o	o	ro	ro	ro	ro	o	o	意志
11-1	a	a	a	×	×	×	×	×	a	seru(使役)
11-2	×	×	×	-	-	-	-	o	×	raseru(使役)
12	θkae	θsun	u	-	-	-	-	i	u	ta·da(過去)
13	θkae	θsun	u	-	-	-	-	i	u	qta·qda·(n)da(継続過去)
活用の タイプ	子音語幹 1動詞	子音語幹 2動詞	子音語幹 3動詞	母音語幹 1動詞			母音語幹 2動詞	子音語幹 4動詞	子音語幹 5動詞	

また、語幹が母音で終る動詞を母音語幹動詞と呼ぶことにする。「起きる」「答える」「開ける」については語尾がまったく同じであり、それぞれの語幹の末尾の母音が異なっているに過ぎない。これらと「取る」を較べると非常によく似ているが活用形番号3に「取る」では語尾 ri が見られるのに、「起きる」「答える」「開ける」では語尾がない(上記のとおり“-”で表示している)ことがわかり、この点から同じに扱えず、異なる活用のタイプを有すると見る(さらに活用形番号12・13でも異なりが現れるが、くわしくは、2.2.5.を参照のこと)。

「起きる」「答える」「開ける」のタイプを母音語幹1動詞, 「取る」のタイプを母音語幹2動詞と呼ぶことにする。

なお, 上記の活用表からも推測されるように, 本稿に言う語幹とは, 活用語がさまざまな活用形をとる際に変化しない部分を言い, 語尾とはそれぞれの活用形から語幹を取り去った部分を言う。また, ここに言う活用形とは, 活用語それ自体で特定の表現形式を表したものにおいてはその形を指し, 活用語に助詞や助動詞が付いて特定の表現形式を形成したものにおいてはそこから助詞や助動詞を取り除いた形を言う。

当該方言の動詞の活用のそれぞれのタイプに所属する語が, 共通語における学校文法での分類のどれに対応するかというと, 子音語幹1動詞はラ行を除く五段活用(ただし, 「死ぬ」「食う」は除く)に, 子音語幹4動詞はカ行変格活用に, 子音語幹5動詞はサ行変格活用に, 母音語幹1動詞は, 上一段活用・下一段活用に, 母音語幹2動詞はラ行五段活用に, それぞれ対応する。子音語幹2動詞は「死ぬ」のみが, 子音語幹3動詞は「食う」のみが所属するが, 子音語幹2動詞に関しては, 共通語においてもナ行五段活用に所属する語は「死ぬ」のみであるから, それに対応すると言えるだろう。

以上が当該方言の動詞の活用の基本的なタイプの区分であり, すべての動詞がいずれかのタイプに所属するものと考えられるが, 現在のところ1語のみ例外的な動詞として「待つ」が見出されている。一部の表現形式を列挙すると次のようである。

madanε(否定), mazu(言い切り), mazuna(禁止), mazudero・mazuro(推量), mazunadaba(仮定), mazusage・mazuhage(原因理由), made(命令), madeba(仮定), madenε(可能否定), maderu(可能), mado(意思), madaseru(使役), madaeru(可能), madaenε(可能否定), maeda(過去)・maedaqke(過去回想), maede・mazude(中止), mazuderu・maederu(継続現在), maeqda(継続過去)

すなわち, 語幹が mad の子音語幹1動詞(言い切りは mazu), ならびに語幹が mazu もしくは mae の母音語幹1動詞(それぞれの予想される言い切りは mazuro・maeru)とが混ざったように見える。これが体系的に安定した存在で

あるのか、語彙的なゆれを背景に持つ不安定なものなのかは現在のところ確認できず、不明である。ここでは後者の可能性が高いと見て活用表には盛り込まなかったが、その確認は課題である。なお、庄内方言の「待つ」については井上(1979)にも言及があり(p. 1), そこでは語彙的なゆれとして扱われているようである。

2.1.2. 後続する助動詞・助詞など

活用表1には後続する助動詞・助詞等もしくは単独で表す意味・用法のうち、代表的なものを掲げた。それぞれの活用形には活用表1に挙げたもの以外にもさまざまな助動詞・助詞等が付き機能を担い得る。ここではそれらを掲げながら、活用表1に挙げたものも含めて、簡略な説明をほどこす(活用表で「活用形番号n」として示したものを以下では「活用形n」として述べる。また文脈から明らかな場合は単に“n”のみで述べることもある)。

活用形1に付く ne(否定)は neR で現れることもある。

活用形2に付く qde(希望)は qdeR で現れることもある。

活用形3には、他に、masu(丁寧), masune(丁寧否定)が付く。後者は前者の否定の形である。ただし、話者にとっては、masu はややよそゆきの語感があり、どこか共通語的な感覚は否めないようである。masune については「武家ことば=家中ことば」的、あるいは「町中の女性ことば」的な語感があり、まれに用いることはあってもあまりこなれてなじみのあるものではないらしい。そもそも活用表1に代表として挙げた sorda もどこか共通語的な語感があると言う。以上の点からすると活用形3は当該方言にとっては独立性の低いものと言うことができよう。なお、masu については国立国語研究所(1953)の中でも記述の対象として扱われており(p. 191他), 方言生活でのその使用は否定できないようにも思われる。国立国語研究所(1953)では、類似の意味を表す「ス」が終止形(本稿の扱いでは活用形4)について用いられることも記述されているが(p. 191他), これについては、話者は「内陸の山形市あたりの言い方」であって自分ではまったく用いないと言う。

活用形4は、他に、連体修飾にも用いられ、また *ndero*(推量)が付く。

活用形5は、他に、*dero* (推量), *domo* (逆接), *nadaba* (仮定)が付く。なお、*domo* は活用形10にも付く。

活用形6に付く *ro* (推量) は *ror* で現れることもある。また、他に、*sage* (原因理由), *gondaba* (仮定)が付く。*sage* は *hage* となることもあるが、意味は同じである。

活用形7は、他に、*kerō* (回想過去推量)が付く。

活用形8は、他に、*ba* (仮定)が付く。この場合の仮定は「～ば良かった」で代表される順接仮定条件であり、国立国語研究所(1993)に言う「仮定形1」に相当するものである(一方、活用形5の *nadaba*, 活用形6の *gondaba*は「仮定形2」に相当するものである)。なお、*ba* は活用形10にも付く。

活用形9に付く *ne*(否定)も *neR* で現れることもある。また、他に、*ru* (可能)が付く。ただし、可能の方は、可能否定と異なり母音語幹1動詞ならびに母音語幹2動詞との接続が不安定である。つまり、可能否定の *ne* は意味の制約さえなければどの動詞にも接続できるが、可能の *ru* はゆれがあるということである(今はその制限に働く規則については不明)。なお、活用形11も可能(さらに助動詞が付いた形で可能否定)を表現するが、それらの異なりについては、話者は人称の異なりを指摘する。活用形9は、主語として他人も自分自身も想定することができるが、他人を想定する方が言いやすいと言う。そして、それは特に可能否定の場合に顕著に感じられるようだ。

活用形10は、他に、*ba* (意志仮定), *domo* (意志逆接)が付く。*ba* は活用形8に、*domo* は活用形5にも付くが、それらと較べると動詞に意志的な意味合いが含まれているものである。その点で活用形8に*ba*が付いた形が表すとした順接仮定条件や「仮定形1」、活用形5に *domo* が付いた形の逆接などのような単純な接続表現よりはやや複雑なモーダルな意味を含むものと言える。

活用形11-1は、他に、*haru* (尊敬), *eru* (受身・可能), *seraeru* (使役受身), *eneR* (可能否定)が付く。活用形9でも述べたようにここでの可能・可能否定は活用形9の可能・可能否定とは人称に異なりを感じるらしく、活用形9が他

人もしくは自分自身を主語として想定させるが、活用形11は、自分自身を主語として表現しているという語感が強く、他人を主語に想定するとかなり使いくにくいと言う(この点は三矢(1932)の記述(p. 287)に一致する)。そして、その点は活用形9の場合と同様に、可能否定の場合に明確なようである。可能表現について「状況可能」「能力可能」の枠組みによる使い分けが指摘されることが多く、それに基づいた枠組みも引き出そうとしたが、当該話者にとってはその枠組みによる使い分けの意識はないようであった。

活用形11-2は、他に、saharu・raharu (尊敬), raeru (受身・可能), raseraeru (使役受身), raenecr (可能否定)が付く。これらは、活用形11-1と活用のタイプの異なりによる相補分布をなすもので、意味的には同じである。

活用形12は、他に、te・de (中止), tesumata・desumata (～てしまった), taqke・daqke (過去回想), taro・daro (過去推量), tadero・dadero (過去推量)が付く。これらの頭がtであるか、dであるかは各活用のタイプについて説明する中で記述することとする。

活用形13についても、頭が qt であるか、qd であるか、nd であるか、また d であるかは各活用のタイプの説明の中で扱う。他に、qtaqke・qdaqke・daqke (継続過去回想)が付く(ndaqke は未確認)。

以上、ごく簡略に用法などの説明を行った。各活用のタイプの説明の中でも繰り返し述べることもあろうし、2.4.には具体的な語形や文例を挙げるので、多少詳しい説明をそちらでほどこすこともある。ゆえに、そちらも参照することが求められる。また、各表現形式に対するネーミングも必ずしもくわしい文法的な意味の記述を通してのものではない。特にテンス・アスペクト関係の文法的な記述については、V章に詳しいので参照のこと。

なお、以上の他、活用形式に深く関わるものとして荒井(1989)の記述する「サテル形」も使用を尋ねてみたが、当該の話者においては語彙的に kagateru (書いてある), toqateru (研いである)が現れるが、かなり語彙的なものであるらしく生産的な形式として用いられてはいないようであったので活用表には盛り込まなかった。また、me (否定推量・否定意志)は、やや複雑な接続を

示すことがわかっているが、十分な結果が得られないままで中断している。これを盛り込むことでまだ活用形が一つくらいは増えると思われるが、課題とする。

2.2. 各活用のタイプの記述

以下では、動詞の各活用のタイプについて、2.1.1. で述べた共通語との対応を念頭に置いた上で読む際のわかりやすさを優先して、「子音語幹1動詞」「子音語幹2動詞」「子音語幹3動詞」「母音語幹1動詞」「母音語幹2動詞」「子音語幹4動詞」「子音語幹5動詞」の順に記述を行う。

2.2.1. 子音語幹1動詞

子音語幹1動詞の活用表を活用表2に掲げる。

このタイプの活用は音便語幹を持つのが特徴である。

音便語幹とは語幹の末尾の子音が独立したモーラに共時的に交替することにより形成される語幹を言う。

当該方言における子音語幹1動詞の音便語幹は次のように、語幹末子音を交替させることによって決まる。

$g \rightarrow i$, $\eta \rightarrow i$, $d \rightarrow$ なし, $w \rightarrow$ なし, $b \rightarrow N$, $m \rightarrow N$

ただし、語幹末子音が g のもののうち eg 「行く」のみは、

$g \rightarrow$ なし

のようになる(なお、上記の $d \cdot w \cdot g$ (「行く」のみ)のように子音が脱落して形成されるものまで音便語幹とするのはいささか ad hoc で、このような方法を援用しすぎると、当該方言の母音語幹2動詞までここに含めることが不可能でなくなったり、当該方言を離れて、全国各地の方言の記述を行う際やそれを通して通時的な考察をする場合に問題になることが考えられ、さらに検討が必要である)。

活用表 2 子音語幹 1 動詞

活用形 番号	書く	行く	研ぐ	出す	立つ	買う	飛ぶ	飲む	語幹 語幹末子音 主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独の意味・用法
	kag	eg	tog	das	tad	kaw	tob	nom	
	g	g	ŋ	s	d	w	b	m	
1	a	a	a	a	a	a	a	a	nε(否定)
2	i	i	i	u	*u	*e	i	i	qdc(希望)
3	i	i	i	u	*u	*e	i	i	sorda(様態)
4	u	u	u	u	*u	*u	u	u	言い切り
5	u	u	u	u	*u	*u	u	u	na(禁止)
6	u	u	u	u	*u	*u	u	u	ro(推量)
7	u	u	u	u	*u	*u	u	u	ke(過去回想)
8	e	e	e	e	e	*e	e	e	命令
9	e	e	e	e	e	*e	e	e	nε(可能否定)
10	o	o	o	o	o	*o	o	o	意志
11	a	a	a	a	a	a	a	a	seru(使役)
12-1	×	@e	×	u	@ta	@ka	×	×	ta(過去)
12-2	@kae	×	@toe	×	×	×	@ton	@non	da(過去)
13-1	×	@e	×	u	@ta	@ka	×	×	qta(継続過去)
13-2	@kae	×	×	×	×	×	×	×	qda(継続過去)
13-3	×	×	@toe	×	×	×	×	×	nda(継続過去)
13-4	×	×	×	×	×	×	@ton	@non	da(継続過去)

表中“*”を付けたものは語幹末子音と語尾とをつないだ際に次のように実現する。

語幹末子音 語尾 実現形

$$d + u = zu$$

$$w + u = u$$

$$w + e = e$$

活用形2・3は語幹末子音が s・d・w の列が他の列と整合していないが、これは音韻上の制約によるものである。すなわち su/si・zu/zi が区別されず su・zu に統合され、e/i も区別されずeに統合されていることが効いていると見ることができる。

活用表1に示した活用形11-2は該当する活用形が存在しないので省略し、表では活用表1における11-1を11として示した。

活用形12-1・2ならびに13-1・2・3・4はそれぞれ後続の助動詞に応じて相補分布的に現れるものである。なお、語幹末子音がŋのものは活用形12-2が“da”に接続することがあり、他はこのように現れることはない。ただし、1.でも述べたとおり、当該の話者にとって d/ä の対立はもはやかなりあいまいになりつつあり、全体にわたって明確に引き出すことはできなかったことから上記のように記述することとした。

2.2.2. 子音語幹2動詞

子音語幹2動詞は「死ぬ」1語のみである。

子音語幹2動詞の活用表を活用表3に掲げる。

このタイプの活用も音便語幹を持つのが特徴である。

当該方言における子音語幹2動詞の音便語幹は語幹末子音のnをNに交替させる。

また、活用表1に示した活用形11-2は該当する活用形が存在しないので省略し、表では活用表1における活用形11-1を11として示した。

2.2.3. 子音語幹3動詞

子音語幹3動詞は「食う」1語のみである。

子音語幹 3 動詞の活用表を活用表 4 に掲げる。

子音語幹 1 動詞・子音語幹 2 動詞同様に, 活用表 1 に示した活用形11-2は該当する活用形が存在しないので省略し, 表では活用表 1 における活用形11-1を11として示した。

活用表 3 子音語幹 2 動詞

活用形 番号	死ぬ	
	sun	語幹
	n	語幹末子音
		主な後統の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	a	ne(否定)
2	i	qde(希望)
3	i	sorda(様態)
4	u	言い切り
5	@SUN	na(禁止)
6	u	ro(推量)
7	@SUN	ke(回想過去)
8	e	命令
9	e	ne(可能否定)
10	o	意志
11	a	seru(使役)
12	@SUN	da(過去)
13	@SUN	da(継続過去)

活用表 4 子音語幹 3 動詞

活用形 番号	食う	
	k	語幹
		主な後統の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	a	ne(否定)
2	ue	qde(希望)
3	ue	sorda(様態)
4	u	言い切り
5	UN	na(禁止)
6	u	ro(推量)
7	uq	ke(回想過去)
8	e	命令
9	e	ne(可能否定)
10	o	意志
11	a	seru(使役)
12	u	ta(過去)
13	u	qta(継続過去)

2.2.4. 母音語幹1動詞

母音語幹1動詞の活用表を活用表5に掲げる。

語幹の末尾の母音(以下, 語幹末母音)は i・u・e・ε の3種類である。

活用表5 母音語幹1動詞

活用形 番号	起きる	落ちる	開ける	呉れる	答える	
	ogi	ozu	age	ke	kodε	語幹
	i	u	e	e	ε	語幹末母音
						主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	-	-	-	-	-	ne(否定)
2	-	-	-	-	-	qde(希望)
3	-	-	-	-	-	sorda(様態)
4	ru	ru	ru	ru	ru	言い切り
5	N	N	N	N	N	na(禁止)
6	q	q	q	q	q	ro(推量)
7	q	q	q	q	q	ke(回想過去)
8	re	re	re	re	re	命令
9	re	re	re	re	re	ne(可能否定)
10	ro	ro	ro	ro	ro	意志
11	-	-	-	-	-	raseru(使役)
12	-	-	-	-	-	da(過去)
13	-	-	-	-	-	qda(継続過去)

活用表1に示したとおり活用形11-1はないので,ここでは11-2を活用形11として示した。

2.2.5. 母音語幹 2 動詞

母音語幹 2 動詞の活用表を活用表 6 に掲げる。語幹末母音は a・i・u・e・ε・o の 6 種類ある。

活用表 6 母音語幹 2 動詞

活用形 番号	割る	当る	握る	作る	捻る	蹴る	帰る	取る	有る	
	wa	ada	nigi	cugu	hine	ke	ke	to	a	語幹
	a	a	i	u	e	e	ε	o	a	語幹末母音 主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	-	-	-	-	-	-	-	-	ϕ	ne(否定)
2	-	-	-	-	-	-	-	-	ϕ	qde(希望)
3	ri	ri	ri	ri	ri	ri	ri	ri	ri	sorda(様態)
4	ru	ru	ru	ru	ru	ru	ru	ru	ru	言い切り
5	n	n	n	n	n	n	n	n	ϕ	na(禁止)
6	q	q	q	q	q	q	q	q	q	ro(推量)
7	q	q	q	q	q	q	q	q	q	ke(回想過去)
8	re	re	re	re	re	re	re	re	ϕ	命令
9	re	re	re	re	re	re	re	re	ϕ	ne(可能否定)
10	ro	ro	ro	ro	ro	ro	ro	ro	ϕ	意志
11	-	-	-	-	-	-	-	-	ϕ	raseru(使役)
12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ta(過去)
13	-	-	-	-	-	-	-	-	ϕ	qta(継続過去)

活用表 1 における活用形 11-1 はないので、ここでは活用形 11 として示した。

全体に母音語幹 1 動詞と似ているが、次の点が異なる。

一つは、活用形 3 に活用語尾 ri の現れる点である。ただし、先に 2.1. でも

述べたとおりこの活用形3は位相的な問題を含んでおり、その存在はやや希薄である。そういう点ではかなり母音語幹1動詞に近いと言える。

しかしながら、活用形12・13は、母音語幹1動詞がそれぞれ da・qda に接続するのにたいし、母音語幹2動詞はそれぞれ ta・qta に接続し、この点は体系的に異なっている。これを相補分布的と見るのも語幹末母音などの異なりも見られず無理がある。

以上の点から、母音語幹1動詞と母音語幹2動詞は、活用体系上異なるタイプに分類すべきものと考えられる。

表中“ ϕ ”で示したのはその活用形が文法の意味体系上その形が存在しないことを示す。「有る」にそれが現れるが、活用の枠組みとしては活用表6に納まることからここに分類することに問題はないであろう。

2.2.6. 子音語幹4動詞

子音語幹4動詞動詞の活用表を活用表7に掲げた。

このタイプの動詞は「来る」のみである。

活用表1における活用形11-1はないので、ここでは活用形11として示した。

なお、活用形9は、ke に近く現れることもあるが、話者の分節意識としては、ki+eであるらしい。そこで、ここでは、kie を活用表に取り入れた。

2.2.7. 子音語幹5動詞

子音語幹5動詞動詞の活用表を活用表8に掲げた。

このタイプの動詞は「為る」のみである。

活用表1における活用形11-2はないので、ここでは活用形11として示した。

活用形9は、se に近く現れることもあるが、話者の分節意識としては、su+eであるらしいので、ここでは sue を活用表に取り入れた。

活用表7 子音語幹4動詞

活用形 番号	来る	
	k	語幹 主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	o	ne(否定)
2	i	qde(希望)
3	i	sorda(様態)
4	uru	言い切り
5	un	na(禁止)
6	uq	ro(推量)
7	uq	ke(回想過去)
8	oe	命令
9	ie	ne(可能否定)
10	o	意志
11	o	raseru(使役)
12	i	ta(過去)
13	i	qta(継続過去)

活用表8 子音語幹5動詞

活用形 番号	為る	
	s	語幹 主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	a	ne(否定)
2	u	qde(希望)
3	u	sorda(様態)
4	uru	言い切り
5	un	na(禁止)
6	uq	ro(推量)
7	uq	ke(回想過去)
8	e	命令
9	ue	ne(可能否定)
10	o	意志
11	a	seru(使役)
12	u	ta(過去)
13	u	qta(継続過去)

2.3. 通時的考察

当該方言の活用体系を中央語と対比した上で、通時的に問題となるいくつかの点についての解釈を行う。ここでは活用体系上問題となるものについて述べることにし、個別の語形の変化などについてはいちいちを扱うことはしない。なお、関連する問題を扱った先行研究としては井上(1974・1976・1979・1981a・1981b)がある。さらに江戸時代の洒落本・滑稽本との対比を試みたものとして石川(1977・1978)がある。

2.3.1. 活用形式の変化

子音語幹2動詞が子音語幹1動詞と異なるタイプに属しているが、これについては「死ぬ」の末尾のヌが後続する助動詞・助詞などの頭の音との関係で撥音に変化したまでのことで、通時的には子音語幹1動詞と同じタイプに属していたものと考えてよいと思われる。古典語のナ変型の活用とは無関係であろう。

子音語幹3動詞は個別の変化を通して生じたものと考えられる。中央語との対応上、同等の活用の類(ここでは大西(1993a)の分類に言う「四段類は行」, 「活用の類」については後述)に属し、語幹末子音の直前(大西(1993a)の分類では「-2モーラ段」と呼ぶ)が、「う段」という類似の音環境を有する他の語の活用は、子音語幹1動詞の語幹末子音がwのものと同じである。活用表9にそれを示した。これでもわかるとおり、「食う」は特殊である。そして、「食う」が通時的に特殊な活用を有することは北奥方言一般に見られることであり、語彙的な問題をはらんだ言語地理学的な観点から扱うべきものと考えられる。

子音語幹5動詞は井上(1979)の指摘もあるとおり、子音語幹1動詞の活用と類似している点がある。しかしながら同じになっていないことは活用表1でも明らかであろう。

当該方言の大きな特徴としては母音語幹1動詞と母音語幹2動詞の活用の類似することが挙げられる。この点をかなり早い時期に指摘したのは、先述のとおり斎藤(1936)であった。そこではこの二つの活用のタイプに異なりがなく、同じに扱えるように記述されているが、挙げられているデータを見てもタ・ダの接続に異なりがあるようである。すなわち、「刈る・切る」は「カて、きタ」となるむねが記述されている(p. 18)が、「枯れる」は「カれダ、カれつダ」となるようである(p. 25)。このように斎藤(1936)のデータを見ても二つのタイプに異なりがあり、その点を見直せば、結果的に本稿での記述と矛盾するものではない。むしろ、積極的に斎藤秀一の記述を裏付けたものとも言えよう。なお、部分的ではあるが、このような傾向について言語地理学的に指摘したものとして井上(1981b)があり、「わからない」がワガネアとなる地域についての

指摘が見られる。

活用表 9 四段類は行 - 2 モーラう段

活用形 番号	縫う	狂う	
	nuw	kuruw	語幹
	w	w	語幹末子音
	主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法		
1	a	a	ne(否定)
2	*e	∅	qde(希望)
3	*e	*e	sorda(様態)
4	*u	*u	言い切り
5	*u	*u	na(禁止)
6	*u	*u	ro(推量)
7	*u	*u	ke(過去回想)
8	*e	*e	命令
9	*e	∅	ne(不可能)
10	*o	∅	意志
11	a	a	seru(使役)
12	∅nu	∅kuru	ta(過去)
13	∅nu	∅kuru	qta(継続過去)

さて、上記の二つのタイプの近似化はそれぞれのタイプの対応する活用の類が別個に変化を遂げて近似化したものと考えられる。話をやや先取りして述べることになるが、母音語幹 1 動詞は上一段類、上二段類、下二段類が対応する。母音語幹 2 動詞は四段類ら行、下一段類、ラ変類が対応する。

母音語幹 1 動詞においては、まず対応するそれぞれの類が一段化を起こし

活用語尾に関して統合し、語幹末母音を除けば、活用語尾の形式に異なりを失ったと考えられる。その後の変化については、次のようにとらえるのが一般的であろう。すなわち、語尾にrを含むこと(特に終止形の末尾が-ruであること)から四段類ら行への類推により近似化を起し、活用体系の単純化がはかられた。「一段動詞の四段化(五段化)」としばしば言われてきたものであり、このような上一段類、上二段類、下二段類と四段類ら行との近似する事象は特に珍しいことではないことはよく知られているとおりでである。この地域に関しては、一段活用に統合した前者の命令形が～レの形で現れることを引き合いにして例証されることが多い。この点は、国立国語研究所(1991)の85～88図を参照すれば、まさに当該地域がその分布の中に位置していることがわかる。今述べたのは命令形に関するものであるが、さらに個別の現象に目を向ければ類似のことが全国的に見られることについては古くから指摘がある(橘(1937))。

当該方言で関連する事象として、使役の助動詞の活用形11-2に接続する形式 raseru についても、本稿の記述では raseru を助動詞として扱ったが、これを分割してraを動詞の活用語尾に seru を助動詞に分類すればさらにその傾向を裏付けるものと言えるのかもしれない。当該方言では子音語幹4動詞(「来る」)までも koraseru (来させる)となることからそのような記述は採らなかつたが、斎藤(1936)は、使役の助動詞(原文では複語尾)はseru(原文では「シ^ハエル」)のみで記述しており(すなわちraまでを動詞と認定する立場をとっている)、その他、raseru が用いられている方言での記述を見るとraを助動詞ではなく動詞に含める記述がまゝあり(本堂(1982)p. 252, 高橋(1986)p. 62など)、それも地元の研究者がそのような記述を採っているところを見るとあるいは ra までを動詞と分節する意識があるのかもしれない。

なお、ここまでの通時的記述においては以上の傾向を四段類ら行に近似する事象として述べたが、あくまでも文献で確認できる形をもとに考えたからこのようにとらえられるのであって、本当にその変化が近似「化」と言えるのかどうかについてはさらに考察が必要なようにも思われる。特に全国的に見

て完全に四段類ら行と同じになっている方言が少ないことを考え合わせると、文献に見られる語形から離れて、さらに考えるべきことは多いように思われ、慎重な扱いを行いたい。

一方、母音語幹 2 動詞においてもそれぞれの対応する類が活用語尾に関して統合した後、未然形語尾「ら」が, tonne「取らない」のように撥音に変化を起し, そこから撥音の脱落を経て, 現在の活用形 1 の tone が生じたものと考えられる。撥音nから ne の語頭への調音の移動はいかにもそのような脱落を発生させやすい。また, 同時に当該方言では「た」「て」への接続において規則的に促音便の脱落が見られ, これも近似化を誘発するものとなったことが考えられる。さらにはいわゆる連用形に相当する形態の勢力がきわめて弱いことは, 活用形 3 の存在そのものへの疑問からも推測されるとおりで, このことも変化の要因として考えられよう。

以上のように, 別の途をたどって母音語幹 1 動詞と母音語幹 2 動詞は近似化したと考えられるが, このように類似すると, 連用形(活用形 3)の勢力がさらに衰え, 同時に語中の有声化に関する規則が単純化するとまったく合一していったであろうことが考えられる。残念ながらその前に共通語化の波を被って, おそらくその道はとだえてしまったものと思われる。

2.3.2. 活用の類との対応

活用の類とは古典語に見られる活用のタイプに基づく語群の区分を指すものであり, その全体については大西(1993a)としてデータを示し, その概念についても大まかに説明した。現在, 活用の類としては, 「四段類」「上一段類」「上二段類」「下一段類」「下二段類」「カ変類」「サ変類」「ナ変類」「ラ変類」の九つの類を立てている。これらの類と当該方言における各活用のタイプの分類との対応関係ならびに類の統合状態を, 現代共通語の活用の学校文法における共時的分類(五段・上一段・下一段・カ変・サ変)と対比して示すと図のように示すことができる。

一見ナ変類が四段類ら行以外と統合していないように見えるが, 実際はナ

変類が四段類といったん統合した後に個別に音の変化を経て分れたこと、また、四段類ら行とラ変類・下一段類も四段類ら行以外と分れているように見えるが、これも実際にはそれらが統合した後に体系的に分れたことは先に2.3.1.に述べたとおりである。なお、共通語での上一段・下一段の区別は語幹末の母音による区別に過ぎないから、活用体系として考えれば實際上これらは同じタイプに属するもの(類は統合している)と見ることができる。

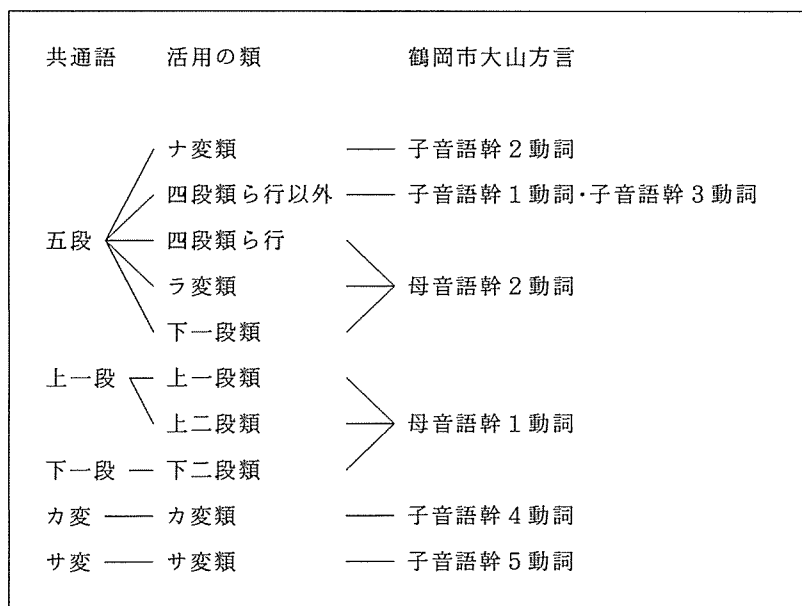


図 活用の類の対応

結局、当該方言の動詞の活用の通時的な状況としては、現代共通語のそれと大きく異なるものではない。むしろ現代共通語のような類の統合の状況を経て、そこから現代共通語における五段のナ行(活用の類におけるナ変類)、ラ行(活用の類における四段類ら行・下一段類・ラ変類)がそれぞれの持つ活用上の音韻ならびに形態的な条件により分化したものと考えられる。つまり、端的に述べるならば現代共通語のような状況よりもさらに新しい状態にあるとも

言えるわけである。ただし、ここでは現代共通語との対応のみを念頭に置いたからこのように言うのであって、本来ならばさらに諸方言との対応から通時的な対応を考察していく必要がある。ゆえに、このことをもって、通時的な対応として現代共通語の状況が当該方言の活用体系の直接の母体となっていると速断することは危険であるし、実際そうではないだろう。しかしながら、類の統合から見た場合、通時的な大きな流れの中でとらえるならば、上記のように考えることは誤りではないはずである。

なお、下一段類については「た」「て」との接続のようすから見ても、当該方言においては四段類ら行やラ変類と統合していることは明らかである。現代共通語においてもこの点は同じであるが、共通語のわずかに古い時代についてはさらに考慮すべき点がある(橋本・岩淵(1933))。特に現時点でも下一段類がいかにも下一段的な形態(すなわちケネー「蹴らない」/ケロ「蹴れ」/ケタ「蹴った」)で東京周辺に分布が見られる点は無視しがたい(国立国語研究所(1991)82図・89図・104図、また、方言区画上やや地域は離れ、扱う表現形式に異なりもあるが大森(1931)も参照)。このように現代共通語ならびにその基盤としての東京語における下一段類を通時的に扱うにあたっては、配慮すべき問題点が残されていると考えられ、現状からの速断は禁物で、慎重さが求められる。

2.4. 動詞の活用の語形例・文例

以下には、実際の表現形を活用形ごとに、まず、後続する助動詞・助詞など(これらについては“-”を頭に付けて示す)ならびに単独での意味・用法で分類し、さらに活用のタイプで分類して示す。また、文例の得られているものについては1行下にそれを示す。そして、それぞれの語形・文例の後に()でくくって、共通語訳ならびに注記を示す。また、語形について用法に関する話者の注記が得られているものについてはそれを〈 〉内に示す。

活用のタイプに基づく分類は次のように略号で示すことにする。子音語幹

1 動詞においては語幹末子音でも、母音語幹動詞においては語幹末母音でもそれぞれ分類して示す。それらの子音ならびに母音については、“-”の後に示すこととする。

その他、単語の用法が理解しにくいと思われるものや俚言形については、活用形4の「言い切り」において簡単にコメントを付す。

分類の略号

子音語幹1 動詞 : C1-g

C1-ŋ

C1-s

C1-d

C1-w

C1-b

C1-m

子音語幹2 動詞 : C2

子音語幹3 動詞 : C3

母音語幹1 動詞 : V1-i

V1-u

V1-e

V1-ε

母音語幹2 動詞 : V2-a

V2-i

V2-u

V2-e

V2-ε

V2-o

子音語幹4 動詞 : C4

子音語幹5 動詞 : C5

タイプ等による分類の配列はこの順に従い,それぞれの分類の中は,語の長さ(短>長),語形をおおまかに共通語に対応させての50音順に従って並べている(ただし,C1-gのみは「行く」を後に回した)。

活用形1

-ne(否定)

C1-g	kagane(書かない)
C1-g	egane(行かない)
C1-g	tojane(研がない)
C1-s	kasane(貸さない)
C1-s	dasane(出さない)
C1-d	tadane(立たない)
C1-w	kawane(買わない)
C1-w	nuwane(縫わない)
C1-w	bowane(追わない)
C1-w	ewane(言わない)
C1-w	jowane(酔わない)
C1-w	udawane(歌わない)
C1-w	kajowane(通わない)
C1-w	kuruwane(狂わない)
C1-w	kosjawane(拵えない)
C1-w	hirowane(拾わない)
C1-b	tobane(飛ばない)
C1-m	nomane(飲まない)
C2	sunane(死なない)
C3	kanε(食わない)
V1-i	mine(見ない)
V1-i	agine(飽きない)

V1-i	ogine(起きない)
V1-i	karine(借りない)
V1-u	ozune(落ちない)
V1-u	tozune(綴じない)
V1-e	ene(居ない)
V1-e	kene(呉れない)
V1-e	nene(寝ない)
V1-e	agene(開けない)
V1-e	erne(入れない)
V1-e	oene(生えない)
V1-e	osene(教えない)
V1-e	kikene(聞こえない)
V1-e	harene(晴れない)
V1-e	merne(見えない)
V1-e	moene(燃えない)
V1-e	wasene(忘れない)
V1-e	kagurene(隠れない)
V1-e	suzugene(押し付けない)
V1-e	soroene(揃えない)
V1-e	kodene(答えない)
V1-e	toqkene(取り替えない)
V2-a	kane(刈らない)
V2-a	wane(割らない)
V2-a	adane(当らない)
V2-a	ogane(育たない)
V2-a	kadane(仲間に入れない)
V2-a	azubane(集らない)
V2-i	kine(切らない)

V2-i	nijine(握らない)
V2-u	une(売らない)
	unesorda(売らないそうだ。)
	unegunata(売らなくなった。)
V2-u	cugune(作らない)
V2-u	miogune(見送らない)
V2-e	kene(蹴らない)
V2-e	nene(練らない)
V2-e	nimene((雪が)柔らかくならない)
V2-e	hinene(捻らない)
V2-e	kene(帰らない)
V2-e	merne(参らない)
V2-o	tone(取らない)
V2-o	nobone(上らない)
C4	koner(来ない)
C5	saner(しない)

活用形 2

-qde(希望)

C1-g	kagiqde(書きたい)
C1-g	egiqde(行きたい)
C1-ŋ	toniqde(研ぎたい)
C1-s	dasuqde(出したい)
C1-d	tazuqde(立ちたい)
C1-w	kaeqde(買いたい)
C1-w	nueqde(縫いたい)
C1-w	boeqde(追いたい)
C1-w	erqde(言いたい)
C1-w	joeqde(酔いたい)

V2-a	kaqde(刈りたい)
V2-a	waqde(割りたい)
V2-a	adaqde(当りたい)
V2-a	oŋaqde(育ちたい)
V2-a	kadaqde(仲間に入りたい)
V2-a	azubaqde(集りたい)
V2-i	kiqde(切りたい)
V2-i	niŋiqde(握りたい)
V2-u	uqde(売りたい)
V2-u	cuguqde(作りたい)
V2-u	mioguqde(見送りたい)
V2-e	keqde(蹴りたい)
V2-e	neqde(練りたい)
V2-e	hineqde(捻りたい)
V2-ε	keqde(帰りたい)
V2-ε	mεrqde(参りたい)
V2-o	toqde(取りたい)
V2-o	noboqde(上りたい)
C4	kiqde(来たい)
	asutamo kosa kiqdenor(明日もここへ来たいなあ。)
C5	suqde(したい)
	gor suqdenor(暮をしたいたいなあ。)

活用形 3

-sorda(様態)

C1-g	kagisorda(書きそうだ)
C1-g	egisorda(行きそうだ)
C1-ŋ	toŋisorda(研ぎそうだ)
C1-s	dasusorda(出しそうだ)

C1-d	tazusorda(立ちそうだ)
C1-w	kaesorda(買いそうだ)
C1-w	nuesorda(縫いそうだ)
C1-w	boesorda(追いそうだ)
C1-w	ersorda(言いそうだ)
C1-w	joesorda(酔いそうだ)
C1-w	udaesorda(歌いそうだ)
C1-w	kajoesorda(通いそうだ)
C1-w	kuruesorda(狂いそうだ)
C1-w	hiroesorda(拾いそうだ)
C1-b	tobisorda(飛びそうだ)
C1-m	nomisorda(飲みそうだ)
C2	sunisorda(死にそうだ)
C3	kuesorda(食いそうだ)
V1-i	misorda(見そうだ)
V1-i	ogisorda(起きそうだ)
V1-u	ozusorda(落ちそうだ)
V1-u	tozusorda(綴じそうだ)
V1-e	esorda(居そうだ)
V1-e	kesorda(呉れそうだ)
V1-e	agesorda(開けそうだ)
V1-e	ersorda(入れそうだ)
V1-e	oesorda(生えそうだ)
V1-e	osesorda(教えそうだ)
V1-e	haresorda(晴れそうだ)
V1-e	mersorda(見えそうだ)
V1-e	moesorda(燃えそうだ)
V1-e	wasesorda(忘れそうだ)

V1-e	kaguresorda(隠れそうだ)
V1-e	suzugesorda(押し付けそうだ)
V1-e	soroesorda(揃えそうだ)
V1-ε	kodesorda(答えそうだ)
V1-ε	toqkesorda(取り替えそうだ)
V2-a	arisorda(有りそうだ)
V2-a	karisorda(刈りそうだ)
V2-a	warisorda(割りそうだ)
V2-a	adarisorda(当りそうだ)
V2-a	oḡarisorda(育ちそうだ)
V2-a	kadarisorda(仲間に入れそうだ)
V2-a	azubarisorda(集りそうだ)
V2-i	kirisorda(切りそうだ)
V2-i	nigirisorda(握りそうだ)
V2-u	urisorða(売りそうだ)
V2-u	cugurisorða(作りそうだ)
V2-u	miogurisorða(見送りそうだ)
V2-e	kerisorða(蹴りそうだ)
V2-e	nerisorða(練りそうだ)
V2-e	nimerisorða((雪が)柔らかくなりそうだ)
V2-e	hinerisorða(捻りそうだ)
V2-ε	kerisorða(帰りそうだ)
V2-ε	mεrrisorða(参りそうだ)
V2-o	torisorða(取りそうだ)
V2-o	noborisorða(上りそうだ)
C4	kisorða(来そうだ)
C5	susorda(しそうだ)

C1-g	kagimasu(書きます)
C1-g	egimasu(行きます)
C1-ŋ	tojimasu(研ぎます)
C1-s	dasumasu(出します)
C1-d	tazumasu(立ちます)
C1-w	kaemasu(買います)
C1-w	ermasu(言います)
C1-w	kosjaemasu(搾えます)
C1-b	tobimasu(飛びます)
C1-m	nomimasu(飲みます)
C2	sunimasu(死にます)
V1-i	mimasu(見ます)
V1-i	ogimasu(起きます)
V1-e	agemasu(開けます)
V2-a	arimasu(有ります)
V2-u	urimasu(売ります)
V2-e	kerimasu(蹴ります)
V2-o	torimasu(取ります)
C4	kimasu(来ます)
C5	sumasu(します)

-masune(丁寧否定)

C1-g	kagimasune(書きません)
C1-g	egimasune(行きません)
C1-ŋ	tojimasune(研ぎません)
C1-s	dasumasune(出しません)
C1-d	tazumasune(立ちません)
C1-w	kaemasune(買いません)
C1-b	tobimasune(飛びません)

C1-m	nomimasune(飲みません)
C2	sunimasune(死にません)
V1-i	mimasune(見ません)
V1-i	ogimasune(起きません)
V1-e	nemasune(寝ません)
V1-e	agemasune(開けません)
V2-a	arimasune(有りません)
V2-e	kerimasune(蹴りません)
V2-o	torimasune(取りません)
C4	kimasune(来ません)
C5	sumasune(しません)

活用形 4

言い切り

C1-g	kagu(書く)
C1-g	egu(行く)
C1-g	ko <u>gu</u> (漕ぐ)
C1-g	to <u>gu</u> (研ぐ)
C1-s	kasu(貸す)
C1-s	dasu(出す)
C1-d	tazu(立つ・建つ)
C1-w	kau(買う)
C1-w	nu <u>r</u> (縫う)
C1-w	bu <u>u</u> (追う)
C1-w	ju <u>r</u> (言う)
C1-w	ju <u>u</u> (酔う)
C1-w	uda <u>u</u> (歌う)
C1-w	ka <u>ju</u> (通う)
C1-w	ku <u>ru</u> (狂う)

C1-w	kosjau(拵える)
C1-w	hirou(拾う)
C1-b	tobu(飛ぶ)
C1-m	nomu(飲む)
C2	sunu(死ぬ)
C3	ku(食う)
V1-i	miru(見る)
V1-i	agiru(飽きる)
V1-i	ogiru(起きる)
V1-i	kariru(借りる)
V1-u	ozuru(落ちる)
V1-u	tozuru(綴じる)
V1-e	eru(居る)
V1-e	keru(呉れる：この語の意味・用法についてはⅦ章参照)
V1-e	neru(寝る)
V1-e	ageru(開ける)
V1-e	erru(入れる)
V1-e	oeru(生える)
	ke oeru(毛が生える。)
V1-e	oseru(教える)
V1-e	kikeru(聞こえる)
V1-e	taderu(建てる)
V1-e	hareru(晴れる)
V1-e	merru(見える)
V1-e	moeru(燃える)
V1-e	waseru(忘れる)
V1-e	kagureru(隠れる)
V1-e	suzugeru(押し付ける：佐藤(1992)p. 107参照)

V1-e	soroeru(揃える)
V1-e	magaseru(任せる)
V1-e	koðeru(答える)
V1-e	toqkeru(取り替える)
V2-a	aru(有る)
V2-a	karu(刈る)
V2-a	waru(割る)
V2-a	adaru(当る)
V2-a	oqaru(育つ：佐藤(1992)p. 172参照)
V2-a	kadaru(仲間に入れる：佐藤(1992)p. 116参照)
V2-a	azubaru(集る)
V2-i	kiru(切る)
V2-i	niqiru(握る)
V2-u	uru(売る)
V2-u	cuguru(作る)
V2-u	mioquru(見送る)
V2-e	keru(蹴る)
V2-e	neru(練る：納豆などを)
V2-e	nimeru((雪が)柔らかくなる：佐藤(1992)p. 54参照)
V2-e	hineru(捻る)
V2-e	keru(帰る)
V2-e	merru(参る：神社に)
V2-o	toru(取る)
V2-o	noboru(上る)
C4	kuru(来る)
C5	suru(する)
連体修飾	
C1-g	kagu hito(書く人)

- C1-g egu hito(行く人)
 C1-n togu hito(研ぐ人)
 C1-s dasu hito(出す人)
 C1-d tazu hito(立つ人)
 C1-w kau hito(買う人)
 C1-w jur hito(言う人)
 C1-b tobu tori(飛ぶ鳥)
 C1-m nomu hito(飲む人)
 C2 sunu tori(死ぬ鳥)
 C3 ku hito(食う人)
 V1-i miru hito(見る人)
 V1-i ogiru hito(起きる人)
 V1-e ageru hito(開ける人)
 V2-a aru hito(有る人)
 zeni aru hito(お金が有る人。)
 V2-e keru hito(蹴る人)
 V2-o toru hito(取る人)
 C4 kuru hito(来る人)
 kosa kuru hito(ここに来る人。)
 C5 suru hito(する人)
- ndero(推量)
- C1-g kagundero(書くのだろう)
 C1-g egundero(行くのだろう)
 C1-n togundero(研ぐのだろう)
 C1-s dasundero(出すのだろう)
 C1-d tazundero(立つのだろう)
 C1-w kaundero(買うのだろう)
 C1-b tobundero(飛ぶのだろう)

C1-m	nomundero(飲むのだろう)
C2	sunundero(死ぬのだろう)
V1-i	mirundero(見るのだろう)
V1-i	ogirundero(起きるのだろう)
V1-e	nerundero(寝るのだろう)
V1-e	agerundero(開けるのだろう)
V2-a	arundero(有るのだろう)
V2-u	urundero(売るのだろう)
V2-e	kerundero(蹴るのだろう)
V2-o	torundero(取るのだろう)
C4	kurundero(来るのだろう)
C5	surundero(するのだろう)

活用形 5

-na(禁止)

C1-g	kaguna(書くな)
C1-g	eguna(行くな)
C1-g	toḡuna(研ぐな)
C1-s	dasuna(出すな)
C1-d	tazuna(立つな)
C1-w	kauna(買うな)
C1-w	nurna(縫うな)
C1-w	bouna(追うな)
C1-w	jurna(言うな)
C1-w	jouna(酔うな)
C1-w	udauna(歌うな)
C1-w	kajouna(通うな)
C1-w	kururna(狂うな)
C1-w	kosjauna(拵えるな)

C1-w	hirouna(拾うな)
C1-b	tobuna(飛ぶな)
C1-m	nomuna(飲むな)
C2	sunna(死ぬな)
C3	kunna(食うな)
V1-i	minna(見るな)
V1-i	oginna(起きるな)
V1-u	ozunna(落ちるな)
V1-u	tozunna(綴じるな)
V1-e	enna(居るな)
V1-e	kenna(呉れるな)
V1-e	nenna(寝るな)
V1-e	agenna(開けるな)
V1-e	ernna(入れるな)
V1-e	oenna(生えるな)
V1-e	osenna(教えるな)
V1-e	hareenna(晴れるな)
V1-e	moenna(燃えるな)
V1-e	wasenna(忘れるな)
V1-e	kagureenna(隠れるな)
V1-e	suzugenna(押し付けるな)
V1-e	soroenna(揃えるな)
V1-e	kodeenna(答えるな)
V1-e	toqkenna(取り替えるな)
V2-a	kanna(刈るな)
V2-a	wanna(割るな)
V2-a	adanna(当るな)
V2-a	ojanna(育つな)

V2-a	kadanna(仲間に入れるな)
V2-a	azubanna(集るな)
V2-i	kinna(切るな)
V2-i	niqinna(握るな)
V2-u	unna(売るな)
V2-u	cugunna(作るな)
V2-u	mioqunna(見送るな)
V2-e	kenna(蹴るな)
V2-e	nenna(練るな)
V2-e	hinenna(捻るな)
V2-e	kenna(帰るな)
V2-e	meranna(参るな)
V2-o	tonna(取るな)
V2-o	nobonna(上るな)
C4	kunna(来るな)
C5	sunna(するな)

-dero(推量)

C1-g	kagudero(書くだろう)
C1-g	egudero(行くだろう)
C1-g	toqudero(研ぐだろう)
C1-s	dasudero(出すだろう)
C1-d	tazudero(立つだろう)
C1-w	kaudero(買うだろう)
C1-w	jurdero(言うだろう)
C1-b	tobudero(飛ぶだろう)
C1-m	nomudero(飲むだろう)
C2	sundero(死ぬだろう)
V1-i	mindero(見るだろう)

V1-i	ogindero(起きるだろう)
V1-e	agendero(開けるだろう)
V2-a	andero(有るだろう)
V2-e	kendero(蹴るだろう)
V2-o	tondero(取るだろう)
C4	kundero(来るだろう)
C5	sundero(するだろう)

-domo(逆接)

C1-g	kagudomo(書くけれども)
C1-g	egudomo(行くけれども)
C1-η	tojudomo(研ぐけれども)
C1-s	dasudomo(出すけれども)
C1-d	tazudomo(立つけれども)
C1-w	kaudomo(買うけれども)
C1-w	jurdomo(言うけれども)
C1-b	tobudomo(飛ぶけれども)
C1-m	nomudomo(飲むけれども)
C2	sundomo(死ぬけれども)
V1-i	mindomo(見るけれども)
V1-i	ogindomo(起きるけれども)
V1-e	agendomo(開けるけれども)
	agendomo erka(開けるけれども, 良いか。)
V2-a	andomo(有るけれども)
V2-e	kendomo(蹴るけれども)
V2-o	tondomo(取るけれども)
C4	kundomo(来るけれども)

asuta kundomo zukan osogunaruzo

(明日, 来るけれども, 時間は遅くなるぞ。)

- C5 sundomo(するけれども)
 -nadaba(仮定)
- C1-g kagunadaba(書くなら)
 kagunadaba cjanto kage(書くなら,ちゃんと書け。)
- C1-g egunadaba(行くなら)
 egunadaba tejami dase(行くなら,手紙を出せ。)
- C1-g tojunadaba(研ぐなら)
- C1-s dasunadaba(出すなら)
 dasunadaba wasennaja((手紙を)出すなら,忘れるなよ。)
- C1-d tazunadaba(立つなら)
- C1-w kaunadaba(買うなら)
- C1-w jurnadaba(言うなら)
- C1-b tobunadaba(飛ぶなら)
- C1-m nomunadaba(飲むなら)
 nomunadaba huzuja er
 ((酒を)飲むならば(地酒の栄光)富士が良い。)
- C2 sunnadaba(死ぬなら)
 sunnadaba essjo sunoder(死ぬなら一緒に死のうよ。)
- V1-i minnadaba(見るなら)
- V1-i oginnadaba(起きるなら)
- V1-e agennadaba(開けるなら)
- V2-a annadaba(有るなら)
- V2-u unnadaba(売るなら)
- V2-e kennadaba(蹴るなら)
- V2-o tonnadaba(取るなら)
- C4 kunnadaba(来るなら)
- C5 sunnadaba(するなら)

-ro(推量)

C1-g kaguro(書くだろう)

C1-g eguro(行くだろう)

asutawa narasa eguro(明日は奈良へ行くだろう。)

C1-g toguro(研ぐだろう)

C1-s dasuro(出すだろう)

C1-d tazuro(立つだろう)

C1-w kauro(買うだろう)

C1-w nurro(縫うだろう)

C1-w bouro(追うだろう)

C1-w jurro(言うだろう)

C1-w jouro(酔うだろう)

C1-w udauro(歌うだろう)

C1-w kajouro(通うだろう)

C1-w kururro(狂うだろう)

C1-w kosjauro(拵えるだろう)

C1-w hirouro(拾うだろう)

C1-b tobuuro(飛ぶだろう)

C1-m nomuro(飲むだろう)

C2 sunuro(死ぬだろう)

C3 kuro(食うだろう)

V1-i miqro(見るだろう)

asuta erŋa miqro(明日、映画を見るだろう。)

V1-i ogiqro(起きるだろう)

V1-u ozuqro(落ちるだろう)

V1-u tozuqro(綴じるだろう)

V1-e eqro(居るだろう)

V1-e keqro(呉れるだろう)

V1-e	neqro(寝るだろう)
V1-e	ageqro(開けるだろう)
V1-e	erqro(入れるだろう)
V1-e	oeqro(生えるだろう)
V1-e	oseqro(教えるだろう)
V1-e	hareqro(晴れるだろう)
V1-e	merqro(見えるだろう)
V1-e	moeqro(燃えるだろう)
V1-e	waseqro(忘れるだろう)
V1-e	kagureqro(隠れるだろう)
V1-e	suzugeqro(押し付けるだろう)
V1-e	soroeqro(揃えるだろう)
V1-e	kodeqro(答えるだろう)
V1-e	toqkeqro(取り替えるだろう)
V2-a	aqro(有るだろう)
	sogosa tabago aqro(そこにタバコが有るだろう。)
V2-a	kaqro(刈るだろう)
V2-a	waqro(割るだろう)
V2-a	adaqro(当るだろう)
V2-a	oŋaqro(育つだろう)
V2-a	kadaqro(仲間に入れるだろう)
V2-a	azubaqro(集るだろう)
V2-i	kiqro(切るだろう)
V2-i	niŋiqro(握るだろう)
V2-u	uqro(売るだろう)
V2-u	cuguqro(作るだろう)
V2-u	mioquqro(見送るだろう)
V2-e	keqro(蹴るだろう)

V2-e	neqro(練るだろう)
V2-e	nimeqro((雪が)柔らかくなるだろう)
V2-e	hineqro(捻るだろう)
V2-e	keqro(帰るだろう)
V2-e	merqro(参るだろう)
V2-o	toqro(取るだろう)
V2-o	noboqro(上るだろう)
C4	kuqro(来るだろう)
C5	suqro(するだろう)
	asuta jakjur suqro(明日、野球をするだろう。)

-sage・-hage(原因理由)

C1-g	kagusage・kaguhage(書くから)
C1-g	egusage・eguhage(行くから)
C1-g	tojusage・tojuhage(研ぐから)
C1-s	dasusage・dasuhage(出すから)
C1-d	tazusage・tazuhage(立つから)
C1-w	kausage・kauhage(買うから)
C1-w	jursage・jurhage(言うから)
C1-b	tobusage・tobuhage(飛ぶから)
C1-m	nomusage・nomuhage(飲むから)
C2	sunusage・sunuhage(死ぬから)
V1-i	kiqsage・kiqhage(着るから)
V1-i	miqsage・miqhage(見るから)
V1-i	ogiqsage・ogiqhage(起きるから)
V1-e	ageqsage・ageqhage(開けるから)
V2-a	aqsage・aqhage(有るから)
V2-u	uqsage・uqhage(売るから)
V2-e	keqsage・keqhage(蹴るから)

- V2-o toqsage・toqhage(取るから)
 C4 kuqsage・kuqhage(来るから)
 C5 suqsage・suqhage(するから)

-gondaba(假定)

- C1-g kagugondaba(書くなら)
 C1-g egugondaba(行くなら)
 C1-ŋ toŋugondaba(研ぐなら)
 C1-s dasugondaba(出すなら)
 C1-d tazugondaba(立つなら)
 C1-w kaugondaba(買うなら)
 C1-w jurgondaba(言うなら)
 C1-b tobugondaba(飛ぶなら)
 C1-m nomugondaba(飲むなら)
 C2 sunugondaba(死ぬなら)
 V1-i miqqondaba(見るなら)
 V1-i ogiqqondaba(起きるなら)
 V1-e ageqqondaba(開けるなら)
 V2-a aqqondaba(有るなら)
 V2-u uqqondaba(売るなら)
 V2-e keqqondaba(蹴るなら)
 V2-o toqqondaba(取るなら)
 C4 kuqqondaba(来るなら)
 C5 suqqondaba(するなら)

活用形7

-ke(回想過去)

- C1-g kaguke(書いたものだ)
 C1-g eguke(行ったものだ)
 C1-ŋ koŋuke(漕いだものだ)

- C1-g tojuke(研いだものだ)
 C1-s kasuke(貸したものだ)
 C1-s dasuke(出したものだ)
 C1-d tazuke(建ったものだ)
 C1-w kauke(買ったものだ)
 C1-w nurke(縫ったものだ)
 C1-w jurke(言ったものだ)

ano hito honna kodo jurkejo

(あの人がそんなこと言ったものだなあ。)

- C1-w kururke(狂ったものだ)
 C1-b tobuke(飛んだものだ)
 C1-m nomuke(飲んだものだ)
 C2 sunke(死んだものだ)
 C3 kuqke(食ったものだ)
 V1-i miqke(見たものだ)
 V1-i agiqke(飽きたものだ)
 V1-i ogiqke(起きたものだ)
 V1-u ozuqke(落ちたものだ)
 V1-e eqke(居たものだ)
 V1-e keqke(呉れたものだ)
 V1-e neqke(寝たものだ)
 V1-e ageqke(開けたものだ)
 V1-e tadeqke(建てたものだ)
 V1-e kodeqke(答えたものだ)
 V2-a aqke(有ったものだ)
 V2-a waqke(割ったものだ)
 V2-a adaqke(当たったものだ)
 V2-i niqiqke(握ったものだ)

V2-u	uqke(売ったものだ)
V2-u	cuguqke(作ったものだ)
V2-e	keqke(蹴ったものだ)
V2-e	hineqke(捻ったものだ)
V2-e	keqke(掃ったものだ)
V2-o	toqke(取ったものだ)
C4	kuqke(来たものだ)
C5	suqke(したものだ)

-kero(回想過去推量)

C1-g	kagukero(書いたものだろう)
C1-g	toqkero(研いだものだろう)
C1-s	dasukero(出したものだろう)
C1-d	tazukero(立ったものだろう)
C1-w	kaukero(買ったものだろう)
C1-b	tobukero(飛んだものだろう)
C1-m	nomukero(飲んだものだろう)
C2	sunkero(死んだものだろう)
V1-i	miqkero(見たものだろう)
V1-i	ogiqkero(起きたものだろう)
V1-e	neqkero(寝たものだろう)
V1-e	ageqkero(開けたものだろう)
V2-a	aqkero(有ったものだろう)
V2-e	keqkero(蹴ったものだろう)
V2-o	toqkero(取ったものだろう)
C4	kuqkero(来たものだろう)
C5	suqkero(したものだろう)

活用形8

命令

C1-g	kage(書け)
C1-g	ege(行け)
C1-ŋ	toge(研げ)
C1-s	dase(出せ)
C1-d	tade(立て)
C1-w	kae(買え)
C1-w	nue(縫え)
C1-w	boe(追え)
C1-w	eR(言え)
C1-w	joe(酔え)
C1-w	udae(歌え)
C1-w	kajoe(通え)
C1-w	kurue(狂え)
C1-w	kosjae(拵えろ)
C1-w	hiroe(拾え)
C1-b	tobe(飛べ)
C1-m	nome(飲め)
C2	sune(死ね)
C3	ke(食え)
V1-i	mire(見ろ)
V1-i	ogire(起きろ)
V1-u	ozure(落ちろ)
V1-u	tozure(綴じろ)
V1-e	ere(居ろ)
V1-e	nerere(寝ろ)
V1-e	agere(開けろ)
V1-e	eRre(入れろ)
V1-e	oere(生えろ)

V1-e	osere(教えろ)
V1-e	harere(晴れろ)
V1-e	moere(燃えろ)
V1-e	wasere(忘れろ)
V1-e	kere(呉れろ)
V1-e	kagurere(隠れろ)
V1-e	suzugere(押し付けろ)
V1-e	soroere(揃えろ)
V1-ε	kodere(答えろ)
V1-ε	tookere(取り替えろ)
V2-a	kare(刈れ)
V2-a	ware(割れ)
V2-a	adare(当れ)
V2-a	oḡare(育て)
V2-a	kadare(仲間に入れろ)
V2-a	azubare(集れ)
V2-i	kire(切れ)
V2-i	niḡire(握れ)
V2-u	ure(売れ)
V2-u	cugure(作れ)
V2-u	niogure(見送れ)
V2-e	kere(蹴れ)
V2-e	nerere(練れ)
V2-e	hinere(捻れ)
V2-ε	kere(帰れ)
V2-ε	meḡre(参れ)
V2-o	tore(取れ)
V2-o	nobore(上れ)

C4	koe(来い)
C5	se(しろ)
-ba(仮定)	
C1-g	kageba(書けば)
C1-g	egeba(行けば)
C1-ŋ	togeba(研げば)
C1-s	daseba(出せば)
C1-d	tadeba(立てば)
C1-w	kaeba(買えば)
C1-w	nueba(縫えば)
C1-w	boeba(追えば)
C1-w	erba(言えば)
C1-w	joeba(酔えば)
C1-w	udaeba(歌えば)
C1-w	kajoeba(通えば)
C1-w	kurueba(狂えば)
C1-w	kosjaeba(拵えれば)
C1-w	hiroeba(拾えば)
C1-b	tobeba(飛べば)
C1-m	nomeba(飲めば)
C2	suneba(死ねば)
C3	keba(食えば)
V1-i	mireba(見れば)
V1-i	ogireba(起きれば)
V1-u	ozureba(落ちれば)
V1-u	tozureba(綴じれば)
V1-e	ereba(居れば)
V1-e	kereba(呉れれば)

V1-e	nereba(寝れば)
V1-e	agereba(開ければ)
V1-e	erreba(入れれば)
V1-e	oereba(生えれば)
V1-e	osereba(教えれば)
V1-e	kikereba(聞こえれば)
V1-e	harereba(晴れれば)
V1-e	merreba(見えれば)
V1-e	moereba(燃えれば)
V1-e	wasereba(忘れれば)
V1-e	kagurereba(隠れれば)
V1-e	suzugereba(押し付けければ)
V1-e	oroereba(揃えれば)
V1-e	koðereba(答えれば)
V1-e	toqkereba(取り替えれば)
V2-a	areba(有れば)
V2-a	kareba(刈れば)
V2-a	wareba(割れば)
V2-a	adareba(当れば)
V2-a	oñareba(育てば)
V2-a	kadareba(仲間に入れれば)
V2-a	azubareba(集れば)
V2-i	kireba(切れば)
V2-i	niñireba(握れば)
V2-u	ureba(売れば)
V2-u	cugureba(作れば)
V2-u	miogureba(見送れば)
V2-e	kereba(蹴れば)

V2-e	nereba(練れば)
V2-e	nimereba((雪が)柔らかくなれば)
V2-e	hinereba(捻れば)
V2-e	kereba(帰れば)
V2-e	merreba(参れば)
V2-o	toreba(取れば)
V2-o	noboreba(上れば)
C4	koeba(来れば)
C5	seba(すれば)

活用形9

-ne(可能否定) <他人を主語にしても,自分を主語にしても言えるが,他人を主語にした方が用いやすい。>

C1-g kagene(書けない)
 omεr kagenendaroja(お前は書けないのだろう。)
 ore kagenεhage kaedekurecja
 (俺は書けないから書いてくれよ。)

C1-g egene(行けない)
 kjorwa egenεhazuda
 ((あいつは)今日は(忙しくて)行けないはずだ。)
 ore kjor esonεsugude egenεnor
 (俺は今日は忙しくて行けないなあ。)

C1-η togene(研げない)
 C1-s dasene(出せない)
 C1-d tadene(立てない)
 C1-w kaene(買えない)
 C1-w nuene(縫えない)
 C1-w erne(言えない)
 aedaba ki ciqsesage erneze

(あいつならば気が小さくて言えないぞ。)

C1-b tobene(飛べない)

C1-m nomene(飲めない)

aezuwa nomene(あいつは(酒が)飲めない。)

C2 sunene(死ねない)

C3 kerene(食えない)

V1-i mirene(見られない)

V1-i ogirene(起きられない)

V1-u ozurene(落ちられない)

V1-e nerene(寝られない)

V1-e kerene(呉れられない)

V1-e agerene(開けられない)

te kegasure agerene(手を怪我して開けられないなあ。)

V2-a warene(割れない)

V2-a adarene(当れない)

V2-i nigirene(握れない)

V2-u cugurene(作れない)

V2-e kerene(蹴れない)

V2-e kerene(帰れない)

V2-o torene(取れない)

C4 kiene(来られない)

C5 suene(できない)

-ru(可能) <この形式は用いるが頻度が高くない。>

C1-g kageru(書ける)

C1-g egeru(行ける)

oredaqte egeru(俺でも行ける。)

C1-g togeru(研げる)

oredaqte togenzor(俺でも研げるぞ。)

C1-s	daseru(出せる)
C1-d	taderu(立てる)
C1-b	toberu(飛べる)
C1-w	nueru(縫える)
C1-m	nomeru(飲める)
C2	suneru(死ぬる)
C3	keru(食える)
V1-i	ogireru(起きられる)
V2-a	wareru(割れる)
V2-i	niŋireru(握れる)
V2-u	cugureru(作れる)
C4	kieru(来られる)
C5	sueru(できる)

活用形10

意志

C1-g	kago(書こう)
C1-g	ego(行こう)
C1-ŋ	toŋo(研ごう)
C1-s	daso(出そう)
C1-d	tado(立とう)
C1-w	kao(買おう)
C1-w	nuo(縫おう)
C1-w	boŋo(追おう)
C1-w	eo(言おう)
C1-w	joŋo(酔おう)
C1-w	udao(歌おう)
C1-w	kajoŋo(通おう)
C1-w	kosjao(拵えよう)

- C1-w hioro(拾おう)
 C1-b tobo(飛ぼう)
 C1-m nomo(飲もう)
 minnade nomode(皆で飲もうよ。)
 C2 suno(死のう)
 C3 ko(食おう)
 V1-i kiro(着よう)
 kono sebiro kiroja(この背広を着よう。)
 V1-i miro(見よう)
 V1-i ogiro(起きよう)
 V1-u ozuro(落ちよう)
 V1-u tozuro(綴じよう)
 V1-e ero(居よう)
 kogosa ero(ここに居よう。)
 V1-e kero(呉れよう)
 V1-e nero(寝よう)
 asuta hajesage nero(明日は早いので寝よう。)
 V1-e agero(開けよう)
 V1-e erro(入れよう)
 V1-e osero(教えよう)
 V1-e wasero(忘れよう)
 V1-e kagurero(隠れよう)
 V1-e suzugeru(押し付けよう)
 V1-e soroero(揃えよう)
 V1-e kodero(答えよう)
 V1-e tookero(取り替えよう)
 V2-a karo(刈ろう)
 V2-a waro(割ろう)

- V2-a adaro(当ろう)
- V2-a oqaro(育とう)
- V2-a kadaro(仲間に入れよう)
- V2-a azubaro(集ろう)
- V2-i kiro(切ろう)
- V2-i niqiro(握ろう)
- V2-u uro(売ろう)
- V2-u cuguro(作ろう)
- V2-u mioguro(見送ろう)
- V2-e kero(蹴ろう)
- V2-e nero(練ろう)
- V2-e hinero(捻ろう)
- V2-e kero(帰ろう)
- V2-e merro(参ろう)
- V2-o toro(取ろう)
- konohende torode(この辺で取ろうよ。)
- V2-o noboro(上ろう)
- C4 ko(来よう)
- C5 so(しよう)
- hajegu so(早くしよう。)
- ba(意志仮定)
- C1-g kagoba(書くつもりなら)
- kagoba kageqcja(書くつもりなら書けよ。)
- C1-g egoba(行くつもりなら)
- egoba egeqcja(行くつもりなら行けよ。)
- C1-ŋ toqoba(研ぐつもりなら)
- toqoba toqeqcja(研ぐつもりなら研げよ。)
- C1-s dasoba(出すつもりなら)

- dasoba dasecja(出すつもりなら出せよ。)
- C1-d tadoba(立つつもりなら)
tadoba tadeqcja(立つつもりなら立てよ。)
- C1-w kaoba(買うつもりなら)
kaoba kaecja(買うつもりなら買えよ。)
- C1-w eoba(言うつもりなら)
eoba etemire(言うつもりなら言ってみろ。)
- C1-b toboba(飛ぶつもりなら)
toboba tobe(飛ぶつもりなら飛べ。)
- C1-m nomoba(飲むつもりなら)
nomoba nomecja(飲むつもりなら飲めよ。)
- C2 sunoba(死ぬつもりなら)
sunoba suneba esu(死ぬつもりなら死ねばいいし。)
- V1-i miroba(見るつもりなら)
miroba mirecja(見るつもりなら、見ろよ。)
- V1-i ogiroba(起きるつもりなら)
ogiroba ogirecja(起きるつもりなら、起きろよ。)
- V1-e ageroba(開けるつもりなら)
ageroba agerecja(開けるつもりなら、開けろよ。)
- V2-e keroba(蹴るつもりなら)
keroba kerecja(蹴るつもりなら、蹴れよ。)
- V2-o toroba(取るつもりなら)
toroba torecja(取るつもりなら取れよ。)
- C4 koba(来るつもりなら)
koba koecja(来るつもりなら、来いよ。)
- C5 soba(するつもりなら)
- domo(意志逆接)
- C1-g kagodomo(書くつもりだが)

C1-g	egodomo(行くつもりだが)
C1-ŋ	toġodomo(研ぐつもりだが)
C1-s	dasodomo(出すつもりだが)
C1-d	tadodomo(立つつもりだが)
C1-w	kaodomo(買うつもりだが)
C1-w	eodomo(言うつもりだが)
C1-b	tobodomo(飛ぶつもりだが)
C1-m	nomodomo(飲むつもりだが)
C2	sunodomo(死ぬつもりだが)
V1-i	mirodomo(見るつもりだが)
V1-i	ogirodomo(起きるつもりだが)
V1-e	agerodomo(開けるつもりだが)
V2-a	arodomo(有るつもりだが)
V2-e	kerodomo(蹴るつもりだが)
V2-o	torodomo(取るつもりだが)
C5	sodomo(するつもりだが)

活用形11-1

-haru(尊敬)

C1-g	kagaharu(書かれる)
C1-g	egaharu(行かれる)
C1-ŋ	toġaharu(研がれる)
C1-s	dasaharu(出される)
C1-d	tadaharu(立たれる)
C1-w	kawaharu(買われる)
C1-w	ewaharu(言われる)
C1-b	tobaharu(飛ばれる)
C1-m	nomaharu(飲まれる)
C2	sunaharu(死なれる)

- C5 saharu(される)
- eru(受身)
- C1-g kagaeru(書かれる)
- C1-s dasaeru(出される)
- C1-d tadaeru(立たれる)
- C1-w ewaeru(言われる)
- C1-b tobaeru(飛ばれる)
- tobaeqdo uruse(飛ばれるとうるさい。)
- C2 sunaeru(死なれる)
- C5 saeru(される)
- seru(使役)
- C1-g kagaseru(書かせる)
- C1-g egaseru(行かせる)
- C1-η togaseru(研がせる)
- C1-s dasaseru(出させる)
- C1-d tadaseru(立たせる)
- C1-w kawaseru(買わせる)
- suzugede kawaseru(押しつけて買わせる。)
- C1-w nuwaseru(縫わせる)
- C1-w bowaseru(追わせる)
- C1-w ewaseru(言わせる)
- C1-w jowaseru(酔わせる)
- C1-w udawaseru(歌わせる)
- C1-w kajowaseru(通わせる)
- C1-w kuruwaseru(狂わせる)
- C1-w kosjawaseru(拵えさせる)
- C1-w hirowaseru(拾わせる)
- C1-b tobaseru(飛ばせる)

- C1-m nomaseru(飲ませる)
- C2 sunaseru(死なせる)
- C3 kaseru(食わせる)
- C5 saseru(させる)
- seraeru(使役受身)
- C1-g kagaseru(書かせられる)
- C1-g egaseru(行かせられる)
- C1-g togaseru(研がせられる)
- C1-d tadaseru(立たせられる)
- C1-w kawaseru(買わせられる)
- C1-w ewaseru(言わせられる)
- C1-b tobaseru(飛ばせられる)
- C1-m nomaseru(飲ませられる)
- C5 saseru(させられる)
- eru(可能)
- C1-g kageru(書ける)
agaruba kageru(明るければ書ける。)
- C1-g egeru(行ける)
zukan aqsage egeru(時間があるので行ける。)
- C1-g togeru(研げる)
- C1-s daseru(出せる)
- C1-d taderu(立てる)
- C1-w kaweru(買える)
- C1-w juweru(言える)
- C1-b toberu(飛べる)
- C1-m nomeru(飲める)
- C2 suneru(死ねる)
- C5 seru(できる)

-ene(可能否定) 〈自分自身を主語にして用いる。〉

- C1-g kagaene(書けない)
 zubun zu hedadahage kagaene
 (自分は字が下手だから書けない。)
 te edagusute kagaene(手を痛めて書けない。)
- C1-g egaene(行けない)
 orewa egaene(自分は行けない。)
- C1-g togaene(研げない)
- C1-s dasaene(出せない)
- C1-d tadaene(立てない)
- C1-w kawaene(買えない)
- C1-w ewaene(言えない)
- C1-b tobaene(飛べない)
- C1-m nomaene(飲めない)
- C2 sunaene(死ねない)
- C5 saene(できない)

活用形11-2

-raharu・-saharu(尊敬) (V2に-saharuを用いるかどうかは不明。また、C4のkiという形も活用形11-2としては問題を有するが、別語系の形を用いる方が通常であるらしいので、一応ここに含めておくことにした。)

- V1-i miraharu・misaharu(見られる)
- V1-i ogiraharu・ogisaharu(起きられる)
- V1-e neraharu・nesaharu(寝られる)
- V1-e ageraharu・agesaharu(開けられる)
- V2-e keraharu(蹴られる)
- V2-o toraharu(取られる)
- C4 kisaharu(来られる) 〈むしろ, gozaharuを用いる。〉

-raeru(受身)

V1-i miraeru(見られる)

V1-i ogiraeru(起きられる)

ogiraeqdo komaru uruserdeja

(起きられると困る, うるさいものでなあ。)

V1-e neraeru(寝られる)

neraeqdo komaru(寝られると困る。)

V1-e ageraeru(開けられる)

V1-e taderaeru(建てられる)

V1-e magaseraeru(任せられる)

V2-e keraeru(蹴られる)

V2-o toraeru(取られる)

C4 koraeru(来られる)

-raseru(使役)

V1-i miraseru(見させる)

V1-i ogiraseru(起きさせる)

V1-u ozuraseru(落ちさせる)

V1-u tozuraseru(綴じさせる)

V1-e eraseru(居させる)

V1-e keraseru(呉れさせる)

V1-e neraseru(寝させる)

V1-e ageraseru(開けさせる)

V1-e erraseru(入れさせる)

V1-e oeraseru(生えさせる)

V1-e oseraseru(教えさせる)

V1-e taderaseru(建てさせる)

V1-e moeraseru(燃えさせる)

V1-e waseraseru(忘れさせる)

V1-e kagureraseru(隠れさせる)

V1-e	suzugeraseru(押し付けさせる)
V1-e	soeroeraseru(揃えさせる)
V1-e	koðeraseru(答えさせる)
V1-e	toqkeraseru(取り替えさせる)
V2-a	karaseru(刈らせる)
V2-a	waraseru(割らせる)
V2-a	adaraseru(当らせる)
V2-a	ogaraseru(育てさせる)
V2-a	kadaraseru(仲間に入れさせる)
V2-a	azubaraseru(集らせる)
V2-i	kiraseru(切らせる)
V2-i	niñiraseru(握らせる)
V2-u	uraseru(売らせる)
V2-u	cuguraseru(作らせる)
V2-u	mioguraseru(見送らせる)
V2-e	keraseru(蹴らせる)
V2-e	neraseru(練らせる)
V2-e	hineraseru(捻らせる)
V2-e	kcraseru(帰らせる)
V2-e	merraseru(参らせる)
V2-o	toraseru(取らせる)
V2-o	noboraseru(上らせる)
C4	koraseru(来させる)

-raseraeru(使役受身)

V1-e	ageraseraeru(開けさせられる)
V2-u	uraseraeru(売らせられる)
V2-o	toraseraeru(取らせられる)
C4	koraseraeru(来させられる)

-raeru(可能) 〈自分自身を主語にして言う〉

V1-i miraeru(見られる)

V1-i ogiraeru(起きられる)

V1-e neraeru(寝られる)

ezumademo neraeru(いつまでも寝られる。)

V1-e ageraeru(開けられる)

V2-e keraeru(蹴れる)

V2-o toraeru(取れる)

C4 koraeru(来られる)

kjor hajegu koraeru(今日は早く来られる。)

-raene(可能否定) 〈自分自身を主語にして用いる。〉

V1-i miraene(見られない)

V1-i ogiraene(起きられない)

V1-e neraene(寝られない)

V1-e ageraene(開けられない)

V2-e keraene(蹴れない)

V2-o toraene(取れない)

C4 koraene(来られない)

ore kosa koraene(俺はここへは来られない。)

活用形12-1

-ta(過去)

C1-g eta(行った)

C1-s kasuta(貸した)

C1-s dasuta(出した)

C1-d tata(立った・建った)

C1-w kata(買った)

C1-w nuta(縫った)

C1-w bota(追った)

C1-w	eta(言った)
C1-w	jota(酔った)
C1-w	udata(歌った)
C1-w	kajota(通った)
C1-w	kuruta(狂った)
C1-w	kosjata(拵えた)
C1-w	hirota(拾った)
C3	kuta(食った)
V2-a	ata(有った)
V2-a	kata(刈った)
V2-a	wata(割った)
V2-a	adata(当った)
V2-a	ogata(育った)
V2-a	kadata(仲間に入れた)
V2-a	azubata(集った)
V2-i	kita(切った)
V2-i	nigita(握った)
V2-u	uta(売った)
V2-u	cuguta(作った)
V2-u	mioguta(見送った)
V2-e	keta(蹴った)
V2-e	neta(練った)
V2-e	nimeta((雪が)柔らかくなった)
V2-e	hineta(捻った)
V2-e	keta(帰った)
V2-e	merta(参った)
V2-o	tota(取った)
V2-o	nobota(上った)

- C4 kita(来た)
- C5 suta(した)
- taqke(過去回想)
- C1-g etaqke(行ったものだ)
- C1-s kasutaqke(貸したものだ)
- C1-s dasutaqke(出したものだ)
- C1-d tataqke(立ったものだ・建ったものだ)
- C1-w kataqke(買ったものだ)
- C1-w etaqke(言ったものだなあ)
- V2-u utaqke(売ったものだなあ)
- V2-e ketaqke(蹴ったものだなあ)
- V2-o totaqke(取ったものだなあ)
- taro(過去推量)
- C1-g etaro(行っただろう)
- omer cjurŋokusa etaror(お前は中国へ行っただろう。)
- C1-s dasutaro(出しただろう)
- ome dasutaror(お前が出しただろう。)
- C1-d tataro(立っただろう)
- C1-w kataro(買っただろう)
- C1-w etaro(言っただろう)
- V2-a ataro(有っただろう)
- V2-e ketaro(蹴っただろう)
- V2-o totaro(取っただろう)
- C4 kitaro(来ただろう)
- C5 sutaro(しただろう)
- tadero(過去推量)
- C1-g etadero(行っただろう)
- C1-s dasutadero(出しただろう)

C1-d	tatadero(立っただろう)
C1-w	katadero(買っただろう)
C1-w	etadero(言っただろう)
V2-a	atadero(有っただろう)
V2-e	ketadero(蹴っただろう)
V2-o	totadero(取っただろう)
C4	kitadero(来ただろう)
C5	sutadero(しただろう)

-te(中止)

C1-g	ete(行って)
C1-s	dasute(出して)
C1-d	tate(立って)
C1-w	kate(買って)
C1-w	ete(言って)
V2-e	kete(蹴って)
V2-o	tote(取って)
C4	kite(来て)
C5	sute(して)

-tesumata(てしまった)

C1-g	etesumata(行ってしまった)
C1-s	dasutesumata(出してしまった)
C1-w	katesumata(買ってしまった)
C1-w	etesumata(言ってしまった)
V2-e	ketesumata(蹴ってしまった)
V2-o	totesumata(取ってしまった)
C5	sutesumata(してしまった)

活用形12-2

-da(過去)

C1-g	kaeda(書いた)
C1-g	koeda(漕いだ)
C1-g	toeda(研いだ)
	kama toedakar(鎌を研いだか。)
C1-g	ojoeda(泳いだ)
C1-b	tonda(飛んだ)
C1-m	nonda(飲んだ)
C2	sunda(死んだ)
V1-i	mida(見た)
V1-i	ogida(起きた)
V1-u	ozuda(落ちた)
V1-u	tozuda(綴じた)
V1-e	eda(居た)
V1-e	keda(呉れた)
v1-e	neda(寝た)
V1-e	ageda(開けた)
V1-e	erda(入れた)
V1-e	oeda(生えた)
V1-e	oseda(教えた)
V1-e	kikeda(聞こえた)
V1-e	tadeda(建てた)
V1-e	hareda(晴れた)
V1-e	merda(見えた)
V1-e	moeda(燃えた)
V1-e	waseda(忘れた)
V1-e	kagureda(隠れた)
V1-e	suzugeda(押し付けた)
V1-e	soroeda(揃えた)

V1-e magaseda(任せた)

V1-ε kodeda(答えた)

V1-ε tookeda(取り替えた)

-daqke(過去回想)

C1-g kaedaqke(書いたものだ)

C1-η toedaqke(研いだものだ)

C1-η koedaqke(漕いだものだ)

C1-b tondaqke(飛んだものだ)

C1-m nondaqke(飲んだものだ)

kinna sage nondaqke(昨日は, 酒を飲んだものだ。)

V1-i agidaqke(飽きたものだ)

V1-e magasedaqke(任せたものだ)

-daro(過去推量)

C1-g kaedaror(書いただろう)

C1-η toedaror(研いだだろう)

C1-b tondaro(飛んだだろう)

C1-m nondaro(飲んだだろう)

C2 sundaro(死んだだろう)

V1-i midaro(見ただろう)

V1-i ogidaro(起きただろう)

V1-e nedaro(寝ただろう)

mor nedarornor(もう寝ただろうなあ。)

V1-e agedaro(開けただろう)

-dadero(過去推量)

C1-g kaedadero(書いただろう)

C1-η toedadero(研いだだろう)

C1-b tondadero(飛んだだろう)

C1-m nondadero(飲んだだろう)

nondaderoqcja aedaba sukidamono

(飲んだだろうよ。あいつならば好きだもの。)

C2 sundadero(死んだだろう)

V1-i midadero(見ただろう)

V1-i ogidadero(起きただろう)

V1-e nedadero(寝ただろう)

V1-e agedadero(開けただろう)

-de(中止)

C1-g kaede(書いて)

C1-g toede(研いで)

C1-b tonde(飛んで)

C1-m nonde(飲んで)

C2 sunde(死んで)

V1-i mide(見て)

V1-i ogide(起きて)

V1-e agede(開けて)

-desumata(てしまった)

C1-g kaedesumata(書いてしまった)

C1-g toedesumata(研いでしまった)

C1-b tondesumata(飛んでしまった)

C1-b jondesumata(呼んでしまった)

C1-m nondesumata(飲んでしまった)

C2 sundesumata(死んでしまった)

V1-i midesumata(見てしまった)

V1-i ogidesumata(起きてしまった)

V1-e nedesumata(寝てしまった)

V1-e agedesumata(開けてしまった)

-qta(継続過去) (実際は現在のテンスにも用いられる。)

C1-g	eqta(行っていた)
C1-s	dasuqta(出していた)
C1-d	taqta(立っていた)
C1-w	kaqta(買っていた)
C1-w	nuqta(縫っていた)
C1-w	boqta(追っていた)
C1-w	eqta(言っていた)
C1-w	joqta(酔っていた)
C1-w	udaqta(歌っていた)
C1-w	kajoqta(通っていた)
C1-w	kuruqta(狂っていた)
C1-w	kosjaqta(拵っていた)
C1-w	hiroqta(拾っていた)
C3	kuqta(食っていた)
V2-a	kaqta(刈っていた)
V2-a	waqta(割っていた)
V2-a	adaqta(当っていた)
V2-a	oqaqta(育っていた)
V2-a	kadaqta(仲間に入れていた)
V2-a	azubaqta(集っていた)
V2-i	kiqta(切っていた)
V2-i	niñiqta(握っていた)
V2-u	uqta(売っていた)
V2-u	cuguqta(作っていた)
V2-u	mioguqta(見送っていた)
V2-e	keqta(蹴っていた)
V2-e	neqta(練っていた)

V2-e nimeqta((雪が)柔らかくなっていた)

V2-e hineqta(捻っていた)

V2-ε keqta(帰っていた)

V2-ε merqta(参っていた)

V2-o toqta(取っていた)

V2-o noboqta(上っていた)

C4 kiqta(来ていた)

C5 suqta(していた)

-qtaqke(継続過去回想)

C1-g eqtaqke(行っていたものだ)

C1-d taqtaqke(建っていたものだ)

asogosa er taqtaqkenor

(あそこに家が建っていたものだなあ)

C1-w kaqtaqke(買っていたものだ)

C1-w eqtaqke(言っていたものだ)

V2-u uqtaqke(売っていたものだ)

V2-e keqtaqke(蹴っていたものだ)

V2-o toqtaqke(取っていたものだ)

C4 kiqtaqke(来ていたようだ)

C5 suqtaqke(していたようだ)

活用形13-2

-qda(継続過去) (実際は現在のテンスにも用いられる。)

C1-g kaeqda(書いていた)

V1-i miqda(見ていた)

V1-i ogiqda(起きていた)

V1-u ozuqda(落ちていた)

V1-u tozuqda(綴じていた)

V1-e keqda(呉れていた)

V1-e	neqda(寝ていた)
V1-e	ageqda(開けていた)
V1-e	erqda(入っていた)
V1-e	oeqda(生えていた)
V1-e	oseqda(教えていた)
V1-e	kikeqda(聞こえていた)
V1-e	hareqda(晴れていた)
V1-e	merqda(見えていた)
V1-e	moeqda(燃えていた)
V1-e	waseqda(忘れていた)
V1-e	kagureqda(隠れていた)
V1-e	suzugeqda(押し付けていた)
V1-e	soroeqda(揃えていた)
V1-e	kodeqda(答えていた)
V1-e	toqqeqda(取り替えていた)

-qdaqke(継続過去回想)

V1-i	miqdaqke(見ていたものだ)
V1-i	ogiqdaqke(起きていたものだ)
V1-e	eqdaqke(居たものだ)
V1-e	ageqdaqke(開けていたものだ)
V1-e	tadeqdaqke(建てていたものだ)

活用形13-3

-nda(継続過去) (実際は現在のテンスにも用いられる。)

V1-ŋ	ojoenda(泳いでいた)
V1-ŋ	koenda(漕いでいた)
V1-ŋ	toenda(研いでいた)

活用形13-4

-da(継続過去) (実際は現在のテンスにも用いられる。)

C1-b tonda(飛んでいた)

C1-m nonda(飲んでいた)

C2 sunda(死んでいた)

-daqke(継続過去回想)

C1-b tondaqke(飛んでいたものだ)

C1-m nondaqke(飲んでいたものだ)

C2 sundaqke(死んでいたものだ)

なお、以上でわかるとおり、「言う」に関しては語幹自体の交替が見られ、特殊な活用を有している。しかしながら、この語については方言的な存在に関して疑問がなくはない(別に *sjaberu* という語があり、こちらが日常的らしい)。そこで活用表の中で体系的に扱うのは避けたものである。

3. 形容詞の活用

3.1. 活用のタイプと活用表

形容詞の活用体系は次の活用表10ではほぼ網羅できたものと考えられる。

活用表の表示のしかたは動詞の場合と同じである。

それぞれの活用形に後続する助動詞・助詞ならびに単独で表す意味・用法について説明しておく。

活用形1には、*ne*(否定)の他、*anme*(否定推量)、*de*(中止)、*nar*(なる)が付く。*ne* は *ner* で現れることもある。

活用形2は、言い切りの他、連体修飾にも用いられ、その他 *ro*(推量)、*dero*(推量)、*ndero*(推量)、*qke*(過去)、*kero*(過去推量)、*roke*(過去推量)、*kendero*(過去推量)、*sorda*(様態)、*jorda*(様態)、*doja*(伝聞)、*ba*(仮定)、*nadaba*(仮定)、*domo*(逆接)、*roba*(推量仮定)、*rodomo*(推量逆接)が付く。*ro* は *ror* で現れることもある。また、*qke* は *ke* で現れることもある。*ba* は国立国語研究所

(1993)の「仮定形1」も「仮定形2」も表現できる。一方, nadaba は「仮定形2」に用いられるようである。kero と roke の意味的な異なりは明らかではない。

活用表10 形容詞

	大きい	低い	新しい	良い	高い	遅い	
	oqki	hiqgu	adarasu	e	taqqε	oso	語幹
	i	u	u	e	ε	o	語幹末母音
活用形 番号							主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	gu	gu	gu	gu	gu	gu	ne(否定)
2	-	-	-	-	-	e	言い切り
3	-	-	-	×	-	-	migi(強調)
活用の タイプ	A型形容詞					B型形容詞	

活用形3は, migi(強調)の他 sa(名詞化接辞)が付く。ただし, この migiは現在ではあまり生産的ではなく, また sa も必ずしも安定して用いられるものではないようだ。斎藤(1933)によれば名詞化接辞としては sa よりも mi がかなり生産的であったようだが, これも話者にとっては生産性が弱い。このように活用形3は存在がやや希薄になりつつあるようである。

さて, 活用のタイプであるが, 活用表10のように活用形2に語尾としてeの現れる「遅い」のタイプとそれ以外の2種類に分けられる。前者は語幹末母音がoのものに限られるようで, 後者は i・u・e・ε のものに限られるようである。このように語幹末母音で見ると相補分布をなしているわけで, この二つのタイプは本質的に大きく異なるものではないと考えられる。ここでは後者(「大

きい」～「高い」のタイプ)をA型形容詞,前者(「遅い」のタイプ)をB型形容詞と呼ぶことにする。

なお、いずれのタイプにも gaq という語尾が認められなくもない。過去形として, oqkigaqta (大きかった), hiqgugaqta (低かった), adarasugaqta (新しかった), egaqta (良かった), taqgegaqta (高かった), osogaqta (遅かった)のような形が, また過去推量として, oqkigaqtaro (大きかっただろう), hiqgu gaqtaro (低かっただろう), adarasugaqtaro (新しかっただろう), egaqtaro (良かっただろう), taqgegaqtaro (高かっただろう), osogaqtaro (遅かっただろう)がそれぞれ認められなくはないが, 話者によるとどこか借用形式を混入させたような印象があるようで, 特に俚言形を持つ形容詞ではこの形式は使いづらい感覚があるようだ。例えば kegesu は「賢い」という意味の俚言であるが, 「賢かったらう」では kegesukedero とは言えるが, これに～ガッタロの形は使いにくいらしい。また, 同様に jabacu は「冷水に濡れて不愉快な感覚」を表現する俚言であるが, これも過去推量では jabacukero とは言えるが, やはり～ガッタロの形では使いにくいらしい。ただし, ほんと安堵した時の表現としては, egaqtaegaqta (良かった良かった)のような語形がもっぱら用いられ, 「活用形2 + oke」に相当する eoke は用いられないようだが, これはむしろ語彙的にe(良い)に限られた慣用的な表現で, 他の形容詞においても生産的に用いられるものではないようだ。共通語においても「おはようございます」が挨拶表現として存在してもウ音便を生産的な活用形式として記述することはないが, それと並行して考えれば, やはり gaq を認める必要はないであろう。そこでここでは, 語尾 gaq を活用表に盛り込むことは避けた。

その他, 国立国語研究所(1953)によれば, 「オセーカロートハいえカロート」(遅かろうと早かろうと)という例が見られる(p. 200)。karor あるいは garor のような語尾の存在を予想させるが, このような表現においても, taqgeroŋajasuroŋa (高かろうが安かろうが)のような表現を用いる方が方言的であるとすることだし, taqgetatejasutate (高いといたってやすいといたって)のような表現が別にあるらしい。

なお、過去を表す *qke* については方言によっては客観的な第三者のことがらを表現するのに用いられ、「た」と用法が区別されることもあるが、当該方言の形容詞の過去を表す *qke* については、形容詞に接続する「た」がないこともあってか、そのようなニュアンスはないようで、自分自身の昔のことを思い出して、「あのころは自分も *wageqke* (若かった)」のように表現することにまったく抵抗はないようである(V章参照)。

3.2. 通時的考察

この方言の形容詞の活用体系はかなりシンプルである。ク活用類とシク活用類(形容詞の活用の類については大西(1993b)に基づく)の区別がないのはもちろん、カリ活用系の形式もまったくない。その上、母音の融合現象がいわゆるイ語尾を飲み込んでしまい、さらに融合した母音の縮約化(単モーラ化)が進み、終止形(=連体形)末尾に融合しにくい *oi* (*oe*) の連続を持つ(大西(1993b)の「-2モーラお段」に相当するもの)B型形容詞を除けば、終止形(=連体形)と語幹が同形になり、カリ活用系の欠如から、語幹がそのままで助動詞・助詞に接続する形式がかなりにのぼる。さらに通時的には *oi* の連続を持っていたと考えられるもの(「-2モーラお段」)も類推によりA型に取り込まれるものもあるようだ(斎藤(1933)p. 66など)。

また、A型形容詞においては、語尾 *gu* への接続も語幹=終止形=連体形が接続するが、これは形容詞終止形の末尾において連母音の融合を起こす方言の宿命のようなものとも言えよう。いったん融合を生じると、元の活用体系と併存させるためには、語幹もしくは語尾の中での母音の交替のシステムを活用体系の中に取り込む必要が生じ、それだけ活用体系が複雑になるからである。例えば、共通語においては「高い」は、*takai*(高い)/*takakute*(高くて)のような活用を持ち、語幹を *taka* と認定し、それぞれに *i/ku* のような語尾を認定することができる。ここに、連母音の融合が発生すると(ここでは、*ai* > *er* を例として考える。実際、共通語の母体としての東京方言ではこのような融

合が存在するわけであるが), *taker/takakute* のような活用になる。これは、語幹に *take/taka* のような母音の交替を持った体系(語尾は *r/ku*, もしくは *e/ku*)と見ることもできようし, *tak* のような語幹を考えて, *er/aku* のような語尾を持つと見ることもできよう。これは、融合しない場合と較べてはるかに複雑な体系である。しかも、同時に連母音の融合に関わらない母音連続を持つ形容詞が別に存在すると、形容詞の活用全体ではさらに複雑性を増してしまうことになる。そこで、融合した形を語幹に取り込むことにより、母音の交替を避けて、体系の複雑化を避けることがはかられるわけである(このような現象を指して「無活用化」と言われることがしばしばであるが、そのような命名が適切かどうかも含めて考えるべき問題はまだ多い。また、当該方言ならびに近隣の方言では問題にならないが、ここにさらに音便(いわゆるウ音便)がからんでくると話はさらに発展する。その点についても今は措くこととする)。

当該方言にカリ活用系の形式がないことについては、そもそもカリ活用が発達しなかったことによるものなのか、かつてはそれがあったものがなくなったものなのか速断はできない。国立国語研究所(1953)では3.1.でも述べたとおり、カローのような形式も記述しており、この記述と当該話者の体系を較べるとカリ活用系の衰退に見えるかもしれない。しかしながら、当該話者の中での判断は、やはり3.1.で記したとおり、ガローのような形式は認められず、また、ガッの形は借用的な意識があるようでこれに従うならば、カリ活用系は新たに導入されつつあるものにも見える。そもそも質の異なる記述資料を較べて、数年からせいぜい二十数年の間隔(それぞれの対象とした話者の生年で考えるなら実質この程度の差であろう)で、体系的に極めて中心的な部分についての通時的な判断を下してしまってよいものかどうか疑問がある。また、一方で話者の意識にゆだねてしまうのも危険であると思われる。結局、今は判断を保留する。地理的な分布なども勘案して考察することを課題としたい。なお、過去形のみ限定して言えば、国立国語研究所(1953・1974)の社会言語学的な調査ではガッの衰退(「強かった」が「ツヨカッタ」から「ツイエッ

ケ」に移行するようす)が見て取れる。また、井上(1978・1980)では地理的にもその傾向を指摘し確認している。ただし、過去形については助動詞そのものの変化が見られるわけで(タリ系の「た」からケリ系の「け」へ変化しているようである)、カリ活用の衰退へと話を簡単には一元化できない。その他の表現形式を合わせ見た上で考察することが求められる。

3.3. 形容詞の活用の語形例・文例

以下には、実際の表現形を活用形ごとに示す。示し方は2.4.の動詞の方法に準ずる。

活用のタイプに基づく分類は次のように略号で示すことにする。A型形容詞においては語幹末母音でも分類して示す。それらの母音については、“-”の後に示すこととする。

その他、単語の用法が理解しにくいと思われるものや俚言形については、活用形2の「言い切り」において簡単にコメントを付す。

分類の略号

A型形容詞 : A-i

A-u

A-e

A-ε

B型形容詞 : B

タイプ等による分類の配列はこの順に従い、それぞれの分類の中は、語の長さ(短 > 長)、語形をおおまかに共通語に対応させての50音順に従って並べている。

活用形1

-ne(否定)

A-i oqkigune(大きくない)

A-i	kenarigune(羨ましくない)
A-u	hiqgugune(低くない)
A-u	jasugune(安くない)
A-u	kejesugune(賢くない)
A-u	neqzugune(儉約すぎない)
A-u	jabacugune(冷たく濡れて不愉快でない)
A-u	adarasugune(新しくない)
A-u	edamasugune(惜しくない)
A-e	egune(良くない)
A-e	taqgegune(高くない)
A-e	mizugegune(短くない)
A-e	curacukenegune(厚かましくない)
B	kogune(濃くない)
B	osogune(遅くない)
B	hosogune(細くない)
B	kasukogune(狡賢くない)
B	haqkogune(冷たくない)

-anme(否定推量)

A-u	adarasuguanme(新しくないだろう)
A-e	taqgeguanme(高くないだろう)

-de(中止)

A-i	oqkigude(大きくて)
A-i	kenarigude(羨ましくて)
A-u	hiqgugude(低くて)
A-u	jasugude(安くて)
A-u	kejesugude(賢くて)
A-u	neqzugude(儉約すぎて)
A-u	jabacugude(冷たく濡れて不愉快で)

A-u	adarasugude(新しくて)
A-u	edamasugude(惜しくて)
A-e	egude(良くて)
A-e	taqgegude(高くて)
A-e	mizugegude(短くて)
A-e	curacukenegude(厚かましくて)
B	kogude(濃くて)
B	osogude(遅くて)
B	hosogude(細くて)
B	kasukogude(狡賢くて)
B	haqkogude(冷たくて)

-naru(なる)

A-i	oqkigunaru(大きくなる)
A-i	kenarigunaru(羨ましくなる)
A-u	hiqgugunaru(低くなる)
A-u	jasugunaru(安くなる)
A-u	kegesugunaru(賢くなる)
A-u	neqzugunaru(儉約すぎるようになる)
A-u	jabacugunaru(冷たく濡れて不愉快になる)
A-u	adarasugunaru(新しくなる)
A-u	edamasugunaru(惜しくなる)
A-e	egunaru(良くなる)
A-e	taqgegunaru(高くなる)
A-e	mizugegunaru(短くなる)
A-e	curacukenegunaru(厚かましくなる)
B	kogunaru(濃くなる)
B	osogunaru(遅くなる)
B	hosogunaru(細くなる)

B kasukogunaru(狡賢くなる)

B haqkogunaru(冷たくなる)

活用形2

言い切り

A-i oqki(大きい)

A-i kenari(羨ましい：佐藤(1992)p. 95参照)

A-u hiqgu(低い)

A-u jasu(安い)

A-u kegesu(賢い：佐藤(1992)p. 176参照)

A-u neqzu(儉約すぎる：この意味の説明は不十分であるが、
簡潔に表現できる共通語がないので、便宜的にこの
ように記載した。佐藤(1992)p. 138参照)

A-u jabacu(冷たく濡れて不愉快だ：佐藤(1992)p. 192参照)

A-u adarasu(新しい)

A-u edamasu(惜しい)

A-e e(良い)

A-e taqge(高い)

A-e mizuge(短い)

A-e curacukene(厚かましい：佐藤(1992)p. 159参照)

B koe(濃い)

B osoe(遅い)

B hosoe(細い)

B kasukoe(狡賢い：「賢い」に対応する語形であるが、意味
はマイナスのニュアンスを持っており、「狡賢い」に
近い。)

B haqkoe(冷たい：佐藤(1992)p. 31参照)

連体修飾

A-u adarasuna(新しいの)

adarasuna kata(新しいのを買った。)

A-e taqge mono(高い物)

-ro(推量)

A-i oqkiro(大きいだろう)

A-i kenariro(羨ましいだろう)

A-u hiqguro(低いだろう)

A-u jasuro(安いだろう)

A-u kejesuro(賢いだろう)

A-u neqzuro(儉約すぎるだろう)

A-u jabacuro(冷たく濡れて不愉快だろう)

A-u adarasuro(新しいだろう)

A-u edamasuro(惜しいだろう)

A-e taqgero(高いだろう)

A-e mizugero(短いだろう)

A-e curacukenero(厚かましいだろう)

B osoero(遅いだろう)

B hosoero(細いだろう)

B kasukoero(狡賢いだろう)

B haqkoero(冷たいだろう)

-dero(推量)

A-u adarasudero(新しいだろう)

A-e edero(良いだろう)

A-e taqgedero(高いだろう)

B koedero(濃いだろう)

-ndero(推量)

A-u adarasundero(新しいのだろう)

A-e taqgendero(高いのだろう)

-qke(過去)

A-i	oqkiqke(大きかった)
A-i	kenariqke(羨ましかった)
A-u	hiqquqke(低かった)
A-u	jasuqke(安かった)
A-u	kegesuqke(賢かった)
A-u	neqzuqke(儉約すぎた)
A-u	jabacuqke(冷たく濡れて不愉快だった)
A-u	adarasuqke(新しかった)
A-u	edamasuqke(惜しかった)
A-ε	taqqeqke(高かった)
A-ε	mizugeqke(短かった)
A-ε	curacukeneqke(厚かましかった)
B	koeqke(濃かった)
B	osoeqke(遅かった)
B	hosoeqke(細かった)
B	kasukoeqke(狡賢かった)
B	haqkoeqke(冷たかった)

-kero(過去推量)

A-u	jabacukero(冷たく濡れて不愉快だったろう)
A-u	adarasukero(新しかっただろう)
A-u	edamasukero(惜しかっただろう)
A-ε	taqqekero(高かっただろう)
A-ε	curacukenekero(厚かましかっただろう)

-roke(過去推量)

A-u	adarasuroke(新しかっただろう)
A-ε	taqgeroke(高かっただろう)

-kederо(過去推量)

A-u	kegesukederо(賢かっただろう)
-----	-----------------------

- B haqkoekedero(冷たかっただろう)
- kendero(過去推量)
- A-u adarasukendero(新しかったのだろう)
- A-e taqgekendero(高かったのだろう)
- sorda(様態)
- A-u adarasusorda(低そうだ)
- A-e taqgesorda(高そうだ)
- jorda(様態)
- A-u adarasujorda(新しいようだ)
- A-e taqgejorda(高いようだ)
- doja(伝聞)
- A-u adarasudoja(新しいそうだ)
- A-e taqgedoja(高いそうだ)
- ba(仮定)
- A-i oqkiba(大きければ)
- A-i kenariba(羨ましかれば)
- A-u hiqguba(低ければ)
- A-u jasuba(安ければ)
- A-u kegesuba(賢ければ)
- A-u neqzuba(儉約すぎれば)
- A-u jabacuba(冷たく濡れて不愉快ならば)
- A-u adarasuba(新しかれば)
- adarasuba kau(新しかれば買う。)
- A-u edamasuba(惜しかれば)
- A-e taqgeba(高ければ)
- taqgeba kawane(高ければ買わない。)
- A-e eba(良ければ)
- A-e mizugeba(短ければ)

- A-ε curacukeneba(厚かましければ)
 B koeba(濃ければ)
 B osoeba(遅ければ)
 B hosoeba(細ければ)
 B kasukoeba(狡賢ければ)
 B haqkoeba(冷たければ)
- nadaba(仮定)
 A-u adarasunadaba(新しいならば)
 A-ε taqgenadaba(高いならば)
- domo(逆接)
 A-u adarasudomo(新しいけれども)
 A-ε taqgedomo(高いけれども)
- roba(推量仮定)
 A-u adarasuroba(新しいだろうならば)
 A-ε taqgeroba(高いだろうならば)
- rodomo(推量逆接)
 A-u adarasurodomo(新しいだろうけれども)
 A-ε taqgerodomo(高いだろうけれども)

活用形 3

- migi(強調)
 A-i oqkimigi(大きいのだ)
 A-u hiqumigi(低いのだ)
 A-u jasumigi(安いのだ)
 A-u kegesumigi(賢いのだ)
 A-u neqzumigi(儉約すぎるのだ)
 A-u jabacumigi(冷たく濡れて不愉快なのだ)
 A-u adarasumigi(新しいのだ)
 A-ε taqgemigi(高いのだ)

A-e	mizugemigi(短いのだ)
A-e	curacukenemigi(厚かましいのだ)
B	osomigi(遅いのだ)
B	hosomigi(細いのだ)
B	kasukomigi(狡賢いのだ)
B	haqkomigi(冷たいのだ)

-sa(名詞化接辞)

A-i	oqkisa(大きさ)
A-u	hiqgusa(低さ)
A-u	jasusa(安さ)
A-u	adarasusa(新しさ)
B	kosa(濃さ)
B	ososa(遅さ)
B	hososa(細さ)

-mi(名詞化接辞)

A-e	taqgemi(高さ)
	taqgemi nanbonurae(高さはどれくらいか。)

なお、形容詞の語彙については、斎藤(1935)に音声表記された詳しい資料が存在する。音声的な融合(ならびにその形式の類推によるひろがり)について検討する上でも貴重な資料である。

4. 形容動詞の活用

4.1. 活用表

当該方言においては活用体系上、形容動詞を認定することが必要である。通時的な語構成上は確かに「体言+断定の助動詞」から成るものであるが、共

時的な「体言+断定の助動詞」とは異なり、連体修飾の用法が存在するからである。当該方言においても「静かだ」は「鳥だ」とかなり並行した活用を持つが、「静かな所」に相当する活用形は見出せるが、「鳥な人」のような形は文法的に存在しない。また、形容動詞そのものが借用ということもなく俚言形も存在し、文法上の範疇として確立しているものである。

形容動詞の活用表を活用表11に示す。

活用表11 形容動詞

	静かだ	お洒落だ	
	suzuga	koqpe	語幹
活用形 番号			主な後続の助動詞・助詞 ないしは単独での意味・用法
1	de	de	ne(否定)
2	da	da	言い切り
3	-	-	naru(になる)

それぞれの活用形に接続する助動詞・助詞・単独での意味・用法について述べる。

活用形1は、ne(否定)の他、中止形としても用いられ、ro(推量)、rodomo(推量逆接)も付く。neはneRで現れることもある。

活用形2は、言い切りで用いられる他、連体修飾として用いられることもある。また、domo(逆接)、derodomo(推量逆接)、ga(疑問)、ke(過去)、kero(過去推量)、ba(仮定)、gondaba(仮定)、gamosurene(かもしれない)、jorda(様態)、dean mega(否定推量疑問)が付く。jordaはjoedaでも同じで、後者の方が古い語形であると話者は内省する。

活用形3は、naruへの接続にあたってはeをはさみこむこともあるが、むし

ろない方が話者にとっては自然なようである。

当該方言においては言い切りと連体修飾が同じ形式になっているのが特徴である。また、ナリ系の形式がまったくないのも特徴である。naru との接続(活用形3)において、助詞を介さない点についてはVI章を参照のこと。

4.2. 形容動詞の活用の語形例・文例

以下には、実際の表現形を活用形ごとに示す。示し方は2.4.の動詞ならびに3.3.の形容詞の方法に準ずる。

単語の意味が理解しにくいと思われる俚言形については、活用形2の「言い切り」において簡単にコメントを付す。

配列は、語形をおおまかに共通語に対応させての50音順に従って並べている。

活用形1

-ne(否定)

koqpedene(お洒落でない)

suzugadene(静かでない)

doqkogidene(臆病ではない)

中止

koqpede(お洒落で)

suzugade(静かで)

doqkogide(臆病で)

-ro(推量)

koqpedero(お洒落だろう)

suzugadero(静かだろう)

doqkogidero(臆病だろう)

-rodomo(推量逆接)

suzugaderodomo(静かだろうけれども)

活用形2

言い切り

koqpeda(お洒落だ：佐藤(1992)p.103参照)

suzugada(静かだ)

doqkogida(臆病だ：佐藤(1992)p.50参照)

連体修飾

koqpeda jome(お洒落な嫁)

suzugada dogo(静かな所)

doqkogida hito(臆病人)

-domo(逆接)

suzugadadomo(静かだけれども)

-derodomo(推量逆接)

suzugadaderodomo(静かだろうけれども)

-ga(疑問)

suzugadaga(静かか)

-ke(過去)

koqpedake(お洒落だった)

suzugadake(静かだった)

doqkogidake(臆病だった)

-kero(過去推量)

suzugadakero(静かだ)

-ba(仮定)

koqpedaba(お洒落なら)

suzugadaba(静かなら)

doqkogidaba(臆病なら)

-gondaba(仮定)

suzugadagondaba(静かなら)

- gamosurene(かもしれない)
- suzugadagamosurene(静かかもしれない)
- jorda(様態)
- suzugadajorda(静かなようだ)
- deanmega(否定推量疑問)
- suzugadadeanmega(静かだ)

活用形 3

- naru(になる)
- koopenaru(お洒落になる)
- suzuganaru(静かになる)
- doqkoginaru(臆病になる)

5. むすび

以上、鶴岡市大山方言の用言の活用を記述した。また、簡単にではあるが、通時的なコメントも付した。それぞれの品詞の共時的な形態の記述に関しては、ほぼ網羅できたものとする。ただし、まだ、いくつかの助動詞などの接続で活用形が若干ふえる可能性は残されている。また、関連して、文法的なカテゴリーをこれで網羅できたかと言うと不完全なところが多々あるはずである。これについては当面の目標ではなかったのではかたないとしても、不満の残るところかもしれない。同時に文法的な意味の記載にしても不十分な点があろう。形式を中心に記述したので、簡単にしか記載できなかったものがあり、かえって誤解を招く点があることをおそれる（例えば、2.1.2., 2.4., 3.3., 4.2. 他で、助詞・助動詞等に対して、()内などに訳とは別に文法的な意味を記載したものがある。これは活用形ならびにそれらと助詞・助動詞等が組み合わさって表現する意味を述べたものであるが、その点についての解説が不十分である。ただし、このような記載法について解説を始めると方法論から述べる必要があり、別途扱うべき問題が多く、当面の目的から離れた論考の

部分が大きくなると判断し、省略したものである)。その他、通時的なコメントにしてもごく簡略なものにとどまり、さらに述べるべき点、扱うべき問題は残されている。

活用は用言のみではなく助動詞にもある。助動詞の活用については一部手を付けたもののまだまだ調査が進んでいない。この点も含めて残された課題は少なくない。

最後に時間のかかるやっかいな調査に対して粘り強く相手をして下さった話者、佐藤治助氏に深謝申し上げます。佐藤氏が研究に取り組んでおられる斎藤秀一の目指そうとしたものに本稿がいくらかでも近づけたとすれば幸いである。

参考文献

- 荒井孝一(1989)「酒田方言における進行相と結果相の対立—特に結果相の用法について—」『国語学』159
- 石川明子(1977・1978)「江戸時代庄内方言の助詞と助動詞—郷土本を資料として—」『山形方言』13・14
- 井上史雄(1974)「荘内・大鳥・山北方言の音韻(文法)分布」『山形方言』11
- 井上史雄(1976)「「呉れる」の語形変化過程」『山形方言』12
- 井上史雄(1978)「《新方言》の分布と変化」『山形方言』14
- 井上史雄(1979)「荘内方言におけるサ変動詞の五段化と一段化」『山形方言』15
- 井上史雄(1980)「音韻・文法の変化様式—荘内方言「面白い」のグロットグラム—」『東京外国語大学八十周年記念論文集』
- 井上史雄(1981a)「荘内方言のr脱落にみる形態変化の近代史」『東京外国語大学論集』31
- 井上史雄(1981b)「音韻変化の伝播過程—荘内方言の動詞におけるr脱落—」『方言学論叢 I』(三省堂, 井上(1985)に再録)

- 井上史雄(1985)『新しい日本語－《新方言》の分布と変化－』(明治書院)
- 大西拓一郎(1992)『方言用言活用体系調査票A・B』(私家版)
- 大西拓一郎(1993a)『方言活用体系調査票C-1』(私家版)
- 大西拓一郎(1993b)『方言活用体系調査票C-2』(私家版)
- 大森榮(1931)「伊豆駿河地方に於ける『蹴る』の活用について」『方言』1-4
- 国立国語研究所(1953)『地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』
(秀英出版)
- 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較
－』(秀英出版)
- 国立国語研究所(1991)『方言文法全国地図』2
- 国立国語研究所(1993)『方言文法全国地図』3
- 斎藤秀一(1933)「山形県荘内の形容詞」『土の香』9-6
- 斎藤秀一(1935)「山形県山添村の形容詞」『文字と言語』6
- 斎藤秀一(1936)「荘内方言に於ける複語尾」『方言』6-20
- 佐藤治助(1992)『心にのこる庄内語』(鶴岡書店)
- 高橋明美(1986)「秋田県雄勝方言文法に関する一考察－用言の活用と助詞・
助動詞による表現法－」『米沢国語国文』13
- 橘正一(1937)「『着らん』と『着やん』－一段動詞の四段化傾向－」『国語研究』
5-1
- 橋本進吉・岩淵悦太郎(1933)「諸方言に於ける『蹴る』の活用に関する調査」
『方言』3-4
- 本堂寛(1982)「岩手県の方言」『講座方言学4 北海道東北地方の方言』(国
書刊行会)
- 三矢重松(1931)『荘内語及語釈』(刀江書店)
- 三矢重松(1932)『国語の新研究』(中文館書店)(三矢(1931)と同じ内容のも
のであるが、もとの雑誌論文を再録したもので、オリジナルに近いようであ
る。校訂者による注記もある。)

本稿執筆にあたっては、平成5年度文部省科学研究費、奨励研究(A)「方言における用言の活用の記述的研究」(課題番号05710260 研究代表者・大西拓一郎)の成果も一部利用したことを記しておく。

V 章

鶴岡方言のテンスとアスペクト

渋谷勝己

1. はじめに	239
2. 鶴岡方言におけるテンス・アスペクト形式	240
3. 鶴岡方言のテンスの体系	244
4. 鶴岡方言のアスペクトの体系	257
5. まとめ	264

1. はじめに

本章は、国立国語研究所による鶴岡方言の体系記述調査のなかから、渋谷が担当したテンス・アスペクトに関する結果を報告するものである。調査は、1992年11月22日から24日にかけて行った。

本章でいうテンスとは、ル形と夕形(一部ヶ形)の2(あるいはヶを含めて3)形式の対立によって示される文法的なカテゴリーのこと、またアスペクトとは、ル形・テイル形の2形式の対立によって表される文法的なカテゴリーのことで、意味的というよりは、便宜的に形式を優先させて規定したものである。したがって本章では、たとえば寺村(1984)があげる広義のアスペクト形式のなかでは、二次的アスペクト形式のうちのほんの(しかし重要な)一部を取り上げたにすぎない。

調査は、渋谷が調査地に赴く前に、先行研究(荒井(1983・1989)、金田(1983)など)および渋谷の母方言である山形市方言の体系を参考にして作成した調査票をベースにして、面接調査によって行った。基本的には調査文を方言に置き換えてもらう翻訳法を用いたが、それに加えて、調査者が調査のなかで適宜方言文を作成し、その適格性を判断してもらう適格性判断法、あるいは自然談話のなかに現れた用例を採集するいわゆる自然傍受法をあわせて採用した。これら3つの方法を総合した調査法は「体系構築法」と呼ぶことができるかもしれない。

インフォーマントは、鶴岡生え抜きの、次の2人である。

(a) 小野寺忠雄氏(男性、1931年3月18日生まれ)

- ・現在に至るまで神明町、鳥居町、大東町など旧市街地に在住
- ・38歳から55歳まで山形県新庄市および山形市にて勤務(ただしその間も鶴岡に在住)
- ・両親は東田川郡朝日村(父)および鶴岡(母)出身

(b) 工藤喜美子氏(女性、1920年5月7日生まれ)

- ・21歳の時から1年半だけ北満滞在、それ以外は家中新町在住

・両親はともに旧西田川郡京田村(現鶴岡市中野京田)出身

以下、調査のなかで得られた用例は、問題になるテンス・アスペクト形式のみカタカナで方言形を表示してある。表記は読みやすさということをごろがけたために、必ずしも音声特徴を忠実に写しているとは限らない。なお用例のなかには、いちいち明記していないが、社会調査(1章参照)において上の2人以外の老年層インフォーマントに接した際に得られたものも含まれている。

本調査の目標は、現在観察することのできる最も古い体系を記述することにあつた。したがって、年齢差が見られるなど、その記述を行うのに社会言語学的な調査が必要とされる場所は、将来の課題として残った(2.「テンス・アスペクト形式」の節など参照)。しかし本章の記述によって、

- (a) テンスの面では、状態用言が、動作動詞・変化動詞と異なって、過去表現にタ形ではなくケ形を用いること。また状態用言のなかでも、居ル系動詞が現在を表すのにタ形を用いることがあること
- (b) アスペクト面では、サッタ形という特徴的な形式があること

といった、全国共通語とは異なった鶴岡方言独自のテンス・アスペクト体系が明らかにされるであろう。

2. 鶴岡方言におけるテンス・アスペクト形式

2.1. 鶴岡方言におけるル形・タ形：テイル形・テイタ形

まず、鶴岡方言の動詞のル形・タ形およびテイル形・テイタ形を整理しておこう。当方言には意味の違いをもたないテイタ形が2種類あるので、それをテイタ形Ⅰ、テイタ形Ⅱとし、活用のタイプを考慮しつつ表1に示す。

表1で問題になることは、全国共通語でテ形が促音便・撥音便をもつ動詞の場合に鶴岡方言では、

表1 鶴岡方言の動詞のル形・タ形・テイル形・テイタ形

		ル形	タ形	テイル形	テイタ形I	テイタ形II
五 段 動 詞	書く	カグ	カイダ	カイデル	カイデダ	カイッダ
	貸す	カス	カシタ	カシテル	カシテダ	カシッタ
	待つ	マヅ	マツタ	マイデル(*)	マツテダ	マツタ
	死ぬ	シヌ	シンダ	シンデル	シンデダ	シンダ
	住む	スム	スندا	スンデル	スンデダ	スンダ
	成る	ナル	ナッタ	ナッテル	ナツテダ	ナッタ
	有る	アル	アッタ	-	-	-
	食う	クー	クッタ	クッテル	クツテダ	クッタ
一 段 動 詞	居る	イル	イダ	=	=	イッダ
	着る	キル	キタ	キテル	キテダ	キッタ
	起きる	オギル	オギダ	オギデル	オギデダ	オギッダ
	寝る	ネル	ネダ	ネデル	ネデダ	ネッダ
変 格	為る	スル	シタ	シテル	シテダ	シッタ
	来る	クル	キタ	キテル	キテダ	キッタ

([-]はその枠の形式がないこと, [=]は稀であることを示す)

(*)印のマイデルは補充形)

- (a) テイタ形IIにおいてマツタ・ナッタ・クッタなどの形式が出ることがあること(分節音レベルではタ形と同形)。さらに、語彙的でもありまたインフォーマント間で一致しないことがあるために表には示さなかったが、タ形において、ナタ(成った)・アタ(有った)などの促音の脱落した形が用いられることがあること
- (b) 同じくテイタ形IIにおいてシンダ・スンダなどの形式が出ることがあること(分節音レベルだけでなく、アクセントも含めてタ形と同形のことがある)

また、

(c) テイタ形Ⅰとテイタ形Ⅱではテイタ形Ⅱを多用するようであるが、
年齢差などによるバラツキが観察されること

といった点であろうか。このことについての状況は、本報告書のⅢ章やⅣ章でも記述されているので参照されたい。ただし、年齢差などの社会的変数やそれと連動するであろう語彙的伝播 lexical diffusion のありかたなどにも配慮した記述は、今回の調査の目的である「最も古い方言層の記述」ということとは相いれないところがあるので、今後の課題として残した。また、テイタ形Ⅱがどのようにして生じたのかという史的形態音韻論の問題についても、同じ理由でここでは説明を省略する。井上(1968・1980)、森山・渋谷(1988)などを参照されたい。

2.2. 鶴岡方言におけるテンス・アスペクト形式の体系

次に本項では、前項で整理したそれぞれの形式を、鶴岡方言のテンス・アスペクトといった文法カテゴリーを表す形式の体系として位置付けてみよう。表2のようになる。

表2 鶴岡方言のテンス・アスペクト形式の体系

		完成相		継続相	
		非過去	過去	非過去	過去
動作・変化動詞	書く	カダ	カイダ	カイテル・ダ/カイッダ	カイテダ(ケ)/カイッダ(ケ)
		カガネ	カガネケ	カイテネ	カイテネケ/カイテネガッタ(ケ)
状態動詞	要る	イル	イルケ	-	-
		イラネ	イラネケ	-	-
	有る	アル	アツケ/アツタ	-	-
		居る	イル/イダ	イダ(ケ)	イッダ
		イネ	イネケ	=	=
形容詞	ない	ネ	ネケ/ネガッタ(ケ)	-	-

([-]はその種の形式がないこと, [=]は稀であることを示す)

当方言では、動作動詞・変化動詞と状態動詞(状態用言)とでテンス・アスペクト形式が異なっているので、表では分けて示してある(ただし、動作動詞・変化動詞の否定形が形式上状態用言としてふるまうことはいうまでもない)。またそれぞれの形式は、国立国語研究所(1985)などにしたがって、ル形・タ形を「完成相」形式、テイル形・テイタ形を「継続相」形式としてまとめ、それをさらに、「非過去」と「過去」に分けた。ただし以下の記述のなかでは、理解の便を考慮して、これまでと同じく、形式に即して、「ル形」「タ形」「テイル形」「テイタ形」として言及する。形容詞・形容動詞についても、便宜的に「白イ」「ナイ」「キレイダ」などを「ル形」と呼ぶことにするが、「白イケ」「キレイダケ」「ナイケ」などの「ケ」の付いた形は、動作動詞・変化動詞の場合に「タ」形と意味・機能的に対立するので、これも形式に基づいて「ケ形」と呼ぶ。

表では、動作動詞・変化動詞の代表として「書ク」、状態動詞の代表として「要ル」「有ル」「居ル」、他の状態用言の代表として形容詞「無イ」を例にして、その諸形式を示した。ケの前に促音が入るか否か(カガネケかカガネッケか)、ケの前のルが促音化するか否か(イルケカイッケか)などの音声面にかかわる細部は無視している。また、動作動詞・変化動詞のテイル形を含む居ル系用言の肯定過去表現などについてはケがカッコに入れてあるが、これはこの形式が任意の要素であることを示す。このことについては3.3.(f)参照。

この表からわかる、当方言のテンス・アスペクト上の特徴をまとめれば次のようになる。

- (a) 動作動詞・変化動詞の肯定過去表現にはタ形が用いられるが、状態用言にはケ形が用いられる(3.1.・3.2.)。ただしこのことは、動作動詞・変化動詞にケ形がないということの意味するものではない(3.4.2.)。
- (b) テイル形や居ルなどの居ル系動詞は、他の状態用言と異なって、タ形で現在を表すことがある(3.3.)。
- (c) さらに居ルについてはイッダという居ルのテイタ形が現在の状態を表すのに用いられ、意味的にイル・イダと対立する。ただしこれと平行的に、動詞のテイル形にさらにテイルが付加するということはない

(3. 3.)。

以上3つの問題に留意しつつ、以下具体的に、鶴岡方言におけるテンスとアスペクトの体系について記述することにしてしよう。

3. 鶴岡方言のテンスの体系

本節ではまずテンスの体系を取り上げる。記述は、(1)動作動詞・変化動詞の完成相表現(3. 1.), (2)(テ)イル以外の状態用言(3. 2.), (3)(テ)イル(3. 3.), (4)テンスマーカーとしてのケの性質(3. 4.), の順序で行う。状態用言のうち、特に(テ)イルだけを別項目とした理由は、すぐ上に述べた(2. 2. (b)(c))。

3. 1. 動作動詞・変化動詞の完成相表現

この点については、当方言の体系は全国共通語のそれと大差ない。基本的にル形で未来、タ形で過去を表す(当方言では、例文(2)のケ(一)ダのように、[ai]が融合して[e(:)]になるなどの音声的なプロセスが観察されるが(Ⅱ章参照)、本章では通読の便を考慮して、以下の例では非融合形のほうをあげることが多い)。

(1) うちのせがれは明日手紙をカグ

(2) うちのせがれは昨日手紙をカイダ/ケ(一)ダ

ル形が、現在を中心とするある幅をもった期間における動作や変化の繰り返しや、現在の習慣などを表し、

(3) うちのせがれは時々手紙をカグ

時に属性表現のなかで用いられることも同じである。

(4) うちのせがれはすばらしい字をカグ

永遠の真理などを表すという点でも変わりがない。

(5) 氷は0度でトゲル

3.2. (テ)イル以外の状態用言

(テ)イル以外の状態用言も、基本的にル形が現在の状態を表す点では全国共通語のそれと変わりがない。

(6) うちのせがれは頭がイー

また、状態用言が主体の意図によって容易に変化し得る状態を表す場合には、それが近未来を表すことがあることも同じである。

(7) あしたはイソガン

しかし過去の状態を表す場合には、図1(『方言文法全国地図』141図「高かった」の略図。子音の有声化、母音の融合などの一部の方言に見られる音声プロセスはほとんど捨象してある)からもわかるように、タ形だけでなく、ケ形(あるいはタとケの両者が共起したタケ形)が用いられることがある(以下の用例で、頭に「?」の記号がある場合にはその用例が文法的にやや不適格な(おかしい)ことを、また「?」の数が多い場合にはその数に比例してその不適格な度合いが高いことを、さらに「*」の記号がある場合にはそれが当該方言では容認されない不適格な文であることを表す)。

(8) a ?うちのせがれは頭がヨガッタ(タ形)

b うちのせがれは頭がイーケ(ケ形)

c うちのせがれは頭がヨガッタケ(タケ形)

(9) a ?今日は野菜がタゲガッタ

b 今日は野菜がタゲケ

c 今日は野菜がタゲガッタケ

これら3つの形式のなかでは、テンスの問題からは少し逸れるが、たとえば安堵したときに、

(10) イガッタイガッタ(良かった良かった)

とは言うが、

(11) *イーケイーケ

とは言わないといったことがあることからすれば、ケによる過去表現が新し

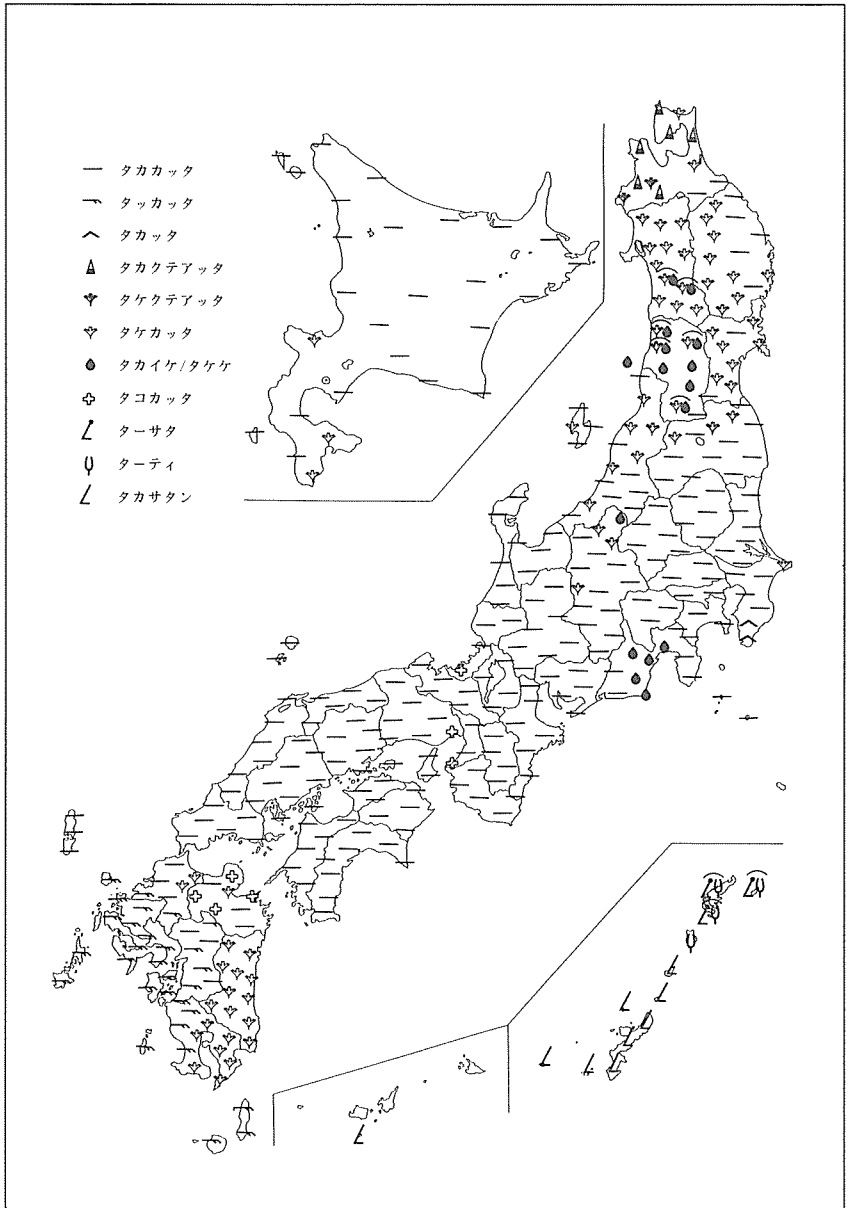


図1 「この着物は高かった」

いもので、タ形のほうはこのような慣用的な表現のなかか、ケのサポートを得て用いられる場合(タケ形)以外には、単独では用いられなくなっていると言うことができよう。ただしケが状態用言を述語にもつ文において純粋にテンスマーカ―として機能しているかというところでもない。このことについては項を改め、3.4.2. で述べることにする。

3.3. (テ)イル

次に、継続相形式(動詞テイル形)を含む、状態動詞居ルの特徴について記述する。先に2.2. で述べたことも含めて居ル系動詞の基本的な特徴をまとめれば、次のようになる。

(a) 居ル系動詞の未来はイルで表すが、現在を表すにはイル・イダ・イッダ(イデダは稀)の3つの形式が用いられる。

(12) 太郎は明日は一日家にイル/*イダ/*イッダ

(13) a 太郎は今家にイル

b 太郎は今家にイダ

c 太郎は今家にイッダ

イッダは「イテイタ」の方言形である。話者によっては大阪方言のイテル(＜イテイル)に相当するイデル、およびその否定形イデネも使うことがあるようであるが、現在を表す丁寧形のイマシタ・イデマシタなどはない。

(b) 絶対テンスにおいてタ形が現在を表すのは、発見のタ等を除けば、動詞居ルのみに観察される現象である(「あっ、今日はテストだった」などの「思い出し」は、当方言ではケで表される)。居ルのタ形にこのような用法が発達するに至った歴史的な問題はまだ解明されていないが、この現象は広く東日本一般に分布するものである(図2(国立国語研究所(1979):35図)参照)。

(c) しかしこの3形式は、常に互換性があるというわけではない。次のように恒常性の度合いが高くなるにしたがって、イダ・イッダは使いにくくなる。

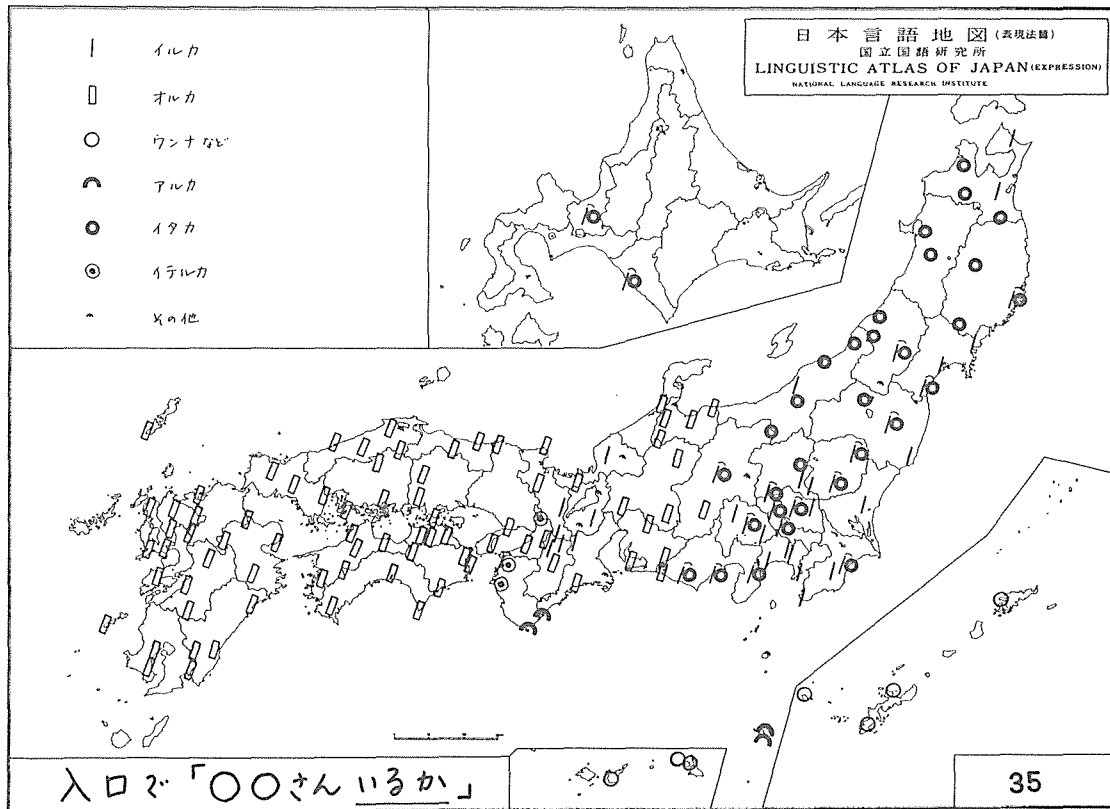


図2 ○○さんいるか

(14) 太郎はいつも家にイル/??イダ/??イッダ

(d) また探していたヒトを見つけだしたような場合には、イッダは使いにくい。イルも不自然で、イダが普通である。

(15) a (太郎を探していて) あっ, ??イル/イダ/???イッダ

cf. (探している人に向かって) 太郎ならここにイル/イダ/イッダ
よ

なお当方言では、探しているモノを発見した場合にもイルを使うことがある。

(16) (鉛筆を探していて) あっ, *イルイル/イダイダ/*イッダイッダ/
?アルアル/アッタアッタ/*アッケアッケ

これは、「あるモノが目の前にない」という状態が、そのモノの意志的な動きの結果であるかのごとくとらえられ、一時的にモノが有情物扱いされた結果であると思われる。したがってそのモノは本体から分離可能な(alienable)ものに限られており、次のような例は非文となる。

(17) *(死体にあるはずの傷を探していて) あっ, イダイダ

(18) *(辞書で単語を探していて) あっ, イダイダ

(e) テイル形・テイタ形の対立は、上のイルとイダの対立に準じるが、イッダ形はない(2.2.(c)・4.1.)。

(f) 過去表現にはイダ・イッダ・イダケ・イッダケの4つが用いられ、このうちイダとイッダが使われた場合には表面上現在を表すのか過去を表すのか、その対立が不明瞭になることがある(図2と図3(国立国語研究所(1979):34図)の山形県の状況を参照)。

(19) 昨日は一日中家にイダ/イッダ/イダケ/イッダケ

(20) 昨日太郎が来たときは手紙をカイッダ/カイッダケ

その場合、例文にあるような「昨日」などの副詞句や文脈情報はそのテンスの解釈を決定することはいうまでもない。

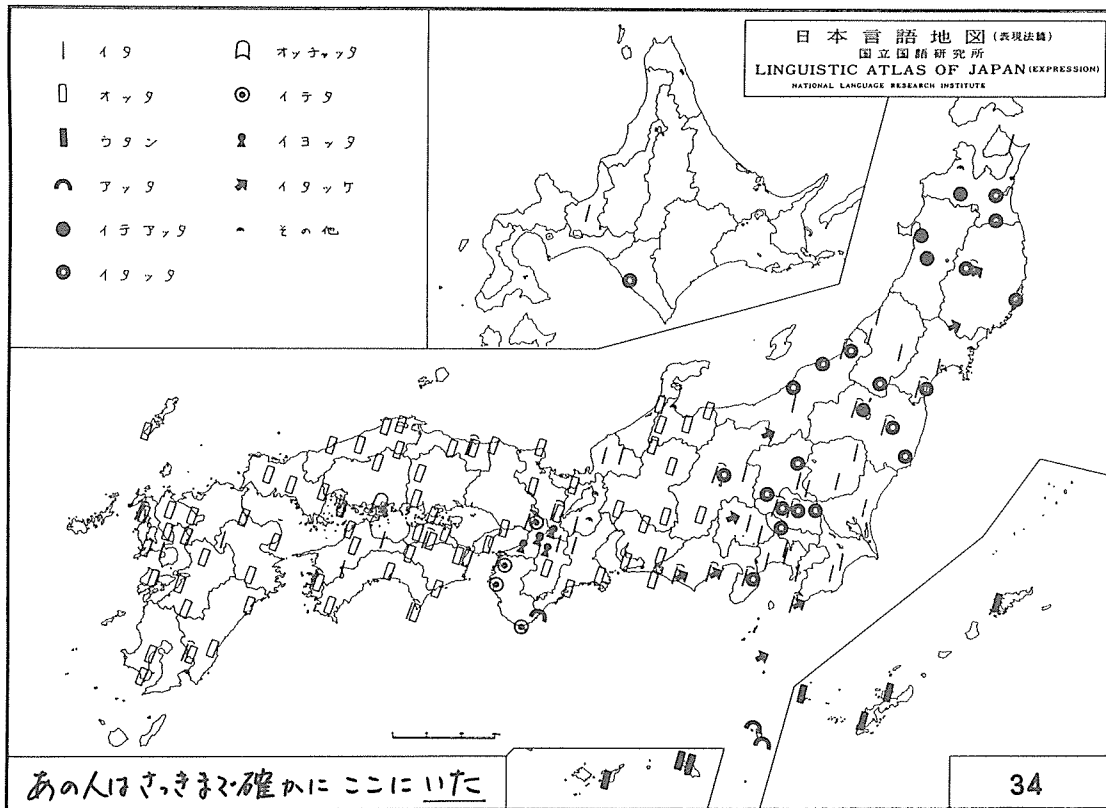


図3 「あの人(は)さっきまで確かにここにいた」

3.4. ケの機能

次に、上の記述で浮上してきた、鶴岡方言のケの問題について考えてみよう。その特徴を浮き彫りにするために、ここではまず東京方言のケの働きについて整理し、そのあとでそれと対照するかたちで鶴岡方言のケの用法をまとめることにする。

3.4.1. 東京方言のケ

3.4.1.1. 形式的特徴

東京方言のケは、形式的には〔動詞・形容詞タッケ〕〔名詞・形容動詞ダッ(タッ)ケ〕などの固定した形で用いられる。

- (21) そういえばみんなでそこへ行ったっけ
- (22) そういえばあのときの太郎の態度はどこかおかしかったっけ
- (23) そういえば太郎はまだ未成年だったっけ

動詞文・形容詞文の場合、現在あるいは未来のデキゴトや状態について述べる時でも、

- (24) ???そこへはだれが行くっけ?
- (25) ??そんなところに喫茶店なんてあるっけ?
- (26) ??その建物って、白いっけ?

のようにル形にケが下接することはほとんどない(ただし容認度は、(24)より(25)(26)のほうが若干高い)。ノダを付加するか、(状態用言の場合のみ)タ形を使って、事態を既成事実化するのが一般的である。

- (27) だれが行くんだっけ?
- (28) そんなところに喫茶店なんてあるんだっけ/あったっけ?
- (29) その建物って、白いんだっけ/白かったっけ?

先の(25)(26)のような、状態動詞・形容詞のル形にケが下接する文を容認するとすればその話者は、状態用言すべてについて、現在の状態を述べるのに〔ル形+ケ〕・〔タ形+ケ〕の両者を用いることができるという規則をもっ

ていることになる。

3.4.1.2. 意味的特徴

次に、意味的には、東京方言のケは基本的に「記憶の検索による思い出し」といった意味を表す。

まず平叙文のなかでは、次のように「(何らかのきっかけを得て)過去に蓄えた記憶を検索した結果、ある特定の記憶が表面化したこと」を表す。

(30) そういえばあの日は雪が降ってたっけ

(31) そういえば確かにそんなこともあったっけ

(32) そういえば明日、僕には大事な約束があったんだっけ

この場合、記憶に収められたデキゴトや状態は意図的なあるいは無意識的な検索を受けていることが大事で、「突発的な思い出し」はケによって表されることはない。その時には(33a)のようにタだけを用いるのが普通である。

(33) a アッ、今日は学校は休みだった！

b *アッ、今日は学校は休みだっ(たっ)け！

また、聞き手に対する情報伝達的なありかたとの関係ということでは、ケには独り言のなかで用いられることが多いという特徴があるが、思い出した内容を聞き手に確認するような場合にはネの下接を許すことがある。

(34) そういえばそのとき君といっしょに東京に行ったっけね

しかし(35a)の例が示すように、聞き手に情報を与える場合、そのような伝達機能を明示するヨが下接することはない。このような場合には、(35b)のようにケを用いずに言うのが普通である。

(35) a *そういえば君、そのときこんなことも言ったっけよ

b そういえば君、そのときこんなことも言ったよ

これは、東京方言ではケをもつ思い出し文は、一般に思い出すという思考作用とほぼ同時に発話されるので、ヨのようなある程度確定した情報を聞き手に伝えるというはたらきをもつ形式とは意味的に調和しないということがあるためであろう。

一方問いかけ文(疑問文)のなかでは、ケは「記憶を検索しても思い出せないことがらに対する疑いや、聞き手に対するその問い合わせ」といったことを表す。

(36) きのうちそんなこと言ったっけ?

(37) いつそんなこと言ったっけ?

(38) 英語のテストはいつだったっけ?

しかし、同じくすでに一度記憶したことがらを聞き手に対して問い合わせる場合でも、

(39) a 太郎の結婚式は来月のいつでしたっけね

b 太郎の結婚式は来月のいつでしたかね

のような、ケをもつ文とそれをもたない文では、(39a)がすでに話者の記憶のなかにあるはずの情報を一通り検索したあとで発されているのに対して、(39b)は単なる疑念表示を行っているだけにすぎない、といった違いがある。したがって、

(40) #太郎の結婚式は来月のいつでしたっけね。ちょっと思い出してみます

のようにまだ検索していないことを明示する発話が後続する場合にはおかしな発話連鎖が生じてしまうが([#]の記号は、その文(発話)がその文脈では不適切であることを示す)、

(41) 太郎の結婚式は来月のいつでしたかね。ちょっと思い出してみます

(42) 太郎の結婚式は来月のいつでしたっけね。さっきから考えているんですが

などは問題ない。

いずれにしても東京方言のケは、上に示したように、テンスマーカーとしての意味・機能はもっていない。「思い出し」を行うのは常に話し手であり、またそれが必ず発話時点での「思い出し」を表すことから、むしろ真性のモダリティ形式(仁田(1991)参照)だということができる。もちろん、連体節やカラ節のなかには入らない。

(43) *あの雪が降ってたっけ日は、外出しなかった

(44) *あの日は雪が降ってたっけから、外出しなかった

もっともここで東京方言のケをモダリティ形式として認めた場合、当該形式の、モダリティ形式全体のなかでの位置付けということが問題になるが、このことは本書の課題ではないので、今は問わないことにする。

3.4.2. 鶴岡方言のケ

これに対して鶴岡方言のケは、基本的には(伝聞などを除いて)、話し手が過去に見たり経験したりした動作・デキゴト・状態などを、発話時において振り返って述べる、広義の回想を表す形式として位置付けることができる。それ自身、テンスを分化させることはなく、また否定化を受けることもない。具体的には次のような意味・機能的な特徴をもつ。

(a) まず動作動詞・変化動詞のル形やタ形に下接した場合には、その発話内容が、見てきたことの報告や昔のデキゴトの回想(思い出)であることを表す(金田(1983)も参照)。この場合のル形とタ形は未完了か完了かというアスペクトを表すもので、テンスは表さない。

(45) a 太郎はせっせと宿題をスルケ(報告)

b 太郎はちゃんと宿題をシタケ(報告)

(46) a そういえば太郎はそのころ時々東京にイグケ(回想)

b そういえば太郎はそのころ時々東京にイツタケ(回想)

(45a)(45b)は、たとえば弟の太郎がちゃんと宿題をするかどうか見届けることを命じられた兄が、その現場にいない親に後でその結果を報告するような場面で用いられる文である。(45a)(46a)はともに「宿題をすること」「(反復的に)東京に行くこと」が終わっていない時点を基準としての報告・回想であるのに対して、(45b)(46b)ではそれが終了した段階を基準にしての報告・回想である。この4例のなかでは(46b)の場合が東京方言のケの用法と重なる。

報告や回想といったムード的な意味は、すでに確定した過去のデキゴトを事実として客観的に述べる場合、典型的には歴史上のデキゴトを編年的に列

挙するような場合には相応しくない。この場合には(47b)のようにタ形を用いて言わなければならない。

(47) a *三矢重松は1871年, 鶴岡市にウマレダケ

b 三矢重松は1871年, 鶴岡市にウマレダ

なお報告と回想の違いは、回想については(48)のように一人称の文が成り立つが、

(48) 俺, 10年前ごろはよく東京に遊びにイッタケなあ

報告ではそれが成り立たないといった点に現れる。これは、報告ということが、発話主体による、他者の行為の客観的な観察に基づいてなされる行為であることと関係があろう。

また東京方言のケとの違いということでは、鶴岡方言のケは、聞き手に聞き手の知らない情報を伝えるという伝達的なありかたを明示するヨ(あるいは方言形チャなど)の下接を許すということがある。

(49) 太郎はちゃんと宿題シタケヨ

(50) そういえばおまえ, そのときこんなこともイッタケヨ

これは、宮島(1961, p. 261)が茨城県水海道方言のケについて、それが推量のべや疑問のガの下接を許すことから、東京方言のケよりも客観的、非回想的だと指摘したことと通じるところのある現象である。鶴岡方言のケも、そのコト的な性質の度合いが高いためにヨの下接を許す。

(b) さらに状態用言の過去表現で、ネガッタなどタのみを用いるのではなく、ネケ・ネガッタケなどのようにケを用いる場合には(このほうが現在では主流。両者に意味の違いはない)、ケはそのコト性を一層強めてテンス形式化し、動作動詞・変化動詞に見られたタによる過去とケによる報告・回想の対立が不明瞭になる。

(51) a 太郎は昨日は元気イーケ(過去)

b 太郎はそのころはまだ元気イーケなあ(回想)

もっとも鶴岡方言のケは、カラ節(方言形はサゲ節・ハゲ節など)には入っても(この点東京方言のケと異なることに注意)連体節のなかでは用いられない

から、テンス形式になりきっているわけではない。モダリティ形式としての性格を残しているところがある。

(52) きのはサムイケサゲ/サムガッタ(ケ)サゲ/(サムイサゲ)はじめて
ストーブをつけた

(53) 最後まで元気 *イーケ/ヨガッタ/イー のは うちの息子だけだった

(54) 去年本当に *サムイケ/サムガッタ/サムイ のは 二週間ぐらいだった

(55) 昨日河原で絵を*カイツダケ/カイツダ 人は うちの叔父だ

以上の状況は、歴史的にあるいは一般論的に見れば、

- (a) 過去を表す(ケと共にしない)形容詞ガッタ形がなぜ消えた(消えつつある)のか
- (b) それと同時に動詞タ形がなぜ消えてしまわなかったのか
- (c) そのことと関連して「状態」という意味についての「過去」とは何なのか
- (d) 「状態」という意味については過去と回想(報告)が中和し、区別されなくなるのか

といった問題を提起する。

このうち(a)と(b)については、活用語(特に形容詞)の無活用化といった形式面での変化の一般的な流れのなかに位置付けることができるのかもしいない。

また(c)と(d)については、全国共通語でも、

(56) a その山へは若い人だけがでかけた

b *その山へは若かった人だけがでかけた

(57) a アメリカは遠いのでこれまでなかなか行けなかった

b *アメリカは遠かったのでこれまでなかなか行けなかった

(58) a 当時逆上がりができるのは僕のほかにあと二・三人だけだった

b 当時逆上がりができたのは僕のほかにあと二・三人だけだった

(59) a からだの調子が悪いので休んだ

b からだの調子が悪かったので休んだ

のように、連体節や副詞節のなかでテンスを分化させない(一般的な属性を言う場合、例(56)(57)),あるいは形式面で分化させても意味が異なるないケース(例(58)(59))があり、また、

(60) 富士山は高かった

のように、永続的な状態(明らかに現在とわかる事態)をタ形で述べる場合にはテンス形式がモダリティ形式にずれ込んでいくといった現象が観察される(国立国語研究所(1985):第Ⅷ部第4章なども参照)。宮島(1961, p. 262)は名詞の過去「山だった」について、名詞は動詞と異なって完了ということがありえないために、回想的過去と完了的過去が区別されないと述べているが、この説明は一部の形容詞文についても適用できるであろう。

いずれにしても、これらの問題は本書の当面の課題ではないので、ここではこれ以上立ち入ることはしない。なお、ケについては、3.4.1.で考察した現代東京方言のケよりも、江戸語のケのほうがわずかながらその用法が広い(中村(1948)など)。その点、鶴岡方言のケは、現代東京方言のそれと対照するよりも、江戸語のそれと対照するほうが興味がある。この問題については、渋谷(印刷中)で考察を加えた。

4. 鶴岡方言のアスペクトの体系

ル形の表すアスペクト的な意味については、全国共通語のそれ、すなわち「動作・変化をまるごとのすがたで差し出す」ということに加えて特に述べるべき特徴はない。そこで本節では、テイル形とテイタ形Ⅰ・Ⅱ、および鶴岡方言に特徴的なサッタ形の表すアスペクト的な意味について記述することにする。

4.1. テイル形とテイタ形 I・II の表すアスペクト的意味

テイル形, テイタ形 I・II は, いずれも全国共通語と同じく, 「動作の進行」「変化の結果の状態」といった基本的な意味, およびその派生的な意味(「習慣」「経験」など)を表す。たとえば,

(61) 私は今部屋で手紙をカイツダ(動作の進行)

(62) 窓がアイツダ(変化の結果の状態)

(63) 私は最近毎朝手紙をカイデル(習慣)

(64) 私は一度結婚シテル(経験)

などである。ただし経験については, 調査のなかで, テイル・テイタのようなアスペクト形式よりも, シタゴドアルといった経験を表すより透明な形式や, シタのようなテンス形式のほうが出やすいといったことがあった。

(65) 私は一度結婚シタゴドアル/シタ

(66) 私は前に一度その映画をミダゴドアル/ミダ

このことは, 「経験」といった意味を, 鶴岡方言ではアスペクト形式テイルを用いて表すことがない(鶴岡方言のテイルには, 「経験」を表す用法がない)ということの意味なのか, それとも他の形式を用いることが多いために頻度としては小さいが, そのつもりがあればテイルを「経験」を表す方言形式として使うことができるということの意味なのか, 現段階ではいずれとも決めることができない。それは, 調査のなかで実際にインフォーマントから誘導的に引き出すことのできたテイルの「経験」用法が, 次のようなものである可能性が同じ程度にあるからである。すなわち,

(a) 「経験」を表すテイルが鶴岡方言になかったとしても, 当方言と共存する全国共通語から「経験」を表すテイルが一時的に方言形として借用された。

(b) テイルの「経験」という意味が, 鶴岡方言にもある「変化の結果の状態」の意味から当方言内部で一時的に派生した。この種の派生はどの方言でも普遍的に起こり得る。

この種の問題は、実は方言文法を研究する際にはいつでも起こってくる可能性のあるものである。ここでは調査法上の問題とあわせて、今後の研究の進展にその解決を委ねることにして、結論を出すことは差し控えたい。

次に、テイル形とテイタ形の意味の違いについて考えてみよう。まずテイタ形Ⅰとテイタ形Ⅱでは、すでに述べたようにテイタ形Ⅱのほうがやや一般的なものである。意味の違いはない。またテイル形とテイタ形の違いは、先に3.3.で居ルの使い方としてまとめたことと平行である。すなわち、その状態の恒常性の度合いが高まることによって、テイルの用いられる可能性が高くなると言える。

(67) 私は今部屋で手紙を ??カイドル(共通語的)/カイツダ

(68) 私は最近毎朝手紙を カイドル/?カイツダ

(69) 太郎はいつ行っても手紙を カイドル/*カイツダ

テイルとテイタの使用条件についてはそのほかに、それほど明確に違いが現れるわけではないが、同じアスペクト的な意味を表す場合でも、カラ節(ハゲ節)などに入ったときのほうが、言い切りなどの場合よりも、テイルが出やすくなるといったこともありそうである。

(70) 私は今部屋で手紙を ??カイドル(共通語的)/カイツダ(=(67))

(71) 太郎は今二階で手紙を カイドル/カイツダハゲ 行ってみろ

しかしこれは、意味の問題とはかかわりがない。節の種類による形式の現れやすさの問題である。

なお当方言では、オルは全く使われないので、西日本各地の方言にあるような、VテオルとVオル(Vは動詞連用形)による進行相と結果相の形式的な対立は見られない。また形式がないということでは、東北方言に広く見られるいわゆる大過去や回想を表すテアツタ形・タツタ形(見テアツタ・見タツタ、図3のイテアツタ・イタツタなど)、金田(1983)が内陸の南陽市方言について報告しているスルガツタ形も、当方言にはない。

4.2. サッタ形による結果相

最後に、当方言に特徴的な複合アスペクト形式であるサッタ形に触れておこう。

この形式についてはすでに、荒井(1989)が鶴岡方言の北に位置する酒田方言とその周辺部の方言での使用状況を、また渋谷(1989)が山形市方言での使用状況をまとめている(荒井はサッタ形ではなくサテル形を中心に取り上げているが、本章では便宜的にサッタ形として一括する)。結論を先取りして鶴岡方言を含む3方言での使用状況を比較するならば、サッタ形は、

- (a) 山形市方言では老年層・若年層いずれにおいても生産的に用いられるが、酒田方言ではある用法(荒井の言う「モーダルなニュアンス」のある場合など)およびある地域(飽海郡・余目町など)を除いて老年層に限定されつつあり、鶴岡方言では書ガッタなどが語彙的・残存的に使用されるにすぎなくなりつつある
- (b) 一方酒田方言では、山形市方言や(今の)鶴岡方言などには見られない用法を発達させている(させていた)

と、まとめることができそうである。

ここではこのサッタ形について、主に荒井(1989)の報告する酒田方言での用法と対照しながら、鶴岡方言での使用のありようを描いてみよう。山形市方言のサッタ形(自発のテイル形)については渋谷(1989)を参照されたい。

4.2.1. サッタ形とは

まずサッタ形とはどのような形式かを述べておこう。サッタ形とは、動詞未然形に、ある五段活用助動詞(接辞)ル・ラル(受け身の助動詞レル(エル)・ラレル(ラエル)などと同じく動詞の活用によって相補分布をなす)が付加し、それにさらにアスペクト形式のテイタが後接した複合形式である(サッタはサ変動詞のサッタ形。鶴岡では、サ変動詞には他にサラッタという形も使われる。なお形式面の問題、すなわちその複合過程に見られる形態音韻的なプロ

セスにはここでは立ち入らない。詳しくは井上(1968・1980), 森山・渋谷(1988)等を参照されたい)。したがってこの形式をアスペクトの観点から考えるとときには,

(a) 動詞未然形に助動詞ル・ラルが付加した場合に、それがどのような意味を表すようになるのか

(b) それにさらにテイタが後接した場合、それはどのような意味を表すのか

といったことが問題になる。以下、この問題について、順次考えることにする。

4.2.2. 助動詞ル・ラルの意味

まず(a)の問題について。残念ながら現在の鶴岡方言では、老年層においてすらル・ラルには生産性がなく、わずかに「(このペンはまだ)書ガル」「(この戸はなかなか)開ガラネ」などが語彙的に聞かれる程度にすぎない。したがってこの形式がもともと鶴岡方言で生産的に用いられていたのかどうかは、実は今のところ定かではない。山形市方言などからいくつかの形式を語彙的に借用したということも考えられるからである。しかし次項で報告するサッタ形がある限られた範囲の動詞(言語内条件)と話者(言語外条件)についてはあるものの、ある程度生産的に用いられているところをみると、かつてはこの地域でも生産的に用いられていた可能性がある。もしそうだとすればその意味は、山形市方言(森山・渋谷(1988))などと同様に、自発であろう。東北方言では一般に、自発を、受け身・可能と形式的に対立するかたちで分節するところが多い。

4.2.3. サッタ形の用法

次に(b)の問題について。

4. 2. 3. 1. 酒田方言のサッタ形

まず、隣接する酒田方言のサッタ形の意味から見てみよう。荒井(1989)は、サッタ形の用法について、次のような分類を施している。「動作主体」その他の用語は荒井のもの。また用例もすべて荒井のものであるが、通読の便を考えてサッタ形のみ方言形で、漢字カタカナまじりで示した。なお、例のなかにある対象をマークする助詞は酒田方言の発話では一般に省略されるので、それがガ格なのかヲ格なのか、実際のところはよくわからない。荒井にもその記述はない。

一. 基本的な用法

(一) 動作主体の結果の状態

- (72) もう家が燃エラテル(=燃え終わっている)
- (73) ハーハー言いながらもやっと頂上に登ラテル

(二) 動作対象の結果の状態

- (74) 机の上に酒が置ガテル
- (75) チンゲン菜がたくさん植エラテル

二. 完了性の要素のつくもの

(一) 動作がすでにすんだことをあらわす

- (76) 先に誰かが歩ガテルようだ

(二) 経験をあらわす

- (77) 遠足で [一度] 来ラテルからまた [もう一度] 寄らなくて [も] いい

(三) 準備された状態にあることをあらわす

- (78) 薬を予約サテルから、取って来てくれ

三. 習慣性の要素のつくもの

(一) くりかえし

- (79) 私は毎日病院に行ガテル

(二) 慣習

- (80) 前は数え八つになると学校に上ゲラテダものだ

四. 予定の要素のつくもの

(一) 予定・予測された状態

(81) 彼はあしたの午後畑で働ガテルからそこに行けば会える

五. 感情評価的な要素のつくもの

〈1〉持続性のみとめられるもの

(一) 状態の持続の完遂をあらわす

(82) おじいちゃんは95を過ぎても病気一つしないで生ギラテルよ

(二) 感情発生の状態

(83) 娘が試験に受かって喜バテル

(三) めいわくの状態

(84) 雨が降ラテデ困ったことに散歩ができない

〈2〉持続性がなくてもいいもの

(四) 意外なできごとの発生・成立

(85) まさか親方が事業に失敗サテルとは思わなかったよ

4.2.3.2. 鶴岡方言のサッタ形

一方鶴岡方言では、サッタ形は主に、動作主体の意志的な行為を表す他動詞について、その対象の結果の状態を表すということができる((戸が)アガッタなどは語彙的な例外)。

(86) 机の上に本が オガッタ

(87) 石油はちゃんと ヨーイサッタ

(88) 冬のために石油はちゃんと カワッタ

(89) このシャツ まだちゃんとアラワテネ

荒井の分類では、「一. (二) 動作対象の結果の状態」に含まれるものである。全国共通語の、対象をガ格で表示するテアル文の表す意味に近いが、荒井の「二. (三) 準備された状態にあることをあらわす」用法(対象をヲ格でマークするテアル文に相当)はない。また荒井のあげる他の用法も、すでに失ってしまったためかそれとももとなかったからなのか、今にわかには判断でき

ないが、鶴岡方言のサッタ形には確認されない。

形式面では、サッタ形のほかにも、頻度は少ないが酒田方言と同じくテイタ形 I に相当するサテダ形が使用され、また恒常性の度合いが増せばサテル形も使用される。

(90) その部屋はいつ行っても花がカザラテル

サッタ形とテイル形・テイタ形との違いは、主体が明示されることがあるか否かといったところにある。(91)(92)の例が示すように、「オレ」という主体を明示すれば、オイッダ(テイタ形)は可能であるが、オガッタ(サッタ形)は非文になる。

(91) おれは机の上に本を オイッダ/*オガッタ

(92) 机の上に本を オイッダ/*オガッタ の おれだ

しかしこのような鶴岡方言のサッタ形も、1942年生まれの井上史雄氏(鶴岡出身)はすでに上の(86)~(89)のような文を用いなくなっており、全国的に全国共通語形テアル(置イテアルなど)や受け身のテイル形(ラ)レテイル(置カレテイルなど)にとってかわられつつあることは否めない。

(93) 黒板に変な字が書ガッタ

といった、いくつかの語彙的なサッタ形を除けば、鶴岡方言では現在の老年層がサッタ形の最後の使用者ということになりそうである。

5. まとめ

以上本章では、鶴岡方言のテンス・アスペクト体系について記述した。

まず1. で調査の概要を述べたあと、2. では形式面を取り上げて、動作動詞・変化動詞と状態用言とは異なったテンス・アスペクト形式の体系をもつこと、後者ではさらに、居ル系動詞がタ形において特徴的なふるまいを見せることを指摘した。

続く3. では、2. の分析に基づいて、動作動詞・変化動詞、(テ)イル以外の状態用言、(テ)イルの3つのグループに分け、それぞれのテンス体系を記述した。

ここでは、状態用言の過去表現にはケが用いられること、居ル系動詞は現在の状態を表すにもタ形を用いることがあること、しかしル形(イル)とタ形(イダ・イッダ)では恒常的属性叙述といった点で使い分けられることなどを具体的に論じた。また特に一項を設けて、テンスマーカーあるいは回想を表すモダリティ形式として使われる鶴岡方言のケの意味・機能的な特徴を、東京方言のケと対照することによって明らかにした。

最後の4. では、テイル/テイタ形を取り上げて、その意味を分析した。また、鶴岡方言に特徴的なアスペクト形式であるサッタ形について、隣接する酒田方言を対象にした記述と比較しながらその特徴を明らかにした。

方言(の部分)体系あるいは言語(の部分)体系一般には、記述言語学が伝統的に行ってきたような静的な記述に適するものと、変化の過程にあるために社会言語学的な記述のほうがふさわしいものがある。仮にすべての言語の体系をこの2つのいずれかに分けた場合、鶴岡方言の老年層に見られるテンス・アスペクトの体系は、状態用言のタ形が衰えケ形にとってかわられつつあること、サッタ形が失われつつあること、などの現象があることを考えれば、後者に属するものではないかと思われる。

ここでもし言語変化を、「安定状態1」→「変化状態」→「安定状態2」といった単純な図式でとらえることが許されるならば、「安定状態1」の実体を鶴岡の老年層の方言のみからうかがうことはすでにむずかしくなっている。また「変化状態」を引き起こした要因についても、活用語の無活用化(ケ形の伸長)、あるいは全国共通語化(サッタ形の衰退)といったことが関与しているのか、にわかには断じがたい。もし全国共通語化ということがこの表現領域にも強力に及んでいるのだとすれば、「安定状態2」において状態用言の過去表現からケ形が失われ、再度タ形が導入されるといった可能性も有り得ることになる。

いずれにしても鶴岡方言のテンス・アスペクト体系は、言語地理学的な調査や今後の追跡調査を通して上にあげたような問題を追究することを誘いかけて止まない体系だと言うことができる。

参考文献

- 荒井孝一(1983)「酒田方言の動詞のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』48-6
- 荒井孝一(1989)「酒田方言における進行相と結果相の対立」『国語学』159
- 井上史雄(1968)「東北方言の子音体系」『言語研究』52
- 井上史雄(1980)「言語の構造の変遷」柴田武編『講座言語1 言語の構造』
(大修館書店)
- 金田章宏(1983)「東北方言の動詞のテンスー山形県南陽市ー」『琉球方言と周辺のことば』(千葉大学教養部)
- 国立国語研究所(1979)『表現法の全国的調査研究』
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』(秀英出版)
- 渋谷勝己(1989)「自発のテイル形」『吉澤典男教授追悼論文集』
- 渋谷勝己(印刷中)「文末詞『ケ』」
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』(くろしお出版)
- 中村通夫(1948)「助辭『け』について」『東京語の性格』(川田書房)
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
- 宮島達夫(1961)「福島・茨城・栃木」『方言学講座2 東部方言』(東京堂)
- 森山卓郎・渋谷勝己(1988)「いわゆる自発について」『国語学』152

VI 章

鶴岡方言における助詞「サ」の用法

— 共通語との対応を中心に —

佐藤 亮一

1. 共通語の「エ」(へ)または「ニ」に対応する場合	269
2. 共通語の「ニ」に対応する場合	270
3. 鶴岡方言の「ナサ」が共通語の「ノニ」に対応する場合	274
4. 共通語の「ニ」を用いた文が鶴岡方言では別表現になる場合	274
5. 鶴岡方言の「デ」が共通語の「ニ」に対応する場合	275
6. 鶴岡方言の無助詞が共通語の「ニ」に対応する場合	276
7. 鶴岡方言の無助詞(または「イ」または「サ」)が共通語の 「ニ」に対応する場合	277
8. 鶴岡方言の「カラ」が共通語の「ニ」に対応する場合	279

要旨 東北方言の一特徴とされる助詞「サ」の鶴岡方言(旧鶴岡市内の高年層の方言)における用法を、話者一名を対象に調査した結果に基づいて記述する。なお、関連して、共通語の「ニ」の鶴岡方言との対応について記す。

調査年月日 第1回 1992年11月22日

第2回 1993年9月10日

第3回 1993年11月22日

話者 田村和子氏。1930年生まれの女性。鶴岡市以外の居住歴なし。父親は東田川郡藤島町生まれ(子どものときに鶴岡市に移住)。母親は鶴岡市大山生まれ。夫は鶴岡市生まれ。

以下に調査結果を記す。方言文(用例)にはかたかなによる簡略音声表記を用い、漢字ひらがなまじり文による共通語訳を添える。なお、ガ行鼻音(鼻濁音)は「ガ」「ギ」「グ」「ゲ」「ゴ」で表す。

1. 共通語の「エ」(へ)または「ニ」に対応する場合

1.1. 方向を表す場合

例1 オメ ドサ イグナ。(おまえはどこ<へ・に>行くのか)

なお、「ドサ」のかわりに「ドゴサ」を用いることもある。

例2 トーキョーサ イッテクンナ。(東京<へ・に>行ってくるよ)

例3 ヒガシノ ホーサ イグ。(東の方<へ・に>行く)

例4 ミギサ マガル。(右<へ・に>曲がる)

「コッチャ(こっちに)」「ソッチャ(そっちに)」「アッチャ(あっちに)」「ドッチャ(どっちに)」という表現があるが、これらは、それぞれ、「コッチサ」「ソッチサ」「アッチサ」「ドッチサ」とも言う。「～チャ」は「～チサ」の変化形であろう。

- 例5 コッチャ コバエ。コッチサ コバエ。(こちに来なさい)
- 例6 ソッチャ イゲバエ。ソッチサ イゲバエ(そちに行きなさい)
- 例7 アッチャ イゲバエ。アッチサ イゲバエ(あちに行きなさい)
- 例8 ドッチャ イゲバ イーナ。ドッチサ イゲバエ(どちに行けばいいか)

2. 共通語の「ニ」に対応する場合

2.1. 場所(動作の到達点)を表す場合

- 例9 トーキョーサ ツイダ。(東京に着いた)
- 例10 ツグエノ ウェサ ホン オグ。(机の上に本を置く)
- 例11 トナリノ ツグエサ ウズス。(隣の机に移動する)
- 例12 キシャサ ノル。(汽車に乗る)
- 例13 トラ オリサ イレル。(虎を檻に入れる)。

2.2. 場所(存在する場所)を表す場合

- 例14 ツグエノ ウェサ ホン アル。(机の上に本がある)
- 例15 ツルオガサ ニサンニジ イル。(鶴岡に2～3日居る)
- 例16 トーチャン エサ イッダガ。(おとうさんは家に居るか)
- (参考)

〈行為を行う場所〉は共通語と同様に「デ」を用い、「サ」は使用しない。例17

- エギデ アウ。(駅で会う)
- 例18 ウンドジョーデ アソブ。(運動場で遊ぶ)

2.3. 授与の対象を表す場合

例19 コレ ハナゴサ ケル。(これを花子にやる)

例20 イヌサ エサ ケル。(犬に餌をやる)

例21 オレサモ クレ。(おれにもくれ)

例22 オメサ ケル。(おまえにやる)

「オメサケル」(おまえにやる)は「オメハケル」とも言う(「オメサケル」より「オメハケル」を多く使う)。ただし、この「ハ」は「オメ」以外には付きにくい。

例23 オメハバツカリ ハナシデオグノー。(おまえにだけ話しておくよ)

例24 オメサバツカリ ハナシデオグノー。(同上)

例25 アンダサ ケル(あなたにやる)

「アンダハケル」は言にくい。「花子ハ ケル」とは言えない。「汽車ハ乗ル」も言えない。

注：井上史雄氏によれば、鶴岡市内で「サ」が「ハ」に変化しかけた一時期があるが、その範囲(地域・年代・用法)は狭いという。

2.4. 行為の対象を表す場合

例26 ハナサ ミズ カゲル。(花に水をかける)

例27 ゴハンサ シオ カゲル。(ご飯に塩をかける)

例28 センセーサ アイサズ スル。(先生に挨拶する)

例29 センセーサ アッタ。(先生に会った)

例30 アノヒトサダバ アイダグネー。(あの人には会いたくない)

例31 アノヒトサダゲ アイダイ。(あの人にだけ会いたい)

例32 コドモサ ハナシ カゲル。(子供に話しかける)

例33 アノ ヒトサ タノム(あの人に頼む)

例34 カミサ ジ カグ。(紙に字を書く)

- 例35 コノ カミサ ウズス。(この紙に写し取る)
- 例36 マゴサ カシエテ ケル。(孫に食わせてやる)
- 例37 セナガサ サワル。(背中にさわる)
- 例38 ヤマサ ノボル。(山に登る)
- 例39 ジゴサ アッタ。(事故に遭った)
- 例40 イジサ ニタスト サンダ。(1に2を足すと3だ)

2.5. 性質・作用・現象の対象を表す場合

- 例41 アノ ヒトダバ ツリサ クワシー ヒトダ。(あの人は釣りに詳しい人だ)

(参考)

「スモサ ツエ」(相撲に強い)とは言えない。「アノヒトダバ スモツエノー」(あの人は相撲が強いねえ)のように言う。

- 例42 コノ クスリダバ イーサ ヨグ キグノー。(この薬は胃によく利くねえ)
- 例43 シャシンサ ウツツダ。(写真に写っている)

2.6. 使役の対象を表す場合

- 例44 トーチャン タロサ テガミ カカシエダ。(お父さんが太郎に手紙を書かせた)
- 例45 トーチャン タロサ ジロドゴ ナグラシエダ。(お父さんが太郎に次郎をなぐらせた)

2.7. 類似の対象を表す場合

- 例46 ハハオヤサ ニツダ。(母親に似ている)

2.8. 変化の結果を表す場合

例47 ハハオヤサ ニッテル。(同上)

例48 コロガシタラ イシサ カワツタ。(転がしたら石に変化した)

例49 サナギ チョサ カワツタ。(さなぎが蝶に変わった)

例50 ミズサ ツゲダバ アゲー イロサ カワツタ。(水に漬けたら赤い色に変わった)

上記は「アゲー イロ ナツタ」(赤い色になった)と言う方が自然。

2.9. 行為の目的を表す場合(動詞に接続する場合)

例51 オヨギサ イグ。(泳ぎに行く)

例52 ハナビ ミサ イグ。(花火を見に行く)

(参考)

行為の目的を表す場合でも、名詞に接続するときには無助詞となることが多い(7.3.を参照)。

2.10. 列挙する場合

例53 キョデワ アネ ヒトリサ イモード ヒトリダ。(兄弟は姉が一人に妹が一人だ)

2.11. 慣用句の場合

例54 ハナサ カゲテ ジマンスル。(鼻にかけて自慢する)

例55 ハナシサワ キーッダドモ。(話には聞いていたが)

例56 ネゴサ コバン。(猫に小判)

例57 ンマノ ミミサ ネンブズ。(馬の耳に念仏)

3. 鶴岡方言の「ナサ」が共通語の「ノニ」に対応する場合

3.1. 準体助詞+(動作の目的や内容を表す)格助詞の場合

例58 スムナサダバ フベンナ トゴダノー。(住むのには不便な所だねえ)

例59 (車が故障して)イグナサ コマツタ。(行くのに困った)

3.2. (逆接既定条件を表す)接続助詞の場合

例60 サムイナサ ユガダ キデル。(寒いのに浴衣を着ている)

例61 マデッデ ユーナサ マイデケネ。(待って言うのに待ってくれない)

例62 アンゲ モーゲダナサ マツダ モーケロート シテアンダツケ。
(あんなに儲けたのに、まだ儲けようとしているんだ)

3.3. (期待に反する行為への不満を表す)終助詞の場合

例63 アンゲ タノンダナサ。(あんなに頼んだのに)

例64 (おまえがしなくても)ワダシ シデヤツダナサ。(私がしてやったのに)

4. 共通語の「ニ」を用いた文が鶴岡方言では別表現になる場合

例65 ネバツテネバツテ ヤット テニイレダ。(粘りに粘ってやっと手に
いれた)

例66 ソンゲ イーナガヤ。(そんなに良いのかね)

例67 イグゴドワ イツタナアドモ。(行くには行ったのだけれども)

なお、共通語の「見るに見かねて」という慣用句は、鶴岡方言では普段使わない表現であるが、あえて言うとするれば「ミルイ ミガネデ テズダツタナスヤ」(見るに見かねて手伝ったのですよ)のよう「イ」を用いた形と言う。

5. 鶴岡方言の「デ」が共通語の「ニ」に対応する場合

5.1. 時刻

例68 ログジデ エギデ アウ。(6時に駅で会う)

「6時サ会ウ」「6時ニ会ウ」は言えない。

例69 ログジデ オネガイシガノー。(6時にお願いしようかねえ)

例70 ナンジデ イゲバイー。(何時に行けば良いか)

例71 セバ ログジハンデ オジャマシマスノー。(それでは6時半にお邪魔しますねえ)

例72 セバ アシタワ ログジデ オギネマネノー。(それでは明日は6時に起きなければならぬねえ)

例73 ハジジジュッペンデ キテクナヘン。(8時10分に来て下さい)

例74 ログジハンデ ツイダ。(6時半に着いた)

(例外1) → 6.1. 参照

(例外2)

例75 アシタ ログジサ メザマシ カゲトイデクレ。(明日6時に目覚し時計をかけておいてくれ)

この場合には「アシタ6時デメザマシカゲトイデクレ」とは言えない。

考察：上記の例は一種の場所(時計の針を止める場所)もしくは到達点(時計の針の到達する点)的な用法か。

6. 鶴岡方言の無助詞が共通語の「ニ」に対応する場合

6.1. 時刻(やや幅のある時刻)または時期を表す場合

例76 ナンジゴロ__ イッタバ イーロー。(何時ごろに行ったらいいだろうか)

「何時ゴロデ行ッタバイーロー」とは言えない。

例77 ログジマデ__ イッテケネー。(6時までに行ってくれないか)

「6時マデデ行ッテケネー」とは言えない。

例78 ハジジマデ__ キテクナヘン。(8時までに来て下さい)

「8時マデデ来テクナヘン」とは言えない。

例79 ヨナガ__ カジ__ ナッダ。(夜中に火事になった)

「ヨナガデ火事ナッダ」とも「ヨナガサ火事ナッダ」とも言えない。

例80 ライネンノ ハル__ ソツギョー スル。(来年の春に卒業する)

「来年ノ春デ～」とは言えない。

例81 (会は)ログガズニジューゴニジ__ アルド。(6月25日にあるそうだよ)

「6月25日デ～」とは言えない。

例82 ワダシ ネットウジ__ デガゲデシマッタ。(私が寝ているうちに出かけてしまった)

「ネットウジデ」とは言えない。

6.2. 行為・選択の対象を表す場合(「～する」に接続する場合)

例83 ドレ__ スーヤ。(どれにするか)

「ドレサ スーヤ」とは言えない。

例84 ドッチ__ スーヤ。(どちらにするか)

例85 セバコレ__ ソー。(それではこれにしよう)

- 例86 サゲ__ スガ?ビール__ スガ? (酒にするか?ビールにするか?)
- 例87 ビール__ スル。(ビールにする)
- 例88 ソロソロ ゴハン__ ソー。(そろそろご飯にしよう)

7. 鶴岡方言の無助詞(または「イ」または「サ」)が共通語の「ニ」に対応する場合

7.1. 変化・経過の結果を表す場合(「～なる」に接続する場合)

変化・経過の結果を表す「～なる」に接続する場合は無助詞のことが多いが、格助詞「に」の変化と考えられる「イ」に接続することもある。この用法では、東北地方は「ニ」の使用地域が広いが、秋田県から山形県庄内地方にかけて無助詞の地域が見られる(図3参照)。

- 例89 アスコノ チョーナンワ デーグハン__ ナッタ。(あそこの長男は大工さんになった)
- 例90 イシャ__ ナラセタカッタ。(医者にならせたかった)
「医者サナル」とは言えない。また「医者イナル」は言いにくい。
- 例91 ゲンキ__ ナッテ ヨガッタノー。(元氣になってよかったねえ)
- 例92 ジャマ__ ナッサゲ～(邪魔になるから)
「邪魔イナル」と言うことは可能。
- 例93 ビョーギ__ ナッタ。(病氣になる)
- 例94 ジューニジ__ ナッタ。(12時になった)
- 例95 オ盆__ ナッタラ マダ クル。(お盆になったらまた来る)
- 例96 シズガ__ ナッタ。(静かになった)
「シズガイナッタ」と言うことは可能。
- 例97 リッパ__ ナッタノー。(立派になったねえ)
「立派イナッタノー」と言うことは可能。

例98 ダイグ__ バッカリ ナリタガル。(大工にばかりなりたがる)
「大工サバッカリナリタガル」とは言えない。また、「大工イナル」とも言えない。

例99 オドナ__ ナル。(大人になる)
「オドナイナル」と言うことは可能。

なお、これらの文脈で「イ」を用いることが可能かどうかに関しては、かなり個人差があるのではないかと推測される。

7.2. 副詞的用法

例100 イッショ__ 行ゴー。(一緒に行こう)

例101 サギ__ 行グ。(先に行く)

例102 イジレズ__ ナランデ!(一列に並んで!)

例103 オレノ カワリ__ イッテクレ。(俺の代わりに行ってくれ)

例104 ホントイ困ッタ。(本当に困った)

この場合には「イ」を用いる。

7.3. 行為の目的を表す場合(名詞に接続する場合)

行為の目的を表す名詞に動詞が接続する場合は無助詞のことが多いが、「サ」を用いることもある。

例105 トーキョーサ ヨメ__ ケル。(東京に嫁にやる)

「東京サ嫁サケル」とは言えない。

例106 リョコー__ イグ。(旅行に行く)

「旅行サ行グ」とは言えない。

例107 シゴド__ イグ。(仕事に行く)

「仕事サ行グ」と言うことは可能。

例108 ホーコー__ イッタ。(奉公に行った)

- 例109 ムゲー__ヤル。(迎えにやる)
「ムゲーサヤル」とは言えない。
- 例110 ログジハンデ ムゲー__イグ(6時半に迎えに行く)
「ムゲーサ行グ」と言うことは可能。
- 例111 ムゲー__ヨゴシテケネ。(迎えによこしてくれないか)
「ムゲーサヨゴシテケネ」は言にくい。
- 例112 マズサ コマズガイ__ヤッタ。(町にお使いに行かせた)
- 例113 デークハンサ デシ__ツケル。(大工さんに弟子にやる)
- 例114 ○○ノ トーリョーサ デシ__ツイタ。(○○の棟梁に弟子に入った)
- 例115 ソズギョーシギサダバ イジバン イーフグ キデ イガネマネノ
一。(卒業式には一番良い服を着て行かなければならないねえ)

8. 鶴岡方言の「カラ」が共通語の「ニ」に対応する場合

8.1. 動作・作用を受ける場合の動作の主または動作の出所を表す場合

- 例116 イヌガラ オイカゲラレダ。(犬に追いかけられた)
cf. <犬が(私を)追いかけた>
- 例117 ネゴガラ カチャバガエダ。(猫にひっかかれた)
- 例118 ドロボーガラ カネ トラエダ。(泥棒に金を盗られた)
- 例119 センセーガラ アイサズサエダ。(先生に挨拶された)
- 例120 アノ ヒトガラ カイシャ ヤメラエデ コマツタ。(あの人に会社を辞められて困った)
- 例121 シャチョーガラ カイシャ ヤメサシエラエダ。(社長に会社を辞めさせられた)
- 例122 タロー トーチャンガラ テガミ カガシエラエダ。(太郎が父親に手紙を書かせられた)

- 例123 ムスゴガラ オミヤゲ モラツタ。(息子におみやげをもらった)
- 例124 キガイガラ ケーサン シテモラウ。(機械に計算してもらおう)
- 例125 オヤガラ ナガエダ。(親に泣かれた)
- 例126 オヤガラ シナエダ。(親に死なれた)
- 例127 アメ__ フラエデ コマツタ。(雨に降られて困った)
- 「雨ガラ降ラエデ」と言うことは可能。「雨サ降ラエデ」は言いにくい。

(参考)

述部の動詞が状態性動詞(非動作性動詞)のときには「サ」を用いる。

- 例128 アガチャン カーチャンサ ダガエツダ。(赤ちゃんがお母さんに抱かれています)
- 「赤チャンカーチャンガラ抱ガエツダ」とは言えない。
- 例129 アガチャン ハハオヤサ バエツダ。(赤ちゃんが母親におんぶされている)
- 「赤チャン母親ガラバエツダ」とは言えない。
- 例130 カーチャンガラ ダギシメラエダ。(お母さんに抱きしめられた)
- 「カーチャンサ抱ギシメラエダ」とは言えない。

以上は表のようにまとめられる。すなわち、鶴岡方言では、「サ」は共通語の「ニ」(または「エ」)の用法の一部を担っている。そして、鶴岡方言では、共通語の「ニ」の用法の一部を無助詞格、または、「デ」「カラ」が担っている。また、鶴岡方言では「ニ」は用いないが、「ニ」の変形形「イ」を用いることがある。

表

共通語	意味・接続など	鶴岡方言
ニ	場所(2.1., 2.2.), 授与の対象(2.3.), 行為の対象(2.4.), 性質・作用・現象の対象(2.5.), 使役の対象(2.6.), 類似の対象(2.7.), 変化の結果(2.8.), 行為の目的=動詞に接続する場合(2.9.), 列挙(2.10.)など	サ
ニ(エ)	方向(1.1.)	
ニ	時刻・時期(6.1.), 行為・選択の対象(6.2.)	φ
	変化・経過の結果(7.1.), 副詞的用法(7.2.)	φ(イ)
	行為の目的=名詞に接続する場合(7.3.)	φ(サ)
	時刻(5.1.)	デ
	動作・作用を受ける場合の動作の主または出所(8.1.)	カラ
ノニ	準体助詞+格助詞(3.1.), 接続助詞(3.2.) 終助詞(3.3.)	ナサ

なお、参考として、「サ」の用法にかかわる4種の方言地図を下記に掲げる。この地図は国立国語研究所編『方言文法全国地図』(19・20・22・27図)の略図である。

図1 「東の方へ(行け)」(方向)では、「サ」は東北地方全域から北関東にかけて分布し、また、「サ」の原形と考えられる「サマ」の変化形「サン」や、「サマ」(または「サ」と「ニ」または「エ」の複合した形式(の変化形)と考えられる「サミャー」「サメー」「サニャー」「サナー」「サネ」「サイ」「セー」などが九州各地ほかに見られる。

図2 「東京に(着いた)」(到達点)では、東日本の「サ」分布は図1と似ているが、九州では「サマ」「サ」の類がほとんど消え、「ニ」などに替わっている。

図3 「大工に(なった)」(変化・経過の結果)では、全国的に「サ」はほとんど消え、「ニ」一色になる。

図4 「犬に(追いかけられた)」で「カラ」を用いる地域は、山形県と九州の一部などである。

参考文献

国立国語研究所(1953)『地域社会の言語生活－鶴岡における実態調査－』

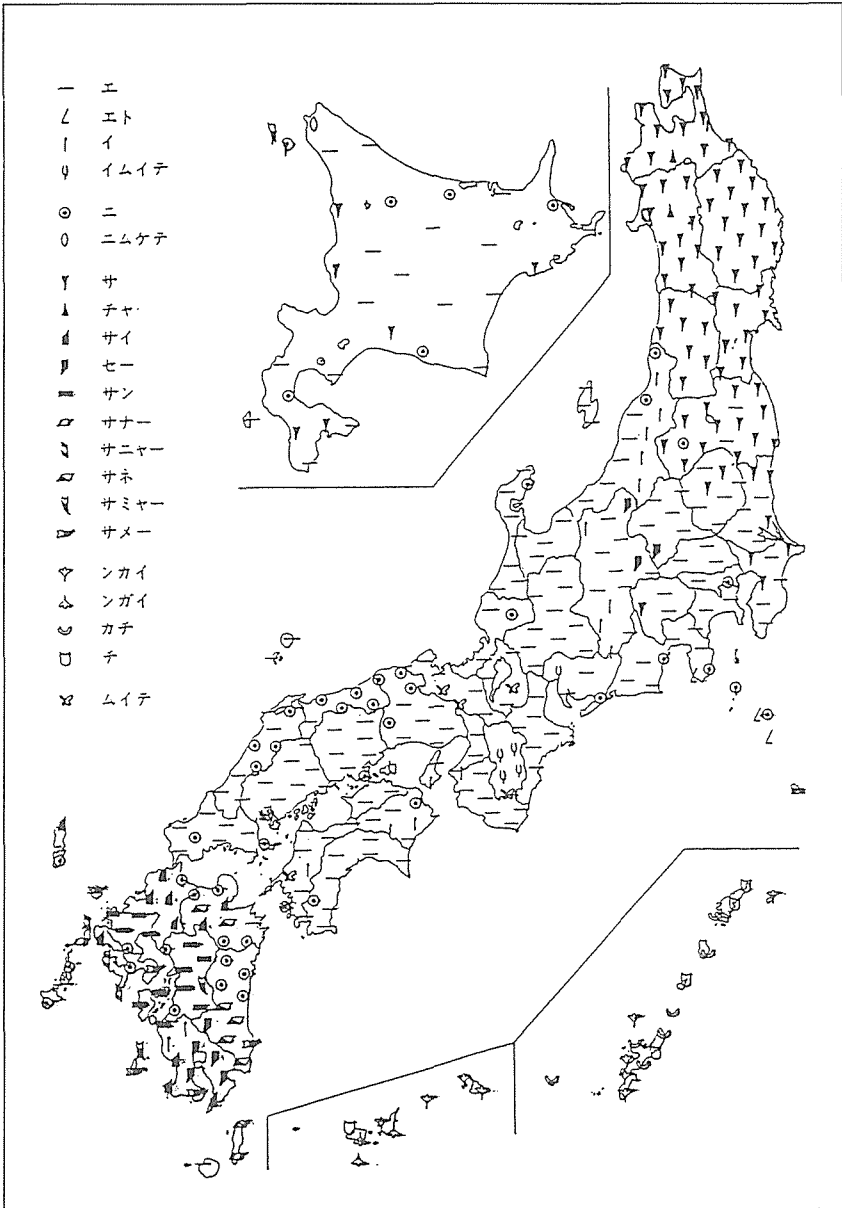
(秀英出版)

国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図』1(大蔵省印刷局)

齊藤秀一(1940)「助詞のサとエ(山形県東田川郡山添村方言)」『国語研究』

8-4

佐藤喜代治(1961)「東北方言における格助詞「サ」の用法」『国語学研究』1



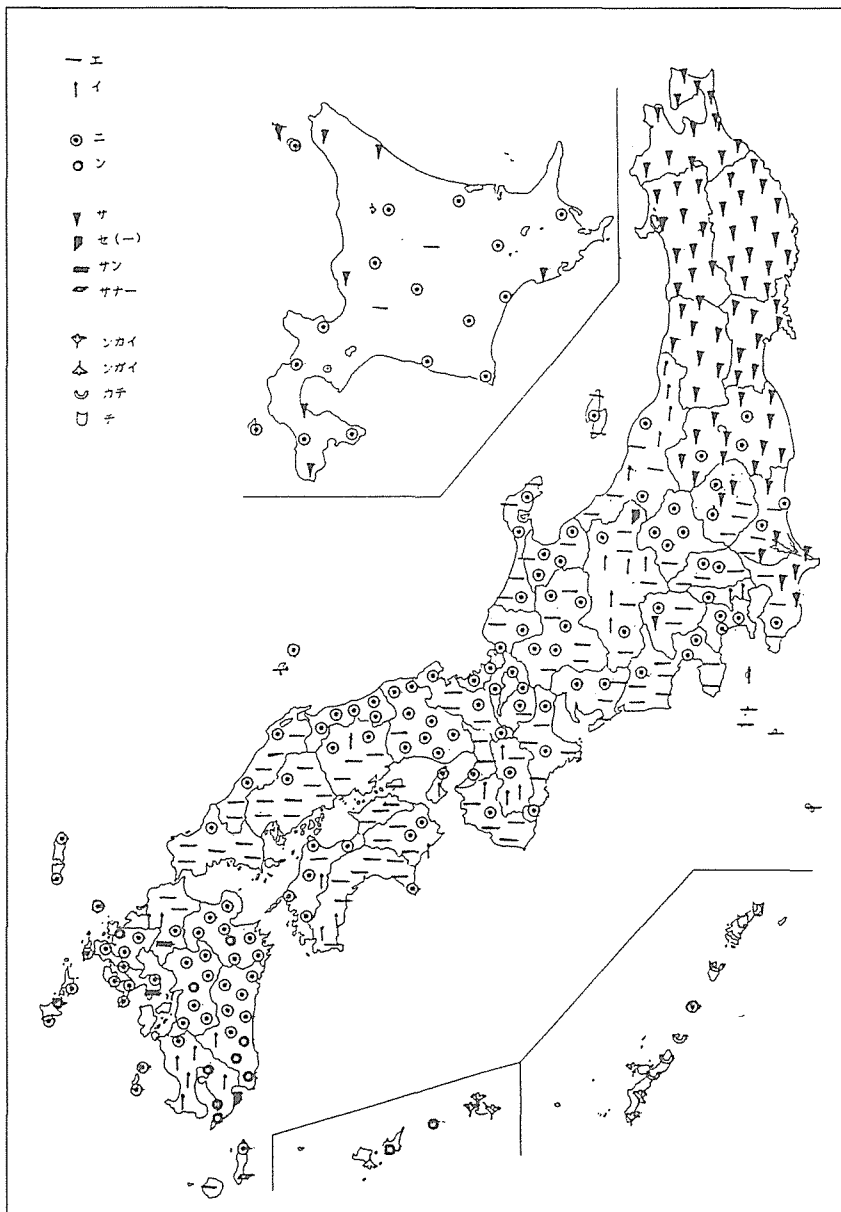


図2 東京に(着いた) (佐藤亮一 作図)

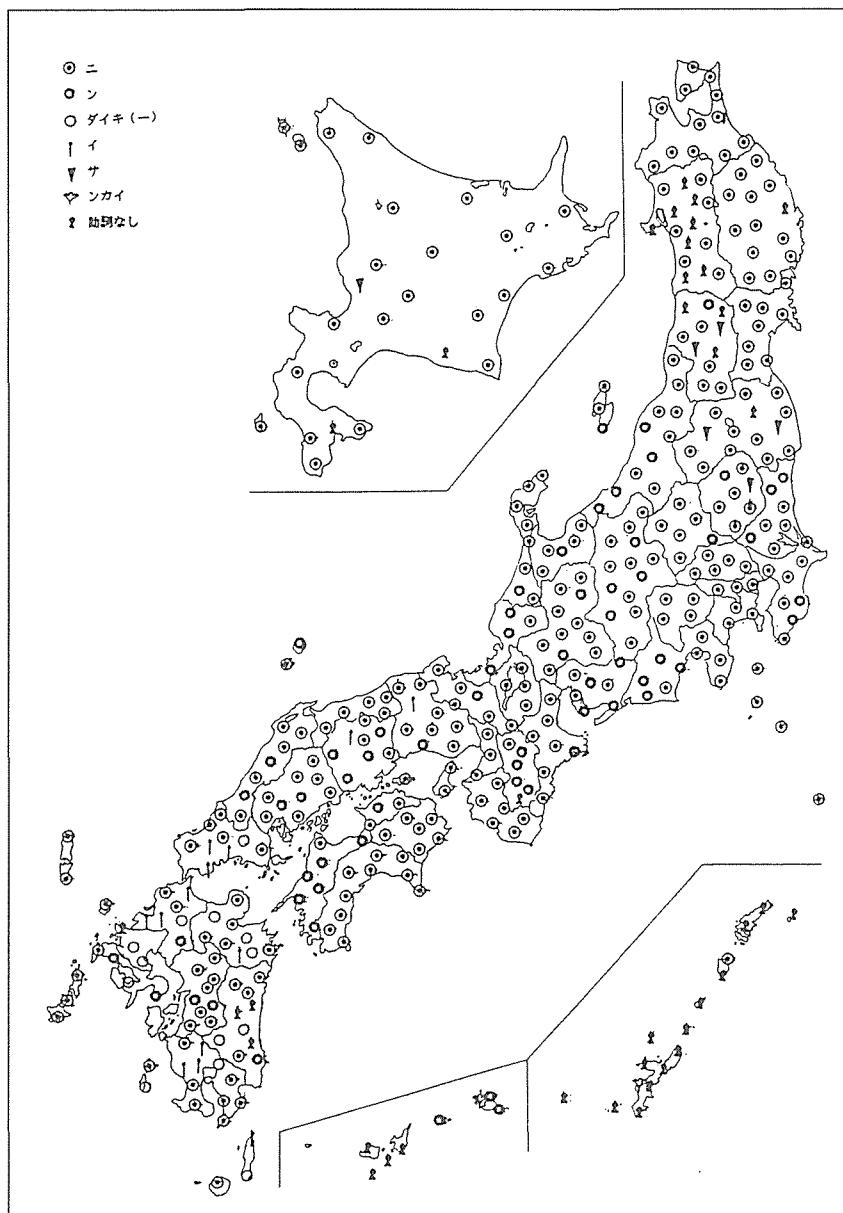


図3 大工になった (佐藤亮一 作図)

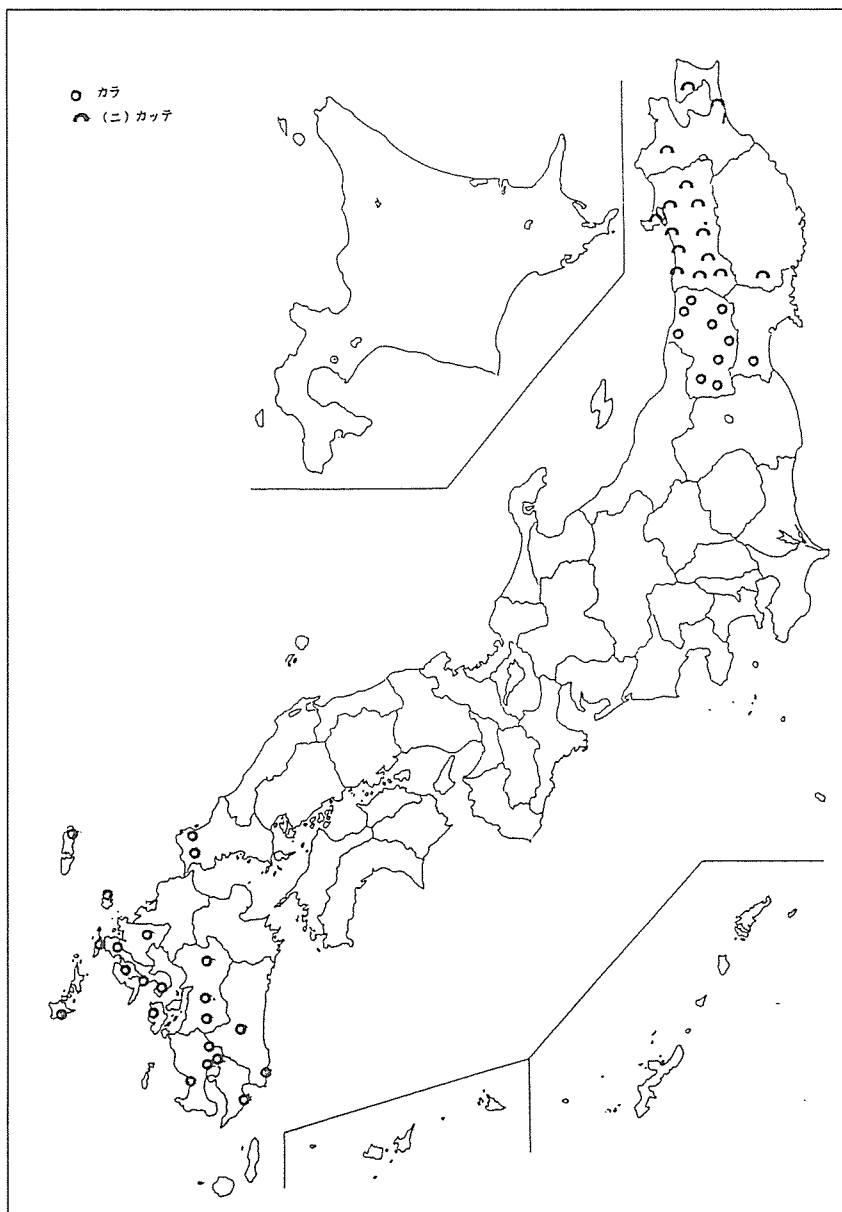


図4 犬に(追いかけられた) (佐藤亮一 作図)

Ⅶ 章

鶴岡方言の授受表現

篠崎 晃一

1. はじめに	289
2. 共通語の授受動詞	289
3. 鶴岡方言の授受動詞	291
3.1. 本動詞の用法	292
3.2. 補助動詞の用法	296
4. まとめ	298

1. はじめに

本章では、国立国語研究所による鶴岡調査の中から授受表現に関わる用法について報告する。

共通語では、モノの授受を表す形式として「やる・くれる・もらう」が用いられ、「やりもらい」の表現と呼ばれることもある。鶴岡方言では、共通語の「やる／くれる」の関係を形式によって区別せず、クエル(ケル)で表現している。本章では、このクエル(ケル)を中心に、与え手と受け手との身分の上下関係、与え手と受け手の人称、与え手と受け手のどちらが主語に立つか、話し手の視点等の観点から授受表現の用法を見ていくことにする。

主たるインフォーマントは、旧鶴岡市内生え抜きの、次の3名である。

佐藤久治氏 (男, 1920年生まれ, 21才から26才まで兵役のため南方に滞在, 48才から50才まで山形市に在住。)

田村和子氏 (女, 1930年生まれ, 鶴岡市以外の居住歴なし, 父親は藤島町生まれ(子どもの時に鶴岡市に移住), 母親は鶴岡市生まれ。)

菅 靖治氏 (男, 1931年生まれ, 19才から23才まで東京に在住, その他は鶴岡市に在住。)

そのほか、社会調査の際に接した老年層のインフォーマントにも用例の確認を行った場合があるが、いちいち明記することは避ける。

なお、以下に挙げる用例については調査例文全体の方言訳は示さずに、問題となる授受の形式の部分のみをカタカナ表記で明示することにする。

2. 共通語の授受動詞

共通語における「やる」と「くれる」の使い分けは、「与え手」から「受け手」へのモノの移動を、話し手の視点という観点で捉えることができる。

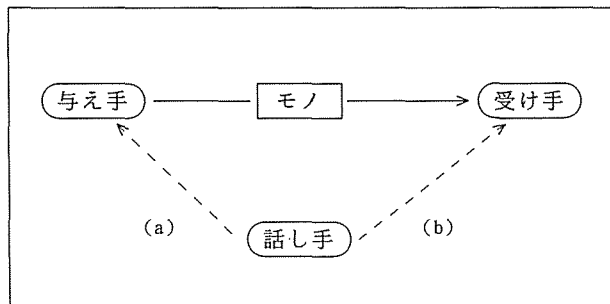


図 1

(1) 太郎が花子に人形をやる。

(2) 彼女が私に本をくれる。

(1)は、与え手である「太郎」から受け手である「花子」への「人形」の移動を表し、話し手の視点は与え手である「太郎」の側にある。同時に与え手が行為の主体でもある。図1の(a)がこれに相当する。

(2)は、与え手である「彼女」から受け手である「私」への「本」の移動を表し、話し手の視点は受け手である「私」の側にある。行為の主体は与え手である。図1の(b)がこれに相当する。

また、

(3) 花子が太郎に人形をもらう。

の場合も図1の(b)が当てはまるが、行為の主体が受け手である点で(2)と異なる。

なお、「～てやる」「～てくれる」の補助動詞の形で利益・恩恵の授受も表現する。

(4) 太郎が花子に人形を買ってやる。

(5) 彼女が私にケーキを作ってくれる。

(4)では、「てやる」に上接する「買う」行為の主体は「太郎」で、同時に利益・恩恵の与え手でもあり、「花子」がその受け手である。その際の話し手の視点は「太郎」の側に属している。(5)は、「てくれる」に上接する「作る」行為の主体、

および利益・恩恵の与え手は共に「彼女」で、その受け手は「私」である。話し手の視点は、受け手である「私」の側にある。

3. 鶴岡方言の授受動詞

鶴岡方言の授受表現の特徴は、前節で述べたような視点の制約が無い点である。

- (6) (私が)友達に本をクエダ／ケダ。
- (7) (友達が)私に本をクエダ／ケダ。
- (8) 私が弟におもちゃを買ってクエダ。
- (9) 妹が私にお菓子を作ってクエダ。

授受動詞の全国分布については『日本言語地図』第2集の73図「やる(遣る)」, 74図「くれる(呉れる)」, 76図「もらう(貰う)」によって知ることができるが、東北地方には「やる／くれる」が対立していない地域が広い分布を示している。『日本言語地図』によれば、山形県は内陸部にケル、海岸部にクレル、クエルがまとまった分布を見せている。『庄内方言辞典』に取り上げられている語形を見ると、クエル、ケルの諸形式が共に載録されているが、ケルについては最上川以南の言い方との注記がある。なお、井上(1976)では、鶴岡市の南約10kmに位置する朝日村の調査を基に「クレル→クエル→ケル」との変化過程を推定している。また、国立国語研究所(1974)の第2次鶴岡調査の結果では「あげる・やる」に相当する方言語形の使用率は「クレル」(26.5%), 「クエル」(15.1%), 「ケル」(11.2%)の順になっているが、今回の調査でもクエルとケルの併用がかなり目立って観察された。おそらく鶴岡の老年層の体系として新しい形式のケルがクエルにとって変わりつつある状況にあるといえよう。

モラウの用法については、共通語とほぼ同じであるため、以下ではこのクエル・ケルを中心に見ていくことにする。

3.1. 本動詞の用法

3.1.1. 待遇差

まず、与え手と受け手との身分の上下関係、身内か身内以外かの基準で用法を検討する。図1の(a)、すなわち共通語の「やる」に対応する用法は次の通りである。

- (10) 私が孫に本をクエダ／ケダ。〈下・内〉
- (11) 私が息子(娘)に本をクエダ／ケダ。〈下・内〉
- (12) 私が後輩に本をクエダ／ケダ。〈下・外〉
- (13) 私が友達に本をクエダ／ケダ。〈同・外〉
- (14) 私が夫(妻)に花をクエダ／ケダ。〈同・内〉
- (15) 私が父親に花をクエダ／ケダ。〈上・内〉
- (16) 私が先輩に花をクエダ／?ケダ。〈上・外〉
- (17) 私が先生に花をクエダ／?ケダ。〈上・外〉
- (18) 私が寺の住職に家でとれた柿をクエダ／?ケダ。〈上・外〉

インフォーマントの意識としては、(16)(17)(18)のように目上の受け手に対してケルを用いることは抵抗があるようである。これは、クエルの音声変化による融合形ケルが、本来の語形に比べて粗雑な発音であるとの意識が働いているため、待遇とは無関係だと思われる。

図1の(b)、すなわち共通語の「くれる」に対応する用法についても与え手と受け手との上下関係は無関係である。

- (19) 孫が私に花をクエダ／ケダ。〈下・内〉
- (20) 息子(娘)が私に花をクエダ／ケダ。〈下・内〉
- (21) 後輩が私に本をクエダ／ケダ。〈下・外〉
- (22) 友達が私に本をクエダ／ケダ。〈同・外〉
- (23) 夫(妻)が私に花をクエダ／ケダ。〈同・内〉
- (24) 父親が私に花をクエダ／ケダ。〈上・内〉
- (25) 先輩が私に花をクエダ／ケダ。〈上・外〉

(25) 先輩が私に花をクエダ／ケダ。〈上・外〉

(26) 先生が私に花をクエダ／ケダ。〈上・外〉

なお、受け手が無生物の用法もある。

(27) 植木に水をクエル／ケル。

(28) 犬に餌をクエル／ケル。

次の用例は、一見、「やる」の敬意形式としてアゲルが鶴岡方言の体系の中に入り込んでいるように見えるが、神仏は一般に高い位置に祭っており、次のアゲルは下から上への移動の意味合が強く、授受動詞とは用法を異にする慣用的な表現と考えられる。

(29) 仏壇に線香をアゲル。

(30) ×仏壇に線香をクエル／ケル。

(31) 神棚に御神酒をアゲル。

(32) ×神棚に御神酒をクエル／ケル。

3.1.2. 述語形式と人称の制約

次に述語形式による用法の違いについて見ていく。

宮地(1965)では、人間相互の間の物の授受行為への話し手の関与のあらわれを、人称の制約の問題として捉え、断定形式(くれる、やる)、質問形式(くれるか、やるか)、すすめ形式(くれないか、やらないか)、命令形式(くれ、やれ)の順に制約が強くなるとしている。鶴岡方言ではこれらの形式に対してクエル(ケル)、クエツガ(ケツガ)、クエネガ(ケネガ)、クエレ(ケレ)が使われるが、与え手と受け手の人称の関係をこの4つの述語形式ごとに整理したのが表1から表4である。表中のⅠ、Ⅱ、Ⅲはそれぞれ1人称、2人称、3人称を表し、「Ⅰ→」は、1人称が与え手、「→Ⅰ」は1人称が受け手であることを示している。

また、「Ⅲ→Ⅲ」は、

(33) 彼が彼女に本をクエダ。

のように与え手、受け手がそれぞれ異なる3人称を指していることを表す。

表 1

クエル	→ I	→ II	→ III (Ⅲ')
I →		○	○
II →	○		○
III →	○	○	(○)

表 2

クエツガ	→ I	→ II	→ III (Ⅲ')
I →		○	○
II →	○		○
III →	○	○	(○)

表 3

クエネガ	→ I	→ II	→ III (Ⅲ')
I →		×	×
II →	○		○
III →	×	×	(○)

表 4

クエレ	→ I	→ II	→ III (Ⅲ')
I →		×	×
II →	○		○
III →	×	×	(×)

共通語と同様、鶴岡方言においても断定形式、質問形式、すすめ形式、命令形式の順に制約が強くなることがわかる。

3.1.3. 所有権の移動

これまでの例では、人と人との間の物品の移動に伴い、与え手から受け手に所有権が移動していた。つまり、受け手が何らかの利益・恩恵を得ていたことになる。しかし、次のように所有権の移動が生じない状況ではクエル・ケルを用いることができない。

(34) 荷物持ってやるからおれにヨゴシエ。

(35) ×荷物持ってやるからおれにクエレ/ケレ。

これらの例は、一時的な荷物の位置の移動を表しているのであって所有権がどこかに移ることはない。

(36) このストーブ邪魔だから台所にヤレ。

(37) ×このストーブ邪魔だから台所にクエレ/ケレ。

(38) 子供を使いにヤル。

(39) ×子供を使いにクエル／ケル。

(40) 雨が降ってきたので息子を車で迎えにヤル。

(41) ×雨が降ってきたので息子を車で迎えにクエル／ケル。

(36)は「ストーブ」が現在置かれている場所から他の場所への空間的な移動を表しており、(38)、(40)も同様に「子供」や「息子」の空間的な移動と解釈できる。

(42) 友達が私に手紙をヨゴシダ。

(43) ×友達が私に手紙をクエダ／ケダ。

(44) 友達に手紙をダシタ／?ヤッタ。

(45) ×友達に手紙をクエダ／ケダ。

(46) ×友達に手紙をヨゴシダ。

手紙を出すという行為は、手紙という媒体を通して自分の意志を受け手に伝えることであって、手紙というモノの授与が本義ではない。鶴岡方言では共通語の「よこす」に対応するヨゴス^{註1)}が用いられるが、このヨゴスには視点の制約があり、(46)のような用法はない。

以上のように利益性、恩恵性が関わらない場合にはクエル、ケルではなく、ヨゴス、ヤルが使用される。つまり、鶴岡方言では、「行くー来る」には共通語と同様に視点の制約があるため、所有権の移動が伴わない場合に視点制約が生じて来るといってよからう。

一方、クエルにはマイナスの利益性、恩恵性に関わる用法、つまり不利益の授受を表す用法もある。

(47) こんな役に立たないものはお前にクエル。

(48) とんでもないものをクエダ。

3. 2. 補助動詞の用法

本動詞のクエル, ケルは単独で, 与え手よりも目上の受け手に対して用いることが可能であったが, 補助動詞用法の～テクエル, ～テケルはむしろ対等以下の受け手に対する用法といえる。

- (49) 先生にコピーシテヤル。
 (50) ×先生にコピーシテクエル／テケル。
 (51) 先生！荷物タガイデヤリマスー。
 (52) 〈友達に向かって〉その荷物タガイデケルノー／タガイデヤルノー。
 (53) 孫に本を買ってテクエル／テケル／テヤル。
 (54) 友達が代わりにシテケダッケ。

これらの例を見ると, 共通語では低い待遇の表現形式である「やる」が本来とは用法を異にして, 丁寧度の高い形式として使われていることがわかる。

- (55) 私があの子に道を教えテヤッタ。
 (56) ?私があの子に道を教えテクエダ／テケダ。
 (57) それなら私が教えテヤッカ。
 (58) ?それなら私が教えテケッカ。
 (59) あの子が私に道を教えテクエダ／テケダ。

(55)(57)は, 具体的な物の授受ではなく, 情報, 知識の提供を表している。つまり, 「教える」という行為によって自分が所有する情報の提供を申し入れているわけである。このような場合, 話者の意識では, (56)(58)のように～テクエル, ～テケルを用いるとやや生意気な表現であるという印象を与えるようである。

- (60) 私が代わりに書いテヤル。
 (61) ×私が代わりに書いテクエル／テケル。
 これも「書く」という行為の申し入れである。
 (62) 私が友達に書かせテヤル。
 (63) ×私が友達に書かせテクエル／テケル。

(64) 私が友達に書いテクエル／テケル。

(62)(63)は友達に「書く」機会を与えることを意味しており、恩恵性は関与するが、所有権の移動は伴わない。それに対し、(64)は私の書いた物の所有権が実際に友達に移ることを意味している。

なお、本動詞の用法と同様、不利益の授受を表す用法もある。

(65) とんでもないことをしテクエダ。

次のように、行為の主体が無生物となる場合もある。

(66) 計算はコンピュータが処理しテクエル。

(67) 切符は自動改札機が読みとってテクエル。

(68) 手続きは農協がやっテクエル。

この(66)(67)の「コンピュータ」や「自動改札機」は人が操作できる機械であり、(68)の「農協」は人の集合体によって成り立っている組織である。

また、

(69) 彼女の優しさが私を包んでテクエル。

(70) すばらしい景色が私を迎えてテクエダ。

のような擬人的な用法もある。

(71) 井上さんは鶴岡に来る度にうちに寄ってテクエル。

(72) 幹事はいつも佐藤さんがやっテクエル。

これらは、行為主体の「寄る」、「やる」という行為が現在まで継続的に繰り返されていることを表している。

(73) (私が孫に)おもちゃを買ってケダ。

(74) (孫が私に)花を買ってケダツケ。

(75) (私があの子に)道を教えケダ。

(76) (あの子が私に)道を教えケダツケ。

(77) (友達が)代わりにしケダツケ。

このように、()内の省略によって行為主体が明示されない場合、行為主体が他者であるマークとして文末にケが添加される用法がある(このケの詳細についてはV章を参照のこと)。

4. まとめ

以上、鶴岡方言の授受表現について記述してきた。その用法を明示したのが図2であるが、特徴的な点を整理すると次の通りである。

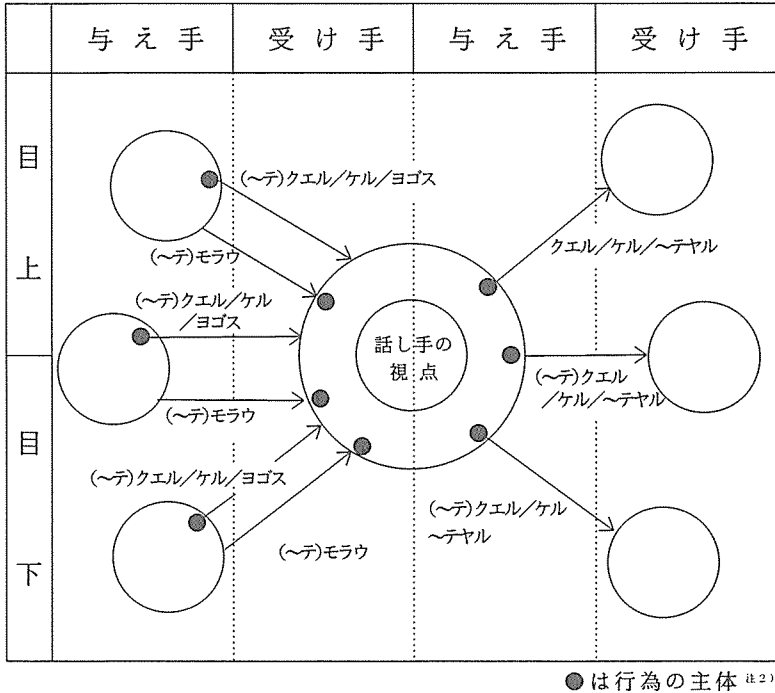


図2

- クエル・ケルは待遇と無関係に使用される。
- クエル・ケルには視点の制約が無いが、モラウ・ヨゴスには視点の制約がある。
- ～テクエル・～テケルは対等以下の相手に対して使用し、丁寧の形式として～テヤルが使われる。

なお、次のように、「～てください」に対応する形式として～テクネヘンがあるが、ここでは詳しくは言及しない。

(78) 私の家にも来テクネヘン。

また、補助動詞の相互承接や話法による制約^(注3)など、分析の及ばなかった点については今後の課題としたい。

注1) 古い語形はゴスで、『庄内方言辞典』にも載録されているが、現在ではヨゴスが老年層にも広く浸透しており、ゴスは理解語として存在するだけである。

注2) 「私が太郎に絵を書いテモラウ」の場合、「書く」という行為の主体と「モラウ」行為の主体とが異なるが、ここでいう行為の主体とは、全体を包括した「～テモラウ」形式で表現される行為の主体としておく。

注3) 例えば、自分の直接の行為として手紙を出す場合に「×手紙クエッゾ/ケッゾ」が不可なのに対して、間接話法的に「おれの友達がお前に手紙ケッドって言った。」という表現は可能である。これは前述したように、前者では、手紙を媒体とした意志の伝達に焦点があったものが、間接話法の中で、焦点が手紙というモノの移動に移って行ったためかと思われる。

参考文献

- 井上史雄(1976)「〈呉れる〉の語形変化過程」『山形方言』12
- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究－主観性をめぐって－』(南雲堂)
- 奥津敬一郎(1979)「日本語の授受動詞構文－英語・朝鮮語と比較して－」『人文学報』132
- 紙谷栄治(1975)「補助動詞「やる・もらう・くれる」について」『待兼山論叢』8
- 久野 暉(1978)『談話の文法』(大修館書店)
- 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活－鶴岡における20年前との比較－』(秀英出版)
- 酒井元子(1970)「意義特徴記述の試み」『言語の科学』1
- 佐藤雪雄(1992)『庄内方言辞典』(東京堂出版)

豊田豊子(1974)「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』

1

宮地 裕(1965)「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63

索 引

索引

- ・必要と認められた語の必要な箇所について索引化した。
- ・内容にしたがって索引語のもとに整理したものもある。
- ・英数字で始まるものについては、冒頭に分類した。
- ・英数字で始まるものであっても、方言形については共通語に対応させた読みで配列した。

【英数】

1 拍卓立	88
2 拍名詞 3 類	101
2 拍名詞の類の統合	102
3 類	102
4・5 類	101
4 類	103
5 母音化	52
5 類	103
6, 7 類	104
acute accent	85
A 型形容詞	217
B 型形容詞	217
b 系列	87
b 系列の助詞付き形	89
b の系列	86
c 系列	89
grave accent	86

【あ行】

青森市	97
青森市方言	96
青森市方言の可能動詞	96
アクセント	26, 33
アクセント移動規則	88
アクセント高核	87
アクセント素	83
アクセント体系	83
アクセント中核	87
アスペクト	239
アスペクト形式	240
アスペクト形式の体系	242
アスペクトの体系	257
アスペクト表現	20
安定状態	265
anme(否定推量)	221
言い切り	174, 223, 231
言い切り形	88
言い切りのイントネーション	105
言う	215

意思	195
意思仮定	197
意思逆接	198
イダ	247
一時的	103
一段動詞の四段化(五段化)	161
イッダ	247
一般動詞	96
井上	97
井上史雄	271
茨城県水海道方言のケ	255
入りわたり鼻音	42, 43, 45, 54, 63
イル	247
イントネーション	86
受身	200, 202
上野	85
上野善道	104
e	229
ene(可能否定)	202
eru(受身)	200
eru(可能)	201
補いあう分布	43
思い出し	252
音韻解釈	83, 87
音韻表記	144
音声の事実	83
音声的な現象面	85
音便語幹	145, 151, 153

【か・が行】

ga(疑問)	231
回帰的变化	103
回想	254
回想過去	186
回想過去推量	188
外来語	47, 50, 56, 59, 77
外来語音	35, 41, 76
核 2～3 のゆれ	103
格助詞	25
確定した過去	254

- 核の交替 89
核の消失 91
過去 205, 208, 224, 231
過去回想 207, 210
過去推量 207, 210, 225, 226, 231
gaq 217
活用形 147
活用交替 98
活用の類 159, 162, 218
活用の類の対応 163
活用表1 146
活用表2 152
活用表3 154
活用表4 154
活用表5 155
活用表6 156
活用表7 158
活用表8 158
活用表9 160
活用表10 216
活用表11 229
仮定 182, 186, 191, 226, 227, 231
仮定形1 149, 216
仮定形2 149, 216
可能 149, 194, 201, 205
可能動詞 92, 96
可能否定 149, 193, 202, 205
カ変類 162
上一段類 162
上二段類 162
かもしれない 232
gamosurene(かもしれない) 232
カリ活用系 218, 219
慣用句 273
記憶の検索 252
記述班 9
基底形 91, 98
希望 168
基本形 93
基本形のセグメント 91
基本動詞 96
疑問 231
逆接 181, 227, 231
共存する音韻体系 39
共存する体系 36, 50
強調 227
共通語化 9, 103
共通語化項目の位置付け 11
共同研究 15
禁止 178
禁止形 93
金田一 85
金田一語彙 84
クエル 291
句音調 87
ク活用類 218
句頭のマーク 87
呉れる 18
くれる 289
クレル 291
群化 98
ke(回想過去) 186
ke(過去) 231
経験 258
敬語 28
継続過去 212, 213, 214
継続過去回想 213, 214, 215
形容詞のアクセント 100
形容詞の無活用化 256
ケ形 243
kedero(過去推量) 225
ケのコト性 255
ケル 291
kero(回想過去推量) 188
kero(過去推量) 225, 231
原因理由 185
kendero(過去推量) 226
検討会 14
行為・選択の対象 276
行為の対象 271
行為の目的 273, 278
口蓋化 40, 46, 47, 60
構造的な要因 103
交替核 97, 99
合拗音 40, 45, 46, 53
語音の条件 103
語幹 147
語幹の統一 97
国立国語研究所 281, 282
個人差 89
五段化 161
固定核 97, 98, 99
語尾 147
個別面接調査法 11

gondaba(仮定)	186, 231	所有権の移動	294, 297
【さ・ざ行】		自立語続き	89
サ	90	真性のモダリティ形式	253
sa(名詞化接辞)	228	新方言	18, 35
最小対	43	推量	177, 180, 183, 224, 230
斎藤秀一	143, 144, 159, 233, 282	推量仮定	227
酒田方言のサツタ形	262	推量逆接	227, 230, 231
sage(原因理由)	149, 185	雀	88, 104
サツタ形	260	性質・作用・現象の対象	272
サテル形	150	静的な記述	265
佐藤喜代治	282	接続形	88, 92
サの用法	25	seraeru(使役受身)	201
saharu(尊敬)	202	seru(使役)	200
サ変類	162	相補分布	83, 87
子音語幹1 動詞	145, 151	sorda(襟態)	148, 170, 226
子音語幹2 動詞	145, 153	促音化	59
子音語幹3 動詞	145, 153	尊敬	199, 202
子音語幹4 動詞	145, 157	【た・だ行】	
子音語幹5 動詞	145, 157	ta(過去)	205
子音語幹動詞	145	ダ	104
使役	200, 203	da(過去)	208
使役受身	201, 204	da(継続過去)	214
使役の対象	272	第1次調査	9
時期	276	第2次調査	9
シク活用類	218	第3次調査	9
時刻	275	体系の共存	39, 40, 77
時刻(やや幅のある時刻)	276	対象の結果の状態	263
磐石方言	88	タキ(滝)	87
磐石町	97	タ形	93, 240
自然下降	88	襷	103
視点の制約	291, 295, 298	taqke(過去回想)	207
柴田 武	57	daqke(過去回想)	210
自発	261	daqke(継続過去回想)	215
下一段類	162, 164	tadero(過去推量)	207
下二段類	162	dadero(過去推量)	210
社会言語学的な記述	265	taro(過去推量)	207
社会調査	11	daru(過去推量)	210
習慣	258	単純語	104
授与の対象	271	単独形	85, 86, 89
順接仮定条件	149	地域社会の言語生活	10
状況可能	150	中間報告会	14
条件形	93	中止	208, 211, 221, 230
状態性動詞	280	中舌化	46
状態の恒常性	247, 259	長音化	87
状態用言	245, 255	調査票	144
助詞付き形	85	通時的な面	102

qke(過去)	218, 224
qta(継続過去)	212
qda(継続過去)	213
qtaqke(継続過去回想)	213
qdaqke(継続過去回想)	214
qde(希望)	168
鶴岡市方言	17
鶴岡方言	17
鶴岡方言のケ	254
鶴岡方言のサツタ形	263
鶴岡方言の特徴	9
te(中止)	208
de(中止)	211, 221
テアツタ1形	95
テアツタ2形	95
テアル形	95
テアル文	263
deanmega(否定推量疑問)	232
テイタ1形	94
テイタ2形	94
テイタ形	240
丁寧	148, 172
丁寧否定	148, 173
ている	20
テイル	247
テイル形	93, 240
テイル条件形	95
テイル否定形	95
てしまった	208, 211
tesumata(てしまった)	208
desumata(てしまった)	211
dero(推量)	180, 224
derodomo(推量逆接)	231
テンス	239
テンス形式	240
テンス形式の体系	242
テンスの体系	244
伝統的な方言	9
伝聞	226
東京語化	35
東京弁化	35
東京方言のケ	251
動作・作用を受ける場合の動作の主	279
動作動詞	244, 254
動作の進行	258
動作の出所	279
動詞群	91

動詞のイントネーション	104
動詞の活用形	83
到達点	281
東北祖語	41
突発的	103
突発的で一時的な変化	103
突発的な思い出し	252
domo(逆接)	181, 227, 231
domo(意思逆接)	198
doja(伝聞)	226

【な行】

na(禁止)	178
ナサ(終助詞)	274
ナサ(準体助詞)	274
ナサ(接続助詞)	274
nadaba(仮定)	182, 227
ナ変類	162
ナリ系	230
naru(なる)	222
なる	222
naru(になる)	232
新潟県村上市	97
錦	103
になる	232
人称	149
人称の異なり	149
人称の制約	293
ne(否定)	166, 220, 230
ne(可能否定)	193
能力可能	150
「～ノ」付き	86
昇り核	87

【は・ば行】

ba(仮定)	191, 226, 231
ba(意思仮定)	197
ハ(オメハ)	271
hage(原因理由)	149, 185
場所(行為を行う場所)	270
場所(存在する場所)	270
場所(動作の到達点)	270
派生形	83
派生交替	98
話し手の視点	289
haru(尊敬)	199
半広母音	84

鼻音化	42, 46, 49, 53, 54, 77	無助詞格	280
被調査者	12	me(否定推量・否定意思)	150
否定	166, 220, 230	名詞化接辞	228
否定意志	150	命令	188
否定形	93		
否定推量	150, 221	【や行】	
否定推量疑問	232	山形県東田川郡朝日村大鳥方言	104
非無声化(有声化)	98	やる	289
表層面	87	有核類	91
弘前方言	88	有声化	40, 42, 44, 46, 48, 50, 53, 59, 98
フィルター	103	拗音	45, 60
複合動詞	104	様態	170, 226, 232
副詞的用法	278	joeda	229
文法的類推	40, 44, 53	jorda(様態)	226, 232
分離可能性	249	四段化	161
併用形のゆれ	89	四段類	162
べー	18		
変異	89	【ら行】	
変化・経過の結果	277, 281	raene(可能否定)	205
変化状態	265	raeru(受身)	202
変化動詞	244, 254	raeru(可能)	205
変化の「押し戻し」	102	raseraeru(使役受身)	204
変化の結果	273	raseru(使役)	161, 203
変化の結果の状態	258	raharu(尊敬)	202
弁別特徴	87	ラ変類	162
母音語幹1動詞	147, 155	ラル(助動詞)	261
母音語幹2動詞	147, 156	両唇音	40, 46, 47, 55
母音語幹動詞	146	両唇摩擦音	40, 45
母音の広狭	102	両唇摩擦音化	84
方言記述班	9	ru(可能)	194
方言の音声の特徴	84	ル(助動詞)	261
方言文法全国地図	281	類似の対象	272
方向	269, 281	類推	91
報告	254	類の統合	164
北奥諸方言	88	類別語彙	83, 84
補充調査	13	ル形	240
補助動詞	296	列挙	273
		連体修飾	176, 223, 231
【ま行】		ro(推量)	183, 224, 230
masu(丁寧)	148, 172	roke(過去推量)	225
masune(丁寧否定)	148, 173	rodomo(推量逆接)	227, 230
待つ	147	roba(推量仮定)	227
mi(名詞化接辞)	216, 228		
migi(強調)	216, 227	【わ行・ん】	
無核類	91	話者	13
無活用化	219	nda(継続過去)	214
無助詞	273, 278	ndero(推量)	177, 224

国立国語研究所報告 109-1

鶴岡方言の記述的研究
— 第3次鶴岡調査 報告1 —

平成6年8月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号
電話 (03) 3900-3111(代表)

©1994 The National Language Research Institute
UDC 809.56-087
NDC 818.5

本書の市販品発行所

(〒112) 東京都文京区関111-24-4-302 (03)3260-5281
株式会社 秀英出版